

笠間稻荷

茨城縣西茨城郡笠間町。

水戸線笠間驛から北約一杆半、驛から一杆二の所迄軌道及自動車の便がある。自動車乗合片道七錢往復一〇錢、貸切片道五〇錢往復七〇錢、俵三〇錢。笠間はもと牧野侯八萬石の藩邸であつたが、笠間稻荷の名によつて關東地方で成田につゞき、賽場として普く知られて居る。

祭神は宇迦魂命を祭り、人皇第三十七代孝德天皇の御代に荒野の片野の一本の胡桃下に祠を建立せられて今日に及んで居ると傳へられ、胡桃下稻荷または紋三郎稻荷とも呼ばれて居る。五穀豊饒・家内繁昌の効顯あらたかなのを以て遠近からの賽者四時絶える事なく、毎年約百萬人を算すると云ひ殊に舊二月初午祭、九月の煙火祭競技會、十一月の獻花祭には特に賑はふ。

【笠間町の旅館】井筒屋(電二)、惠比壽屋(電五)、笠間館(電四三)、橋屋(電七二)、大阪屋(電二四)、其他。一泊二圓一三圓半。

【西念寺】茨城縣西茨城郡西山内村稻田。水戸線稻田驛の西約一杆。自動車四分、乗合一〇錢(八回)貸切五〇錢。寺は稻田禪坊又は稻田御坊と稱せられ元仁元年(紀元一八八四年)親鸞上人が教行信證文類を編み、眞宗の立教開宗をした處と稱せられ、上人の舊蹟として名高く、宗祖上人東國化導の根本地として一般信徒の間に特に有名である。境内廣く一部丘陵に據り木堂、太鼓堂、上人納骨堂、太子堂などがある。明治四年火災に罹り堂塔殆んど焼失し、古建築は山門・太子堂を残すのみで、他は皆その後の再建である。

【西山莊】水戸から分岐する水郡南線常陸太田驛から西北約三杆三、自動車二分、乗合一〇錢(一回)貸切往復一圓半。

元祿四年、徳川光圀が國政を嗣の綱條に譲り、此の地に退いて館を營み、あたかも村翁の營みをなし、晴耕雨讀にその晩年を送つた所で、丘陵の溪谷閑靜なる地である。最初の家屋は文化中焼失し、現存の建物は天保年中齊昭が舊態を模して再建したものである。茅葺、建坪四〇坪、間敷九室、庭前には心字池を掘り、瀧をかけ、觀月臺を造り、規模は小さいが別荘らしくして居る。

【袋田鐵山】茨城縣久慈郡袋田村。前記水郡南線袋田驛から東約一杆餘、鑛泉の一〇〇米手前迄乗合がゆく、一〇錢、一日六回。地は瀧川沿ひの田圃の中にある環境はや、平凡である。鑛泉は單純泉で三四度、浴用加熱し疥癬・皮膚病・胃腸病・神經痛等に効がある。【旅館】浴試樓(一泊一圓半以上)。

▲袋田瀧 前記袋田驛の東二杆五、乗合自動車一〇錢(一日六回、自動車終點から)

して居る。採掘は専ら上向階段法により三〇米乃至四五米の垂直距離で横坑道を開鑿各坑道は直立又は斜堅坑により連結して居る。中にはエレベーターの備はつて居る堅坑があつて五五〇米の地下まで坑道が通ひ、之等の坑道を通算すると長さ一〇〇杆以上にも達し、深い部分は遙かに海面以下に下つて居るのである。此の深い坑内にも電車も通れば、幾多の壓搾空氣に依る鑿岩機で鑛石が採掘されて居る。斯くして掘られた鑛石は事務所に向ふの選鑛場に送られて近代的方法によつて油選鑛とされ、更に二條の鐵索により大雄院の精鑛爐に送られて製鍊されるのである。その取扱量大約一月三、八〇〇噸、鑛夫三、六〇〇名、製品年額金一、八〇〇萬圓(二六〇萬圓)、銀二〇、〇〇〇萬圓(一〇〇萬圓)、精銅二二、〇〇〇噸(六八〇萬圓)である。

【平潟海岸及勿來巡り】(一日の行程である)

常磐線關本驛の東南約一杆九に「大津海水浴場」があり(乗合自動車一〇錢一日一七回)その北約二杆(自動車なし)に「五浦の勝」がある。五浦は關本驛の東南四杆、大津町から東北に向ひ丘陵の上を進んで東岸に出た處にある。岩礁の多い海岸で、砂岩の成層を示すものが海蝕を受けて、數多の小島を形成し、或は天然橋を作り、或は岩壁をなす處に白波が砕けて風景がよい。此處から平潟まで東北約二杆餘。(大津—平潟間バス一〇錢)「平潟」は關本驛の東北一杆九、自動車の便がある(バス一〇錢、一日一七回、貸切五〇錢。藥師堂のある丘陵が左方から突出して關門の状態をなし、海水深く滲入して裏形をなし、八幡神社のある丘陵が右から出て灣を抱き小畫景をなして居る。盛んな漁港でまた海水浴の適地がある。平潟町から勿來の關へは東北約五杆、その中二杆は濱街道で俵の便がある。義家の故事で名高い勿來驛からはいよく「磐城の國」に入る。

【旅館】▲大津町西町八勝園(電大津一九、室二〇)、大津館(電一七、室六)大平館(電五二、室七)、末廣館(電一三、室七)、以上何れも料理兼業にて普通一泊は一圓半、二圓、二圓半。

▲平潟町 保養館(電平潟一三、室一〇、料理兼業)、靜海亭(電八、室八)、住吉屋(電四、室八)以上一泊一圓半—二圓半。

【勿來の關址】福島縣石城郡勿來町。勿來驛の南方約一杆九の九面の丘上にある濱街道の關址指示標の西約一杆に當る。白河の關と共に古へ奥州に入る關

水戸及其の附近 (平潟・勿來・相馬三妙見)

ら瀧途徒歩二杆)。月折山の中腹、瀧川の彎岩の岩壁に懸り高さ一二二米、七三米と稱し、四段になつて落下して居る。約八百年前西行法師は此の風趣に魅せられて四度までも此處を訪れたといふので一に四度の瀧とも云ふ。秋葉の美が殊によろ。「ごつ」の世に包みおきけん袋田の布引き出す瀧の白糸」水戸光圀。

【矢祭山】福島縣東白河郡高城村。前記水郡南線東館驛の南西約四杆、自動車貸切一圓。

此處は福島縣の南端、久慈川を挟む奇巖の勝地で、花崗岩の丘陵は方狀節理により崩壞して奇峯が族立し、その上に赤松・ツツ・ジ・楓などが生えて居る。

【旅館】矢祭館、勝美館(何れも矢祭山下、一泊一圓半位)。

【日立製作所】常磐線助川驛の西北二杆二、バス一〇錢(列車毎従業員三、七〇〇人を有する規模宏大な電氣機械器具の製作所で、鋼線の製作もなし、殊に電氣モーターの産出で名高い)。

▲上野—助川間 汽車三時間四五分(一四九杆一)、三等二圓一七錢。

【助川の旅館】常磐館(電助川一一六、驛前、三圓一六圓)、東曉館(電一一五、驛三〇〇米、三圓、五圓)、天地閣(電二九、驛四〇〇米、三圓一五圓)、眺洋館(電七二、驛三〇〇米、一圓半—二圓半)以上何れも料理兼業。

【日立鐵山】同上助川驛の西北五杆半(バス二五錢、列車毎、貸切七〇錢)にある金・銀・銅・硫化鐵の産地である。平方面行列車が大發、下孫驛を過ぎる頃から車窓左のかなたの山の上に天に沖する大煙突が煙を吐いて見えるのが日立鐵山の煙突である。かつては本邦第一の高建築として知られたもので、海拔一九七米の山上に更に直立一五五米、上端の直徑凡九米、基底の直徑一〇米と云ふ鐵筋コンクリートの建物であつて、製鍊所から出る煙の煙は皆この煙突に集められて中天に吐かれて居るのである。

助川驛を西に出ればそこに日立鐵山専用の電車があり、これにより助川の町、芝内の日立製作所、電氣製鍊所、大雄院の役宅町等を右に見て、崖の中途の切削道で大雄院の事務所に着く。此處で刺を通じ、更に四杆の山道を登れば

本山の採鑛區に着くのである。

採鑛區は二七〇、萬平方米に達し、角閃片岩、雲母片岩中の層狀含銅、黃鐵鑛床で、黃鐵鑛・黃銅鑛の外少量の金銀鐵鑛・閃鉛鑛・方鉛鑛などを隨伴して居る。鐵鑛の走向傾斜は北東四五度で、西北に五〇度乃至七〇度の傾斜をな

門であつたが、關の創始は明かでない。もと菊ヶノ割と稱し、蝦夷の南下を防ぐために設けたものと云はれ、弘仁年間(八二〇—八四八)に官道に移されてから漸次荒廢し、關所の實は失はれ、歌の名所となるに至り、今は公園風になつて昔の佛も止めない。關址には今二基の小石祠があり、一を關東ノ宮と呼び、一を奥州の宮と云ふ。兩祠の後方に嘉永四年の碑があり表面に源義家の「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻花」の歌、裏面に筒井憲家の撰文を刻して居る。此の附近の海岸はまた常磐線中最も景色のよい部分で、「松川磯」と稱せられて居る。しかし乍ら今は勿來の町を支へるものは、その史蹟でも景蹟でもなくその西方から年々十數萬トン宛産出される石炭である。人口約八千。

【旅館】松岡屋(電勿來一一、驛二杆)、胡日屋(電二、驛三〇〇米)、東屋(電一八、驛二杆)、以上何れも料理兼業、普通一泊一圓一圓半。

【相馬の野馬追祭】中村町・原ノ町・小高町を通じて南北二八杆に亘つて行はれる大祭典で、相馬地方の一特色をなす壯烈なる相馬三妙見聯合の神事である。之は相馬氏の祖平將門が八州の兵を下總國小金ヶ原に集め、馬を放ちて兵を練つた遺風を傳へたものと云はれ、一方講武を目的としたものである。祭典は原の町の西南にある雲雀ヶ原を中心として行はれ、七月一日(宵乗祭)、一二日(野馬追祭)、一三日(野馬掛)の三日間である。初日には三神社何れも神輿を出し、古式な武者行列で原ノ町に入り、神輿を夜ノ森山上に安置して宵乗の式が行はれる。此の日競馬があり夜は民謡流山の踊がある。二日目には行列は雲雀ヶ原祭場に向ひ、神輿は牛來山上に着坐し野馬追が始まる。三社の神旗が煙火と一緒に打ちあげられ、天空から落下すると猛烈な争奪戦が起り、その壯觀はさながら戦國時代の合戦の巻を今に見るかの様である。旗を取つたものは牛來山七曲りを馳け上り、木陣審判所で賞を受ける。三日目には小高神社境内で野馬掛が行はれ、白衣を着けた健兒數十人が赤手で奔馬を捕縛する行事があるのである。

▲相馬三妙見 小高・太田・中村の三神社を相馬三妙見と云ふ。何れも縣社。小高神社は小高驛の西北約半杆、小高町の小高城址に、太田神社は磐城太田驛の西北約二杆半、太田村別所に、中村神社は中村驛の南約一杆半、中村町中村城址の西北隅丘上にあり、何れも天御中主神を祀り、舊蹟を妙見神社と云ひ、相馬氏代々の氏神として崇敬された處である。

上野—中村驛 汽車八時間(三〇九杆二)、三等三圓八九錢。

塩原温泉廻り日程案 (東京から二日遊覧)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發前 九・三五	仙臺行 準急行列車	
	西那須野驛	着後 一三・二三 發後 一三・三〇	自動車にて 鹽原温泉へ	▲上野―西那須野間 二時間四八分(一四八軒一)、三等片道二圓一六錢。 【註】週末旅行ノ場合ハ上野發後一時四五分ノ列車又ハ二時三五分ノ急行(夏期西那須野驛ニ臨時停車スル)ニ乗車ノコト、尙觀楓季ニハ臨時列車モ運轉サレド。 ▲西那須野驛カラ鹽原へ約二〇軒餘、自動車四五分、乗合片道一圓。 (前七時カラ後七時迄九回發、二〇人乗十數臺アリ一回ノ團體輸送力二五〇名乃至四〇〇名位デアル) 貸切五人乗五圓。 福渡戸(一三五頁)、鹽ノ湯(一三六頁参照)。
	鹽原	着後 一・一〇	福渡戸又ハ 鹽ノ湯ニ泊	
第2日	鹽原温泉	發後	自動車	出發前適宜鹽原温泉郷探勝 (参考) 【高原山(海拔一、七九五米)】 那須野ノ西ニ火山性ノ優美ナ裾野ヲ流シテ、西ハ日光諸山ト對シ、其間ニ鬼怒峽谷ヲ抱キ、北ハ日留賀岳、男鹿岳ヲ經テ那須岳ニ山嶺ヲ連ネ、東山麓ニハ鹽原温泉郷ヲ抱イテ居ル。登山ニハ新湯カラ西ヘ喬木帶ヲ約四軒登ルト高原嶺ニ出ル。ソコカラ右ヘ折レテ約三軒テ山頂ニ達ス。山頂ハ鷲鳥山ト稱シテ岳ノ二峯ニ岐レ東南ハ關東平野ヲ展ケ、西カラ南ヘハ鬼怒峽谷ヲ隔テ、間近ニ日光赤嶺山ヲ望ミ西北ニハ明神岳、荒海山ナドヲ望ムデ其奥ニ栗山郷ノ山々ガ連リ、北ニハ那須岳ガ眺マラレル。山頂カラ道ヲ西ニトリ約七軒テ下レバ川治温泉ニ出、途中カラ左折シテ會津街道ニ出レバ 鬼怒川温泉へ出ラレル。此高原山越ハ紅葉期ニ特ニ良ク、樂興興味アル山旅デアル。
	西那須野驛	着後 五・三〇 發後	上野行準急行	
	上野驛	着後 八・一〇	歸宅	
旅行費用概算 二 等 等 一 八 ・ 六 四 三 等 三 圓 三 角 三 分				
内 譯 上野―西那須野―鹽ノ湯間汽車自動車往復 (備考欄参照) 及旅館一泊料二等五圓、三等三圓、食料計上ス				

鹽原温泉郷

栃木縣鹽谷郡鹽原町。

那須野ヶ原の西の涯に聳ゆる高原火山(一七九五米)と、其北方の彌太郎山(一三九一米)との間を隔てる谷の奥、箒川の沿岸に散在する一大温泉郷で、西の箱根と並稱せらるゝ、東北風指の温泉地である。箒川は深々、水清く、奇岩絶壁の所に見らるゝ、山水郷で、紅葉山人の言葉の如く「道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、池あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯、尙數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、九か一々探り得べき」別して回廊橋ありたりから峽底はるかに瞰下し、龍化の橋を渡り、安山岩脈の柱状節理に奇觀を呈する布瀧及材木岩を過ぎるあたり、箒川一帯の溪谷美と、春の野州花、秋の紅葉の美觀(一〇月上旬から一月中旬迄)は都人士を惹きつけるに大きな力を有つて居る。

温泉は大網・福渡戸・鹽釜・畑下戸・門前・古町の箒川沿ひの外、鹽の湯・須卷・新湯・元湯を古來鹽原十湯と稱へて居たが、近年袖ヶ瀧が新に展けて一湯となつて居る。泉質は新湯の硫黄泉を除く外、多く鹽類泉に屬し、含有物の多少に依て其效能にも幾分の差異はあるが、凡そ胃腸病・婦人病・リウマチス等に效がある。

西那須野驛から會津東街道を西北に進み關屋村を過ぎると間もなく那須野ヶ原の景初まり、穴平橋・松生橋・石安戸橋・猿岩橋・境橋を渡り九回瀧を過ぐれば大網温泉に至る。此のあたりの對岸に聳ゆる根木山は、春は野州花、秋は紅葉が甚だよい。大網から進めば河中に布瀧を見、次に稚兒ヶ瀧が見える。澄鮮橋を渡り、右に瀧を見、寒溪橋を過ぎると、白雲洞といふトンネルがある。此の邊りが鹽原の絶景の一と稱されて居る。トンネルを抜けると右に柱状節理の發達した石英粗面岩、材木岩が見える。此處から右に二百米許り細徑を登ると龍化瀧がある。瀧は三段から成り、鹽原語彙中壯觀を呈するもの一つである。材木岩から尙進めば福渡戸の温泉場に入り、此處を過ぎると前方に天狗岩が高くそそり立つて居る。石英粗面岩の斷崖百米、岩上に赤松を頂いて鹽原絶勝の一に數へる。其上流河中に七ツ岩の奇觀がある。更に進めば鹽釜温泉場

鹽原温泉

に入り、道の右方、高尾塚に接して一大化石を見る。之は第二紀の化石で、此地一帯も亦第三紀末葉迄は一面の海に被はれた地域である事を示して居るのである。鹽湯橋を渡り鹿野川を左に見て其谷を上れば鹽の湯がある。此の附近は秋季紅葉の絶景を示す所である。鹽釜から箒川の清流に沿ふて溯れば、谷は稍廣くなり畑下戸、門前の二温泉を過ぎ、蓬萊橋を渡る。橋の上からは左方に七絃瀧を美しく眺め、古町を過ぎて左に小徑を進めば、源三郎の石灰洞がある。福渡戸・鹽釜・畑下戸と、愈々此温泉郷の中心地になると、谷は漸く適當に潤け、湯宿は何れも清流に臨んで眺望がよい。古町以西は太古の鹽原湖底であつて、田圃漸く潤け、兩側幾階の段丘がいかに山間盆地の情景を濃かにする。此處まで来れば、今まで常に青澁谷を歴し、息詰まるやうな峽谷美を感じて來た身も、いかに開放せられた様な美の實味の餘裕を得る事が出来るのである。

大網温泉

西那須野驛から一七軒半、自動車四〇分。

温泉は鹽原街道から急坂二〇〇米を下つた箒川畔の岩間に湧き、石間の湯、河原の湯の二つあり、天然浴槽に浸り乍ら鬼止の瀧が仰がれる。石間の湯は特に皮膚病、花柳病に效くと云ふ。

福渡戸

大網から三軒。西那須野驛から二〇軒半、自動車四五分。

地は海拔三四〇米、東北に裏山白倉山の青澁を背ひ、西南に前山を仰ぎ、箒川の清流に臨んで人家連り鹽原温泉の中心地で御用邸もその東端に設けられ、ある。旅館の内湯は鹽釜から曳湯して居るが、此處の深崖から湧くものは淡の湯、冷の湯、岩の湯、不動の湯、裸の湯などがある。裸の湯は含鐵炭酸泉で子供湯とも云ひ、浴槽内に子抱き石と云ふのが有る。

【旅館】 満露屋(電話鹽原一番、一〇〇番、室六四、普通一泊料二圓乃至五圓、團體一圓半位から、①三圓半、和泉屋(電話同五・二五、室六〇、②三圓) 磯屋(電話同九、室七二)、松屋(電話同三・一〇二、室四四、③三圓)、叶屋(電話一五、室二七)、丸屋(電話同二、室二三)、坂口屋(電話四〇、室一五)、牧野屋(電話一四、室一四)、以上普通一泊二圓乃至五圓、團體一圓半位から。

鹽釜温泉

福渡戸から九〇〇米、西那須野驛から二二軒四、自動車五〇分。

古町方面と鹽の湯方面との分岐點で、道路に沿ふて土産物を賣る店や、茶店飲食店などが並んで居る。旅館は只二軒であるが此處に郵便局がある。箒川に

塩原温泉

帯して白倉山を貫ひ、温泉は川の兩岸に湧出し、北岸にあるを坂下の湯と稱し、痔疾に特效があると云ふ。南岸にある熱の湯は福渡戸の旅館の内湯に曳かれて居る。有名な遊女高雄の塚は郵便局の後方にある。

〔旅館〕橋木屋(電鹽原一・一五、室數一〇)、普通一泊一圓半乃至四圓)。

鹽ノ湯

鹽釜から鹽湯橋を渡り、鹿股川沿ひに一軒四。

西に前黒山を望み、東南に椋形山を貫ひ、恰も鹽の底にある様な感じの所。旅館は鹿股川に臨んで幽邃の境を占め、紅葉の美觀最も勝色ありと云はれて居る。温泉は川岸の岩洞中に湧き冷の湯、中の湯、岩の湯などの名があり、天然の浴槽をなして居るので百餘段の階段を下つて行く。鹿股川に沿ふて上ること凡そ四軒の間には咆吼瀧・霹靂瀧・雷瀧・素練瀧・雄飛瀧等あり何れも鹽原七名瀧中に數へられて居る。

〔旅館〕明賀屋(電鹽原八番、一〇八番、室八二、③三圓半)、玉屋(電同七・七〇番、室七八)、柏屋(電同四、室四〇)、普通一泊料二圓乃至五圓。

袖ヶ澤

鹽釜から畑下戸に至る途中から左に遊園橋を渡つて約一軒餘、箒川の清流に臨み畑下戸、門前、古町の全景を一眸に收むる風光の地にある。温泉旅館は鹽原遊園地株式會社の經營になる露上館があり(電三三番、室一七)、萬人風呂と稱する二つの大浴槽を設けてある。此處から山道を三〇〇米許り行けば須卷へ出る。

畑下戸 鹽釜から約三〇〇米、箒川の曲流せる所の低地にあり、浴舎は本道から見下される様になつて居る。温泉は元の湯、鳩の湯、貉の湯、冷の湯とあり、附近に名所「普門が淵」がある。

普門は一に富門とも書き、雪舟の畫法をよくした隠れた巨匠であつた。今鹽原妙雲寺に藏する涅槃の巨幅は此人の筆であると云ふ。普門が淵は寶永四年の昔、泥酔した普門が足踏みをらし、深淵に陥ちて死んだ處である。普門の父はもと京都の公卿侍であつたが、主家の侍女と共に來りて此地に寺小屋を營み角兵衛、阿秋、普門の三子を擧げたのであつた。阿秋は鹽名を後世に馳せた三浦屋の名妓高尾太夫である。

〔旅館〕紙屋(電鹽原二、室三〇、一泊二圓一五圓)、清琴樓(電同二三、室三四、一泊同上)、大和屋(電三五、室一八、一泊一圓一四圓)、漆屋(一圓半、二圓)、井桁屋(室九、一圓、一圓半)、伊勢屋(同上)。

那須温泉廻り日程案 (東京から二日)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發前 九・三五	仙臺行 準急行列車	▲上野―黒磯間 三時間四分(一五九軒六)三等片道二圓三〇錢 (註)上野發後一時四五分ノ仙臺行列車ナレバ黒磯着後五時五分。
	黒磯驛	着後 一三・二九	下乗合自動車	▲黒磯驛カラ新那須温泉へ西北一六軒、自動車三〇分、乗合九〇錢、貸切五圓。同湯本温泉へ西北一七軒、自動車四〇分、乗合一圓、貸切五圓(乗合自動車湯本發着所カラ旅館へ一〇〇米餘アル)。
	那須湯本	着後	新那須又ハ湯本宿泊	
第2日	那須	發後	自動車	
	黒磯驛	發後 五・二四	上野行準急列車	出發前迄適宜那須諸温泉探勝。
	上野驛	着後 八・二〇	歸宅	

旅行費用概算

三二 等 一八・七〇

内譯

(上野―黒磯―湯本間) 汽車自動車往復費  
(備考欄参照) 及旅館一泊料二圓五圓、三等二圓半、食料三圓五分、トシテ二等二圓半、三等二圓ヲ計上ス

MEMO

那須温泉廻り

門前

畑下戸から約一軒、蓬萊橋を隔て、古町と連り、鹽原物資の集散地をなし、諸温泉中最も人家の密集した所で、町役場・温泉組合・小學校等がある。小松内府重盛の嫡妙雲尼の開基と傳へる甘露山妙雲寺がある。温泉は中の湯、寺の湯、河原湯とある。

〔旅館〕富田屋(電鹽原一〇、室數二七、普通一泊二圓一五圓、③三圓)、坂木屋(電同五八、室一五、一圓半一五圓)、福田屋(電同四六、室一五、一圓半一四圓)、常盤屋(電五九、室一五、八〇錢一三圓)、山口屋(一圓、一圓半)、青木屋(同上)。

古町

門前の西端蓬萊橋を渡つた所、海拔四四〇米、東北に大久保狹間の連峯、西南に含下、喜十六の峯巒を繞らし、箒川の町の東を洗つて居る温泉は不動湯、旭の湯、中の湯、角の湯、御所の湯等がある。

〔旅館〕米屋(電鹽原六二、室四八、二圓一五圓、③三圓)、上會津屋(電同三一、室三五、二圓一五圓)、中會津屋(電同二〇、室二六、二圓一五圓)、楓川樓(電同六、室二八、二圓一五圓)、萬屋(室九、一圓一三圓)、角屋(室五、八〇錢一圓半)、柳田屋(室五、一圓半、二圓)。

須卷

畑下戸又は門前から箒川に架けられた假橋を渡つて約六〇米、喜十六山の半腹木立の中にある。此處の名物團子は茅の串に刺して木の葉の上に乘せて出すなど、野趣に富んで居るものである。

新湯

古町から西南八軒餘、途中に樹叢の類を産する赤沼、大沼、小沼、菱沼など云ふ山間幽邃の湖水があり、鹽原富士の名のある圓錐形の硫黄山の中腹に温泉場がある。温泉は硫黄山の西腹爆裂火口中にある五箇の勢力微弱な噴氣孔の二に淡水を注いで温度を高め、各旅館の内湯として居るもので、浴場は上の湯、中の湯、寺の湯、貉の湯の四ヶ所ある。此處から鶴頂山の麓を縫うて川治温泉迄一四軒。

〔旅館〕上藤屋(室一五、一圓二〇錢一圓二圓)、下藤屋(室二〇、一圓半一三圓)、大黒屋(室一六、一圓一三圓)、君島屋(室一一、一圓一圓)、鶴屋。

元湯 新湯の西北山道約三軒半、古町から西八軒、海拔七九〇米、赤川河畔の湯地、紅葉の勝地、近くに七瀧の勝がある。温泉は炭酸泉で胃腸病、呼吸器病、リウマチス等に效があると云ふ。

〔旅館〕惠比須屋(室一八)、元泉館(室一八)、湯木屋(室一〇)、一圓一圓

那須温泉

栃木縣那須郡那須村。

那須嶽の東南麓、那須野野一帯に散布する温泉郷で、天平の昔、那須の郡司狩野三郎行廣に見出されてから千有餘年、古來有名な温泉場である。その名のふの矢なみつくりふこの上に、説たはしる那須の篠原一鎌倉右大臣實朝の名歌など、其昔貴紳の遙々此地に來浴せられしと傳へられて居る。古來湯本・北・辨天・大丸(オホマル)・三斗小舎・高雄股・板室を那須七湯と云つて居たが、近年八幡・旭・新那須・飯盛など新に展け、特に那須御用邸が設けられてから一層面目を改めた様である。那須岳の雄姿を望み、那珂川の清流帯の如く山の裾を繞り、一望漢々たる曠野の景は、蓋し天下稀に見る大自然の景である。之に加ふるに、九尾の狐に絡る傳説を有する殺生石あり、那須與一に因縁深き温泉社あり、また、晚春漸る如き翠緑の間に色取々に咲き競ふつじ、見渡す限り萬山錦と變る秋の紅葉の夕暮の時に一しほ色増す風情もあり、浴泉・觀賞・登山・等々、旅行者の心を奪くべき多くの力を有つて居る。

那須火山群は、北日本中軸火山帯の盟主として、之を那須火山帯と稱せられる程の名火山で、栃木縣の北部に聳え、茶臼岳その中央に座し南に月山、黒尾谷岳、北に朝日岳、三木槍岳あり總じて那須の五峯と稱せられ、東方に美しい裾野を曳いて居る。五岳のうちで最初に活動を始めたものは、その最北の二峯即ち三木槍及尾沙門岳を双峯とする三木槍火山及旭火山である。之等は何れも一個の成層火山で、山上處々に爆發火口を生じ、尖峯群立して居る。之と前後して南月山及黒谷山を頂く南月山火山が生じたが、これまたその西南側の爆發火口によつて双峯に分るに至つた。此の南北二火山の間には巨大なる那須逆裂火口あり、約八平方杆の面積を占め、東南に開き、那須諸温泉中板室と三斗小屋を除く外は皆この火口中に存して居る。茶臼岳は此の大火山の西北端に偏倚して噴出したもので、今日湯川の谷底等に見らる、火山泥流を生じ、續いて二回の熔岩流出によつて現在の主峯茶臼山を生ずるに至つた。然しこの熔岩は遠く其の末を擴ぐるに至らず、その末端は急斜面をなして終り、特に第二回目的ものは主として、火口の真上に膨れ上つたま、宛然鎔を覆せた形態を呈し、鐘狀火山をなすに至つたもので、その南にある高湯山は海拔一、九一七米あり那須岳の最高點である。その後頂上東側及西山腹に特に噴煙の多い爆發火口を生じ、此の噴煙中からは盛に硫黄を昇華するのでその硫黄を採取して居る。(採取された硫黄は主として群馬縣岩倉の火薬製造工廠に送る。年

産額一千石)等の光景を見學のため頂上を究めるには、湯本の宿を朝起して山道五杆半、正午頃には容易に山頂に達しうる。先づ北進して温泉神社に至り次に餐の河原に下り、殺生石の傍を過ぎ、岩塊の多い坂道を登る。それより辨天澤を右に見て高原を西北に進み辨天大丸の二温泉を右に見て、傾斜の加はる山道を進めば、硫黄製煉所に至る。此處は海拔一、四八〇米、東方の展望が廣い。之より明礬澤を左に見て茶臼朝日兩山の鞍部(一、七二五米)に達する。此處を分水界と稱し、夏季茶店が出る。茶臼岳に登るには此處から南進し、朝日岳に登るには左に取りて急峻な岩角を攀る。三木槍岳は朝日岳の登り口を右に見て北進する。何れも山上の展望は廣い。

新那須温泉 此の温泉は大正一二年大丸温泉から引湯したもので、交通の至便と眺望の佳きとを以て急激の發展を見、今日では湯本に次ぐ温泉場となつて居る。地は海拔七五〇米、背後に那須の噴煙を望み、前面には茫々たる那須野ヶ原の大曠原を俯瞰して居る。温泉は無色透明の鹽類泉で、温度五五度乃至七五度、胃腸病・婦人病に效く。

〔旅館〕 山樂(電一三・三八、室六四、普通一泊三圓、四圓、五圓六圓、④四圓)、靜觀樓(電一七、室一六、三圓乃至五圓)。

湯本温泉 新那須から約一杆登る。那須諸湯の物資集散地で、諸般の設備もよく整ひ、那須温泉と云へば主として此の湯本を指すのである。地は海拔約一、一〇〇米、那須岳は北一帯に繞り西南は遠く開けて眼界頗る宏闊、殊に一〇月中旬からの紅葉の大觀は高原特有の眺めである。温泉は無色透明の酸性硫黄泉で、温度七六度、俗に天然六〇六號の稱があり花柳病・皮膚病・癩病・神經諸病・眼病・リウマチス等に效がある。此處には草津と同じく時間湯の浴法があり温泉街から約半杆程離れた湯川の溪にある鹿の湯が泉源で、各旅館の内湯は何れも之から曳いたもので、此の泉源へ

行くのを「元湯通ひ」と呼んで居る。湯たゞれを治す爲には別に喜樂湯と云ふのがある。附近には日蓮上人に因縁深き喰初庵、つじの名所の東公園、温泉神社、殺生石などの勝地がある。

〔旅館〕 小松屋(電話那須二、室三百、黒磯驛前支店電話黒磯二六、④三圓)、松川屋(電同九、室二三〇、④三圓)、清水屋(電同二三、室四七)、松屋(電同二三、室四二)、立花屋(電同二八、室四九)、常盤屋(電同二六、室三七)、河内屋(電同三六、室五〇)、和泉屋(電同三七、室三八)、中藤屋(電同二二、室三四)、若松屋(電同三五、室二七)、室井屋(電同六五、室二五)、荒木屋(電三三、室六)、宿泊料其他は組合に依り協定され各館共同で一泊料一圓半乃至四圓。

〔附近名所〕 ▲殺生石 湯本の北二百米許り、那須岳の寄生火山御段山の東腹、湯川の溪谷に面する處にあり、石は黝色を呈する輝石安山岩の大塊で、此の附近南北一二米東西八米の間に盛にガスを噴出する硫氣孔の表面に横つて居るものである。その爲附近の岩石は著しくガスに作用されて分解し、灰白色を生じ、且つ玉葱の皮の如く剝脱し或は全く分解して土砂となつたものもある。此處には硫烟が昇騰して居ないが、硫化水素の臭氣が粉々として居る。噴出のガスの性質及種類は明でないが、小食獸や昆蟲類が瓦斯に中つて石の四邊に死んで居るので、古來この石に毒ありとせられ、今も四邊に柵を設けて近よるを禁じ、芭蕉翁の句碑「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」が建つて居る。

〔八幡温泉〕 湯本から殺生石の傍を過ぎて二杆、那須高原の中央にあり、屢望那須諸温泉中第一、特に附近一帯は晚春つじに掩はれる。温泉は大丸から引湯したものである。〔旅館〕 五十嵐館(室數一七、一泊一圓半―三圓)。

〔北温泉〕 湯本から八幡を経て北四杆半、余笹川に枕み、那須第一の紅葉郷である。温泉は目の湯・天狗の湯・相の湯とあり弱鹽類泉で湧出量豊富、温泉ブールなど設けられ、中には見上げるばかり高い懸崖から湯瀧になつて居るものもある。泉温五五度乃至六五度、小兒病・不妊症に特効があると云ひ、リウマチス・胃腸病・腺病・ヒステリー・眼病などにも効く。〔旅館〕 旭屋(室數七〇)。

〔旭温泉〕 八幡から二杆餘、北温泉への途中から左折する。泉質は鐵泉で、北温泉旅館と同一館主の經營で、自炊が主である。冬季休業す。

〔辨天温泉〕 旭から約一杆、湯本から西北三杆半、殺生石を過ぎて急坂を登り、茶店の所から八幡への道と岐れて左折して行く。温泉は無色透明の炭酸泉と含鐵酸泉の二種あり、湧出量頗る豊富で到る所に湧出し、内湯の外プール、湯籠もある。此の湯は又「仕上の湯」とも云ひ、湯本温泉の湯籠を大概一週間で治すと云ふ。旅館の後の岩窟内の温泉の湧出する所に辨財天の祠があるので辨財の湯と云ふ。夏は避暑、冬はスキーによし。胃腸病・貧血・ヒステリー等に効がある。〔旅館〕 小林屋(電一五番、室數四六、一泊一圓半―三圓半)。

〔大丸温泉〕 湯本から西北四杆、辨天から北六百米、北温泉へ一杆六、那須嶽の中腹白土川の岸に枕む。湯は溪流の斷崖から湧出し泉量の豊富なこと驚く許りで、内湯に引かれた殘餘は皆溪流に溢れ、其の量の多きと高温の爲め入浴に適する川と化し、盛夏の頃、枝を交えた蒼樹の下に、自然の浴槽に浸る氣持のよさは到底他に求められない。泉質は鹽類泉で五〇度乃至七五度、胃腸病に特効がある。〔旅館〕 大丸(電一四番、室三四、一泊一圓半―三圓半)。

〔三斗小舎温泉〕 湯本から西北十二杆、高林村三斗小舎、那須最奥、最高(海拔一四〇五米)の温泉で、茶臼岳と朝日岳の分水界を越して行く。牛の背によるも米三斗以上の重量品を運搬する事出来ぬので此の名があると云ふ。地勢開潤展望頗る壯快、氣候冷涼で六月上旬頃櫻の花開く。此附近は明治戊辰の役に官軍兩軍が殊死して戦つた古戰場で、此處から福島縣の甲子温泉へは一六杆、那須岳の頂上へは二杆である。泉質は鹽類泉で温度四八度、花柳病に特効があると云ふ。〔旅館〕 大黒屋(室數一九)、煙草屋支店(室一一)一泊一圓半以上。

〔高雄股温泉〕 湯本から西北二杆、那須嶽登山の裏道に當り、海拔一千百米。東南は展けて那須野ヶ原の眺めがよい。温泉は硫黄泉で、四三度、皮膚病、腦病に効くと云ふ。〔旅館〕 葎屋(室數六、一泊一圓半以上)。

〔飯盛温泉〕 湯本から約五杆、最近開拓された温泉で、風光の美が勝れて居る。旅館は飯盛館一戸(室三、主として自炊制で、冬季は營業を中止する)。

〔野公温泉〕 湯本から六杆、大丸から一杆、旅館一戸(室六、一圓半以上)。

〔板室温泉〕 高林村板室字鹽澤、黒磯驛の西北二〇杆半、自動車五〇分、乗合一圓三〇錢、貸切七圓。

那須の一峯黒谷山と男鹿岳との裾合、那珂川上流の谷合にあり、他の温泉と

離れて一境をなし、交通路も別となつて居る。地は湯川の溪流に沿つて居り、那珂川に合流する邊の景色は紅葉の頃最もよい。温泉は鹽類泉で温度三九度、夏季の外は加熱するが、リウマチス・神經諸病・中風に特効あると云はれ、婦人病、胃腸病にも効くと云ふ。

〔旅館〕 大黒屋(室三七)、加登屋(室三二)、一井屋(室二二)、米屋(室數一九)・江戸屋(室一一)、一泊一圓半乃至四圓、晝食付は五〇錢乃至一圓増。

〔宇都宮市〕 上野から普通列車で約二時間、急行で一時間半以上(一〇五料九)、三等一圓五九錢。

栃木縣の中央に位し、田川に跨つて居る。平野の真中にあるとは云ふものの北に八幡山の丘陵を貢ふので市全體が緩かな傾斜をなして居る。もと戸田氏一二萬石の城下で古來奥羽に通ずる要路であつた。今縣治の中心で、附近に歩兵第一四師團司令部が置かれ、縣會議事堂、商品陳列所、煙草專賣局、農事試験所、下野製紙會社工場、日清製粉會社工場、神野木片織工場、高等農林學校工業學校、商業學校、農業學校等がある。驛から西方市の中央を東西に通ずる池上町、大工町の大通は商業の中心で、曲師町、日野町は小賣店多く、馬場町は娯樂機關のある所である。人口八一、三八八(昭五・一〇調)、米、麥、製麵、干瓢、石材、木片織を産し、殊に干瓢は地方代表の名産で年額二百萬圓に及ぶ。宇都宮は宇都宮宗圓の築城した處である。宗圓は藤原房前の裔道兼の曾孫であるが、觀山に入つて得度し、石山寺の坐主であつたが、前九年の役源義家に従つて奥州に下り、宇都宮に於て朝敵調伏の祈禱をなし、亂治まつてのちその功により下野國守護職となり(康平五年)弟兼仲の子宗綱の代から宇都宮氏を稱するに至つた。子孫二七代に傳へて關東の豪族であつたが國綱の時慶長二年豊臣秀吉のために没收せられ、淺野長政代つて木城に治し、のち蒲生秀行一二萬石に封ぜられて大いに城壁を修築して市街を拓いた。爾後奥平氏(慶長六年)、木多氏(元和五年)、阿部氏(元祿一〇年)、松平氏(寛永二年)の諸氏を経て安永三年六月戸田忠寬の城下となり明治維新に及び、戊辰の役兵燹に罹つて廢城となつた。

〔旅館〕 白木屋本店(傳馬町、驛二軒、電二二三二、室一八、二圓半一五圓)、白木屋ホテル(川向町、驛前、電二二二六、室二五、二圓一五圓)、丸井屋(小袋町、驛三〇〇米、電二四八九室二五、二圓一三圓)、藤江屋(驛町、電二六

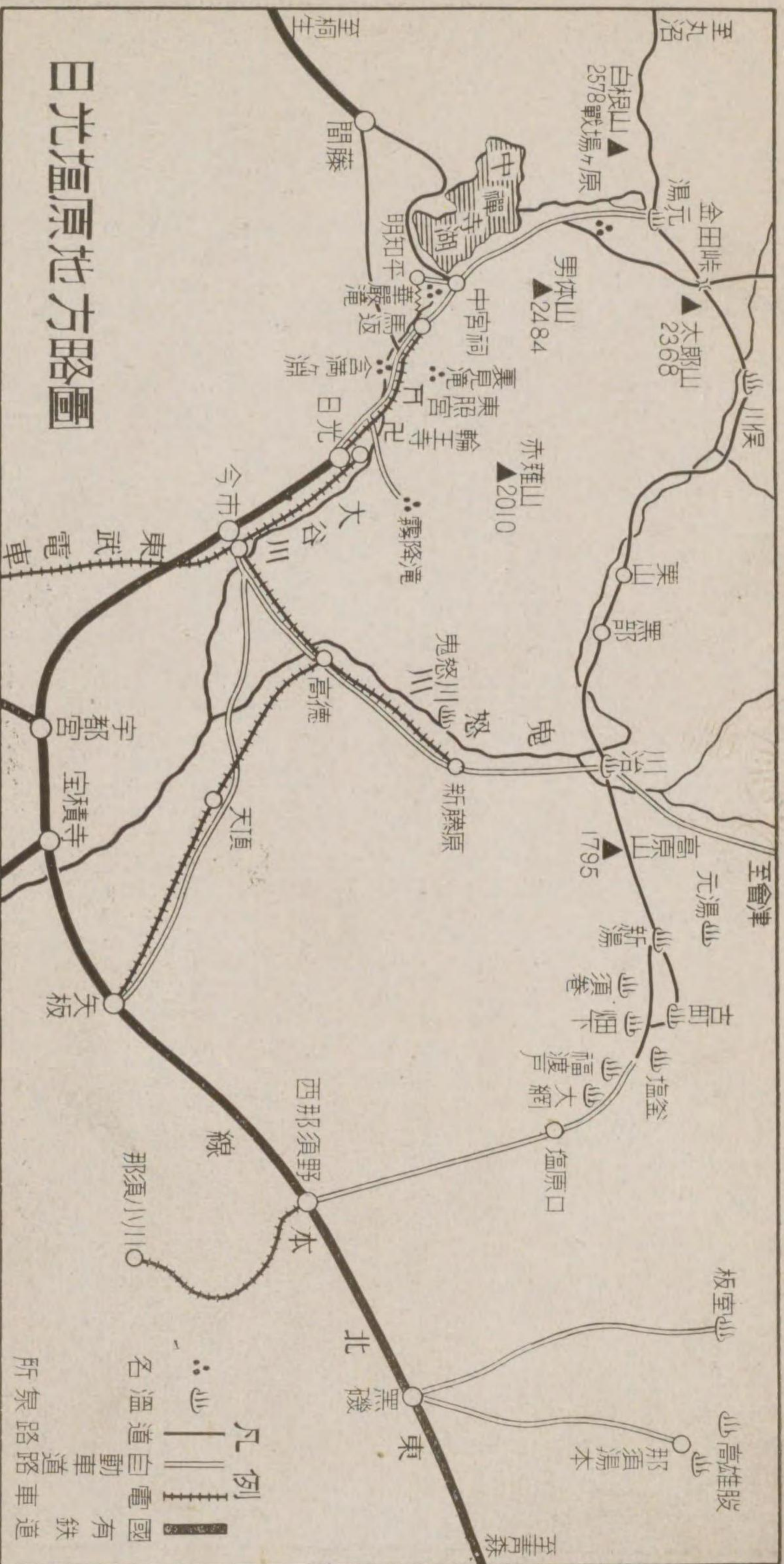


日光東照宮陽明門と  
華嚴瀧 (本文一四七頁)

一九、室三七、二圓一五圓)、清水屋(驛前、室二五、電二八〇五、二圓一五圓)。(遊覽順路) 驛―清嚴寺―二荒山神社―縣廳―蒲生神社―八幡山公園―大谷觀音―驛。以上、貸切自動車にて二時間半位。▲貸切自動車一時間二圓、半日(五時間)八圓。▲乗合自動車 驛―新石町―軍道間運轉、一〇錢、凡一五分毎。▲タクシ―市内五〇錢均一。

〔名所〕 ▲清嚴寺 驛の西北約八〇〇米、清水町にあり、此處に鎌倉時代の末、正和元年に孝子某が母の一三回忌追福のため建てられた高さ三米餘、幅約三〇釐の鐵塔婆の遺物があり國寶に指定されて居る。▲二荒山神社(國幣中社) 驛の西一軒七、市内馬場町白ヶ峯と稱する丘上、杉森のうちにあり乗合自動車の便がある、六分、一〇錢。豐城入彦命を祀る古社で、下野國一ノ宮として鎌倉時代に幕府の崇敬厚かつた處である。境内公園となり眺望よく、櫻樹が多い。毎年一月一日と二月一日の春渡祭、冬渡祭には神輿の渡御があり賑はひ、五月一日には圓舞祭があり地方農民が社前で田樂舞を演ずる。一〇月二日には大祭を行ひ、その附祭として一〇月二八日、二九日の兩日には古式の流鏑馬神事が催される。▲蒲生神社(縣社) 驛の西北約二軒、市の北端八幡山の中腹にあり、大正一四年の創建にか、り蒲生君平を祀る。君平は宇都宮の人で有名な勤王家、寛政三奇人の一人で、文化一〇年江戸に歿し、谷中臨江寺に葬られた。▲宇都宮城址 二荒山神社の南半軒餘、釣天井の傳説のある處で今は市の公園となつて居る。▲八幡山公園 市の北端にある丘陵で頂上の見晴がよい。

〔大谷觀音〕 驛の西北約九軒、河内郡城山村大谷にあり、自動車の便がある二五分、片道三〇錢往復五〇錢(一〇回)、貸切五人乗一圓半、往復二圓。宇都宮附近第一の名勝地で、丘陵の岩窟内に十體の佛像を牛肉彫で現はして居る。西に面する壁面には千手觀音の立像があり、高さ約四米、相好圓滿、衣紋の線が頗る暢達にして且つ雄健で平安朝時代の作風を現はした堂々たる石佛で、天開山大谷寺觀音堂(天台宗、弘法大師の開基と傳へられてゐる)の本尊が多々あるが、中にも大谷石佛はその大なるものに屬し指定の史蹟である。尙附近には屏風岩、天狗投石などの觀巖として岩石並列し洞窟も多く風景奇絶、野州妙義と呼ばれて居る。つ、じ及紅葉の季節は更に美觀を呈する。〔料亭〕 松水館(室一一)。



日光見物日程案 (東京から日歸り)

地名	發着時刻	記事
(イ) 上野驛	發前 八・三〇	日光行準急行列車 三月一—一月運轉
(イ) 日光驛	着前 一〇・四五	下車、參拜
(ロ) 雷門驛	發前 七・五	東武鐵道日光行特別急行電車
(ロ) 日光驛	着前 一〇・二三	下車、參拜
日光	發前	自動車又はケーブルカー
馬返	發前	ケーブルカー又ハ自動車
明知平		(ケーブルカー)
又大平臺		(自動車)
中宮祠	着前	晝食、遊覽

日光見物(日程案)

備考

(イ) 上野—日光間二時間二五分(一四六料四)、三等二圓一三錢  
 「註」上記準急行列車ハ急行料不要、食堂車アリ。季節ニヨリ上野發前八時日光着—〇時二五分ノ不定期臨時準急行列車運轉ス。  
 (ロ) 淺草雷門カラ日光迄東武鐵道會社ノ特別急行電車デ二間時一八分(一三五料五)、普通貨片道二圓一三錢(三等ノミ)、季節ニヨリ往復割引乗車券發賣ス。  
 (註) 上記特別急行ハ三月カラ一月マデ運轉。急行ハ前五時カラ後八時マデ一時間毎二時五分ニ發車ス、所要二時間四三分、其他季節ニヨリ不定期特急回数運轉ス。  
 ▲日光—馬返間一〇料一、自動車三〇分、乗合五〇錢、電車三五分(九料七、四〇錢)(一五〇頁參照)。  
 ▲馬返—中宮祠間七料九、自動車及ケーブルカーノ二途アル。  
 一、ケーブルカー及自動車連絡一三分、片道八〇錢往復一圓三〇錢。  
 二、自動車三〇分、片道一圓、往復一圓五〇錢(一五〇頁參照)。  
 省線及東武電車ト連帶券往復日光—中宮祠間二圓二〇錢。  
 ▲馬返カラ一料ノ大谷川ニ架ケラレタ幸橋邊ニ至レバ男體燦岩ノ二百米ニ及ブ斷崖屏風岩ガ右方ニ見エ、幸橋カラ西北ニ進ムコト二百米デ榮橋ヲ渡リ大谷川ヲ離レテ更ニ西進二百米デ支流ノ深澤ニ架スル深澤橋ヲ渡ル迄ハ山水ノ景勝スベキモノガアル。此處カラ道ハジツグザツグノ坂路トナリ約六料許リデ頂上大平臺ニ出ル。馬返カラ二料餘ノ劍ヶ峯茶屋カラハ高サ三〇米中五米ノ方等瀧(左方)、中一米高サ三十六米ノ般若瀧(右方)ノ二瀧ガ丹青山ト劍ヶ峯ノ間ニ懸ルヲ眺メ、紅葉ノ頃ハ稀ニ見ル勝地デアル。  
 大平高原ニ至レバ氣分俄ニ一轉、白樺ノ美林ノ下ヲ約一料許リ行ケバ中禪寺湖畔ニ至リ途中左方木下閣カラ葦巖瀧ノ聲ヲ傳ツテ來ル。

中宮	馬返	西參道	日光驛	赤羽驛	上野驛	日光驛	淺草	雷門驛	
發後二時頃	發後二時半頃	着後三時頃	發後 四・二五	着後 六・三〇	着後 六・三三	發後 四・四五	發後 四・四五	着後 六・二六	
ケーブルカー 又は自動車	自動車又ハ 電車	東照宮參拜	上野行準急行列 車三月一―一月運轉 季節ニヨリ日光發後 五時五五分ノ不定期 準急行列車ガアル (上野着八時二〇分)	歸宅	東武鐵道淺草行 急行電車 三月一―二月毎日	歸宅	歸宅	歸宅	
▲中禪寺湖、中宮祠、中禪寺(一五〇頁參照)。	▲馬返―西參道間七軒二、自動車二〇分、乗合三〇錢、電車三〇分、三〇錢。	▲神橋―日光驛一軒九、自動車電車共二一〇錢宛。 東照宮(一四七頁參照)。	「參考」電車乗降場カラ各名所ニ至ル料程						
			東照宮 神橋カラ約半軒	二荒山神社 約八〇〇米	三代靈廟 同	慈眼大師堂 約三〇〇米	瀧尾神社 約九〇〇米	霧降院 約六五〇米	
			釋迦堂 同	光瀧 同	湯元温泉 同	中華殿 同	方等瀧 同	般瀧 同	
			羽瀧 同	含瀧 同	大瀧 同	裏瀧 同	清瀧 同	方等瀧 同	
			約二軒七	約四五百米	約五五〇米	約二軒	約一軒六	約八軒半	
								約一八軒	
								約三二軒	

旅行費用概算

(口) 三等	(イ) 二等	(イ) 二等	(イ) 二等
八・四六	八・四六	八・四六	八・四六
内譯	内譯	内譯	内譯

MEMO

日光・丸沼方面遊覽日程案 (東京から二日)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發前 八・三〇	日光行準急行列車	▲上野―日光間準急行列車(三月一―一月運轉、食堂車付)ニテ二時間半三等片道二圓一三錢。
	日光驛	着前 一〇・四〇	下 自動車又ハ電車 東照宮參拜	「註」一、雷門カラ東武電車ニテ二時間一八分、二圓一三錢(一四一頁參照) 二、晝食ハ少シ早目ナレドモ列車食堂ニテシタタメルコト。
	神橋	着前	頁參照	▲日光驛―神橋間一軒九、自動車、電車共二一〇錢。
	西參道	發後 二・五三	自動車又ハ電車	▲西參道―馬返間七軒五、自動車二〇分、三〇錢、電車三〇分三〇錢。
	馬返	發後 一・三〇	ケーブルカー 又ハ自動車	▲馬返―中宮祠間七軒二、(A)ケーブルカー自動車連絡一三分賃八〇錢。(B)自動車三〇分、賃一圓(一五〇頁參照)。
	中宮祠	着後 一・五〇	遊覽	▲中宮祠―日光湯元温泉間一三軒六、自動車四五分、賃七〇錢。
	中宮祠	發後 五・〇〇	自動車	▲日光湯元温泉(一五二頁參照)。
	湯元温泉	着後 五・四〇	宿泊	

湯元温泉 發前 七・〇〇 徒歩

▲中宮祠カラ中禪寺湖ニ舟ヲ浮ベテ上野島ヲ右ニ眺メ、對岸ノ八丁出島ノ入江足尾新道(約一、六〇〇米)ニ達スル、此處カラ道ハ下リ、深澤ニカカツテ約二軒二軒ノ間藤野ニ出デ日本一ノ銅山、古河鐵業會社ノ足尾銅山ニ着ク。足尾本山ニ着イテ渡良瀨川ノ橋ヲ渡シテ製鐵所ガアル。

▲鋼山ハ慶長年間ノ發見デ、モト徳川幕府ガ直轄シ、日光、芝、上野ノ諸廟築造ノ材料ニ供シ、マタ江戸城ノ屋根簷用ニ使用シタモノデアル。明治一〇年古河家ニ鐵業權ガ移リ、現ニ坑夫三、六〇〇人ヲ使役シ、年産ノ粗銅一、〇〇〇噸、價格一、〇〇〇萬圓、別ニ粗製亞硫酸一、二〇〇萬噸其ノ他ヲ產出シテ居ル。鑛床ハ小瀧、木山間ノ備前橋山ニアリ、鑛脈ノ延長ハ普通六〇米乃至六〇〇米、鑛幅ハ三〇〇米乃至四米、鑛質ハ石英銅鑛脈ト綠泥銅鑛脈ノ二種デ相絡ンデ一脈ヲナスコトガ多イ。

▲足尾線終點間藤野カラ桐生マデ汽車約二時間半(四四軒一)、桐生カラ小山廻リ上野迄三時間(二二九軒九、間藤―上野三等二圓四五錢)、桐生カラ高崎廻リ上野迄三時間(一四〇軒二、間藤―上野三等二圓五七錢)。

▲湯元温泉―金精峠間上リ五軒餘、徒歩一時間半。

▲金精峠―菅沼二軒七、下リ三五分(菅沼湖尻迄五軒餘アリ一時間半)

第2日	
金精峠	着前 八・三〇
菅沼	着前
丸沼	着前
同賀川	發後 二・〇〇
須賀川	發後 三・〇〇
追貝	發後 四・四六
沼田	發後 五・一三
澁川	發後 八・〇三
上野驛	着後 八・〇三

温泉ホテルニテ  
自 動 車  
自動車乗換  
自動車乗換  
自動車乗換  
上野行列車  
歸 宅

位、湖畔ニ第一山の家及菅沼森林浴所ガアル、一泊五〇錢)  
▲菅沼湖尻カラ八丁ノ瀧ヲ下リ丸沼北岸ノ丸沼温泉ホテル迄約二軒半、徒歩四〇分位。  
丸沼(一五四頁参照)。  
▲丸沼温泉ホテル―須賀川約一九軒、自動車五〇分、乗合七〇錢、一日三回。  
▲須賀川―追貝約八軒、自動車二〇分、乗合三五錢。  
▲追貝―沼田驛間約二〇軒、自動車一時間、乗合八〇錢。  
▲沼田―澁川―上野間三時間一六分(一四二軒八)三等二圓八錢  
〔註〕  
一、沼田發同五・五〇ノ上野行急行列車ガアル、上野着後八・三〇。  
二、澁川ニテ下車、伊香保ニ泊リ上野名ニ遊ブモヨイ、二二頁参照。

旅行費用概算

三二 等 一三・五七  
三二 等 一三・五七

内譯 前記日程案ニ要スル汽車賃、自動車賃ノ外(備考欄参照)旅館一泊及食  
事料、日光廟參拜料及其他費用トシテ二等八圓、三等六圓ヲ計上ス

日光・裏日光(鬼怒川峡谷)遊覽日程案 (東京から四日)

日程	地名	發着時刻	記事	備	考
1 第	神橋畔	着前 二・〇〇	乗合自動車馬返ニテ		
	上野	發前 八・三〇	日光行 準急行列車	▲上野―日光間二時間半、三等二圓一三錢。 雷門カラ東武電車ノ便アリ、一四一頁参照。	
	日光	着前 一〇・四四	東照宮參拜	▲東照宮參拜(一四七頁参照)。	
	湯元	着後 五・四四	宿	▲西參道―馬返間七軒二、自動車二〇分、三〇錢、電車三〇分 三〇錢。	

日	湯元	川俣温泉	川治温泉	新藤原	今市驛	上野驛
第2日	湯元	川俣温泉	川治温泉	新藤原	今市驛	上野驛
第3日	湯元	川俣温泉	川治温泉	新藤原	今市驛	上野驛
第4日	湯元	川俣温泉	川治温泉	新藤原	今市驛	上野驛

▲馬返―中宮祠間(A)ケーブル自動車連絡一三分、八〇錢(B)自動車三〇分、一圓。  
▲華嚴瀧、中禪寺湖、中宮祠、戰場ヶ原等(一五〇頁参照)。  
▲中宮祠―湯元間一三軒六、自動車四五分、乗合七〇錢(一五二頁参照)。  
湯本旅館―南間ホテル、板屋(一五二頁参照)。  
▲日光湯元カラ蓼ノ湖、刈込湖、金田峠(二、〇二四米)、西澤金山(二、四六〇米)、ヲ經テ川俣温泉迄約一六軒、徒歩六時間位。  
川俣温泉旅館 清湧館(二泊一圓二〇錢乃至四圓)  
▲川俣―黒部―川治間約三二軒、徒歩所要八―九時間(乗物ナシ)途中黒部村ニ山木屋旅館アリ、一泊一圓半―二圓。  
▲川治温泉旅館―近江屋(一泊二圓―五圓)  
川治温泉(一五三頁参照)。  
▲川治カラ新藤原驛(下野電鐵)迄八軒、自動車二五分乗合片道五〇錢、往復八〇錢(一日七回)貸切二圓。  
▲藤原―鬼怒川温泉間二軒六、電車八分、賃七錢。  
鬼怒川温泉(一五三頁参照)。  
▲鬼怒川温泉―今市驛間自動車三〇分(一六軒)乗合片道五〇錢往復八〇錢、貸切四圓(六人乗)、電車ナレバ四〇分、賃三四錢(一三軒六)。  
▲電車下野今市驛ハ東武電車ノ驛ト共同デアルガ、省線今市驛トハ約二軒距ツテ居ル、乗合自動車一〇錢、徒歩約三〇分。  
▲下野今市カラ淺草雷門行東武電車デ二時間一五分、賃二圓四錢。  
▲今市―上野間二時間〇九分(三九軒八)三等二圓四錢。

旅行費用概算  
三二 等 一三・五七  
三二 等 一三・五七  
内譯 上野―日光―湯元間、川治―今市―上野間汽車及自動車賃、(備考欄参照)及旅館三泊料二等二圓、三等九圓、食料、東照宮參拜料及其他費用トシテ二等八圓、三等六圓ヲ計上ス。



日光及其の附近

日光

栃木縣上都賀郡

日光は天然美と人工美とを同時に稱讃し得る勝區として其名海外に迄知られ近時時國立公園候補地の一に指定された勝景地である。日光の一區は、男體山を中心として、所謂日光山稜の峯巒が蒼々と連り、其間に溪流あり、飛瀑あり、湖沼あり、叢原あり、温泉あり之に加ふるに人工美の精華を誇る東照宮の殿閣が、老杉の間に隠見し、自然の秀麗と人工の精華と相俟つて雙美の盛名を恣にし、古來「日光を見ぬ内は結構と云ふ可らず」の俚諺はよく此間の事實を物語つて居るものである。

そも日光の地域たるや、山あれば湖あり、湖あれば瀧あり、山水の交錯極りなきもの、これ何れも火山活動の賜である。第三紀末に前白根山から温泉ヶ岳に亘る斜長流紋岩の山々を噴出し、次で第四紀の頃第二次第三次の活動により月山(二、二八七米)・女峯(二、四六四米)・赤嶺山(二、〇一〇米)・小眞名子(二、三三三米)・大眞名子(二、三七五米)・男體山(二、四八四米)・太郎山(二、三六八米)・山王帽子(二、〇七三米)・三ツ岳(一、九四五米)・白根山(二、五七八米)等の一大火山群を構成した。此の大火山群は東は高旗火山を介して那須火山に、西は赤城の雄峯を隔て、榛名火山に至るまで、關東平野の一境を貫く一大火山帯の中央に位し、其規模に於ても、峯巒の高さに於ても、夫等のうち最も雄たるものである。但し之等の諸火山は何れも既に活動を終り、有史以來活動の歴史あるものは白根火山の中央火口丘奥白根だけである。

日光山は元來「ふたらひ」で、佛徒がこれを補陀洛(フダラ)に附會し、紀元一四二七年(稱徳天皇、神護景雲元年)勝道上人が始めて此山を閉りて此處に四本龍寺の伽藍を造つた一千二百年來の聖地である。のち「ふたら山」即ち二荒山は日光山と改稱され、寺は満願寺と變り、更に輪王寺と改められた。また勝道上人が一山の鎮守として勸請したと云ふ二荒山神社があり、日光山とは廣く此の輪王寺と二荒神社との境内に當て居る。其の境内に徳川二代將軍が家康の靈廟を造營し、三代將軍が改築を施したのが今日現在する東照宮である。

日光自動車會社賃金表(八・六調)

本社 栃木縣日光町(電三六三)

Table with columns: 區間, 哩程, 賃切, 乗合. Rows include routes like 日光驛-神返橋, 日光驛-中禪寺, etc.

※印賃金(日光-中禪寺)は省線及東武電車連帯の場合の賃金である。【神橋】日光橋の二〇米程上流の大谷川に架せられた長さ一五間二尺、幅四間の朱塗の靈橋で、平素は柵を以て鎖され、大祭の時に勅使の渡御あるのみである、古は山管の蛇橋とも云つた。翠林の下に朱塗金珠が碧水に映ずる様は繪其儘の美さで、日光の美は此處から始つて居る。此處から長坂を上つて大手通の正面は東照宮、右は輪王寺である。▲山管の蛇橋とは今から千六百六十餘年前、稱徳天皇の天平神護二年三月(紀元一四二六年)、輪王寺の開山勝道上人が始めて登山する時蛇が橋となつて上人を渡したと云ふ傳説から此の名があつた。神橋のほとりに蛇王權現の祠があり「橋渡しの神」として參詣者が多い。▲神橋の手前左側に板垣退助伯の銅像がある。維新の際東照宮の兵燹に罹るを同伯が防ぎ止めたのを記念する爲昭和四年一月有志の建立したものである。【輪王寺】神護景雲元年(紀元一四二七年)勝道上人の開山。始めは四本龍寺と稱し比叡山、東叡山と共に、天台の三本山と稱され、文保二年後醍醐天皇の

日光及其の附近(東照宮)

る。依て日光廟は在來の佛刹及神社の境内に割込んで營まれたもので始めから獨立して造營されたものではなく、その後大猷院の廟が嵌込まれ、大小數百に上る建物が複雑した關係を持つて居る。

【日光町】日光をして今日最も人口に膾炙せしめたものは、山水湖瀑の秀麗よりは寧ろ赤嶺火山の南麓、恒例山に鎮座まします東照宮の壯麗無類の建築美であつて、古來日光を見ずして結構を説く勿れと云はしめた程である。日光の町は實に此の東照宮の鳥居前町として發達したもので、日光驛の前から日光街道を挟んで神橋前迄旅館商舖等軒を連ね長く東西に連つて居る。之即ち日光東町、一名出町で、之に對して東照宮の西南に西町、一名入町が、大谷川の北の段丘地帯に御用邸を廻つて住宅區域が發達して居る。海拔約五三〇米。【日光の旅館】小西別館(驛から一軒半、電日光二番、五番、室四七、一泊四、五、六、八圓)、小西本館(驛一軒四、電二、三、室二三、團體收容二百人、一泊三、四、五、七圓、團體宿泊二圓一三圓、④四圓)、神山(驛半軒餘、電八、室五一、團體收容三百人、一泊三、四、六、七圓、團體宿泊一圓半一三圓、③三圓)、神橋館(驛一軒半、電一三八、室二〇、團體收容百人、一泊二、三、四、五圓、團體宿泊一圓半一三圓)、上州屋(驛一軒半、電一五五、室三一、團體收容一五〇、宿泊料同上)、古橋(電四、室二〇) 山光館(電七八、室一八)、紙半(電六二、室二四)、井桁樓(電三四)、金谷ホテル(驛から一軒半、電一番、七番、純洋式。風呂無一人室二五、三食付一圓一六圓、同二人室二二、三食付二圓一七圓。風呂付一人室八、三食付一六圓一八圓。同二人室一五、三食付二六圓一三五圓。食事料朝二圓、晝三圓、夕三圓半、③八圓)。

【日光街道の杉並木】東照宮附近から今市に至る日光街道の二里五丁五七間(樹數二、九九五本)、鹿沼から富田に至る側幣使街道の三里一九丁一二間(樹數四、五三七本)、今市御成街道から大瀧前迄の二里二五丁三七間(樹數九、三九一本)、今市から大瀧迄の會津街道三五丁四四間(樹數一、四八一本)、總延長九里一四丁三〇間、樹數一八、四〇四本を算する並木道で、今から二七〇餘年前寛永の初年頃に松平右衛門大夫正綱が、東照宮造營の際二四年の苦辛を以て植樹寄進したもので、天を覆する老杉の美しさは全く世界無比と云はれて居る。

▲三佛堂は往時の金堂で本坊輪王寺門跡及一山五〇ヶ寺院の總本山で、慶安元年の造營に係り九間六面、重層入母屋造、銅瓦木葺當山第一の大建築である。▲東照宮(別格官幣社) 栃木縣上都賀郡日光町恒例山。▲省線日光驛から神橋まで一軒九二、自動車五分、乗合一〇錢(馬返行)、賃切五〇錢、電車二分、賃一〇錢、約三〇分毎に運轉。

▲東武日光驛から神橋まで一軒一〇。自動車乗合一〇錢(電車着毎)、賃切五〇錢。▲神橋から東照宮迄坂路約半軒(徒歩)。贈正一位太政大臣徳川家康の靈を祀る。日光山は家康の崇敬厚かつた下野の名僧勝道上人の開山する處で、元和二年四月一七日、家康駿府に薨するや、其夜久能山に殯し、翌三年二月東照大權現の神號を授けられ、同年三月更に正一位を贈られ、此の月將軍秀忠遺命により久能山から靈柩を移して社殿を造營せられた。現存せる社殿は三代將軍家光が宗廟を改築して威を天下に示さんと欲し、當時の名工巨匠を一山に集め二千七百萬圓(現今に換算)の巨費を投じて寛永一一年一月改築を始め寛永一三年四月(紀元二、二九六年、昭和九年から二九八年前)美事に竣成したのが此の廟である。(改築造營に關しては、古記録の後世の偽作の爲に臆説が傳へられ、其造營期間に關しては、つひ先年迄寛永元年から同一三年迄一三年の長日月を費した様に信ぜられて居るが、最近平泉澄博士が文獻を發見し、其考證の結果僅一年有半の短期日に落成した事が明になつた) 境内九〇、九四三平方米 桃山時代の後を受けた徳川時代の建築の完全な、所謂權現造の模範的建築物である。社殿は全部朱塗の極彩色で、金

銀珠玉を鏤め、精巧な彫刻を施したもので、一度其前に立てば兵馬の權を握ること三百年、三百諸侯を脚下に跪かせた徳川氏の權勢と榮華とを偲ぶ事が出来る。いま社殿全部は特別保護建造物に指定されて居る。

造營に關しては主として松平右門大夫正綱、秋元但馬守泰朝の兩人が奉行として其經營に當り、從事した工匠は大棟梁甲良、豐後宗廣で、其子宗次、その孫宗智も當時幼少であつたが參與して居る。甲良宗廣は所謂建仁寺流の巨匠で、此建築の考案設計は皆宗廣の頭腦から出たものである。

日光建築は主として次の諸點に考慮が拂はれて居る。先づ第一に狭少な神域の中に、社殿の配置を字餘曲折せしめて建築物相互の調和をもとめ、全體的にも部分的にも奥ゆかしい感じが與へられて居る。第二には老樹が自然の儘に保存せられ、自然の秀麗と人工の精華と良く調和せられて居る。第三には社殿の構造を耐久、耐火、耐寒、耐濕たらしめると共に、裝飾に全力を傾け、當時のあらゆる工藝美術の粹が集められて居る。

次に社殿配置、建築の特徴は佛寺的建築即ち鐘樓・本堂・五重塔の如き佛寺に屬する建築物と、鳥居・神庫・水盤舎・拜殿・本殿等神祇的建築物とが巧みに織込まれて居る事で、之等の社殿は五重の塔を含めて總面積僅かに二、七二八方米(六五)坪、東京淺草觀音の二倍、東京ステーションの三分の一、一部の建物としての奈良の大佛よりも小さく、其規模の意外にも小なる事である。有名な陽明門の如きは僅か二七方米(八坪餘)の小建築ではあるが、神宮司廳技師大江工學士の計算によれば、今日の金に換算して概算一坪約一五萬圓、他の建物も一坪二萬五千圓、總工費二千七百萬圓の巨額にのぼつて居ると云ふ事で、規模は小さくとも之によつて如何に立派であるかと云ふ事がうかがはれる。

▲石鳥居 後水尾帝の御宸筆「東照大權現」の額を掲げて居る。元和四年黒田長政の寄進せるものと云ふ。高さ約八米、柱徑一米餘の花崗石で造られた明神式の鳥居で、東照本宮第一の入口をなし、此鳥居を起點として諸堂を運ね、廟堂に至る參道が延長一軒以上に及び飛石敷、切石敷などを施して居る。此大鳥居をくぐれば左に紅柄塗の五重塔が老杉の間巍然として映帯して居る。▲五重塔 方三間、九輪頂上迄約三二米(十丈五尺)方位に合せて十二支の彫刻がある。慶安三年一月二月(紀元二二二一〇)酒井忠勝の献進せる塔は、文化一四年(紀元二二七二)雷火の爲め鳥居に歸し、同年酒井家にて再建せるものである。石段を上れば、舊仁王門の表門である。▲表門 三間二面總朱塗極彩色の八脚門で、内裏に金色の狛狗(コマイヌ)が左右に踞り、門の左右には彫塀が廻されて居り、右には三つの神庫がある。▲三神庫 上、中、下の順に並び、皆校倉造りで總朱塗、花鳥草木の極彩色が施され、上神倉の破風造りの下には、二つの象の彫刻があり、狩野探幽の下繪で恰も生けるが如くである。▲厩 境内只一つの素木造りで、有名な三猿一見ざる、聞かざる、言はざるの彫刻がある。▲厩の西北に御水屋があり、其の左に一切經の輪藏、又、伊達政宗奉納南無觀音の灯籠などがある。石段を上つた左右に、石柵の親柱と柵と一つ石で彫つた飛越の獅子があり、鐘樓・鼓樓が兩側に建つて居る。老杉の下に琉球燈籠、和蘭燈籠があり、鐘樓の前には朝鮮から献納の洪鐘と、廻轉灯がある。鐘樓の西には▲藥師堂がある。本地堂とも云ひ、家康の本地佛藥師如來を安置した堂で間口六間奥行五間、入母屋造總朱塗大堂宇で内陣の天井には有名な鳴龍がある、長さ約一五米。狩野安信筆の墨繪で、其の頭下に立つて手を拍てば、不思議にも銀鈴の如き音響が聞ゆるので此の名がある。

▲陽明門 其の結構、人をして思はず豊若たらしめ、日暮るる迄見るも飽く事を知らぬ處から又の名を「日暮の門」とも云ふ。陽明門とは禁裏一二御門の一なる門名を賜はつたものである。其の結構は桁行三間五尺四寸、梁間二尺四寸屋根入母屋造、四方軒唐破風付、二重扇棟、銅瓦本葺の樓門で、額は後水尾天皇の御宸筆である。柱は皆樺丸柱の白塗で、雲紋の地彫を施し、目貫龍、千人唐子の智恵遊、飛出の獅子、木目の虎などの彫刻で滿され、中通り天井には八方睨の智恵遊、兩脇四隅の天井には天人舞樂の繪がある。皆狩野探幽の筆になる。其他桐に鳳凰の彫刻、蟠龍・花鳥・聖賢君子の像などありて仔細に觀賞せば日暮るも知らぬのである。門に續いて袖塀廻廊があり、正面には唐木造りの壯麗な▲唐門がある。極彩色の透し彫に滿されて居る一二〇間三尺の端籠が門の左右から本殿及拜殿を圍み、鍍金で疊んだ五級の階段は直ちに拜殿に通じて居る。

▲拜殿 結構更に壯麗である。入母屋造りで、銅瓦本葺、唐破風造りにして向拜あり、羽目は牡丹唐草の透彫、縁廻勾欄は蠟色塗、金物は全部鍍金又は鍍金の七寶である。内部は三堂に分れ、中央は五間四面六三疊、向つて左に法親王御着座の間、右に將軍着座の間がある、何れも二間四面一八疊敷中央の間の格道上人が二荒山神社と四本龍寺とを創建した所と傳へ、今の社殿は江戸時代の再建で二荒山神社の別宮である。▲四本龍寺 本宮の後にあり、境内約一二七坪、中に四間四方の觀音堂と四柱造丹塗の三重塔がある。▲常行堂 二荒山神社の南方にある。慈覺大師の創建で、今の堂宇は江戸時代の再建で堂内に國寶の鐵製多寶塔がある。▲慈眼堂 常行堂と法華堂との間から坂を登つた丘上にある。▲小倉山 霧降補道の途中から左に入つた所、小遊園地を爲し眺望がよ。

▲大猷院靈廟 徳川三代將軍家光公の御靈屋である。慶安四年に工を起し、三年を経て承應二年(二二一三年)に竣工した四間門・鐘樓・鼓樓・夜叉門・拜殿本殿等結構善美を盡し、東照宮と共に其殿堂の美を以て聞え、何れも特別保護建造物に指定されて居る。

▲日光廟の拜觀がすんだら寶物館を見るのが普通である。同館は三百年祭記念に建築したもので、東照宮、二荒山神社及輪王寺の寶物が陳列されて居る。▲田母澤御用邸(本町通り) ▲含湯ヶ淵、御用邸脇の道を左に入り、大谷川を渡つて數百米の處。大谷川の溪流美を爲す所で、其の附近に石彌陀座像が數十並んで居る。▲小倉山 霧降補道の途中から左に入つた所、小遊園地を爲し眺望がよ。

▲霧降瀧 神橋から右に折れて登り、小學校前を過ぎて稻荷川の釣橋を渡れば左手丘陵の老杉中に「興雲津院」がある。背後に屹立する外山には日光山鬼門鎮護の毘沙門天を祀つて居る。梅林で名高い高照庵の庭を廻り上れば、小倉の春曉」として日光八景に數へられて居る小倉山公園がある。此處を左に廻り二、三の小高低を経ると望瀑臺に着く。神橋から此處までダラ／＼登りの四軒餘り、自動車を通ずる。貸切片道三間半、往後五間。

▲霧降瀧は裏見・華嚴と共に日光三瀧と云はれ、途中一階段あつて水勢霧散するので此の名があり、紅葉の名所となつて居る。その上流の丁字瀧から玉簾瀧へは更に二軒餘あり、全體として半日の旅である。

▲裏見の瀧 馬返に至る途中、荒瀧停留所から約二軒の荒瀧川の上流にある日光瀧から五軒餘(一里一三丁)瀧へ牛糞の所迄自動車が行く、貸切往復五間。往時は瀑水の裏側から其の壯觀を見る事が出来たので、其の名があつたが、明治五年九月の大瀧風雨のため瀧口の岩標を墜落して舊時の奇觀を失つた。然し、多少濡れることを厭はねば、裏面から瀧を見ることが出来る。

天井は格間毎に岩紺青地に極彩色の百種の龍を畫き、柱は總金太、み極彩色の金襴卷・長押の彫刻・承塵の上に掲げた土佐光信の三六歌仙の扁額、換戸の金泥地に畫かれた竹に麒麟、牡丹に狂獅子の探幽守信の筆等善美を盡して居る。左右着座の間は、天井は二重折上造り、大羽目は紫環、黒環の貫材を用ひ、彫刻、詩繪を施して居る。中央の間正面の三間には御簾を垂れ金幣三個をたて、御簾の上には神鏡を掲げて居る。拜殿と石の間にある四本の柱は黒漆の柱で有名のものである。石の間は拜殿の後に續き一段低くなり、本殿が連接して居る。

▲本殿 石の間を隔てて拜殿に隣り、幣殿、内陣、内内陣に分れ、其の結構の美は云ふ迄もないが、一般の拜觀を許さぬ。

▲東廊下の潜門 坂下門には、左甚五郎作の眠猫の彫刻があり、そこから約二五〇米に二百餘階の石段を上つて奥社に詣でる。拜殿の後に總唐銅の高さ七尺の鐘板の門があり、石の玉垣を廻らした中に、英傑家康公の墳墓、多寶塔がある。丸銅の直徑四尺、高さ一丈一尺餘り、老杉天を摩し、神威嚴然たるものがある。▲例祭は六月一日で、翌二日には神璽渡御の行列があり、(武者其他約千人)、又一〇月一七日を渡御祭と稱し、同様の行列(武者其他約五百名)があり、徳川時代其儘の行列は他に見る事の出来ぬ壯觀である。近年八月一七日を夏祭と稱し、涼納祭がある。

▲東照宮拜觀時刻 自四月至九月前七時から後四時迄、自一〇月至三月前八時から後四時迄。

▲東照宮拜觀料 一人一圓(團體五〇人以上一人に付九〇錢、一〇〇人以上一人に付八〇錢、學生團體五〇錢、小學生團體二五錢)。案内料六〇錢(團體の場合は九〇錢)。

▲二荒山神社(國幣中社) 東照宮の西約三〇〇米、恒列山西麓古杉の茂つた所にあり、大己貴命・田心姫命・味耜高彥根命を祀る。同三年(紀元一四六八)勝道上人の山中開創に當つて、二荒山神社を鎮祭せられたのが始めで、下野一の宮としてその壯嚴一山に鳴つたものである。朱閣翠林の調和が美しく、今の社殿は元和五年(紀元二二七九)に徳川秀忠が造營したもので、拜殿と本殿は特別保護建造物となつて居る。神木三本杉、國寶化灯籠がある。奥社は男體山頂に中宮祠は中禰寺湖畔に鎮座して居る。例祭は四月一七日。

▲本宮神社 神橋々畔杉並木碑の所から上つた丘上にある。神護景雲年間(勝

【華嚴瀧】中禪寺湖の吐口大尻から東方約五〇〇米にあり、石英斑岩の浸蝕面を掩ふ男體燈岩に懸て居る。直下すること約一〇〇米、幅は上部で約一〇米、瀧壺は深き二〇米、水色は淡碧色を呈し、岩壁の前に直下して極めて美觀を呈して居る。大平臺の瀧見茶屋傍からエレベーターで瀧壺前に降りれば正面二〇米程距て瀧全體を仰ぎ見ることが出来る。エレベーターは二四人乗二臺あり、所要五〇秒、賃往復四〇錢。徒歩なれば瀧坂を下り、白雲瀧を経て五郎兵衛茶に至る約一程の道がある。瀧の懸る岩壁は厚さ約五〇米の男體燈岩で、石英斑岩の上に横つて居る。燈岩の下端は集塊岩状をなし、中禪寺湖から来る地下水は此處にしばられて主瀑の兩側に數條の玉簾を懸け、岩蕪が瀑前に群をなして飛翔して居る。瀧水は冬季は涸れて主瀑は消滅し(五月半迄)、僅に地下水から来る數條の小瀑を見るのみである。

中禪寺湖

栃木縣上都賀郡日光町。

▲日光驛から馬返(中禪寺口)まで一〇軒一。  
一、日光自動車で三〇分、乗合片道五〇錢(前五・四五から午後五・四五迄省線及東武電車に接續運轉してゐる)、賃切三圓。  
二、電車で約三五分、賃片道四〇錢(往復七五錢(凡三〇分毎に運轉。九軒七)馬返(中禪寺口)から中宮驛まで八軒舊道は五軒餘)  
一、ケーブルカーで明知平迄八分(一軒二)、運賃片道五〇錢(往復八〇錢(前七・二〇から午後七・四〇まで三〇分毎に運轉)、明知平から中宮驛迄日光登山鐵道會社専用自動車路により五分(二軒二)賃片道三〇錢(往復五〇錢(エレベーターに接續運轉))  
二、日光自動車により三〇分(八軒)、乗合片道一圓、往復一圓五〇錢(一日一二回往復、冬期は運轉中止、尚省線主要驛から中宮驛迄運轉乗車券を發賣して居る。日光・中宮驛間片道一圓三〇錢(普通賃一圓五〇錢)往復二圓二〇錢。賃切日光驛から片道八圓往復一五圓、但し馬返・中宮驛間は上り下りの時刻に制限がある。

中禪寺湖は日光驛の西一八軒、男體山の南麓にあり、一幸の湖と云ふ。今を距る千二百年の昔、勝道上人が男體

中禪寺湖舟遊モーターボート乗船賃金表

航路	定員	團體	時間
二荒山一歌ヶ濱間	五人	二五	二〇
同往復			二〇
三角廻り	三人	六	二〇
同往復			二〇
足尾新道一尻	二人	三	二〇
同往復			二〇
名所廻り一野島	三人	五	二〇
同往復			二〇
千手	二人	三	二〇
同往復			二〇
名所廻り一野島	三人	五	二〇
同往復			二〇
湯元口一瀧行	二人	三	二〇
同往復			二〇
大名所廻り一野島	三人	五	二〇
同往復			二〇
赤岩一瀧行	二人	三	二〇
同往復			二〇

客待二〇分以上一時間以内賃金の五割増  
使用船 一五人乗乃至三五人乗モーター船一一隻あり、一時に二八〇名迄乗船出来る。

【二荒山神社中宮祠】男體山の麓、中禪寺湖の北岸風光明媚の勝地にある。日光二荒山神社の別宮で、本殿拜殿共に江戸時代の建築である。本殿の右側に勝道上人開山の碑があり、此の碑の傍に男體山表登山口がある。【中禪寺】中宮祠から大尻橋を渡つて一軒許り、幸の湖の東岸勝景の地にある。延暦年間勝道上人の創建と傳へる天台宗の梵刹で、もと中宮祠の西隣にあつたが明治年間今の地に移したものである。本尊千手觀音像は桂の立木を以て造られたと傳へ、俗に立木觀音と呼び、高約五米半(一丈八尺)鎌倉時代の作で國寶に指定され、阪東十八番の札所になつて居る。▲歌ヶ濱は中禪寺前の湖畔で、勝道上人が丸木舟を造り、此處に来て苦行せられた時、天人下りて歌嘆せられたので歌ヶ濱と呼ぶと云ふ。

日光及其の附近 (中宮祠・男體山)

山に登り發見したと傳へらるゝ湖で、湖面海拔一、二七一米の幽邃境に碧水を湛へて居る。東西六軒半、南北一軒八面積一二・三九平方軒、南岸からは八丁出島の半島が突出し、其東に上野島がある。湖盆は西に淺く、東に深い。そして最深點は東部の南方に偏し上野島の東方にあり一七二米に及び、華嚴の瀧の高さよりも更に七二米深い。かゝる高度にありながら、面積深度共に斯く大なるは本邦の他に見ない處である。

湖盆は石英斑岩と花崗岩から成り、其地盤は地質時代に浸蝕されて大なる窪地を作つたもので、もと遙に東方に及んで居たが、男體山の燈岩流が此窪地を横斷して流れを堰き止め、此處に湖水を形成するに至つたものである。湖盆を涵養する水は廣大な受水區域から注入するものを主とするもので、冬季降雪期には著しく其の水位を低くする。排水は大尻川から流れ、その懸垂するものは華嚴の瀧で、以下大谷川となり鬼怒川に合して利根川に注いで居るが、冬季は水位が低いので、大尻川は河床を露はし、排水は全く止み、華嚴の瀧は數ヶ月間主瀑に一滴の水をも見ないが、華嚴瀧の落下する懸崖からは數條の細瀧が玉簾の如く垂れて居る。之は中禪寺湖の水が異つた二つの燈岩層の間を流れ出づるもので、湖水は表面と地下の二つの排水口を有して居るのである。湖の水温は表面で月別最高が八月の平均二・三度附近、最低が一月の平均四度位、凡そ一〇〇米以深は一年を通じて四度、冬季は風波激しき爲湖面の水結する事少い。水は極めて清澄で深度一八米附近まで明に透視し得られ、また水色も極めて美麗で、三號から四號附近の藍色を呈して居る。

排水口が華嚴の瀧となり魚類の沂上を妨げ、古來魚類を産しなかつたが、明治六年以來魚類を移植し、一四年には嘉魚・赤腹魚(ザコ)・エビ・鱒等を、其後米國の紅鱒・ホロイトフイッシュを放流し、三九年からは帝室林野局に於て養鱒を計畫し、湖畔青瀧池に孵化場を設け、漸次繁殖して漁獲が多くなつて來た。湖畔には一般に樹木が繁茂し、また紅櫻多く、五月中旬花開き、秋は紅葉が美しい。

【男體山】中禪寺湖の東北に優美な火山性の裾野を引き、湖面を抜くこと一二三米、海拔二、四八四米の圓錐形の偉大なる山容を空に聳え、其西に聳ゆる白根山と共に湖面に美しい山影を投じて居る。關東の名山として知られ、また日光諸山の重鎮で、二七方軒の面積を占むる標式的コニデーで、山頂には直徑約八〇〇米の半圓形の火口がある。火口はカルデラをなし、深さ二〇〇乃至三〇〇米あり、火山灰、砂、礫其他火山岩屑が堆積して居る。火山の外側は四方に規則正しき傾斜をなし、頂上に近い處は三〇度以上に及び、下るに従つて緩傾斜となつて居る。

登山路は凡そ四つあるが、中宮祠から登るのが最便利である。開山期は五月五日から一〇月二五日迄で、登山者は山の維持費として一人一〇錢の納金を要する(團體には割引あり)、七月一日から八月一日迄は山頂に電話を設ける外、途中所々に賣店、給水所等が出る。古來登山者は嚴重なる潔齋をなして參拜したもので、今にその遺風が残して居る。毎年八月一日から一週間行はれる登拜祭が夫れで、表參道から登るものは中宮祠の社前に於て、また裏山の志津から登るものは出張の神官から必ず祓を受けなければ登山を許されない事になつて居る。先づ中宮祠社務所に祈禱料として一人金五〇錢を納め、社殿に參拜すると、登山路の門を開けて呉れる。道は頂上へ殆んど直線的で相當急に感ずる。中宮祠から頂上迄約八軒、二時間乃至三時間を要する。三合目と五合目に休憩小舎があり、此の間は針葉樹に白樺の混じた美しい林で五合目から上は岩石と木の根が露出して少しく道が悪くなる。途中には水の湧出して居る所がないから登山口で準備する必要がある。頂上に二荒山神社があり大己貴命を祀り、その西に太郎山神社があり味耜高彥根命を祀り、八合目瀧尾神社に田心姫命を祀つて居る。此の三社を總稱して奥社と云ひ、勝道上人が日光山神社を創建した後、此處に勧請したものと傳へて居る。

山頂の眺望は頗る廣闊で、白根山を始め日光及奥上州の重疊たる山峯を眺め、脚下には中禪寺湖の青碧を俯瞰し、遠く富士、秩父、關東平野などの眺望が勝れて居る。頂上から道を北にとり、大眞名子山との鞍部へ下ると志津小舎に出る。小舎から東南にうりゆう坂、深笹の河原を經、裏見の瀧を見て清瀧へも日光町へも下りられる。また志津小舎に一泊すれば樂に興味ある男體及裏山の山旅が出来る。

〔中禪寺湖畔の旅館〕 葛屋(電中宮祠五、室四七、一泊三、四、

五、六圃、團體宿泊一圃半—三圃半、③三圃半)、米屋電一、室一八、團體收容一〇〇人、④五圃)、伊藤屋(電七、室二七、團體收容二百人、③三圃)橋本(電九、室三七、團體收容二〇〇人、④四圃)、和泉屋(電三、室三二、團體收容一七〇人)以上一泊三、四、五、六圃、團體一泊一圃半乃至三圃、一泊二圃、食料朝一圃半、晝二圃半、夕三圃、④五圃)。

日光湯元温泉

▲中宮祠から戰場ヶ原を経て一三軒六、自動車で三五分、貸切四圃、乗合一八七〇錢。前八・三〇—後六・三〇、一日六往復以上。

地は海拔約一、五五〇米、西に白根山、北に温泉岳、東に二ツ岳の峯巒を繞らし、南の一方開けて湯の湖の青藍に面し遙に男體山の偉大な山容が仰がれる。温泉は湯の平を略南北に貫いた一線に沿って湧出し、裸湯・河原湯・緞子の湯・中の湯・御所湯・瀧湯・姥湯・笹湯・荒湯・自在湯・蓼の湯・鶴の湯等と稱され、緞子の湯は明礬を多量に含む硫黄泉で温度五五度、眼病に特效があり、其他の湯は何れも硫黄泉で四〇度乃至六五度、胃腸病・皮膚病・リウマチス・花柳病・婦人病に效がある。

【旅館】南間ホテル(電日光湯元二番、和室四五、一泊三圃—八圃、洋室三圃、④五圃)、板屋(電同三、室二七、一泊三圃—六圃、④四圃)、釜屋(電同五、室二二、一泊二圃—五圃)、渡邊(室七、一泊二圃—五圃)、米屋(室七、二圃—五圃)、宮川(電同七)、湯の家(電同六)。

【戰場ヶ原・湯の湖】中宮祠から西に、さく／＼とする焼石積や木下蔭を行き湖畔を進めば約四軒で草湍ヶ原があり、此處に帝室林野局日光出張所所屬の「鱒の養殖場」がある。此處から北に二〇〇米許り、龍頭の瀧を経て坂を登れば「戰場ヶ原」に出る。原は海拔一、四〇〇米、廣さ八・八三七七平方軒の平原を根據地として居る。

川俣温泉から鬼怒川の溪流に沿って川治温泉、藤原、鬼怒川温泉に至る四〇餘軒に亘る裏日光一帯、即ち鬼怒川峡谷は四山の山隈水明なること、春は新緑に野州花、夏は釣魚に舟遊、秋は觀楓に、冬は狩獵にと都人士一泊の清遊には實に絶好の地である。殊に此の間の紅葉は日本一と云はれる。紅葉期一〇月上旬から一月上旬迄。

【八丁の湯】川俣温泉から鬼怒川上流を溯つて右岸の林道を約三軒で夫婦瀧があり、此處で左岸に渡ると急に二〇〇米許り手白山からの尾根に登り、手白瀧の落合に下つてまた本流に出て川原を行くと八丁の湯がある。川俣温泉から約八軒。此處に野天の浴槽が一つあり、營林署建設の小舎があり、キヤムプなどに適して居る。

【鬼怒沼】八丁の湯から約四軒半、鬼怒沼山頂から約六〇〇米許り下にある。沼は南北に狭長な美しい濕原をなし、小さな二箇餘の沼池が點在して居る。高山原始湖で、鬼怒川の源をなして居る。鬼怒沼山(海拔二、一四一)頂上は木立で眺望がないので、普通登山者は此處を頂上として居る。

【湯澤の噴泉塔】日光湯元の北二〇軒、川俣温泉への途中、西瀧金山から岐れて八丁の湯への途中、湯澤の溪谷にある。金山から八軒。西瀧の溪谷には温泉が處々に湧出して硫黄が沈澱して居る。噴泉塔は圓錐形をなし、本流左岸の縣崖に四圃、左岸に注ぐ支流の吐口に近く二圃ある。前者は近づく事が出来ぬが、後者は出来る。前者四圃の噴泉塔中最大ものは底部直徑約一米、高さ六〇釐位、現に頂上の噴孔から温泉が溢流し、塔は生長しつゝある。他の三個は夫よりも著しく小さく、温泉は噴出して居ない。支流にある二圃の噴泉塔中最大なるものは底部の直徑及高さ共に約三〇釐、頂上に大小二圃の噴孔があり、大孔は熱湯の飛沫を二米餘の高さに、小孔は小球を六〇釐の高さに飛沫せしめて居る。之等の噴泉塔は主として炭酸カルシウムから成り、少量の硫黄及硫酸を混じり、内部は堅實な岩石であるが新しい外部は柔かた容易に粉末となる。之等の物質を沈澱せしめる温泉は無色透明で、硫化水素臭あり、微鹹味を帯びてアルカリ性反應を呈し、温度攝氏九四度ある。いま天然紀念物に指定。

【川治温泉】栃木縣鹽谷郡藤原村川治。東武電車今市驛から下野電鐵で新藤原驛まで二八分(一六軒二)、四一錢、それから温泉近くの高原迄約八軒、自動車二五分、乗合片道五〇錢往復八〇錢(前七・一五—后六・一五迄七回)、貸

で、附近一帯花菖蒲とあやめが大群をなして美しく、また七〇餘種の高山植物がお花畑をなして居る。昔、二荒神、赤城の神と戦つて勝ち、戦勝の宴を此處に催して唄ひ且つ踊つたと云ふので斯く呼ばれ、至つたと云ふ傳説がある。原の一部に浅く水を湛へた開田沼(あかぬま)がある。男體火山の一層岩が湯川の上流を堰き止めて造つたもので、層岩に躍つた水が龍頭の瀧の壯觀を生み、沼の埋れた原野が戰場ヶ原である。原の真中に三木松があり、道は此處で二つに岐れ、右は西瀧金山へ通じ、左は湯元道となり、二軒許り進んだ所に、左湯元道の木標がある。「湯瀧」は本道から岐れて半軒程の所にあり、湯の湖の水が直下すること一三〇米、幅凡三〇米の大瀧で、三名瀧に比肩する名瀧である。「湯の湖」は所謂閉塞湖で、石英斑岩を基底とする溪谷が、太郎山の層岩流に堰き止められて出来たもので、前白根山の東麓、峯巒重疊の中、海拔一、五四三の處に水位を保つて居る。湖は南北凡一軒、面積〇・二五方軒で、あまり大きくないが東岸に鬼島半島の翠巒を浮べ、其風景は寧ろ中禪寺湖に勝つて居る。湖底は概して浅く、最深一三米半で、排水口の西北僅かの所にある。水温は夏季中禪寺湖よりも幾分高く、水は黄色を帯びた緑色で九號乃至十號である。排水口は南端にあり、岩石に堰かれて二つに分れ復合して湯瀧となつて居る。湖中に鱒、鯉、鮒多く流し、遊客の食膳を賑はして居る。冬期は約半米位の厚さに結氷し好スケート場となり又湖畔數ヶ所にはスキー好適のスロープがある。積雪平均一米位。湯の湖を左に見て進めば湖の北岸に日光湯元温泉がある。

湯の湖の鱒釣は湯元温泉の入口にある林野局出張所で許可を受ける。期間六月一日から九月一五日止、料金半日二圃、一日三圃。鱒釣船は半日一圃、一日二圃。湖上遊覧ボート一時間五〇錢。

日光湯元温泉から白根山は一日行程としてよく、又金精峠を越えて奥上州の菅沼、丸沼へは一二軒、噴泉塔八丁の湯を経て川俣温泉迄は二〇軒である。

【川俣温泉】栃木縣鹽谷郡栗山村川俣。日光湯元温泉から金山峠を越して約一六軒、徒歩六時間位。地は鬼怒川水源に近い峡谷で、男體、帝釋等の峻嶺に取圍まれ、温泉旅館は鬼怒の溪流に臨む仙鶴にある。温泉は瀧の湯(五一度)地蔵湯(五四度)とあり、クローリウム含有泉で婦人病一切、ヒステリー、神經痛、リウマチス、外傷性諸症等に效がある。附近に八丁の湯、噴泉塔、鬼怒沼の神聖地等があり、その繁華には普通此處

切五人乗二圃。省線今市驛から貸切自動車五〇分、五圃、乗合自動車一時間半七五錢。日光、高原兩山の間に介在する小盆地で、西方鬼怒沼に發する鬼怒川と、北方會津津に發する男體川の落合ふ地點にありて、岩石と水流の奇に富み所謂山紫水明の郷である。温泉は仙鶴岳の、下河岸の岩間から湧出するものを其盛浴槽に湛へる原始的の温泉で、無色透明の弱アルカリ性泉、温度五五度、玉の如く美しい創傷、眼病、胃腸病、脚氣、リウマチス、痔疾、婦人病等に效がある。▲此處から高原山の中腹を越せば約一四軒(徒歩三時間—四時間)で鹽原の新湯へ出られる、また會津街道を北へ約二〇軒で會津若松市へ出る。五人乗貸切二五圃。

【旅館】近江屋(室二二、一泊二圃—五圃、自炊入湯料一日一〇錢、座料道具料一日二五錢乃至五〇錢、夜具一枚一八錢乃至三〇錢)。

【湯西川温泉】栃木縣鹽谷郡栗山村。下野電車新藤原驛から會津街道を北に約一二軒程進み、關門(此處に件久旅館の出迎場がある)から左折して湯西川に沿つて約一六軒許りの所にある。新藤原驛から高原(川治温泉附近)迄乗合五〇錢(川治の項参照)、高原から關門迄約五軒(此處迄貸切がゆく)關門から湯西川迄入夫一圃、駄馬一圃、籠四圃。

地は湯西川の沿岸、海拔一、二〇〇米の所にあり、全く夏を知らぬ別天地である。十戸許りの部落をなし、湯は川の兩岸に五ヶ所程湧出して居るが旅館に内湯がない。泉質は無色透明の鹽類泉で温度四九度、花柳病に特效があると云ひ、皮膚病、痔疾、リウマチス等にも效がある。

【旅館】件久湯西川館(一泊七〇錢—三圃、自炊式室料諸道具附一室貸切一日三〇錢乃至一圃半、同入込座敷は一五錢以上、寢具料一夜一〇錢乃至六〇錢、但し九月から三月迄の閑散期には以上の五割引。館内には罐詰類及飲料水の販賣所があり、ラヂオ、テニスコート、ピンポン臺、大弓場、釣魚等の娯樂設備がある)、龜田、金井(六〇錢—一圃半)、清水、金又(六〇錢—一圃)等、尙此處から山道約一五軒で前記川俣温泉へ、約二〇軒で噴泉塔に出られる。

【鬼怒川温泉】栃木縣鹽谷郡藤原村。今市(東武電車今市驛)から下野電鐵で二二分、三四錢、電車驛カラ二〇〇米、又は省線今市驛から一六軒、自動車三五分、乗合三五錢、貸切三圃半。

に沿ふて至る途中は春は野州花、秋は紅葉の美あり、また虹見の瀧・兎跳・五光岩・岩削橋・夫婦瀧等の勝がある。又舟遊び・釣魚・茸狩の快もある。温泉は湧出量豊富で何れも断崖の下、岩間から湧出し、之を其儘岩窟に湛へたものや、川の真中へ設けた千人風呂もあり、各旅館ではモーターで百尺崖上に引揚げて内湯として居る。泉質は弱黄類泉で無色透明、温度五五度、外傷性諸傷害・胃腸病・神経痛に特效あり、リウマチス・婦人病等にも效がある。

【旅館】 鬼怒川温泉ホテル(電話原二五・二六、優雅な日本間九〇バス付洋間六室、舞臺付大宴会室、大食堂、グリル、娯樂室、家族風呂、温泉プール、全館温水暖房等の設備が完備して居る。日本室二食付三圓一六圓、洋室八圓乃至二圓、晝食料一圓一三圓、一品料理も調理す、④和五圓洋八圓) 麻屋(電話原一・二二、室四〇)、大瀧館(電話二〇、室二七) 鬼怒川館(電話六・一〇、室三〇)、星野館(電話一三、室二二)、山水閣(電話三二、室三七)、大出館(電話五、室二五)、以上一泊二圓一五圓。

【白根山】 日光湯元温泉から西へ金精峠への道を約八百米程行き白根山道の追分を左折して白根沼に沿ふて約二軒は緩かな登りである。沼の行詰る所で右手の尾根に移り、前白根山へ登る。此の道は木の根の露出した可なり急な道で、湯元から約二時間で外山と前白根(二、三七七米)の鞍部に出る。そこから尾根を西に僅か進むと西方目の前に中央火口丘奥白根の岩峰が聳え、脚下には五色沼が光つて居る。此處は外輪山の東壁で、湖畔に下れば夏も往々雪が残り、高山植物が御花畑を造つて居る。五色沼は前白根の西麓、海拔二、一七四米の高所にある。火口原湖である五色沼と白根山を右に見て一旦西南の尾根を下り岳峰や、はんの木の下つて草原に出て、そこから頂上迄殆んど一直線に岩骨を踏んで登る。湯元から奥白根頂上迄約八軒、三時間乃至四時間で上る。白根山は男體山の西北、群馬・栃木二縣の境上に位置する二重式火山で、関東北部第一の高山として知られて居る。最高點一、五七七米六、其頂上には中央

③三圓半。

【日光湯元丸沼沼田間の交通】

日光湯元温泉―金精峠 上り約五軒餘、徒歩一時間半。▲金精峠―菅沼 二軒七、徒歩三五分。▲菅沼入口―同湖尻約二軒半、徒歩四〇分位。▲菅沼湖尻―丸沼北岸 約二軒半、徒歩四〇分位。▲丸沼北岸の温泉ホテルから須賀川約一九軒、利根運輸自動車一日三回往復、乗合七〇錢、五〇分(丸沼發前九時、後二・二五、四時)、(途中に自根温泉があり、須賀川の約一軒手前の鎌田は尾瀬沼への岐れ道となつて居る。▲須賀川―追貝約八軒、追貝自動車商會、一日七回往復、乗合三五錢、二〇分。沼田驛―鎌田間貸切五人乗七圓。▲追貝―沼田驛 約二〇軒、道路良く、一人乗バス運轉す(列車毎所要一時間一〇分、片道八〇錢、往復一四四〇錢、貸切五人乗五圓、一人乗一二圓。沼田驛―丸沼間 貸切一二圓、二時間餘、(乗合は鎌田、追貝乗換、途中に追貝の吹割瀧、白根温泉がある)。

【白根温泉】 丸沼から八軒、沼田から東北四〇軒、自動車一圓半。白根山塊の山中にある温泉で、閑寂の郷である。温泉は鹽類泉で五五度、胃病に特效があり、腦病・リウマチス・ヒステリー・婦人病・痔疾等に效があると云ふ。

【旅館】 白根館、星田館、一泊一圓二〇錢―二圓。此處から六軒で會津街道鎌田に出、片品川を遡ること二七軒の所に尾瀬沼がある。

【追貝の吹割瀧】 鎌田から一〇軒、沼田驛から二〇軒の東方にある。乗合八〇錢、貸切五圓、片品川の河床をなす岩盤の裂隙に懸れる奇瀑で、高さは七米に過ぎないが中二六米に及び、附近に千歳橋、鱒止の瀧、獅子岩、屏風岩等追貝の眺めが次々に迎撃して呉れる。

【追貝の旅館】 清瀧閣(電話二二、④二圓)。

【尾瀬沼】 群馬縣の北部をなす奥上州山塊の山上湖で、福島縣との境上にあたり、周圍約五軒の小湖ではあるが、湖北に二、三四六米の燧岳聳え、その他檜高山(一、九三二米)・皿伏山(一、九一六米)などに包まれ、人煙遠き神秘境を作つて居る。又此處には長徑八軒、短徑五軒に亘る尾瀬ヶ原の大濕原を持ち、その西に至佛山、東に奥日光の山脈が聳えて居る。此の尾瀬ヶ原を繞る山岳と濕原と森林美は、関東に於ける特異な山岳美として登山者の愛好の地であり、植物景觀及生態學上見るべきものが多いと云ふ。湖の東岸に長藏小舎がある(標高一、六六五米)、三〇人の収容力があり、

火口と云ふべき窪みがなく、數個の燧烈火口があり、且つ東西の大きな割目が山を殆ど南北に二分して居る。その西側のお釜は物凄く程険しい断崖で圍まれ、奇岩亂立し、其の間を草木で飾つて居る。此のお釜は明治五年の大爆發の址で、明治二六年にも再び遠近に灰を降らしめたが、その後は烈しい活動を見ない。頂上には白根山神社の小祠があり、山頂の展望は雄大で、東に中禪寺を俯瞰し、湖の北に男體の全山容を眺め、戰場ヶ原を麓にめぐらし、日光火山群の山々が一目に入り、淺間・榛名・赤城の諸山をも指摘され、眼下に關東平野が際限なく廣がつて居る。頂上から西北に下つて血の池地獄、遠鳥居を経て白根温泉迄約一〇軒。尙血の池地獄で右へ折れば笑窪を経て菅沼、丸沼へ出る

【菅沼、丸沼、片品川】

日光湯元温泉から西北に行き金精峠を越して菅沼に出で、其南岸に沿ふて一軒程ゆけば湖尻は八丁の瀧となり、更に丸沼、大尻沼、湖面海拔一四〇二米最長徑一軒の二つになつて深く濶み、夫等の畔には千古の姿が保たれ新緑及紅葉の景趣に富んで居る。是等の沼は何れも白根山の西北麓に位し、その燃岩の爲に溪流が堰き止められて出来たものである。金精峠は湯元温泉から五軒餘、徒歩一時間半位。湯元から西北に進んで約一五十分許り、白根山への分れ道迄は平坦であるが、それから漸次坂路となる。頂上近くは稍急であるが、それ以外は左程の坂ではない。標高二、〇二四米の時に金精(男性)神社がある。峠から菅沼迄二軒七、徒歩三五分位、此の内二軒程が下り坂である。菅沼は湖面海拔一、七一九米、その形は二個の三角形と一個の長方形とを連絡した如く最長徑一、七五〇米、湖岸線は屈曲多く延長一四軒に及んで居る。水深七五米、湖周に緑樹繁茂し風景がよい。湖尻近くに菅沼森林浴所(一泊五〇錢)がある。此處から半軒許り進み、更に二軒餘、約四〇分許り、所謂八丁瀧道の急坂を下ればやがて丸沼北岸の丸沼温泉ホテルに着くのである。

丸沼は、陸測の地圖では、湖面海拔一、四〇三米(菅沼との差三一六米)最長徑六〇米となつて居るが、最近發電所用ダムが丸沼の湖尻に設けられたので、水面は約二一メートル許り高く、従つて湖面積も幾倍せられ、湖畔の大木亦湖底に没し去られ、一種悲壯な感を抱かせるものがある。

【丸沼温泉ホテル】(群馬縣利根郡片品村)温泉入浴隨時、室敷和一〇、洋三〇、一泊二食付一圓半、二圓半、四圓、又は室代和室一圓一圓二圓、洋室八圓、食事は食堂にて好みのものが出来る。定食七〇錢、其他并物及一品料理四圓、

小舎番常住し冬期も使用出来、物資も供給する。一泊一圓三〇錢、餅當二〇錢 沼田驛―追貝―須賀川―鎌田約三〇軒、自動車乗合一圓二五錢、貸切五人乗七圓、此間片品川に沿つて遡る。

鎌田から越木、土田等の部落を経て約一〇軒で戸倉に着く(案内あり)、此處から道を右に、荷鞍山の東麓を経て三平峠(一、七六九米)を越し尾瀬沼の東岸に出る(長藏小舎まで一七軒)道と、左に進で荷鞍山の西麓を経て鳩待峠(一、六一五米)を越し尾瀬ヶ原を廻つて長藏小舎に行く道とがある。後者は前者よりも遠く約二八軒ある。

▲燧岳は長藏小舎から約七軒、うち四軒の沼尻川迄は平坦である。

尾瀬沼から北に進で南會津郡の坂下方面に出る沼田街道があり、また傍腰山、赤安山、黒岩山、鬼怒沼山等の尾根を縦走して鬼怒沼に降り、約八軒下流の八丁湯に一泊、噴泉塔を見物して湯元温泉、中禪寺湖に出る事も出来る。

東北沿線

【須賀川の牡丹】 東北本線須賀川驛の東南約三軒三(毎年五月一〇日頃から同月末日迄の開園期間中には各列車毎に乗合自動車がある。片道二〇錢。貸切は一圓)今を距る約二〇〇年、明和年間に大阪から移植したものと云はれ、その後一時荒蕪に委されたが明治年間に至つてまた盛んに栽培されるに至つたものである。園内の老樹六〇〇若木を合せて三、〇〇〇株を越え、その種類も二〇〇種以上を算すると云ふ事である。その古いものは幹の周り七寸、高さ一丈に及び一株の花よく三〇〇を付けるものがある。見頃は五月二〇日前後。▲須賀川町(岩瀬郡)は南北に延びた高臺の上に發達した街道町で、天正以前には二階堂氏の領した處である。人口一七、九九三(昭五・一〇)、煙草、清酒、生糸、馬等の集散地として市況榮えて居る。

【旅館】 虎屋(電話須賀川一五、驛一軒五、一泊二圓、三圓、料理兼業、旅館前送乗合の便あり)、八木屋(電話三九、驛前)。

【郡山市】 上野から急行五時間(二三三軒)、三等二圓九七錢。福島縣の中央、安積平野の東部に位し、陸羽街道の要衝を占め、磐越東線、同西線の分岐點をなし、近くは水郡線の基點となつて居る。福島縣下第一の商業地で人口五一、三六七(昭五・一〇)、附近に有名な安積開墾地がある。市内の繁華區は柳内で、大町通は商業の中心をなして居る。

此の地は阿武隈低地帯南中央部の撓曲盆地に位し、その西方には廣く平野の發達を見るが、用水の不足に禍せられて昔から不毛の地とされ、二本松藩の一屬領としてその産業の見るべきものがなかつたが明治六年安場縣令が開墾組合「開成社」を創立して荒野の開墾を企て、次いで明治十二年政府自ら六〇〇萬圓の巨費を投じて開拓に従事し、同一五年長さ四八軒、遠く猪苗代湖の水を曳く安積疏水を完成して五〇平方軒に灌漑し得るに至つたので、此處に米産の豊庫開け、次いで東部電力會社が此の水の落差を利用して沼上發電所を起してその電力を郡山に送り、製糸紡績製糖等諸種の工業を起すに及んだので農産工業二重の收穫を與へたので市況頗る活潑となり、日露戦争前には人口一萬二千にも足らず、白河は勿論須賀川にさへ及ばなかつたものが、現在五萬一千を越え、既に福島・若松を凌いで縣下第一に位置するに至つた。工場の主なるものは東邦製糖工場(高南)、仙臺鐵道局工場(小田原町)、日本紡績工場(蘆山町)、片倉製糸岩代製糸場(原田)、名古屋紡績郡山工場(長者町)、小口組製糸所(田中)、橋本製糸所(清水臺)、地方專賣局(大堤)等で其他農事試験場(神明町)、商工會議所、公開堂等がある。

〔旅館〕木村屋(電一七、驛前、二圓一三圓半)、布袋館(電四五、驛前、二圓一三圓)、太田屋本店(電五六、驛三五〇米、二圓半一三圓半)、太田屋支店(電三〇三、驛前、太田屋別館(電五三九、驛半軒、二圓半一三圓半)、和久屋(電一一〇、驛半軒、二圓半一六圓)、内山(電四〇五、驛前、二圓半均一)。

〔名物〕安積豆(砂糖豆)、花いかだ煎餅、花かつみ(手巾)。

〔廻遊順路〕驛—蘆山公園(驛の西約一軒)—公會堂—開成山公園(西三軒—自動車三〇錢)—安積神社(驛の西半軒)—大町—北町—柳内—驛。以上貸切自動車にて約二時間、料金四圓。自動車半日貸切一〇圓。

福島市

上野から準急行列車で五時間半(二六九軒二)、三等三圓四七錢。

福島縣の東北部、福島盆地の中部、阿武隈河岸に位し、交通の要衝に當り、福島縣行政金融の中心をなして居る。福島盆地は阿武隈構造谷底中、更に一段陥没した部分であつて、其の表面は四圍の山地から流されて來た壤土に厚く

被覆せられ、信夫・伊達二郡に屬する所謂信達平野をなし、良田廣く開け、且つ河岸の砂地には桑園到る處に繁り、養蠶業の盛な點でも全國屈指の地位を占め、近年はまた梨・櫻桃等の果實もなかく、多く産出されて居る。

市は實にこの盆地を中心として發達した町で、もと信夫(しのぶ)と云ひ、信夫國造の始めた處である。然し古來大藩の成立を見ず、伊達、蒲生等の争奪の巷となり、徳川の末には親藩板倉氏三萬石の城下をなし、明治維新に及んだが、その位置東北交通の要衝に當つて居たため、諸藩の争奪の的となつたものであらう。廢藩の後は此處に縣廳を置かれ、地方行政の中心となり、加ふるに養蠶業の急激な勃興は、生絲、繭の取引を盛ならしめ、東北有数の商業都市たらしむるに至つた。即ち明治一三年、東北最初の銀行が出来、東北唯一の日本銀行支店、六縣唯一の高等商業學校のあるのも此處である。今や漸くその勢力を郡山市に奪はれんとして居るが、尙、福島市二重・共同生絲・山十組製糖・日本紡績・福島生絲・鐘ヶ淵紡績・日本絹織等の工場があり、人口また四五、六九二(昭和五・一〇調)を有し若松及び郡山と鼎立の姿を保つて居る。

〔旅館〕福島ホテル(榮町、驛二〇〇米、電一三・八九〇、室三五、一泊三圓)、辰巳屋榮町、驛前、電三〇九・三一六、室二五、三圓、藤金本店中町驛四〇〇米、電二〇四、室一七、二圓半、藤金支店(榮町、驛二〇〇米、電二〇三、室一八、二圓)、福島館(榮町、驛前、電三六、室二〇、二圓)、平松館(榮町、二五〇米、電一一八・二〇〇一、室二三、二圓半)、芳晴館(榮町、二〇〇米、電六三、室一四、二圓)、島屋(榮町、二五〇米、電一〇八、室二八、一圓八〇錢)、大平館(置賜町、四〇〇米、電五五三、室一四、二圓)、西屋(大町、四〇〇米、電二四、室二〇、二圓)、其他。

〔土産物〕梨、櫻桃、信夫文字摺(絹手巾)。

〔土産物〕梨、櫻桃、信夫文字摺(絹手巾)。

谷観世普一信夫文字摺—協會グラウンド—信夫山公園—驛。以上貸切自動車にて約二時間位。▲貸切自動車一時間一圓、二時間一圓半、半日四圓。

〔名所〕▲信夫山 驛の北約一軒半、自動車五〇錢、市の北方に屹立し、海拔二七三米、石英粗面岩から成る。驛前から福島電車で谷観世普下車(約二〇分)、西に進めば直ちに山の東麓に達する。此處に岩谷観世普があり、江戸時代の三三觀音その他の磨崖佛がある。此處から山麓に沿つて約一軒西に進めば山の中腹に信夫公園があり、福島市街を一時の裡に收め、吾妻火山、阿武隈の流れを望んで風景がよい。これより更に北へ登ると寺山の東面に薬王寺があり、その東北谷山の絶頂に信達二郡の總社羽黒神社がある。▲文字摺 驛の東北約六軒、自動車一五分、乗合二〇錢、貸切一圓二〇錢。前記岩谷観世普停留所の東方約二軒半、岡山村山口の觀音寺境内にある。石は大なる花崗岩で、もと山腹にあつたのであるが、源融(ミナモトノホル)と虎女のロマンス以來、麥の青葉を以て石面を摺ると相思の人の面影が見られると云ふので、それ等徒輩のため、近傍の麥圃は被害甚大、農夫等因じて一夜石を下へ突き落したのだと云ふ。今柵を廻らしてある。源融(河原左大臣)は貞觀六年中納言を拜し、陸奥出羽按察使を兼ねた人で、奥州探勝の途すがら山口の里(文字摺觀音のある所)に足を止め、村長の娘虎女と假の契を結んだのであつた。百人一首で有名な河原左大臣の戀歌、みちのくの忍ぶもじり誰故に、みだれそめにし我ならなくにには遙に己を慕ふ虎女に贈つた歌と傳へて居る。文字摺石は此の歌によつて名高くなつたもので、こゝから丘に登ると觀音堂の前、亭々と登ゆる老杉の下に、明治初年に建てられた河原左大臣の歌碑がある。また丘上には五智如来を安置する多寶塔がある。

〔靈山〕福島から電車で掛田(二〇軒、一時間二分)または梁川(二一軒、同上)に至り、それより靈山神社を経由するものを表參道とする。掛田から神社まで東北約六軒、自動車二〇分、乗合三〇錢(一日四回)貸切一圓半。福島縣から貸切五人乗片道四圓、往復六圓。梁川から神社迄東南一〇軒、自動車貸切片道二圓往復三圓。靈山神社は靈山支城の一なる古屋館(コヤダテ)の山上(伊達郡靈山村大石)にあり、明治一四年の創建で北畠親房、顯家、顯信、守親の四公の靈を祀るもので、明治一八年四月別格官幣社に列す。北畠顯家は建武中興の際、陸奥守に任ぜられ、義良親王(ノリナガシノウ)を奉じて多賀の國府に下向して奥羽の鎮撫に當つたが、足利尊氏の叛くに及び、凶徒蜂起し

て國府に止まる事能はず、延元二年伊達行朝及靈山寺の僧徒を頼んでこの山に移り居館を構へて居た。靈山神社から表參道を南へ下り、被川の溪谷に沿つて登ること約六軒で靈山の山頂に達する。靈山は片麻岩、花崗岩等から成る。阿武隈高原の東北部に發ゆる玄武岩質の奇峯で、その頂上はむしろ高原状をなすが、西の斜面は火山集塊岩の奇峯によつて絶壁をなし、妙義三山にも准らふべき奇勝を連ね、福島盆地を縦貫する東北本線の車窓から遠望しても直ちにそれと認め得られる。山頂の集塊岩は甚だしく風化浸蝕を受けて所謂奇岩怪石をなし、稚兒ヶ岩、神樂岩、弘法大師學問ヶ岩、物見、猿跳、五百羅漢、蟻戸渡、突拔岩等々。眺望また甚だ大で史に景に、訪ふべき所尠くない。山は海拔八五〇米。貞觀年中慈覺大師がこの山を開いて靈山寺を建立したと傳へ、靈山寺建立の時勸請された日枝神社の遺址があり、こゝに日枝の小祠がある。その小祠の東に當つて靈山寺址と推測せられて居る所があり、また小祠から南方に進めば國司館址と傳ふる遺址がある。こゝに靈山城の碑があり、顯家公木丸蹟の標柱が建て居る。

飯坂温泉 福島縣伊達郡飯坂町。飯坂と湯野とは摺上川を挟んで兩者相對し、十綱橋を以て連絡し、交通機關は兩者同一である。

湯野温泉 福島縣伊達郡湯野村。飯坂温泉は海拔一二〇米餘、緩傾斜の高原、信達平野の西北隅に位し、三方は丘陵に圍まれ、只東南に遠く田圃が展げ、その東北側を繞つて南に流る、摺上川の清流を隔て東岸の湯野と相對し、十綱橋によつて相結ばれて居る。浴樓は概ねこの深峽の岸に臨んで軒を列ね、或はその支流赤川の谷に臨んで特殊の景觀をなして居る。

温泉は約百ヶ所の泉源を有し、多く鹽類泉に屬し何れも

無色透明で、温度は五〇度乃至六〇度、リウマチス・婦人病・胃腸病・骨折・痔疾等、殊に鱒湖・透達の二湯は婦人病に效くと云ふ。〔特色〕療養並に行楽向。

湯野温泉は摺上川を挟んで飯坂に對し、十綱橋によつて交通して居る。家の造りから泉質・效能等全く飯坂と同一である。

飯坂の温泉は透達湯、鱒湖湯を中心とする湯澤と、十綱橋畔の波來湯筋、瀧野湯筋、赤川筋と、川上約二軒の郊外にある天王寺温泉とに區別せられ、湯野温泉は十綱橋畔の湯野と外に摺上川の上流約二軒の穴原とに分れて居る。此湯泉郷のうち瀧野湯筋と、湯野の浴槽は摺上川の峽畔から上へ上へと寸地を求めて建てられ、清流に影を映じて一の畫景を形成して居る。これを對岸から望むと何れも三層四層の高樓であるが更に表通りから見れば、普通の平屋又は二階建である。それで往來の方から入つて行くに先づ四階に入り夫から三階二階へと下りる様に出來て居る。瀧野湯筋や赤川筋の旅館は都人士向の代表的旅館許りで「遊樂の巷」の感があり、赤川湯は川を挟んで五、六軒の旅館が塊り合ひ、谷には朱塗の橋が架けられ、四邊の翠色に照應して繪の如き情緒を滴らせ、また萬人風呂などがある。しかし鱒湖湯、透達湯の二つの共同湯を中心とする一區は湯治客ばかりで賑はひ、いかに田舎の湯宿といふ感じを興へる。穴原と天王寺は川を挟んで相對し、小倉山の翠を貪つて風光美しく、夏季此處に涼を求めて來るものが少くない。此處から摺上川の上流六軒許り、白兔、瀧野のあたりは溪流の美特に勝色を呈して居る。

〔旅館〕 (瀧野湯筋) 花水館 (電飯坂三、室二四。⑤五圓) 角屋 (電六、室一七、④四圓半) 以上何れも貸切湯あり、普通一泊三圓半、四圓、五圓、樹屋 (電同四、室二三、一泊二圓半—四圓) (赤川筋) 泉州閣 (電同九、室一七、一泊同上、貸切湯あり)、赤川屋 (電同二〇、室一五、④三圓半、普通一泊同上)、金瀧 (電同八、室二一、一泊同上)、其他。

〔湯野〕 稻荷屋 (電飯坂三六・一三六、④三圓半、貸切湯あり、普通一泊三圓均一)、龜屋 (電同二三五、一泊三圓)、湯野野屋 (電五、二圓半—三圓)

麓にあるものは遠刈田、青根、新開、鎌先、小原、秋保の温泉があり、西麓即ち山形縣側にあるものは赤湯、上の山、蔵王高湯等である。蔵王山麓一帯は好スキー場として喜ばれて居る。雪質も良く、スキー季節は一月下旬から三月下旬迄で、初心者よりは山岳スキーに適し、遠刈田、我々温泉を根據として蔵王山へのスキー登山に興が多い。

〔登路〕 東北本線白石驛から大原驛まで、奥羽本線山形、金井驛及上の山からの二方面がある。登山期七月九月。

〔白石・大原口〕 白石驛から西北二軒、自動車五〇分、乗合七〇錢、大河原驛から西二軒五、自動車四五分、乗合七〇錢) で遠刈田温泉に達し遠刈田温泉から刈田岳頂上迄一三軒、登り六時間下り三時間位、比較的容易である。途中約九軒の所に新道小舎(我々温泉から約一軒)があり、登山中は小舎番が居て、橋渡しや登山料などを徴して居る。此處から約一軒で餐の河原に出る。そこからは蔵王の連山が一眸の裡に集る。

〔山形・金井口〕 金井驛から東一軒(自動車五〇分、八〇錢)、山形驛から一六軒(自動車五〇分、八〇錢)で蔵王高湯温泉に達し(一九三頁参照)、高湯から熊野岳まで七軒、熊野岳から刈田岳迄は稍平坦な道で一軒餘ある。上り三時間下り二時間。

〔上の山口〕 上の山から刈田岳まで二一軒、途中九軒の永野迄自動車が行く貸切二圓半、永野には案内人が居る、案内料二圓。永野から頂上迄は約一二軒稍急で上り四時間、下り二時間半位を要する。

山頂熊野岳に石室があり、刈田岳には刈田神社がある。山頂の眺望は頗る雄大で、東には阿武隈川の一流が見下され、海上には遙かに松島、金華山を望み、仙臺の市街は手に取る様に見える。西は山形盆地に山形市、上の山温泉などを俯瞰し、北に月山、鳥海山などが望まれる。

〔鎌先温泉〕 宮城縣刈田郡福岡村。東北本線白石驛から西約八軒一、自動車二〇分、乗合三〇錢(一日五回)、貸切五人乗一圓半。

上野—白石間急行にて約六時間二〇分(三三〇三軒三三)、三等三圓八三錢。地は翠巒四周、閑寂の境で、昔から奥羽の薬湯と云はれ、効能が卓越して居るので有名である。温泉は炭酸鹽類泉で、四九度、腺病、神經痛、リウマチス特に創傷に卓効があると云ふ。

半)、泉屋(電三七、一圓七〇錢、二圓半)、橋本館(電二七、二圓半、三圓)新松葉屋(電一六、同上)、綿屋(電一七、二圓—三圓)、東館(電七四、二圓、二圓半)、清水館(電一六一、一圓半—二圓半)、信夫屋(電一三七、二圓—三圓)、清瀧館(電七三、二圓)。(穴原) 泉屋(二圓半、二圓)、吉川屋(二圓半—三圓)、惠比須屋(二圓—二圓)。(天王寺) 立花屋(三圓付二圓—三圓)、おきなや(同上)。(湯澤) 中村屋(二圓)、油屋(二圓—二圓)二圓、堀江屋(同上)。(波來湯筋) 田村屋(二圓)、立屋(二圓三〇錢)、葛屋(同上)、平野屋(二圓半) (以上何れも内湯あり) 其他。ますや(④三圓半)。

〔名所〕 ▲大島城址 十綱橋の西約一軒半、館山にありいま鷹(おうとり)公園となつて居る丸山々上の平地で、平泉の藤原氏全盛の當時その將佐藤基治が信達の子等を領して築城した所と云ふ。かの有名な佐藤信忠、忠信の兄弟は此の基治の子等であつて、父に代つて義經の部下に加はつたのである。然るに義經西征の途中、信忠は屋島に斃れ、忠信はその後吉野に於て主人に代り、義經二度目の東下りの時には二人共其行に欠けて居た。また基治もやがて頼朝の軍を迎へて、今の金谷川附近に戦死したのであつた。今飯坂の醫王寺には基治父子の墓及義經由縁の寶物がある。▲醫王寺(新義真言宗) 飯坂の南約二軒福島電車西線醫王寺前停留所の西約半軒、平野村鱒野にあり。佐藤氏の菩提所で、基治夫妻及信忠、忠信の墓がある。▲西根神社 十綱橋の東約半軒、湯野村にあり。〔名物〕 飯坂納豆、十綱織、家寶餅、文字摺。

〔蔵王山〕 羽前、陸前、磐城の三ヶ國に跨る古來の靈山で、熊野岳(海拔一八四一米)から孤嶺を描き、東南の刈田岳(一、七五九米)に至る環状を外輪山とし、更に五色岳(一、六七四米)を中央火口丘とする二重火山蔵王岳と、其南方に接して口を開いた大爆發裂口を有する屏風嶽(一、八一七米)及馬の神山(一、五八五米)、後鳥帽子山(一、六六六米)一帯の南蔵王火山とからなつて居る。五色岳の西腹には御釜と稱する火口湖がある。直徑約三〇〇米の圓形をなし、中に濁綠色の温泉を湛へ、時々その水を奔騰させまた泥土を噴出することがある。蔵王山麓には山形縣にも、宮城縣にも一大温泉郷が形成されて居る。其の東

〔小原温泉〕 刈田郡小原村、同上白石驛から西南約九軒一、自動車三〇分、乗合四〇錢(一日五回)、五人乗貸切二圓。地は白石川の清流に臨んで景色がよい。温泉は鹽類泉で五四度、神經諸病、婦人病、特に眼病に効くと云ふ。

〔旅館〕 桂屋、泉屋、枕流閣。附近に大正一三年分湯した鎌倉温泉がある。旅館 内城屋、高橋屋。

〔遠刈田温泉〕 刈田郡宮村、同上白石驛から二軒、自動車五〇分、乗合七〇錢(一日八回)、貸切五人乗三圓半。別途東北本線大河原驛から自動車四五分、七〇錢(二軒五、或は仙南温泉軌道により一時間四〇分、賃一圓)。

地は蔵王山の東麓に位し、東南に青麻山を望む海拔三三〇米、松川の左岸にある。四境翠巒を繞らす閑靜な一區ではあるが脂粉の香も相當漂つて居る。温泉は鹽類泉及炭酸泉で四三度内外、腺病、胃腸病、リウマチス等に効がある。

〔旅館〕 我妻、遠藤、村上、佐藤、三浦屋、大小室、中野。〔青根温泉〕 柴田郡川崎村、同上白石驛から西北二九軒、自動車一時間二〇分、乗合一圓(一日四回各急行列車に接續)、貸切五圓、遠刈田温泉から約六軒、自動車四〇分。同上大河原驛から二八軒、自動車一時間五分、賃一圓(一日七回)貸切五圓。

地は花房山の中腹海拔五〇〇米、西に蔵王山を貪ひ、東南は遠く開けて仙臺附近から松島、金華山までも見渡され、眺望の雄大な事我國温泉中稀に見る處である。温泉はアルカリ性鹽類泉で四九度、神經諸病、胃腸病、婦人病、眼病に効くと云ふ。

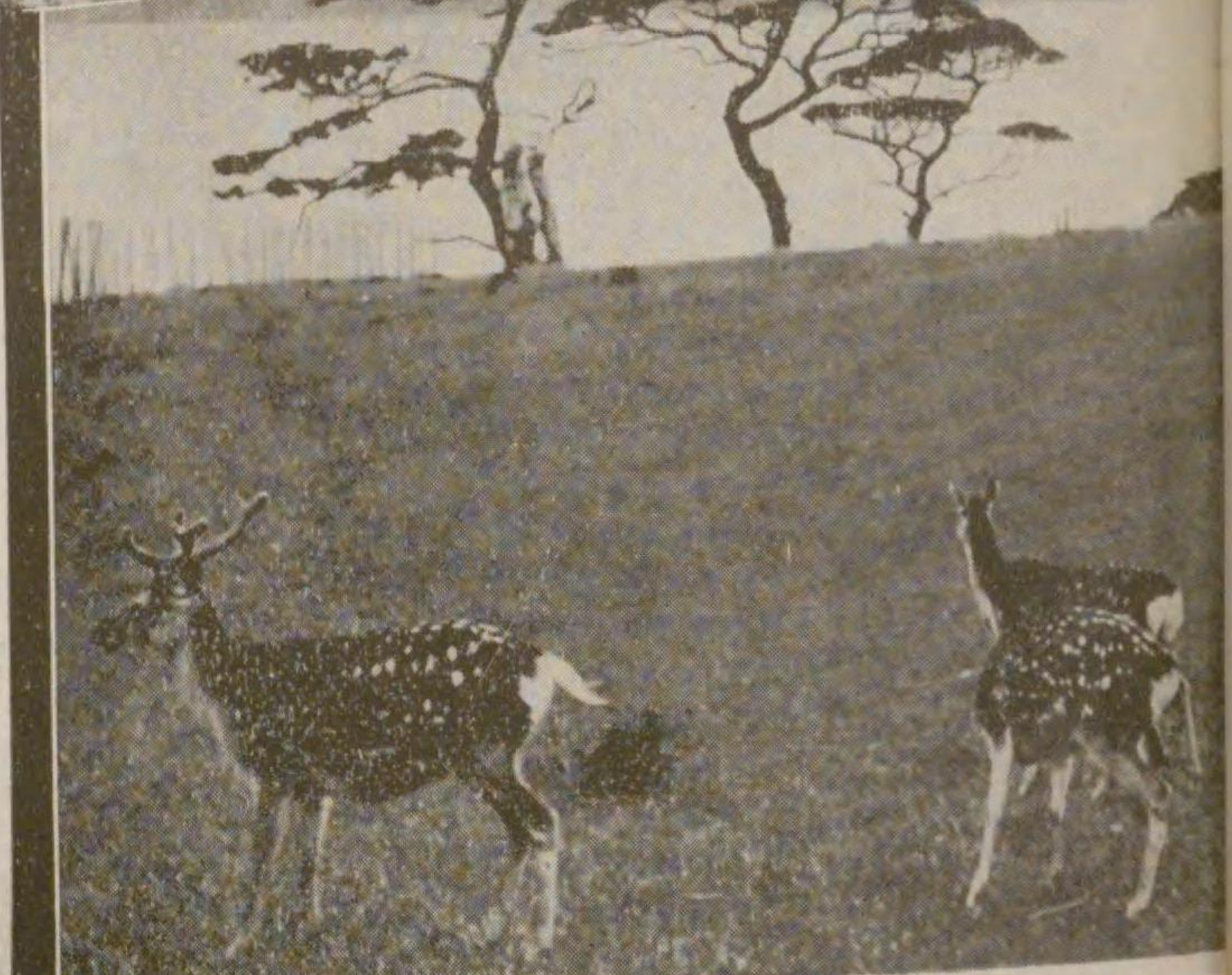
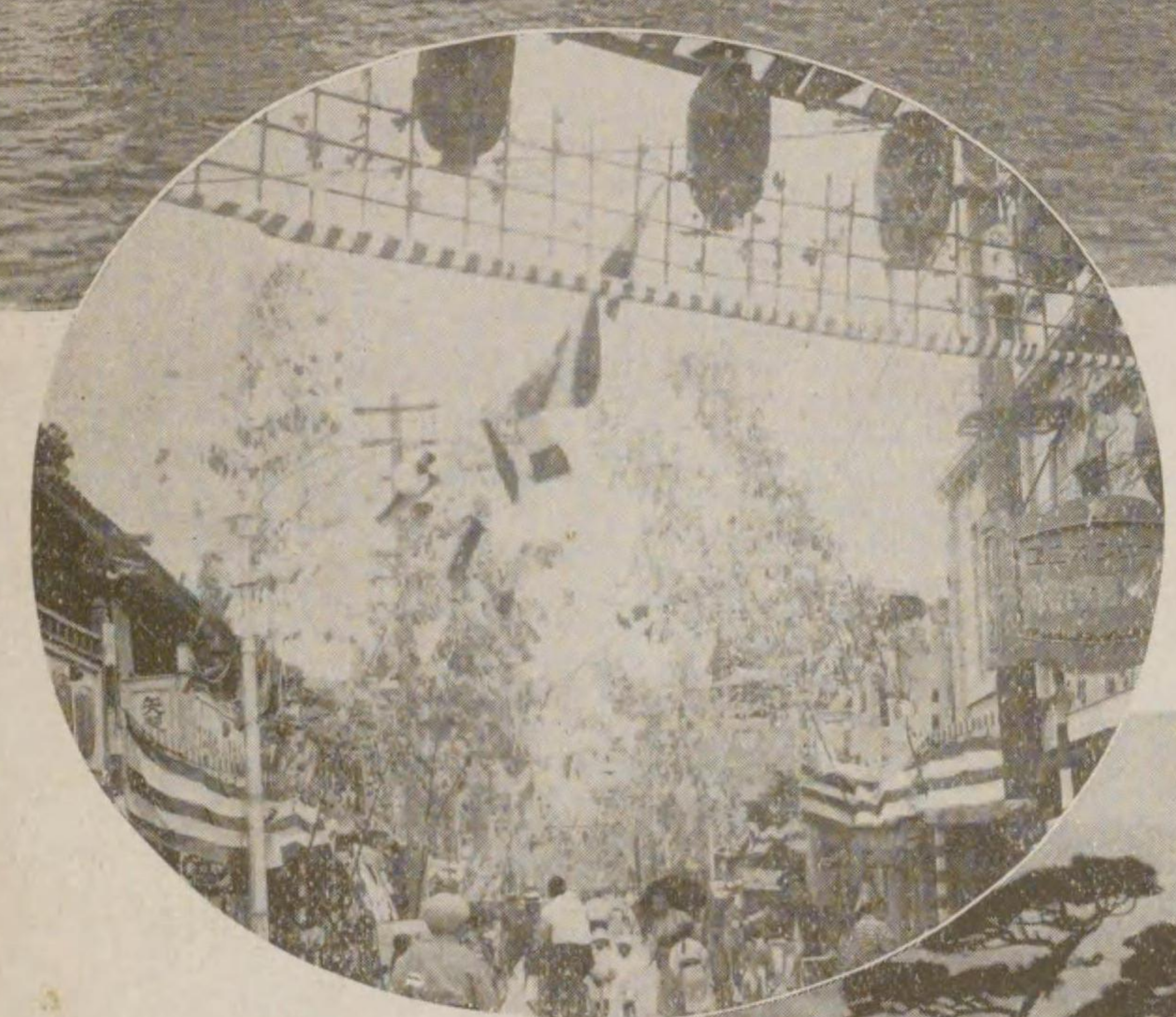
〔旅館〕 青嶺閣(丹野七兵衛、電話青根局呼出、室六一、一泊二圓半、自炊一日一圓、④二圓半)、不忘閣(佐藤仁右衛門、室六一、一泊二圓、自炊一圓④二圓半)、不忘館(室三〇、二圓)、名號館(室三〇、一泊二圓)。

蔵王山へは此處から一二軒あり、その登山根據地となつて居る。

〔我々温泉〕 柴田郡川崎村、前記遠刈田から西北上り八軒一、駄馬二圓、籠二圓。地は海拔約八〇〇米、蔵王山中の仙境にあり濁川に沿つて居る。温泉はアルカリ性鹽類泉で胃腸病、婦人病、皮膚病に効がある。此處から蔵王山頂まで七軒一、上り三時間、下り一時間半位。登山案内料一圓。〔旅館〕 竹内(室四〇、一泊一圓半、自炊一日五〇錢以上)。

松島及金華山遊覽日程案 (東京から五日遊覽)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發後 一〇・三〇	常磐線廻り青森行 各等急行 車中泊	▲上野—水戸—仙臺八時間半(三六二軒九)三等四圓二五錢。 「註」東北本線經由三四八軒五ニ對スル運賃ヲ、常磐線或ハ東北本線ノ何レニ依ルモ旅客ノ任意デアアル。 急行料三等六五錢。上記列車ニ各等餐臺及洋食堂車ガアル。 遊覽自動車ニヨリ仙臺見物、一巡約三時間、賃八〇錢。 驛前—榴ヶ岡公園—孝勝寺—政岡ノ墓—瑞鳳殿—青葉城址—櫻ヶ丘公園—林子平ノ墓—青葉神社—支倉六右衛門ノ墓—縣廳前—芭蕉ノ辻—驛前。 ——第一六二頁乃至一六四頁參照——
第2日	仙臺驛 仙臺驛 本鹽釜驛 松島	着前 七・〇〇 發後 二時頃 着後 二・三〇 着後	下車、遊覽 宮城電鐵 鹽釜神社參拜後 松島遊覽 宿	▲仙臺—本鹽釜間宮城電鐵テ三〇分(一五軒六)賃二五錢(三〇分毎ニ發車ス) 「註」省線テ岩切經由汽車二八分、三等二五錢。仙臺驛前カラ 乘合自動車ノ便モアル、所要三五分(一六軒二)賃二五錢(前五時カラ午後一〇時マデ三〇分母、五人乘切二圓半)。 ▲鹽釜(一六四頁)、松島(一六五頁參照)。 ▲鹽釜—松島間汽船一時間、二五錢、宮城電車一四分、二五錢(一六五頁參照)。 松島、旅館、白鷗樓、觀月樓、東洋館、
第3日	大鷹森 松島 海岸驛 石卷驛	往復 發後 着後	和船又ハ モーターボート 宮城電鐵 宿	松島公園カラ新富山—富山—石卷間宮城電鐵ニテ五〇分(二七軒三)賃八八錢。一時間毎ニ運轉ス。仙臺—石卷一圓三〇錢。 「註」▲松島海岸カラ松島驛へ三軒七、電車一七分、賃二〇錢。自動車一三分、乘合二〇錢、賃切一圓。 ▲松島驛—小牛田—石卷驛汽車一時間二〇分(四七軒七)、三等七四錢。 ▲省線石卷驛カラ宮城電鐵驛へ約五〇分、合同汽船發着所へ約一軒(自動車乘合列車毎、一〇錢、賃切五〇錢)。 石卷市(一六八頁參照)。旅館 千葉甚、福島屋、



(上) 松島風景  
(中) 仙臺の七夕祭  
(下) 金華山の鹿  
(本文一六七頁)

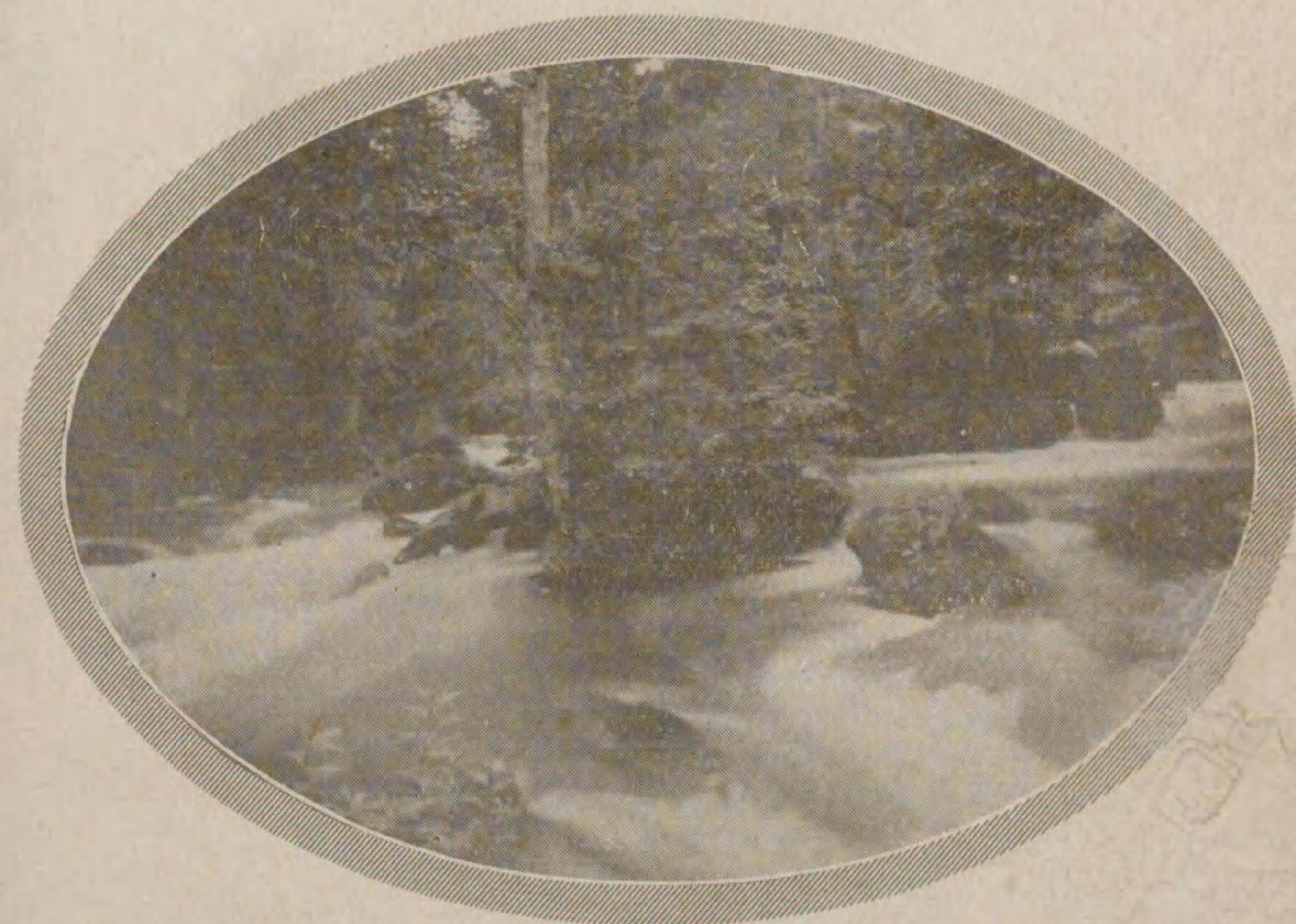




(頁七四一文木) 湖 田 和 十

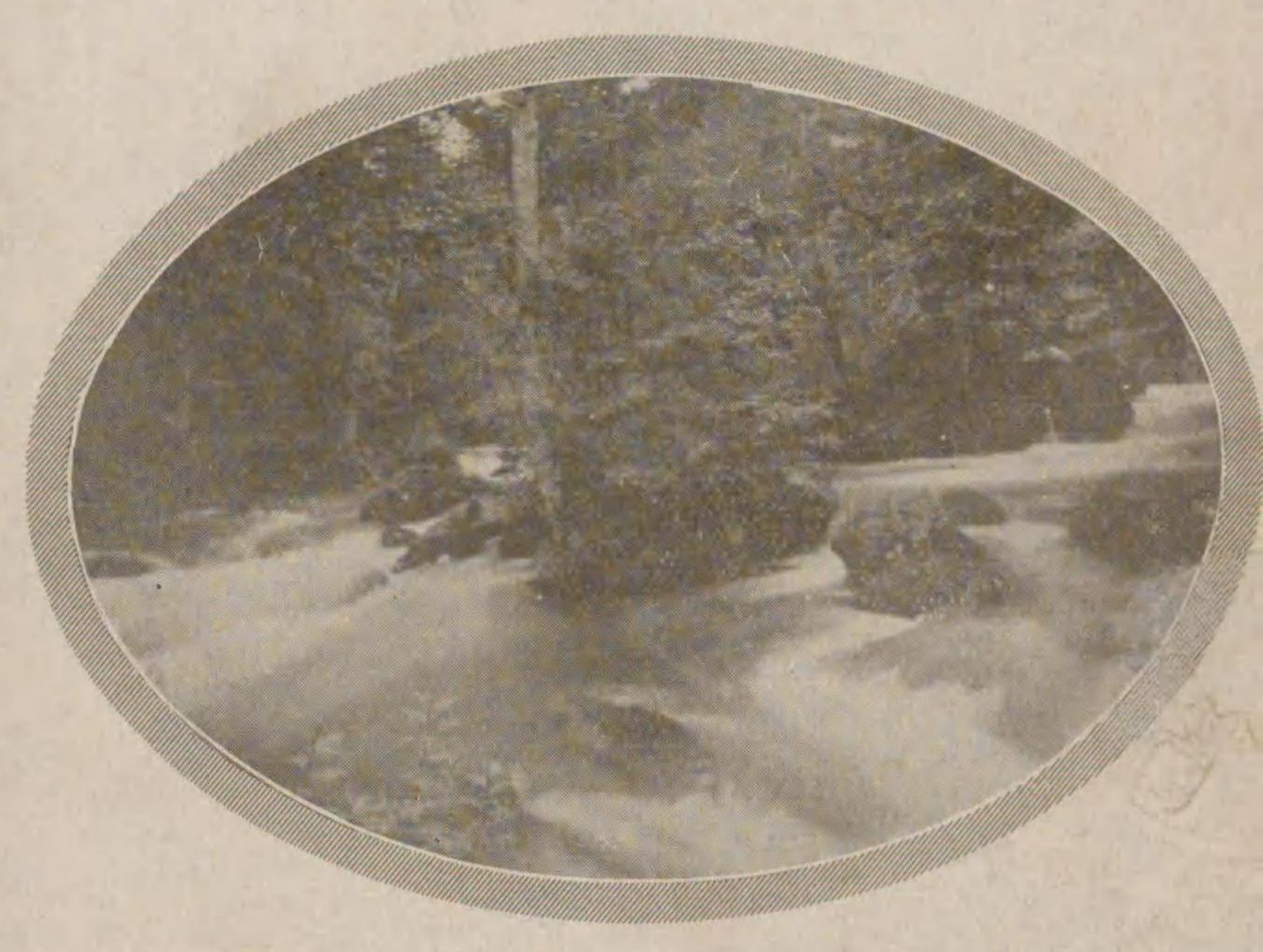
島須比惠湖田和十(上)

谷溪瀬入奥湖田和十(下)





(頁七四一木) 湖 田 和 十  
 島 須 比 惠 湖 田 和 十 (上)  
 谷 溪 瀨 入 奥 湖 田 和 十 (下)





第5日	第4日	第3日
上野驛	仙臺驛	石卷港
着前	着後 發後	發前 一〇〇〇
歸宅	乘車中一泊換	石卷合同汽船 定期航路 (毎日運航)
三等	二等	一等
二六・二八	二五・二六	二一・二二

仙臺發後	仙臺發後	仙臺發後	仙臺發後	仙臺發後
一〇・三〇	一〇・三〇	一〇・三〇	一〇・三〇	一〇・三〇
水戸廻り各急行列車ハ	水戸廻り各急行列車ハ	水戸廻り各急行列車ハ	水戸廻り各急行列車ハ	水戸廻り各急行列車ハ
上野着前六・五〇	上野着前六・五〇	上野着前六・五〇	上野着前六・五〇	上野着前六・五〇
仙臺發後八・三〇	仙臺發後八・三〇	仙臺發後八・三〇	仙臺發後八・三〇	仙臺發後八・三〇
水戸廻り普通列車ハ	水戸廻り普通列車ハ	水戸廻り普通列車ハ	水戸廻り普通列車ハ	水戸廻り普通列車ハ
上野着前六・二五	上野着前六・二五	上野着前六・二五	上野着前六・二五	上野着前六・二五
仙臺發後九・〇〇	仙臺發後九・〇〇	仙臺發後九・〇〇	仙臺發後九・〇〇	仙臺發後九・〇〇
福島廻り普通列車ハ	福島廻り普通列車ハ	福島廻り普通列車ハ	福島廻り普通列車ハ	福島廻り普通列車ハ
上野着前六・二五	上野着前六・二五	上野着前六・二五	上野着前六・二五	上野着前六・二五

▲石卷—金華山間二時間(三三料)、三等一圓五〇錢 (鹽釜發午前八時、賃一圓半)。  
 「註」宮城電鐵石卷驛前カラ山鳥渡迄自動車ノ便モアル、所要三時間(四八料)、乗合片道一圓八錢、往復二圓八〇錢。(石卷發九時及二時、山鳥渡發八時及二時)ノ二往復、賃切五人乘一五圓。  
 山鳥渡ハ社務所直營ノ蓬萊丸(三五人乘)ニテ八分(二料半)、片道二〇錢宛、隨時發  
**金華山(一六七頁参照)。**  
 ▲金華山宿泊ノ場合ハ、黃金山神社應接所ニ獻膳料ヲ納メ、宿泊スルコトヲ申込ミ、案内人ヲ頼ンデ燈臺見物ニ行ク。燈臺ハ島ノ東南端ニアリ、往復四時間位ヲ要ス。翌朝祈禱ノ後裏廻リノお山めぐりヲスル、全行程二〇料、所要五時間位。  
 ▲金華山—鹽釜間石卷合同汽船テ三時間半(毎日)、二六湊、三等一圓五〇錢、二等二圓二五錢。  
 ▲鹽釜—仙臺間電車三〇分毎ニアリ、賃二五錢。  
 ▲仙臺—上野急行八時間二〇分(急行料三等六五錢)、三等四圓二五錢。

旅行費用概算

三等 二六・二八  
 二等 二五・二六

内譯

上野—仙臺—松島—石卷—金華山—鹽釜—上野間汽船汽船賃  
 全部(備考欄参照)、急行料二回分、鹽釜—上野間汽船汽船賃  
 三等上段一、夜分八〇錢、旅館二泊分三等六圓二、夜分九圓、食  
 事料五回分其他費用トシテ三等五圓二等七圓ヲ計上ス

仙臺市

上野から水戸經由急行列車で八時間半(三六二軒九)、三等四圓二五鐘(運賃は東北本線經由三四八軒五に對する運賃で、常磐線或は東北本線の何れに依るも旅客の任意である)急行料三等六五鐘。

市は宮城縣の中部に位し、西南北に青葉山、越路山、大年寺山等の丘陵を繞らし、廣瀬川の清流は市の西南部を灌漑し、東方は宮城野に連る沃野が廣々と展けて海岸に迄延びて居る。市は慶長五年以來伊達氏六〇餘萬石の城下町として榮えた奥州第一の都會で、人口一九〇、一八〇人を擁し(昭和五・一〇調)第二師團司令部・宮城縣廳・宮城控訴院・東北帝國大學・仙臺逓信局・仙臺鐵道局・仙臺稅務監督局・仙臺地方專賣局・仙臺鑛山監督局・その他高等の學校を置かれ、また商工業盛んに行はれ、縣治の中心となつて居る。

伊達氏が此處に築城する以前は宮城野に續く荒涼たる原野で、國分莊と呼ばれて居た。鎌倉時代の初め千葉平常胤の五男五郎胤道、宮城郡國分莊を領し青葉城を築き、國分を姓として子孫相續したが、能登守盛氏に至り嗣なく、天正五年伊達政宗の叔父(伊達晴宗の五男)喜九郎盛重を養嗣子としたが政宗と不和を生じ、戦ひ敗れて盛重は羽後秋田に奔つた。政宗は天正一九年以來玉造郡岩出山城に居たが、慶長五年(紀元二二六〇年)青葉城を修築し(同七年竣工)初めて府城と爲した。そして古來城の邊に千體の佛があつたので千體城と號したが後千代と改め、のち三度改めて仙臺とした。その後市街は漸次擴張されたが、この最初の配置は大體に於て現今まで維持され芭蕉の辻を中心として四方に連つて居る。

伊達政宗は實に仙臺の開祖であり、また東北の雄であつた。かれの生地は米澤盆地の一角であつたが、長く池中のものたるを欲せず、弱冠にして仙臺の山信達の野を瞻望し、磐梯山下に青名氏を滅して會津を收め(天正一六年、二二歳の年)、田村を助けて中通地方に勢を張り、早くも東北地方に大をなすに至つたのは政宗尙少壯の頃である。只體むらくは地の利を得ず、身雄臣臣の早くも天下に馳するに會し、その鋭鋒を北方に避くるに至りつゝ、も、尙大崎の沃野を脚下にその領五八萬石、二〇數郡に達したのである。青葉城は天燈廣瀬川を外濠とし、天險青葉山を木丸とし、その一側を龍の口の深峽に護らしめ、經ヶ峯、雙岩山、大年寺山等に社寺を設けて事ある時の分派堡とし、また彼の開いた追波川に注いだ北上川を仙臺灣に通じ、石巻の港をその河口に開いたのも、その北上川の下流から松島灣と廣瀬名取の河口を列ねて遠く阿武隈川口まで貞山堀の運河工事を始めたのも、松島灣頭の舊寺を改めて瑞巖寺を建て、桃山式の大建物の豪華を誇つた一方にも、事ある日には之に兵馬を貯ふる企てを秘めたものと云はれて居る。されどその位置北緯に偏したため、鷗鷺國內に張るに由なく、關南の雄志また遂に徳川幕府の鎮國令に福せられ終つたとは云へ、ローマに使した支倉六右衛門の墓は北山に、海國兵を談じて一世を警めた林子平の碑は市の西北隅に、今尙何をか語らんとして居るのである。その政宗が難伏の後の雄飛の計を胸にして開いた城下であればこそ、近代の産業に特筆すべきもの少く、また交通上何等自然の要衝たらざるに不拘、仙臺は今に至るまで東北第一の大都市として政治學藝の中心をなし、その石巻は今尙榮え、貞山堀は今も水運を助け、彼の定められた街區は今も仙臺の郊外に及んで居る。寛永三年從三位權中納言に任ぜられ、寛永一三年五月二六日(紀元二二九六年)薨す。年七二歳。

〔産業〕英雄政宗は軍事にその非凡なる偉力を發揮すると同時に、産業にもまた心をを用ひ、大崎平野を開墾して米産を増し、優秀な職人を諸國に求めて織物、染物、漆器、指物、埋木細工、酒、醬油、味噌等の生産に力を盡したので仙臺平、八橋織、清酒、味噌等世に知られて居る。仙臺平は政宗が京都から召した織工兩國屋八右衛門が工夫して織出したもので、八右衛門織と稱して居たが、世に廣く行はれるに及んで、他地方で仙臺平と名づけるに至つたものである。その品位の高雅と地質の強いの名高い袴地用の絹織物である。八橋織は元祿頃の伊達風俗に由来するもので、織模様は七五三の方形を組合せて之に松島の風景などを織出した極めて優美な絹物で、特に婦人用のものに供されて居る。埋木細工は古くは名取川から出たものであるが、今は市西の長倉山及越路山から掘出す。脂氣があつて特殊の色澤と品位があるので盆、茶托などに愛用されて居る。

〔旅館〕針久本店(國分町、驛一軒半、室二五、電二〇五番、二圓半)

〔交通機關〕▲電車▼市内循環三分毎、賃五錢均一。▲乗合自動車▼長町驛―仙臺驛―大學病院線四分毎、全四區、原町―榴ヶ岡―仙臺驛線八分毎全二區、宮町―北一番町―仙臺驛線一〇分毎全二區、仙臺驛―西公園線一〇分毎全一區、仙臺驛―御靈屋線一〇分毎全一區、賃金一區五錢の割。▲タクシー▼舊市街五〇錢新市街八〇錢郡部一哩に付三〇錢、▲貸切自動車▼一時間三圓半日一〇圓一日二〇圓。

〔名所〕▲榴ヶ岡公園 驛の東方一軒二、電車五錢、乗合自動車五錢(八分毎)。市街區の東端にあり、宮城野原に臨む小丘で、東公園とも云ふ。往時はつ、じの名所として顯はれ、元祿八年藩主伊達綱村が生母三澤初子の冥福を祈る爲に此地に釋迦堂を建立し、其南に馬場を開いて櫻を櫻、四民遊興の地としたもので、今樹齡二五〇年に及ぶ枝垂櫻が數十株あり花時には盛觀を極め、大正一三年名勝地に指定された。園の東方に當る地は昔の宮城野で、萩、女郎花などの生ひ茂つた處で、古歌にも詠ぜられて居るが、今は第二師團の練兵場になつて垣々たる芝生の原となり、飛行場をも兼ねて昔時を偲ぶよすがもない。▲孝勝寺政岡の墓 驛の東約一軒半、宮城電鐵櫻ヶ岡停留場の西南、市内東九番町、日蓮宗孝勝寺の後に在る。政岡は伊達第三代綱宗の側室、四代綱村(幼名龜千代)の生母で(戲曲伽羅千代萩で名高い乳母政岡)本名三澤初子と云ひ、伊達騒動の紛擾中に能く幼主を守護養育した。綱村は報恩のため孝勝寺に廟を造り、その冥福の爲につ、じが岡に釋迦堂を立てたが、廟は明治二年撤廢され、二二年現在の墓標が立てられたのである。▲東北帝國大學 市内片平町。もと二高構内に明治四四年理科大學が建てられたのが創り、今は理、工、醫、法文の四學部と金屬材料研究所を備へて居る。金屬材料研究所は鐵鋼研究の世界的權威本多光太郎博士の努力の結晶として生れたもので、多數の學者が各種金屬材料の研究に従事して居る。醫學部は附屬病院と共に北四番町にある。▲瑞鳳殿 驛の西南約二軒四、乗合自動車五錢。城山續きの經ヶ峯の頂上にあつて、蒼蒼たる老杉に圍まれ、結構の美、小日光と稱せられて居る。藩祖伊達政宗の靈廟で、寛永一四年の建立である。輿院壇上には衣冠束帯を着けた政宗の木像を安置し、右側欄内には政宗に殉死した家臣一五人、陪臣五人の石塔があり、また向側には二代忠宗(感仙殿)、三代綱宗(善應殿)の廟があり、丘の中腹には瑞鳳寺がある。他の歴代藩主は多くは驛の南方約四軒半の市外大年寺山に葬られて居る。▲櫻ヶ岡公園 驛の西二軒、電車五錢、乗合自動車五

三圓半、五圓、六圓半、③三圓)、針久支店(驛前、電二〇六番、室二六、二圓半、三圓半、五圓、③三圓)、針久別館(驛前、電一三六七、室一一、五圓、七圓、一〇圓、一五圓、③五圓)、芭蕉館(南町三七、電三〇三番、驛一軒、室二五、二圓半、三圓半、③三圓)、瀬戸館(電六六番、國分町、一軒二、二圓一七圓)、陸奥別館青木ホテル(電五一八番、驛前、和室二七、二圓一五圓、③三圓)、仙臺ホテル(電二一四番、驛前、和室一八、一泊二圓半、三圓半、五圓。洋室三、室代二圓一三圓。食事料朝一圓、晝一圓半、夕二圓、③四圓半)、奥田(電三三二、驛前、室三三、二圓一三圓半、③三圓)、中村(電一〇六六、南町通、驛三〇〇米、室一四、三圓一三圓半、③三圓)、大泉本店(電六八、國分町、驛一軒半、室二〇、二圓一五圓、③三圓)、境屋(電六、南町、驛八七〇米、二圓半一三圓、洋風呂あり)。

〔遊覽巡路〕「小廻り」驛―榴ヶ岡公園―孝勝寺政岡の墓―東北帝國大學―瑞鳳殿―櫻ヶ岡公園―公會堂―仙臺城址―縣廳―商品陳列所―芭蕉の辻―驛。以上貸切自動車で一時間位、料金三圓。

〔大廻り〕驛―東照宮―榴ヶ岡公園―孝勝寺政岡の墓―東北帝國大學―瑞鳳殿―櫻ヶ岡公園―公會堂―仙臺城址―大崎八幡神社―林子平墓―青葉神社―支倉常長墓―縣廳―商品陳列所―芭蕉の辻―驛。以上貸切自動車で四時間位、料金五人乘八圓。

仙臺及其附近

〔遊覽自動車〕仙臺驛前(毎日一〇時及後二時ノ二回)發―榴ヶ岡公園―孝勝寺政岡の墓―瑞鳳殿・瑞鳳寺―青葉城址―櫻ヶ岡公園―林子平之墓―青葉神社―支倉六右衛門之墓―縣廳前―芭蕉の辻―驛。以上一巡約一五軒、乗車見物約一時間半、下車見物六ヶ所、約一時間半、料金八〇錢、外に觀覽料二〇錢を要す。

鐘(一〇分毎)西公園とも云ひ、廣瀬川に臨み、青葉山に對す。縣社櫻岡八幡及市公會堂がある。▲仙臺城址 縣の西南約二軒半。市電大町一丁目下車、大橋を渡ると城門の前に出る。自然の天險によつて築城したもので、前面には廣瀬川を控へ、後方には山を背負ひ遙に宮城野を一望の下に收め、頗る要害の地を占めて居る。この城は初め千葉氏が居館を營み青葉城と呼んだが、慶長年間政宗ここに築城して以來伊達氏の木城となつた。維新後廢城となり、木丸址とその北麓一帯は今公園となり、二の丸址には第二師團司令部が置かれ、追手門はその正門となり、政宗が後水尾天皇から賜つた菊桐の御紋章は燦爛として仰がれる。▲縣廳 勾當臺通り。▲商品陳列所 (同上)。▲芭蕉の辻 縣の西一軒、乗合五錢(三分毎)辻の四隅にはもと城の櫓に似た白壁の二階建があつて異彩を放つて居たが、明治二三年頃から順次火災等で失はれ、今は只西北の一隅(共済生命)にのみ昔の面影を止めて居る。此辻は古來市の中心と認められ舊藩時代には天和二年の忠孝の札、切支丹禁制の札、貞享五年の捨馬禁制の札が掲示され、今里程元標が残つて居る。此處から南北に通ずる陸羽街道筋は古來の商業地であり、東西に通ずる大町通りは現今商業の中心地で、その街道の裏側にあたる東一番町は娯樂機關備り年中雜沓して居る。▲東照宮 縣の北方二軒餘、徳川家康を祀り、承應三年伊達二代忠宗が造營せるものである。縣社。例祭四月一七日。▲大崎八幡神社 縣の西北約三軒四、市内八幡町の老杉の茂つた丘の上にある。乗合自動車一〇錢、二〇分(二〇分毎)。社殿は藩主伊達政宗が應長九年に造營を初め同十二年(紀元二二六七年)落成した所謂模範建造の最古のもので、桃山式の特長を遺憾なく發揮せられ、近畿地方のそれに比して却つて勝れた部分のある華麗豪華な建築で、松島の瑞巖寺と共に東北地方に於ける桃山式建築の双美と稱され、今特別保護建造物に指定されて居る。▲林子平墓 縣の西北約四軒半、市電大橋病院前下車。伊勢堂下曹洞宗龍雲院境内にある。子平は名を友直と云ひ、愛國の先覺者として蒲生君平、高山彦九郎と並稱され、寛政三奇人の一人で、深く海防の事を憂へ、海内を周遊して地理を觀察し、長崎に遊んで海外の事情を問ひ、三國通譯、海國兵談等を著したが幕府は之を以て無根の事を誇張して實名を隠るものとなし、寛政四年仙臺に禁錮して版木を沒收した。子平は「親もなし妻もなし子もなし版木なし金もなければ死にたくもなし」と詠じて自ら六無齋と號し、翌五年齒關中に歿した。明治一五年特旨を以て正五位を贈らる。石塔には「六無齋友直

居士 寛政五癸丑歲六月廿一日 行年五十六歳」と刻んである。▲青葉神社 (縣社) 縣から三軒、バス五錢、一五分。市内通町にある。藩祖政宗を祀る。例祭一〇月一九日。▲支倉六右衛門常長墓 縣の西北三軒三、バス一五分、五錢。市内通町光明寺境内にある。支倉常長は伊達政宗の家臣で、慶長一八年九月(紀元二二七三年)その使節として師父「ソテロ」と共にイスパニア及ローマへ派遣された。その一行は日本人一五〇人、南蠻人四〇人と云はれて居る。途中ルソン、メキシコを経てイスパニアの首府マドリッドに入り、國王フィリッポ三世に謁見して政宗の書翰及贈物を奉呈し、翌年一〇月初めて羅馬に達し、法王パウロ五世に謁して政宗の書翰及贈物を奉呈し、滞留すること数年、市民権を授けられた。かくて出發後八年を経て元和六年法王の書翰贈物などを齎し具に南歐の状勢を報告した人である。その贈物の多くと市民證書は今尚伊達家に保存されて居る。

▲青葉山 縣の西約三軒、櫻岡公園から西に向ひ廣瀬川に架かる一三三米の長橋を渡り、第二師團司令部の正門を左に望みながら左に折れて登る。山は海拔一二三米、直下に廣瀬の清流を隔て、仙臺全市を眺め、また東方平野を越えて仙臺灣が見える。春は櫻花、秋は南麓龍の口瀑にかけての紅葉がよい。山上城址には戰利品陳列の威揚館がある。【陸奥國分寺址】 縣の東約三軒、市内木の下の町、宮城野練兵城の南にある。宮城電鐵陸前原町驛の東一軒。舊址には藥師堂、白山神社があり、藥師堂は特別保護建造物に指定されて居る。

▲仙臺驛前 宮城電鐵で木鹽釜迄三〇分(一五軒六)、賃二五錢、三〇分毎。▲仙臺驛前から宮城電鐵で木鹽釜迄三〇分(一五軒六)、賃二五錢、三〇分毎。▲省線で岩切經由仙臺から二八分(一五軒一)、三等二五錢。▲仙臺驛前から乗合自動車で三五分(一六軒二)、賃二五錢(前五時から午後一〇時まで三〇分毎)、五人乗貸切二圓半。

鹽釜町は松島灣の一支鹽釜灣に臨む港市で、船舶の出入多く、物資の集散地に行はれ、特に鮮魚の市場としては全國屈指の地位を占めて居る。鹽釜は仙臺の門戸たるの地に位して居るが、その灣内は比較的水淺くして、只單に漁船の出入と、石巻又は秋田に寄港した汽船から仙臺に送る荷を中繼する傳馬船の發着所として命脈を保つて居るに過ぎなかつたが、鐵道鹽釜線の開通を見るに及び一層其位置重大となり、殊に昭和八年三月六〇〇萬圓の巨

費を投じて大規模の築港計畫完成し、灣内を浚渫して數千噸の巨船の出入を容易ならしめ、入江を埋めて岸壁を築き、また丘陵を削りて新市街を開くなど其工まさに成らんとして居る。加ふるに宮城電鐵及仙臺自動車道路の完成は更に港と仙臺市の關係を密接にしたので鹽釜町は目下盛に發展を續け、今や人口二三、二八五を數へ、輸出入貨物の如きも十年前に比し數倍に達する活況を呈し、青森を凌いで將に東北地方に於ける最大開港として重要な商港となりつゝある。

▲名物 安産餅、牡蠣(松島灣内に養殖さる、もので年額七萬圓を産す)、しほがま(菓子)。

▲鹽釜町旅館 鹽釜ホテル(電一八)、大田屋(電二七)、まびや(電三五)、千屋(電四七)、筑前屋(電二六二)、以上何れも一泊料一圓乃至四圓、團體一泊一圓三〇錢—二圓半。

▲鹽釜神社(國幣中社) 省線鹽釜驛から表坂迄約九〇〇米、乗合五錢、賃切五〇錢。同裏坂迄約半軒、緩かな石段を登る。表参道の鳥居際から直ちに二五四段の急な石段を登り詰た所に樓門があり、更に唐門を入ると正面に本宮があり、右手には別宮がある。本宮には武甕槌命(左宮)、經津主命(右宮)を祀り別宮には鹽土老翁神と志波津彥神を祀り、兩社を併せて奥州一の宮、正一位鹽釜大明神と號する。古來武門の崇敬厚く、又航海の神及安産の神として一般に信仰されて居る。社殿は元祿八年(紀元二三五五)仙臺藩主伊達綱村が造營を始め寶永元年(紀元二二六四年)伊達吉村の時に竣成したので、境内には老杉繁茂し櫻樹花卉多く、東方には昔千賀浦と呼んだ鹽釜灣を望み極めて風致に富んで居る。例祭七月一〇日、三月一〇日(帆平祭)。

松島

▲鹽釜から松島へ。

(A) 海上五哩三、松島灣汽船定期一時間毎に出帆す、所要一時間、賃金一等六〇錢、二等四三錢、三等二五錢。和船二時間、一艘三圓半(五人迄)、モーターボート四〇分、一艘三圓半(一〇人迄)。

(B) 宮城電車で四分(七軒六)、三分毎(冬期は一時間母)に運轉す、賃二五錢(仙臺—松島五〇錢)。

▲省線松島驛—松島海岸 松島電車一七分(三軒七)、賃二〇錢、自動車一三

仙臺及其の附近 (松島)

分(三軒七)乗合二〇錢(每列車)、賃切一圓。

松島は松島灣の内外に基布せる百餘の島嶼及灣岸の勝景で、古來日本三景の一として普く世に知られた名勝である。殊に灣の東側宮戸島の最高點大鷹森、灣の東南側花淵半島上の多聞山、灣の北側富山の頂上、灣の西北側扇谷の奥の山上等から眺めた松島の景は、古來松島の四大觀として其名聲を辱しめぬものである。只憾むらくは灣内次第に水淺くなり、特に干潮時等に於ては其景を減すること少くないから、松島の眞價を窺はんとせば宜しく満潮に乗じて灣内を廻り、之等四大觀の景を賞するに如くはないのである。

松島灣は其地形上からは仙臺地方の青葉山、八木山一帯と同じやうな高臺が、河流の侵蝕によつて樹枝狀の谷に貫かれ、それが多くの斷層と地盤の彎曲とに因つて沈降し、ここに海水を迎へて内海となり、谷は其儘深澤となり、峯巒は海上に突出して長岬となり、島嶼となつて、百餘島を灣内に浮ぶるに至つたものであると云ふ。島は地質上第三紀層の凝灰岩から出來たものが多く、一般に甚だ低く、殆ど同じ高さを保ち、海波の浸蝕作用によつて奇形を呈し、海波は更に島脚に石門を穿ち、斷崖を産み、或は蓬萊島の如く黃白段々の縞を示し或は各層その浸蝕の程度を異にして仁王島の如き奇觀を造つて居るものもある。加ふるに島上に島腹松を載りて碧潭に映じ、岩壁に影さして風景の美をなして居る。

▲松島の四大觀 何れも高所から俯瞰するに便宜な地點を撰んだもので北に富山、東に大鷹森、南に多聞山、西に扇谷があり之を松島の四大觀と稱し、中でも富山と大鷹森が最も勝れて居る。

▲大鷹森の壯觀 鹽釜から七哩、和船四時間、料金往復五圓、モーターボート二時間、料金往復八圓半。松島海岸から四哩、和船二時間、往復五圓、モーターボート五分、料金往復八圓。松島灣の巨島宮戸島、總面積約七方軒三、戸數凡二〇〇戸、人口一、三五四餘を有す、桃生郡宮戸村の中央にある海拔一〇六米の高峰で、其の頂上からは遠く富山、松島海岸、扇谷等の雄嶺をばつきり見渡し得、脚下には百餘の島々灣内所狭き迄に様々の風致を見せ、太平洋上には

牡鹿半島、金華山など藍色にボート水平線上に霞んで見ゆる其の絶景は四  
大景中の隨一で、大鷹森に登つて始めて松島の眞の美を究む事が出来る。  
故に松島遊覧日程中此の大鷹森遊覧は忘るべからざるコースの一つである。  
また北里濱部若の丘上には貝塚があり、石器時代の人骨約二〇體と多数の遺  
物を發見した著名な遺蹟である。

▲富山の麗観 松島海岸から約八杆、松島驛からは約五杆半。宮城電鐵富山停  
留所から約四〇〇米。停留場から山道にか、れば深い木立の間に大仰寺の白  
壁が見え、其處に「頂上迄三丁二〇間」と書いた木標が見える。海拔一一七米  
の頂上に奥州三觀音の一として名高い富山觀音堂がある。其の前に立てば松  
島灘の一大盆景が展開せられ、其の風光明媚なる事眞に麗観の名に背かぬ。少  
し降りたる所に名刹大仰寺がある。

▲多門山の美観 鹽釜から東へ海上二連、和船往復三圓半、モーターボート往復  
五圓。代々崎の突端に發ゆる小丘で、船着場から約五杆餘登つて頂上に達す。  
徒歩容易。山中悉く松林、北は斷崖數千仞、山上には毘沙門堂があり、松林の  
間から扇谷、富山、大鷹森の諸勝を眺むるの美観は此の山特有の眺めである。  
▲扇谷の幽観 鹽釜から海上四連、和船往復三圓半。扇谷の停留場から五、六  
百米の坂を登れば山頂に出る。松島海岸から陸路一杆半餘海路一連。宮城電鐵  
濱田停留場から一杆六。此處から見た松島は、西北蔽はれ東西開き多聞山、材  
木島、桂島、大鷹森、小町島、都島等の島々恰も扇面の繪の様に見え、眼界は  
狭いが闊つた勝景を見せて居る。

▲名所 ▲五大堂 松島海岸の埠頭のある廣場の東端から二つの短い橋が架  
つて陸地に連つて居る最端の老松生ひ茂る五大堂島にある。橋は「すかし橋」  
と云つて角材を梯子の様に並べた丈で、板が張つてない。堂は舊く大同年間  
坂上田村鷹が毘沙門を安置したのを、慈覺大師が五大明王に改め、慶長九年  
(紀元二二六四年)に至つて伊達政宗更に其外側を被ふ堂を造つて今日に至  
つて居る。三間三面單層屋根寶形造木瓦葺で、明治三四年特別保護建造物に指  
定された。▲觀瀾亭 瑞巖寺の東南百餘歩を距る海岸の小丘觀瀾亭にある。伊  
達政宗が豊臣秀吉から伏見桃山城の一字を賜はり江戸藩邸に移したのを、二  
代忠宗此地に移して月見の御殿と云つたもので、敷石を凝した建築で、境内の  
眺がよい。▲瑞巖寺 五大堂の西北約半杆。もと圓福寺と號し鎌倉時代法身禪  
師の開山で、奥州著名の福林であつたが、後荒廢したのを伊達政宗が再興に志

〔松島遊覽順路〕

- (一) 海岸―瑞巖寺―觀瀾亭―雄島―五大堂―愛宕山公園―新富山―棧橋。  
(二) 海岸から船で灣内を廻り宮戸島に上陸、大鷹森に登つて引返す。  
(三) 海岸から船で灣の西部を眺め乍ら鹽釜へ行く、又は鹽釜から其の反對  
に松島へ行く。  
(四) (二)の行程を宮戸島から潜ヶ浦海峡を出て野蒜の不老山に至り夫から  
引返す。

〔松島舟遊覽其他〕

- 1 遊覽定期船(第一六五頁A)此の定期船は愈々遊覽客には便利であるがほ  
んの松島の一部を見るのみ、夏期中には桂島に往復寄港す。  
2 遊覽和船(島廻り貸切一圓半、桂島廻り三圓半、大鷹森廻り五圓(但五人  
以上は一人に付三〇錢増))  
3 モーターボート(一〇人迄)一日貸切一五圓、半日貸切一〇圓、島廻り三圓  
半、扇谷・馬枚島廻り五圓、扇島・桂島廻り六圓半、大鷹森廻り八圓(一  
〇人以上は一人に付一割増)。

金華山

▲石巻から石巻合同汽船で二時間(一〇連)、三等片道一圓五〇錢往復二圓  
八〇錢(一日一往復)。  
▲宮城電鐵石巻驛前から山島渡迄自動車で二時間半(五八杆)、山島渡は金  
華山社務所直營の蓬萊丸にて八分、二杆半、賃二〇錢、隨時發。  
▲鹽釜から石巻合同汽船で石巻經由四時間(二六連)、三等一圓五〇錢、二  
等二圓二五錢、一日一往復運航。

金華山は牡鹿半島の東端凡一杆、山島の渡を距ること約  
二杆の太平洋上に秘められた靈山で、東西四杆、南北五杆  
全山花崗岩から成り、海拔四四五米の金華山が寶珠状をな

し、良材を紀州熊野山に求め天下の名工一三〇人を集めて慶長一〇年四月工  
を起し、同一四年四月(二二六九年)竣工した大伽藍で、寺號も此時改められて  
伊達家の菩提寺となつたものである。建築様式は方丈・庫裡の制を採り、桃山  
式の粹を發揮した豪宕闊達を極めたもので、本堂(方丈)は桁行一三間、梁間九  
間、單層木瓦葺の大字をなし全く書院の形式になり、内部中央の間には甲冑を  
着けた政宗二二歳の像が安置され、壁襖は狩野永徳、長谷川等胤その他當時の  
名工の筆になつた所謂金碧畫で華麗を極めて居る。明治天皇東北御巡幸の際  
には當寺が行在所となり、此處の上段の間を御在所とされた。今伽藍主要の建  
築物は擧げて特別保護建造物となつて居る。

寺は老杉鬱蒼たる内にあり、門内にある法身窟は又無相窟とも云ふ。最明寺  
時頼が雲水となつて諸國を巡歴して此の窟に着き、初めて法身禪師に遇つて  
其高徳を知り、鎌倉に歸つてから兵を遣はして天台宗徒を追放し(淳和天皇の  
天長五年慈覺大師が勅宣によりて建立したと云ふ天台の巨刹松島寺)禪宗(臨  
濟宗妙心寺派)に改めて圓福寺と號し法身禪師(常陸の産で眞壁平四郎と云ふ)  
を開山とし、政宗改築の時再び瑞巖寺と改められた。

▲雄島 松島海岸の南端にあつて渡月橋を以て海岸に連つて居る。昔は僧徒修  
行の地で、島中には大小の碑が建つて居るが、中でも南端にある類賢碑が最も  
名高い。類賢は妙實庵主として徳の高かつた人で、碑は老師を慕へる弟子が鎌  
倉時代に建てたもので、支那式六角の額堂内にあり、碑文は當時書道の大家で  
あつた僧寧一山の自撰自書である。▲松島遊園…入園料大人一〇錢小人五  
錢、仙臺から往復乗車券所持者は無料。宮城電鐵會社の經營で海岸に清浄なる  
劇場・食堂・浴室を設け、入浴無料、常設活動寫眞無料・食堂定食(和五〇錢)。  
▲桂島 鹽釜から二七錢、四一錢、松島海岸から南へ二連。四月から九月迄定期船寄港  
す。鹽釜から二七錢、四一錢、五五錢。松島から一九錢、三〇錢、四〇錢。桂島  
は海水浴場として名高く、附近には雨降石・三度森・松崎神社等の景勝地があ  
る。旅館 桂島ホテル、海水館。▲新富山 松島電鐵停留所から一〇〇米。五  
大堂から北へ七〇〇米の丘陵で、松島四大觀に亞ぐ眺望の佳い所である。遠く  
桂島や大鷹森まで指摘する事が出来、頂上には金毘羅神社がある。▲不老  
山 松島海岸の東方海上約一〇杆、宮城電鐵東北須磨驛附近砂濱に點在する  
小丘で、松島勝景の一に數へられ、南の海岸は浪が靜かで海水浴場として  
名高い。

して巍然として聳え、山中には赤松・もみ・ぶな・けやき  
等が千古の姿其儘に鬱蒼と茂り、麓は狂瀾に激して岩壁そ  
の方狀節理に沿うて發達し、千疊敷等の壯觀を現はして居  
る。此處に有名な黄金山神社があり、全島その神域として  
野猿木に鳴き五五〇餘の神鹿人に戯れて居る。また東海の  
蓬萊島と謂ふべきであらう。

金華山はもと陸奥の山と稱して居たが天平勝寶元年(紀元一四〇九年)初め  
て黄金を産し朝廷に獻じ、これより黄金花咲く金華山と名を改めたと云ふ。も  
とは島で穿いた草鞋は金泥が附着して居ると云ふので、必ず脱かしたもので  
あると云ふ。

〔遊覽の好季〕

三月から一二月迄であるが土用中は南風  
強く海上荒れる事が多い。

▲黄金山神社(縣社) 島の西南なる棧橋から、鹿の徘徊する参道を約一杆、金  
華山の中腹にある。今の社殿は明治年間の再建で、金山毘古命、金山比賣命を  
祀る。参拜人の多くは祈禱を重じ、各自所願の祈禱を依頼し、お札を受けて歸  
る祭典は四月の初巳と九月二十五日に執行される。

▲お山巡りには表廻りと裏廻りの二つがある。表廻り―黄金山神社―滑石神  
社―清水石―鞍掛石―烏帽子岩―座禪石―孔雀ヶ池を経て菅蒲平に達する。  
これより海拔四四五米の山頂に至れば大海無神社の祠があり、太平洋上の眺  
望實に雄大で、その眺望絶佳の地點を無双峰と云ふ。約二杆、往復二時間。裏  
廻りは無双峰の傍の急坂を下り―朝日岩―夜光石―黄金石―天狗の三刀石―  
三日月石―大柱石―御鎌石―胎内―瀝り―開山上入座禪石―山形石―影向石―  
險陽石―坂を下り密林の間を進み、芍薬園に至り、之より海岸に出て―千疊敷  
―千人湯―天狗灘―金波越―銀波越―御船澤―大平―袈裟掛松―御籠岩―御  
路地崎―宮ヶ崎―黄金崎―大函坊(島の東端にあたり、斷崖切るが如く壯觀を  
極める)―小函崎―掛圖石―太鼓石―七福神石(以上の三石を三福對と稱す)  
―繁の河原から再び山口に入り朴の木原を経て―阿彌陀峠―山の神社―愛宕  
神社―黄金山神社。全行程約二〇杆、所要五時間半。  
▲献膳料には左の區別があつて、それを納めた人は祈禱を受けて等級に應じ

神符、神儀の授與を受け、日歸りなれば晝食、宿泊する人は別に料金なくして、翌朝の食事をとらして貰ひ、社務所に泊させて貰ふ。(但し献膳料は必ず納むべきものではないが、島内に旅館がないから宿泊又は食事をさせて貰つた場合はそれ相應の謝禮をせねばならぬ。

- ▲大々献膳 七圓以上 祈禱、神符(名入板札及神號表装物一幅)神饌、食事泊宿。
- ▲中献膳 五圓以上 同 同 (板札) 同 同 同。
- ▲甲献膳 三圓以上 同 同 (同) 同 同 同。
- ▲甲献膳 二圓以上 同 同 (紙札) 同 同 同。ほかに日歸りの者に限り加膳 一圓 同 同 (同) 晝食。

【石巻市】宮城電鐵で仙臺から一時間四分(五〇分)五〇分、一圓三〇錢、松島海岸から五〇分(二七分三〇)八八錢、凡そ一時間毎に運轉。地は北上川に跨り、伊予寺大門と呼ばれ、鎌倉時代の始め葛西氏が居城を此處に構へて居た。其後伊達政宗が領するに及んで、河村孫兵衛に命じ、もとの北上川本流追波川の肩口、鹿又村から一二杆の間に新河を開鑿し(寛永一三)、その河口に開港(寛治年間)したのが創りである。そして其富なる米を江戸に送るための門戸となせる一方、遠く北上川を遡つて盛岡附近迄運送する舟運の便を利し、他方貞山堀を介して阿武隈川迄連絡し、以て奥州二大藩の 江戸に對する商業的門戸として股賑を極め、其繁榮殆ど仙臺を凌ぐものがあった。維新以來鐵道の發達に伴ひ衰運に向つたが、尙三陸水産業の中心として榮え、昭和八年市政を布いて(人口三〇、七四三、昭和五、一〇調)宮城縣下第二の都市となつて居る。されど之を昔日の繁榮には比すべくもないが、漁船の出入に於ては東北第一に位し、鯉節・鮎節などの節類、竹輪蒲鉾、その他の製造業が盛である。葛西氏の祖は清重と云ひ、頼朝奥州征伐の後、奥州二州の鎮撫の爲特に東北に殘された名族であつて、南北朝の代には奥州の國司北畠顯家に屬し、此處の日和山に義を唱へた。のち高清の代に至り足利尊氏に屬し奥州探題となり、日和山に居城を構へ、久しく此處に居たが後佐佐に移つた。

- 〔石巻の旅館〕千葉甚(電二六、驛約一杆、室一九、③三圓)、福島屋(電五二、驛九〇〇米、室二〇、③三圓)、依屋(電二九室八、③三圓)(以上普通一泊二圓半―三圓半)、阿部新(電一一、普通一泊二圓、一三圓、③三圓)、中村屋(電五五六、佐藤屋(電二四六)、千石屋(電四一〇)、松葉屋(電三二〇)(以上普通一泊一圓七〇錢―二圓七〇錢)。

即ち伽羅御殿の御所址で、そこから道を少し曲ると右手に小高い山が見える。之が高館で、義經の居た判官館の址である。昔は今の北上川が遙か東の山際を繞つて平泉の町は此の館の東方に廣がつて居たが、今は河道の變遷のため高館の麓に河が迫り、その東側は断崖になつて流れに臨み、眺望も勝れて居る。此處は兄頼朝と仲を違へた義經が遙々落つて流れての間平和な日を送つたのであつたが、やがて没落に會して自殺を遂げた所と云はれ、山の頂に義經堂と云ふ小祠がある。

奥州の豪族藤原清衡は、初め陸奥大郡を領し、江刺郡豐田館(今の岩谷堂町字豐田)にあつたが、改めて陸奥の押領使を拜し、嘉保元年(紀元一七五四年)平泉に居館を營みて移り、之を奥御館と稱し、基衡、秀衡の子孫相繼ぎて之に住して居た。柳御所は平泉館の北に在り清衡、基衡の居所で、義經も亦暫く之に居たと云ふ。伽羅御所は秀衡の構へたるものである。

白河の關以北縦横凡そ百里の、黄金花咲く陸奥を占領すること九〇餘年、其頃盛に北上山地の溪流から出た澤山の砂金と、北上平原の沃野に饒る農産とを獲して、其富王室に超ゆと稱され、春の朝には、東稻山に雲かとばかり咲き亂れたる櫻花を眺め、秋の夕には北上川に映る月影を掬して、伽羅の御殿に舞樂を奏する寵臣幾千、上國の戰塵は覇を稱して榮華に耽る夢を破り得なかつた。

されど秀衡歿後統を繼ぎたる泰衡は、懐に入りたる(文治三年春三月)英雄義經を殺して(文治五年四月晦日の夜、義經三一歳)鎌倉に和を乞ふたのであつた。が、頼朝は時機到れりとなし、自ら奥州征討の將として一千の精銳を率ゐて大旗を白河に翻した。その勢は秋風に草木の露拂ふが如く、先づ伊達の大木戸破れ、多賀の國府に關守なく、津久毛橋扼しかね、義臣すゞつて城に籠りよく防ぎたれど、伽羅の御所に紅焰漲ると見るまに、三代の精羅一朝にして焦土と變つた。時に文治五年九月(一八四九年)、藤原秀衡父祖三代の治府であつた平泉の榮耀も、憶へば春の短か夜の夢であつた。

國破れて山河あり、城春にして草青むと、今は只金鶏山にのみ其昔を偲ぶ一寒村となり、八百年の古風、寂寞として秋風長へに吹いて、落葉まばらに散るところ、此の地を訪ふ旅人の涙を新にするであらう。

【中尊寺】岩手縣西磐井郡平泉村大字中尊寺、衣川の南岸關山の上にある。平泉驛から西北約一杆六、途中約一杆の坂下迄自動車がよく、乗合一〇錢。

【名所】▲日和山葛西城址 驛の南約一杆、城址は海拔百餘米の高地にあり今公園となつて脚下に市街を瞰下し、遠く牡鹿の山々から、仙臺灣を二眸の裡に收め、風光がよい。市立の迎陽館及郷社鹿島御免神社がある。

【一の關町】岩手縣西磐井郡、仙臺から急行二時間(九二杆九)、三等一圓四二錢。盛岡から急行一時間四分(九〇杆三)、三等一圓四〇錢。地は舊仙臺藩の支封田村氏二萬七千石の城下古の磐井で、陸中の咽喉に當り歴史上有名な地である。北上川及其の支流磐井川に因つて出来た廣い沖積原を控へ、その中心市場として陸中南部最大の市邑をなし、商工業が榮えて居る。人口一〇、四一二(昭和五、一〇調)。

北上川は一の關より以北、長く北上縦谷底の第三紀層を穿ち、その兩側に廣い沖積層を發達せしめつ、南下し來り、この町の東方狐禪寺附近から東に折れ、北上山地の堅固な古生層を穿ち、深く峡谷を造つて宮城縣に流れ去つて居るので、北上川通ひの舟は狐禪寺迄は通つて居る。然しその上流平野の流れは廣いが浅くして、北上中流部の米産地には舟を通ずる事が出来ぬので、鐵道開通前は、北上通ひの舟楫による仙臺灣との聯絡は、此處で行はれたので、一の關はその名の通り陸中第一の關門であつたのである。而して今はまた大船渡線の分岐點として氣仙沼方面との交通の衝に當つて居る。

【旅館】清水屋(電一四四番、二圓半―三圓半)、石橋ホテル(電七番、二圓半―四圓)、洋室七圓以上、③三圓、美登屋(電九番)、岩淵屋、山木屋其他(一圓二〇―二圓)。

古墟平泉

岩手縣西磐井郡平泉村。上野から普通列車で二時間半(四八杆六)、三等五圓一二錢(急行列車最寄停車驛は一の關)、一の關から二分(七杆二)、三等一三錢。

平泉は東北第一の史蹟地で、今から八百有餘年前、藤原清衡・基衡・秀衡の治府「平泉館」のあつた所である。

平泉の旅館

及川、對山館、一泊二圓位。平泉館址は今の平泉驛の傍高館の南にあり東西三〇〇米、南北三〇〇米許り、今田圃となつて農家敷軒あり、官道を挟んで居る。平泉驛を出て右に一本町を北に進むと人家の後に小高い一つの草薙がある。それが藤原三代の館址、

寺は關山と號し、仁明天皇嘉祥三年(一五一〇年)釋圓仁奥州を跋渉して一字を建立し、慈覺大師を開基として弘台壽院と號したに始まる。後下野大慈寺の僧榮信來住し、土民の信仰を得、清和天皇貞觀元年中尊寺と改めた。堀河天皇寛治二年(一七四八年)清衡當寺を經營し、堂塔僧坊三百餘宇、天仁二年(一七六九年)功竣るに及び、鎮護國家の靈場として勅願所となした。(清衡の一七六九年)功竣るに及び、前九年及後三年の兩役に死んだ敵味方の菩提を弔ふ爲と云ふが、當時王室を凌ぐ富を擁したと云はる、清衡が、爲して成らざる事なかつた際に、永年愷がれて居た都の文化をこの一廓に移さんとし、造營されたもの一つで、今残つて居る金色堂、經藏を見ただけでも如何にそれが上方文化の模倣であるか、判る)。のち基衡秀衡相尋で堂塔僧坊を増建し、一時寺塔四〇餘宇、坊舎三百餘宇に及び、伽羅堂宇光彩赫輝として、海内屈指の靈場となつた。文治五年、平泉の泰衡没落の後には頼朝から寺社領を安堵し、兩來幕府奥州總奉行等の保護もあつたが、昔日の如く盛んならず、加ふるに建武四年(一九九七年)野火の餘焰にて樞門金堂以下諸堂宇大半灰燼となり、僅かに經藏、金色堂を殘すのみとなつた。天正年中豊臣秀吉七ヶ村の朱印地を給ふ。のち伊達政宗の領地となるや、寛永初年後水尾天皇勅して金色堂の破損を修理せしめた。其後榮隆寺社の荒廢を歎き、伊達氏の庇護により、協力して舊趾遺蹟につきて小祀堂宇を建立したが、舊時の十分一にも及ばなかつたと云ふ。今の本堂は明治年間改築にかゝる。天台宗に屬し、寛文以後東叡山の末寺であつたが今は延曆寺の末寺となつて居る。

▲金色堂 藤原三代の榮華を今に傳ふる唯一の建物であるが、鎌倉時代に之を保護する覆堂が設けられ、今日外から見えるものは之であるが、之とてまた名建築で、今は金色堂と共に特別保護建造物となつて居る。中に覆はれた金色堂は俗に光堂と云はれ天仁二年(一七六九年)工を起し、天治元年(一七八四年)竣成まで前後一六年の永き歳月を費して藤原清衡が己が遺骸を藏めんがため生前に造つた葬堂である。堂は方三間單層にして屋根は實形造である。中の間は七尺二寸、兩脚の間五尺五寸、柱の高さは一丈九寸、内外上下、四面悉く簾布を以て覆はれ、黒漆を以て厚く塗り、其の上更に金箔を貼り内部は鐫柱彫梁悉く螺鈿珠玉を飾つてある。中央一間を内陣とし、他を外陣として居る。内陣には中央及左右に須彌壇があり、中壇の四隅には七寶莊嚴丹靑の柱を立て、柱毎に一二光佛を圖し、壇上には何れも阿彌陀・觀音・勢至・多門・持國二天、六地藏

等定期作の一驅を安置し、中央の須彌壇の下には清衡の遺骸、左には基衡、右には秀衡の遺骸が木乃伊となつて金色の棺に蔵されてあつたが今は中央壇下に三つの棺を並べて居る。覆堂は一六四年後の正應元年(一九四八年)鎌倉將軍惟康親王が平貞時及宣時に命じて金色堂を保護せんが爲に造立せしめたものである。明治九年七月、明治天皇御東巡の折、繪旨を賜はり三〇年、特別保護建造物に指定された。堂の右に「五月雨の降り残してや光堂」の芭蕉の句碑がある。▲經藏(金色堂の背後にあり)天仁元年(一七六八年)藤原清衡の建立したものである。元は二階建の瓦葺であつたが、建武四年の野火に上層を焼失し、其礎石を修理して現在に至つたものである。堂は三間四面六尺六寸間で、屋根は寶形造、内陣の柱及天井は寛永の修繕に新にされ、屋根は明治二六六年に茅葺を改めて今の檜瓦葺とした。しかし四壁其他は創建當時のもので、纏網彩色、蓮華文など僅かながら存して居る。内陣には八角須彌壇(國寶)が置かれ、壇上に文珠菩薩を安置し、前には釋尊(國寶)があり、尙佛前の灯臺、卓、警架は何れも國寶である。その形状の優美にして高麗な螺鈿の裝飾は、鎌倉時代の趣味をよく現はして居る。内陣の左右及後の三方に八段の經架を設け、藤原三代實隆に保る一切經五千七百卷が、黒漆の經籠(二六〇合)に納められて居る。その内には經卷の題目及帙數等が螺鈿で表はされて居る。清衡の納めたものは紺紙に金銀泥一行交りの書寫で、比叡山自在坊蓮光の奉行にて、一千の僧侶八ヶ年を費して書上げたものと云はれ、今二〇卷を藏して居る。基衡の納めたものは紺紙金泥で今六百餘卷を藏して居る。また經架の下にある唐櫃には秀衡の納めたものと傳ふる黄紙朱版の一切經があり、今九〇卷を藏し、三種とも國寶になつて居る。朱版を除く他の經卷は表紙に金泥で寶相華の模様を描き、見返には佛菩薩・山・水・月・雲・木草・水鳥・孔雀・象・多寶塔・船などを金泥或は銀泥の線で畫き、山その他はぼかしを用ひて居り、世に中尊寺經として名高い。

▲辨財天堂 金色堂の西北にあり「最勝王經十界寶塔曼荼羅」が十幅陳列されて居る。藤原末期の繪畫の一遺品として貴重なもので、國寶となつて居る。其他金堂は金色堂の東北に舊址があり、清衡の建立せる處であるが、建武四年焼失し、今は佛體二十餘軀のみ残つて居る。鐵守は北に白山社、南に日吉社あり共に開山慈覺大師の勸請せるものである。

【中尊寺拜觀料】普通六(錢)、二五人以上四八錢、五〇人以上三九錢、百人

だかまり、流れは白龍銀蛇の如く躍るかと見れば、一躍深潭碧淵に満き、その兩岸の岩壁に映じて清爽極まりなき景觀を生じ「東北の覺の床」の稱がある。その上流には松を茂らし、伊達政宗の移植したと云ふ貞山櫻があり、また峽上に天工橋を架して一層その景を加へて居る。

【觀鼻溪】一の關から大船渡線で四〇分(二二軒三、三等片道三五錢)陸中松川驛から北三軒半、途中長坂迄二軒六、自動車通ず、乗合二〇錢(列車毎)、北上山地の一部を造る非常に厚い石灰岩が西に向て殆ど直立した中を、松川の上流砂礫川の流が迂餘曲折して穿つた延長二軒餘の峽谷で、兩岸の岩壁削るが如く、高さ一〇〇米を超え、屏風の如く廣く平に突つ立つた岩壁あり、それが岐れて天をも摩する巨筍のやうに形を變じた部分あり、洞窟あり、溪流懸り流れは巨岩の底に渡り深淵をなし、曰く鏡明岩、凌雲岩、毘沙門窟、吐雲峯、壯夫岩(岩中第一の眺めである)、少婦岩、小飛泉、大飛泉、馬鬣岩、曲屏岩、步背岩等々。岩壁の壯大、巖壁の怪、まさに天下の偉觀で、指定の名勝になつて居る。長坂から舟で往復約一時間、賃三〇錢(臨時)、春は藤、山吹、秋は紅葉の美殊に勝れ、夏は清風を楽しむことが出来る。

峽の東に盡る所に、大岩壁上絶えず細流を迸出して居る鐘乳石の怪突起がある。その状よく狢の鼻の如きを以て狢鼻の名稱が生れたのである。

【旅館】(岩手縣東磐井郡長坂村)鈴木、かぢや一泊一圓以上。

【氣仙沼町】大船渡線の主要驛で一の關から二時間半(六二軒六、三等片道九七錢)。前に氣仙沼灣を控へ、この附近の漁業の中心地で、鮮魚貝類(年額九七七萬圓)、節類、干魚、海苔(以上年額二二一萬圓)、織詰類(二五六萬圓)、燒竹輪及蒲鉾(年額二二三萬圓)及佃煮、乾鮑などの業が盛である。人口一五二四五(昭五・一〇)。

氣仙沼灣は南北約八軒、其東側に大島嶼あり、波濤かで景勝に富んで居る。特に瀨口岩井崎から銚ヶ磯には石灰岩の奇巖浪に激して潮を噴き、大島の龜仙、或はその東北唐桑半島の早馬山から大島瀨戸等の眺望等は實に一幅の名畫である。

【旅館】日野屋(電氣仙沼六一、驛二軒六、室二三)、松軒(電一〇三、驛二軒六)、敷島(電六一、驛二軒)、村傳(電六六、驛一軒五)、佐藤本店(電二二六、驛一軒)、以上一泊一圓半、二圓、三圓、四圓、五圓、菅原(電一一六、驛一軒二)、朝日館(電三三八)、佐藤別館(電三七〇、驛半軒)、以上一圓半

以上三〇錢、軍人學生二〇錢、中等學校百人以上二二錢。  
 峯藥師堂・寶庫・金色堂・經藏・辨天堂・繪畫館・辨慶堂など町歌に説明して呉れる。諸堂拜觀時限は三月から一〇月迄前七時一後五時、十一月から二月迄前八時一後四時。

【毛越寺】驛から五〇〇米餘、乗合自動車五錢。中尊と同様嘉祥三年慈覺大師の開基に係り、金剛王院醫王山と號した。本尊は大師自作の藥師如來、清和天皇の貞觀一一年「北門鎮護の御願寺」たるべしとの勅詔を受けた。長治年間堀河天皇の勅願によつて、清衡に堂塔興造の勅命下り、次で基衡主として建立にかかり、秀衡の代に至りて堂塔四〇禪房五〇〇餘字全く完成した。更に周圍には總社、日吉、白山、祇園、北野、稻荷等、當時都で信仰の盛であつた神を勧請して鎮守となし、その宏壯なる規模は遙に中尊寺を凌駕した。平泉第一の大伽藍で、奥州藤原氏の富榮を示して餘りあつたが、爾後次第に衰微を重ね、嘉祿二年(一八八六年)の野火に罹り、さしも巨大な伽藍も悉く烏有に歸し、今は僅かにその遺址を有し、史蹟に指定されて居る。今の毛越寺は明治三二年に建てたもの。實物拜觀料二〇錢。夏草やつはものどもの夢の跡(芭蕉)

【達谷窟】平泉驛から西五軒半、窟は丘陵の一面をなす凝灰岩の絶壁中に穿れたもので、高三丈、廣九間、奥行七間程あり、その昔盜賊高丸、惡路王等の據つた岩窟であつた。延暦二〇年、坂上田村麿が桓武天皇の勅命を奉じて東夷征伐の際、盜賊等は將軍の勢を望み見て逃走した。田村麿は追撃して止まず神樂岡にかこんで誅し、更に達谷窟に攻寄せ、遂に賊徒を全滅せしめたのである。田村麿は平賊祈願の奉養として、山城鞍馬寺に模して前面九間舞臺造の堂を此の窟内に建て、慈覺大師の作に係る多聞天八體を安置して祈願所とした。窟の左方の岩壁には高さ四丈餘の磨崖佛の磨滅して僅に殘影を止てるものがある、之は源義家が安部員任を征伐した後、戰死者の遺骸を埋め、岩面に弓踏を以て巨大な大日如來の像を描き、石工に刻ませたものと傳へて居る。

【嚴美溪】達谷窟から約三軒。平泉驛から達谷窟經由自動車四〇分、乗合四〇錢(列車毎)貸切二圓半。一の關驛から七軒餘、乗合三〇錢(列車毎)貸切二圓。五串の溪とも云はれ、磐井川の流が栗駒火山の基底を作る一の玻璃質岩に懸つて、急流飛瀑をなしたもので、その飛瀑が次第に上流に退いたため、跡には深い峽谷を生じ、約一軒に互る奇岩怪石は流れにそり立ち、水心にわ

三圓位。

▲明神崎 氣仙沼驛の東約二軒五、自動車一〇錢。八幡太郎義家が奥州征伐の折、戰勝を祈るため建てたと云ふ五十鈴神社があり、境内の眺めがよい。又明神崎の西端が内海に面した所に「管絃窟」(おなりあな)がある。鐘乳洞が海水に浸蝕されて出来たもので、潮水の干満に際して岩に激して微妙な音響を發するのでこの名がある。窟内には石乳が垂れて自然の柱梁となり、人物や鳥獸の像が彫られてある。

【小原木の大理石】氣仙沼町の東北山路一三軒、唐桑村小原木の海岸に沿ひ約一軒に互る雪白結晶の大理石で、白地に黒の紋條をなし碧波綠樹と相映じて美觀を呈して居る。

【水澤町】岩手縣隱藩郡、仙臺から普通列車で三時間一〇分(一一六軒三)、三等一圓七四錢。  
 人口一萬三千餘の町であるが、町の南端、公園の一部にある萬國緯度觀測所を以て知られて居る。

【旅館】岩井屋(電水澤四七、驛一軒)、勇屋(電六一、驛前)、一泊一圓半、二圓半。

【緯度觀測所】水澤驛の西南一軒二、乗合自動車三〇錢(列車毎)、貸切五〇錢。北緯三九度八分四秒、東經一四一度七分五二秒、海拔六二米にある。此處は地球廻轉軸の位置の變化を知るため緯度の變化の量を恒星觀測によつて調べて居る天文臺で、此の事業のため列國が共同的に設けた世界の三觀測所の一つである。その觀測は西曆一九〇〇年から始まつて今日迄繼續し、夏季は午後九時から翌午前三時まで、冬季は午後七時から翌午前一時までの間に於て天頂に近く通過する六等星位の小さな星の子午線通過の際の赤緯を測るものである。最初の二二年間は觀測簿をドイツのポツダムにある萬國測地學協會中央局に集めて計算し極軌道を算出して居たが、一九二二年以降は此の觀測所が萬國天文同盟會緯度變化委員會の中央局となつてイタリヤのカルロフォルテイ及米國のユキヤの二緯度觀測所の觀測簿を毎月集めて計算して居る。理學博士木村榮氏がこの項を發見して世界的に名譽を博したのも此の天文臺に於てである。

【駒形神社】(國幣小社)水澤驛の西南約一軒。【高野長英舊宅】同約六〇〇米何れも乗合あり、三〇錢。



花巻温泉

岩手縣神宮郡湯本村花巻。

▲東北本線花巻駅から花巻温泉電氣鐵道で二五分(七軒四)、賃三三錢。

▲上野から花巻迄急行六時間二〇分(二四〇軒一)、三等三圓五二錢。

▲青森から花巻迄急行三時間一七分(二四七軒八)、三等二圓一四錢。

▲仙臺から花巻迄急行三時間一七分(二四七軒八)、三等二圓一四錢。

地は臺川に臨み西北方に萬壽山・羽川・堂ヶ澤山・小櫻山等の翠巒を繞らし東南は花巻方面に向つて展げ、北上の沃野、北上の山系が見渡される。

温泉は大正一二年に西方約一軒半距つた臺温泉から引いたもので、近代的施設が遺憾なく備はり、また旅館も浴客の好みに應じて自由に選擇出来る様に棟を異にして多數の等級がつくられて居るから、各自が氣安く滞在し得る様になつて居る。

泉質は無色透明鹽類泉で温度六〇度、神経系統病・胃腸病・皮膚病・婦人病に效がある。特色は行樂向。

〔旅館〕 松雲閣 (電三六・二九・三四、洋室六、室代一人五圓、七圓)

二八八圓、一二圓、和室次の間付二九、一泊二食付五圓半、七圓、別館七圓、一〇圓、一二圓、②四圓半、千秋閣 (電三二、三五、室五二、一泊三圓半均一、②三圓二〇錢)、花盛館 (電二三、室四八、一泊二食付二圓半均一、自炊室料一人五〇錢、附屬食堂定食和朝三〇錢、晝五〇錢夕六〇錢、洋一圓二〇錢から)、蓬萊館 (電二二、手輕な自炊旅館で貸室四〇あり、室代一人三〇錢)、貸別荘 (十三棟あり甲は八疊以下三室、乙は六疊以下二室、何れも内湯及電話付家庭向で七、八、九の三ヶ月は一日貸切甲七圓、乙五圓、其他の月は甲五圓乙三圓半。申込は松雲閣へ)、紅葉館 (電二九、大小宴会用二室及客室四あり、一泊二食付五圓半、七圓)。

附近には釜淵の瀧、緒ヶ瀬の瀧があり、また約二、七〇〇アールノ遊園地や、園内の運動場と、運動器具、娛樂場

〔遊覽巡路〕 「小廻り」驛―石割櫻―岩手公園―商工館陳列所―有町通―驛「大廻り」驛―大慈寺―八幡神社―有町―商工館陳列所―岩手公園―石割櫻―本誓寺―報恩寺―夕顔瀧橋―厨川柵―驛。

〔名所〕 盛岡城址 驛の東約一軒半、市の中央丸の丘上にある。慶長年間南部利直の築城したもので、今公園となり、園中には南部家の始祖光行及中興信直を祀つた縣社櫻山神社がある。▲石割櫻 驛の東一軒半、地方裁判所の構内にあり、巨大な花崗岩の割目に根を下した白彼岸櫻で、指定の天然記念物となつて居る。

▲高松池 驛の北三軒、上米内にあり、小さな谷を堰止した池で、池畔には櫻樹が多く、若手山が背景をなして風致を添へて居る。花時には池上ボートを浮かべ、冬期はスケート場となる。

▲大慈寺 驛の東南二軒餘、市内東中野にあり、その境内には原教の墓がある▲二歳駒の驛市 市内新馬町で毎年九月中旬に開かれるもので、その出場の馬数は約二萬に達しその價格も二〇萬圓以上に及び連日雑沓する。多數の馬匹が街路一パイになつて通行する事も珍らしくないので、不馴な訪問者の膽を冷す。

▲煙火 盆の八月一五日を中にする三夜に市内各戸に薪を束ね、これに煙皮を捲いて夕刻一齊に點火して魂迎魂送りをするので、燈籠流しと共に古來有名である。

〔岩手山〕 盛岡市の西北二四軒にあり、海拔二〇四一メートルの休火山で、東方から望めばその容姿富士に似て居るので岩手富士、南部富士など、も云はれて居る。しかし西方には二、三小峯が連立して多少形の美を損じて居るため南部の片富士とも云はれる。西北は秋田駒ヶ岳山麓に連り、東南に平原を繞らし、小岩井牧場その他の牧場地は所謂南部馬を畜して居る。

此の山は東西の新舊二つの圓錐火山の重合したもので、西岩手は東岩手よりも古く、東西三軒南北約二軒の大地獄の楕圓形火口の底に低い中央火口丘があり、更にその内部に御苗代と稱する火口原湖と、火口湖釜がある。最も外側の大地獄火口壁は侵蝕をうけて絶壁の大輪壁を生じて外輪山をなし、南壁を鬼ヶ城山、北壁を屏風岳と云ひ、鬼ヶ城山の最高地點を姥ヶ岳と呼び海拔一、七〇六米ある。その北西壁は機切瀧の火口瀧に刻まれ、松川の一支流をな

にもあらゆる文化設備が取入れてあり、動物園等もある。また此地方の民謡に合せた舞の田植踊や金山踊などは、地方色の横溢したものである。

〔花巻スキー場〕 温泉場の裏手、堂ヶ澤山を整理して造つたスキー場で面積約一、九〇〇平方メートルあり、五度乃至三〇度の緩急斜面を有して居る。殊に夜間の練習にも事欠かぬ爲め一面に照明装置を施して居る。休憩所及シャUTTエの設備もある。積雪は一メートルで、二月末から三月初旬まで元れる。

温泉事務所内に花巻温泉スキー協會があり貸スキーの設備がある、一日三〇錢、半日二〇錢。

〔臺温泉〕 花巻温泉から西一軒三、自動車三〇錢。裡貫郡湯本村。地は海拔四八〇米、花巻温泉の近代的遊樂地なるに反し全く一變した靜寂な山の湯治氣分の漂ふて居る療養向の温泉である。湯の湧出量豊富で泉質もまた多種あり附近温泉中唯一である。〔旅館〕 阿部、金矢ホテル、樂知館、臺陽館、一泊二圓半以上、自炊一日二五錢乃至五〇錢。

盛岡市

▲上野から急行列車で一時間餘(五三二軒七)、三等五圓七八錢。

▲仙臺から急行列車で四時間(一八三軒二)、三等二圓五六錢。

▲青森から急行列車で四時間四六分(二〇四軒七)、三等二圓七八錢。

市は北上川と中津川の合流點に位し、交通は河谷を利用して八方に道路を通じて要衝に當り、鐵道は東北本線のほか橋場線、山田線を分岐して居る。

此の地は慶長の初め南部利直の築城によつて開けた城市で、爾來南部氏一三萬石の城下として明治維新に及んだ、爾後縣廳を置かれ、市外厨川村には騎兵第三旅團の司令部があり、高等農林、私立の醫專その他の學校官署も少くなく、盛岡電氣工業株式會社、川口荷札株式會社、吉岡鐵工場、福田鐵工場、照亦鐵瓶工場、片倉製糸場、東北衛器株式會社等の工場があり、商工業が盛んである。産物の主なるものは鐵器、木綿織等で、特に南部鐵瓶の名高く、牛馬市が亦盛である。人口六二、二四九(昭五・一〇)。

〔旅館〕 高與、陸奥館、三島屋、齋藤、近江屋、(回答未着)

し、瀧が多い。東岩手山は前記の鬼ヶ城と屏風岳が互に近づいて東方に閉合する邊に噴出した二重式火山で、頂上の火口をお鉢と呼び直径七〇〇米の圓形をなし、火口壁の最高點は藥師岳と呼ばれ、岩手山の最高點をなして居る。此の火口には更に妙高ヶ岳と稱する小中央火口丘があり、その西方に偏せる火口を御室と呼び深さ一八〇米に達し、内壁は懸崖をなして居る。

〔登山路〕 柳澤口、網張口、栗石口、平笠口の四路あり、その中柳澤口を藁口と稱し普通登山者は此の口から登つて網張口へ降りる。

東北本線瀧澤驛(盛岡から一軒九)から柳澤まで約一〇軒、自動車がある。柳澤には縣社岩手山神社があり、社務所へ宿泊出来る。

柳澤から山頂まで約一四軒で凡そ五時間を要する。神社から四軒許り牧場の平坦地を行くと受取坂から登りになる。三合目から岩岩礫の急な登りとなる、七合目から九合目までは地蔵平と云ひ、優松帯の高原をなして居る、右手の富士の縮圖の様な山容が岩手山頂で、約一軒許り須走状の岩岩礫を登ると、周圍は美事な火口丘が廻つて居る、その最も高いのが西北端の藥師岳で、中央火口丘の妙高岳の東方に岩手山神社の奥社がある。

頂上附近には駒草が多く、イワテハタザオ(十字科)等も多い。

山頂から望むと、東南には北上川と北上平野、盛岡市等が俯瞰され、北上山脈の連嶺が眺められる、南は脚下に小岩井農場が開け、遠く栗駒山を望み、西は葛根田川の溪流を隔て、乳頭山、秋田駒ヶ岳が間近に眺められる。

此の山は東南側には殆んど森林は無いが、西南には青森トド松、樺等の原生林があり、山腹にはブナ林があり、面目を異にして居る。

山頂から道を西に網張温泉に下れば約一二軒あり、此の間林相の美に勝れてゐる。殊に支脈鬼ヶ城の岩壁が鋭く鋸齒状に聳ゆるのは一偉觀である。網張温泉から小岩井まで約一八軒、緩かな下り道で全部徒歩による。

十和田湖

十和田湖は秋田縣陸中國鹿角郡七瀧村と、青森縣陸奥國上北郡十和田村に跨り、八甲田火山郡の南に位する高山湖で、四周に峰巒圍繞し、其の脈延びては急に、或は緩に湖邊に迫る所、見上る斷崖絶壁を形作り奇峭怪巖を峙たしめ曲浦長汀と展げ、稜々たる岬角をなし、又、飛んでは島嶼となり、それらの島々悉く蘇苔に粧はれ、珍草老木繁生し宛然天下の名盆栽を一堂に集めたるかの感がある。しかも太古その儘の湖水は波穩かに明鏡の如くに藍碧千古の祕を湛へて居る。

遊覽の季節は五月から一月中旬迄である。五月は櫻、つゝじ、藤、六月は新緑の美あり、夏は湖畔の氣温最高二四度最底一二度で避暑に適し、月夜の舟遊に甚だ興が多い秋山は満山の紅葉燃ゆるが如く樹種多きにより色に變化あり其美觀多く類を見ぬ。殊に一〇月中旬がよい。其他の季節は雪解のため道路悪く、交通機關も旅館も閉止する。

十和田湖の成因は複雑な形の二重式「カルデラ」であると云ふ。即ち第一次のカルデラは稍四角張た圓形で、東西約一〇軒、南北約八軒あり、その南岸には牛の角の如く二つの半島が突出して居る。この二つの半島は第一次カルデラの中に噴出した一つの中央火山口であつて、その中に抱く灣が第二次カルデラである。湖上の勝景は此の中央火山口たる兩半島から生み出されるもので、その西のものを中山半島と呼び、其形細くして長く、最高湖面一五〇米位、小さな山の波状をなして起伏し、つゝじが岡、神苑山、鳳鳴山、駐月山等の諸峯連り何れも姫小松赤松等繁生して居る。西側には多數の岩島が之に附屬して最も幽雅の境で、小舟に乗り其間を廻遊する事が出来る。東の半島は御倉山と呼び太くして短いけれども御倉山といふ圓頂丘が附着して長さと高さを増して居る。兩半島の中間に向ふ側は高い崖をなして水中に下り、島



は殆どなし。

御倉山(湖面より高さこと二八九米)は第二次中央火山口であつて、中湖陥落以後に噴出したものらしいと云はれて居る。湖は面積七八方軒、全國第一位の大湖で、湖岸線は大體に於て單調であるが、南岸から御倉、中山の二半島が突出して居るので、その延長は四六軒二に達して居る。湖は此の二つの半島のため四つに區分せられ、南岸は東湖、中湖、西湖に分たれ、自餘の中部以北は北湖と呼ばれて居る。最深點は兩半島に抱かれた中湖の南に偏して存し、三四八米あり田澤湖(四二五米)、支笏湖(三六〇米八)の次に位し、我國第三位に在る深湖である。しかし此の灣を出ると、その北西に一三〇米程の深區を見るのみで、其他の區域は可なり淺くなつて居る。湖面は海拔四〇一米、然る此の水位は昔は遙に高かつたと云ふ。即ち東湖の宇尊部附近に今の湖岸から數十米も高い所に湖成段丘が明に認められると云ふ、是が今日の水位迄低下したのは、奥入瀬川が北方の壁を突破して流出し、且其河床の次第に低下した爲である。

次に水色は「フオーレル」氏の第三號の藍色湖で、その澄切た水は二〇米の深度に卸された透明度板を明に認めらる、程美しい(田澤湖は三九米)。水温は表面夏季二度三、冬季零度、深層は一年を通じて五度である。

十和田湖にはもと魚類が棲で居なかつたが、明治三六年、和井内貞行氏が北海道支笏湖原産のかばちえつぽと云ふ小さな鱒の卵を取寄せ、人工孵化によつてその稚魚五萬尾を放流したのが始まりで、爾後年々數萬尾の稚魚を放流し、和井内鱒と名付け、年産百萬尾以上に及で居る。鱒釣は和井内ホテルに申込めばよい。和井内姫鱒は六月一〇日頃から七月末迄は素人にも良く釣れる。八月以後は鱒釣に經驗ある人へのみ釣れる。鱒釣は七、八月で和井内ホテル棧橋でよく釣れる。

湖畔を繞る翠巒は皆低く、特に聳えたものはない。北方の膳棚山(一、〇一一米)、東方の御子岳(一、〇五三米)、西方の白地山(一、〇三四米)等は湖水に近い高地で、之等は何れも密林に包まれ、かつら、いたやかえで、とちのき、ほろ、きはた、さわぐるみ、ぶな、みづなら、さわしは、つのはじばみ、はりざり、な、かまじ、こみねかえで、やまらるし、しゆりざくら、らわすみざくら、みやまかますみ、いぬがや等多く、秋季は紅葉の美觀を呈する。

【湖島鳥瞰臺】▲御子岳、子の口、宇尊部間にあり、湖面より高さこと六五

かある、そのあたり高く見上げれば千丈巖が長く連り、下には黄・茶・紫・赤、黒等の色を呈する火山燧岩、火山灰の五層が見える。之を色割岩又は五色岩と名づける。更に烏帽子岩・屏風岩等火山岩の節理により上部の崩壊した鋭岩などを見て千木松に至る。日暮崎から二軒半、これより一直線に西に進み、

に出る、下を見れば千古の祕を包んだ碧潭微動だもせず妖鏡のやうに物凄く樹間に閃めく。そこに鐵の梯子が斷崖に掛つて湖邊に下り、此處を十和田第一の靈場「御占場」といひ、白紙に小鏡を載せるか、觀世鏡を造つて、水面に浮べて吉凶を占ふ面白習慣がある。

十和田湖

十和田湖は秋田縣陸奥國鹿角郡七瀧村と、青森縣陸奥國上北郡十和田村に跨り、八甲田火山郡の南に位する高山湖で、四周に峰巒圍繞し、其の脈延びては急に、或は緩に湖邊に迫る所、見上る斷崖絶壁を形作り奇峭怪巖を峙たしめ曲浦長汀と展げ、稜々たる岬角をなし、又、飛んでは鳥嶼となり、それらの島々悉く蘇苔に粧はれ、珍草老木繁生し宛然天下の名盆栽を一堂に集めたるかの感がある。しかも太古その儘の湖水は波穩かに明鏡の如くに藍碧千古の秘を湛へて居る。

遊覽の季節は五月から一月中旬迄である。五月は櫻、つばき、藤、六月は新緑の美あり、夏は湖畔の氣温最高二度最底一二度で避暑に適し、月夜の舟遊に甚だ興が多い秋山は満山の紅葉燃ゆるが如く樹種多きにより色に變化あり其美觀多く類を見ぬ。殊に一〇月中旬がよい。其他の季節は雪解のため道路悪く、交通機關も旅館も閉止する。

十和田湖の成因は複雑な形の二重式「カルデラ」であると云ふ。即ち第一次のカルデラは稍四角張る圓形で、東西約一〇軒、南北約八軒あり、その南岸には牛の角の如く二つの半島が突出して居る。この二つの半島は第一次カルデラの中に噴出した一つの中央火口丘であつて、その中に抱く灣が第二次カルデラである。湖上の勝景は此の中央火口丘たる兩半島から生み出されるもので、その西のものを中山半島と呼び、其形細くして長く、最高湖面一五〇米位、小さな山の波状をなして起伏し、つ、じが岡、神苑山、鳳鳴山、駐月山等の諸峯連り何れも姫小松赤松等繁生して居る。西側には多數の岩島が之に附屬して最も幽雅の境で、小舟に乗り其間を廻遊する事が出来る。東の半島は御倉半島と呼び太くして短いけれども御倉山といふ圓頂丘が附着して長さ上高さを増して居る。兩半島の中間に向ふ側は高い崖をなして水中に下り、島

は殆どない。

御倉山(湖面より高きこと二八九米)は第二次中央火口丘であつて、中湖陥落以後に噴出したものらしいと云はれて居る。湖は面積七八方軒全國第一位の大湖で、湖岸線は大體に於て單調であるが、南岸から御倉、中山の二半島が突出して居るので、その延長は四六軒二に達して居る。湖は此の二つの半島のため四つに區分せられ、南岸は東湖、中湖、西湖に分たれ、自餘の中部以北は北湖と呼ばれて居る。最深點は兩半島に抱かれた中湖の南に偏して存し、三四八米あり田澤湖(四二五米)、支笏湖(三六〇米八)の次に位し、我國第三位に在る深湖である。しかし此の灣を出ると、その北西に一三〇米程の深淵を見るのみで、其他の區域は可なり淺くなつて居る。湖面は海拔四〇一米、然る此の水位は昔は遙に高かつたと云ふ。即ち東湖の宇尊部附近に今の湖岸から數十米も高い所に湖成段丘が明に認められると云ふ、是が今日の水位迄低下したのは、奥入瀬川が北方の壁を突破して流出し、且其河床の次第に低下した爲である。

次に水色は「フオーレル」氏の第三號の藍色湖で、その澄切た水は二〇米の深度に卸された透明度を明に認めらる、程美しい(田澤湖は三九米)。水温は表面夏季二二度三、冬季零度、深層は一年を通じて五度である。

十和田湖にはもと魚類が棲で居なかつたが、明治三六年、和井内貞行氏が北海道支笏湖原産のかばちえつぼと云ふ小さな鱒の卵を取寄せ、人工孵化によつてその稚魚五萬尾を放流したので始まり、爾後年々數萬尾の稚魚を放流し、和井内鱒と名付け、年産百萬尾以上に及んで居る。鱒釣は和井内ホテルに申込めばよい。和井内鱒釣は六月一〇日頃から七月末迄は素人にもよく釣れる。八月以後は鱒釣に經驗ある人へのみ釣れる。鱒釣は七、八月で和井内ホテル棧橋でよく釣れる。

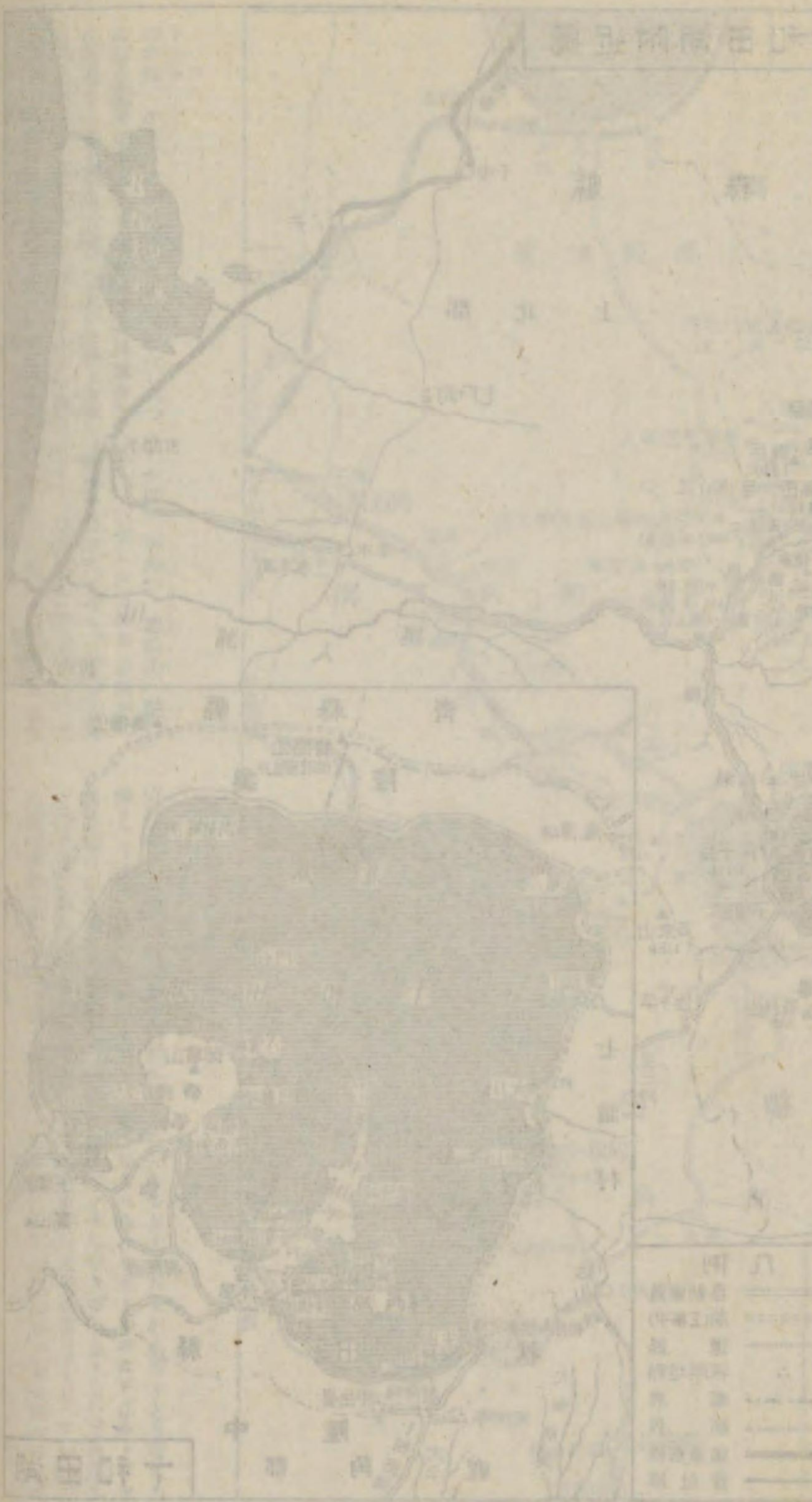
湖畔を繞る翠巒は皆低く、特に登えたるものはない。北方の膳棚山(一、〇一一米)、東方の御子岳(一、〇五三米)、西方の白地山(一、〇三四米)等は湖水に近い高地で、之等は何れも密林に包まれ、かつら、いたやかえで、とちのき、ほうきはた、さわぐらみ、ぶな、みづなら、さわし、つのはじび、はりざり、な、かまじ、こみねかえで、やまうら、し、ゆりざくら、らわすみざくら、みやまかまじ、いぬがや等多く、秋季は紅葉の美觀を呈する。

【湖景鳥瞰圖】▲御子岳、子の口、宇樽部間にあり、湖面より高きこと六五

十和田湖附近圖



十和田湖は秋田縣陸中國鹿角郡七瀧村と、青森縣陸奥國上北郡十和田村に跨り、八甲田火山郡の南に位する高山湖



は殆どなり。御倉山(湖面より高きこと二八九米)は第二次中央火口丘であつて、中湖陥落以後に噴出したものらしいと云はれて居る。湖は面積七八方軒、全國第一位の大湖で、湖岸線は大體に於て單調であるが、南岸から御倉、中山の二半島

米あり、松倉澤又は宇樽部から二時間位で頂上に達する。湖景島嶼第一の展望臺である。▲中湖展望道 休屋からも宇樽部からも一時間位で頂上に達し、婦女子にも登ることが出来、中湖の幽潭を脚下に俯して眺めがよい。頂上三ヶ所の展望臺を一巡するには更に約一時間を要する。

【湖上遊覧】二、三人乗から四、五〇人乗迄の遊覧船が數十隻あり、一時に四、五百人の觀光も出来る。普通の遊覧には子の口から御倉、中山の二半島を巡航し、休屋に立寄り生出に至る。或はその逆に行く。

- 子のロー宇樽部 三〇鐘、二〇分。
- 宇樽部—休屋 一圓二〇鐘、一時間一〇分。
- 休屋—生出 二〇鐘、二〇分(三軒)。
- 子のロー—休屋(遊覧船) 一圓二〇鐘、一時間半(約一六軒五)
- 子(直航) 七〇鐘、四〇分(約一〇軒)
- 子(貸切船) 自七圓至三〇圓。
- 子のロー—休屋—子の口 一圓九〇鐘、二時間五〇分。
- 子のロー—休屋—生出—子の口 一圓九〇鐘、三時間。
- 生出—休屋—子のロー—生出 一圓九〇鐘、三時間。

子の口から船に乗て西南に向ひ、右に青撫山、御花部山(膳棚山)、左に御子岳、高山を眺め、東湖を一直線に横切つて御倉半島の北端に近づき子の口から三軒半島の西岸に沿つて中湖に行く。半島の北岸には直立の絶壁があり、姫小松、赤松其他の樹木が生ひ茂り、初夏の新緑、仲秋には紅黄とりどりの霜葉が美しい。半島の西北端を八雲崎と云ひ、一軒半で西側の突端日暮崎に達する。此處には水面から直立する火山岩の上に赤松が茂り、其下には平坦な岩礁がある。船を繋いで岩上に立てば中湖を大觀することが出来る。此處から對岸中山半島の千鶴ヶ崎迄は直徑約二軒ある。日暮崎から中湖の湖岸に沿つて進めば比翼松、神代の浦を経て鴨眼崎に至る。ここには赭色の岩の間に御室と云ふ洞窟がある。その次には赤色の酸化鐵を多く含む集塊岩から成る赤根岩がある。そのあたり高く見上げれば千丈巒岩が長く連り、下には黄・茶・紫・赤、黒等の色を呈する火山燧岩、火山灰の五層が見える。之を色割岩又は五色岩と名づける。更に烏帽子岩・屏風岩等火山岩の節理により上部の崩壊した觀岩などを見て千木松に至る。日暮崎から二軒半、これより一直線に西に進み、

中湖の西岸、中山半島の御占場に至る。此間二軒。途中湖中の最も深いあたりを過ぎる。御占場の背後には大樹の鬱蒼たる陰に巨岩が重なり合ふて絶壁を作り鐵の梯子がかけられてあり、其上に十和田神社がある。御占場から西北に向ひ、中山半島の東岸に沿つて進めば水際に近いあたりは赤紫色を呈する集塊岩が多く、其水に接する所は波浪に浸蝕されて凹み、そこに波が入つて岩に打ちかゝるとその音が反響して美しい音が聞える。業平岩、千代の浦、小町岩、千代ヶ崎を過ぎて千鶴ヶ崎に至る。御占場から一軒半、中湖の火口壁は此處で終る。

千鶴ヶ崎から中山半島の北岸を進み赭色の集塊岩から成り、赤松を載くローソク岩を見、更に西北千島ヶ浦に至れば、半島のくびれて船中から西湖の水面を望み得られる處がある。此處を見越すと云ふ。これより北進して北端中山崎に至る。千鶴ヶ崎から二軒。此處から西南に轉じ西湖に入り、中山半島の西岸に沿つて南進する。見越を左に見て、夕暮松を眺め、葭野地と稱して蘆の生えて居る水の浅い處を過ぎる。それより更に權現崎、グミ島、比翼松を経て六方石を望み、尾上松に至る。中山崎から二軒半。尾上松は湖中隨一の佳景で、半島の高い所には姫小松生ひ茂り、湖岸には赤松が疎生し水際にはどうだんつ、じが岩にからんで居る。尾上松から東南に向ひ飄蕪崎、高砂浦、蓬萊島を過ぎ自籠の入江に入る。入口には鏡島、兜島があり、入江の中には巨大な岩石が直立して居る。鐵の梯子を登つて上に至れば平な處があり、そこは十和田傳説で名高い南祖坊が入定した處であると云ふ。更に進んで柱狀節理の火山岩から成る黒比壽大黒島を過ぎて休屋に着く。尾上松から一軒半。

休屋には南北一軒半に亘る砂濱があり、之を御前ヶ濱と云ふ。その背後には奥行一軒の平地が横はり、南部に神田川が流れて居る。この川を境として南は秋田縣である。砂濱の中程に棧橋があり、其處に上陸して北方に向ひ表參道の森林の中を三百米程進むと一の岐坂あり、少し登れば十和田神社がある。神社には日本武尊を祀る。又神社の右方の岩石の累累たる細徑を登れば小さな堂宇があつて南祖坊の石像を安置す。更に登ると中湖を見おろす斷崖絶壁の上に出る。下を見れば千古の祕を包んだ碧潭微動だもせず妖鏡のやうに物凄く樹間に閃めく。そこに鐵の梯子が斷崖に掛つて湖邊に下り、此處を十和田第一の靈場「御占場」といひ、白紙に小鏡を載せるか、觀世経を造つて、水面に浮べて吉凶を占ふ面白く習慣がある。

【十和田神話】
十和田湖又は田澤湖の様には神祕な湖などには夢の様な淡い傳説が纏るものである。十和田湖にも次の様な面白い傳説がある。その昔、鹿角郡柴内と云ふ所に久内と云ふ人があり、その娘お花と呼ぶ類ひ稀な美しい乙女と、日本海に臨む寒風山の彼方に住む大蛇の化身であつた立派な殿方風の男との間に生れた八郎太郎と云ふ筋骨業に優れた若者があつた。

或時八郎太郎は二人の友と一緒に鹿角の北方に當る「言分山」にマダの樹皮を採りに登つたのであつた。そして或日炊事用の溪水を汲みに澤に下つた所手桶の中に尺に餘る岩魚が三尾も飛び込んだ。早速焼いて食した處、得も云はれぬ美味だつたので友の分迄平げて了つた。ところが間もなく烈しき渴を覺え、汲んで来た桶の水では足らず、遂に谷川に下り七日七夜の間鯉飲した。不圖水鏡に映じた自分の姿が龍身に化して居るのを見て今更の如く吃驚したが、己が身は龍神の血を享けて此の世に生れて来た事を豫て老婆から聞かされて居たので、その因果をさとし、人知れず思ひ染めて居た田鶴子と云ふ可憐な乙女の事も思ひあきらめなければならなかつた。そこで今は之迄と、山を削り水を堰き止めて一大湖を作つてその主となり、常に水中に棲んで居た。

その後幾千年を経て南祖坊と云ふ出家が、陸中三戸郡十賀村に熊野權現の申し子として生れた。父は清和天皇の貞觀年中諫に遇つて其處に流浪の末を送つた綾小路關白藤原是真卿の子で、是行卿と云つた。南祖坊は幼少にして聰明無類、永福寺の月體和尚の許に得度して雲水修行に數十回に及んだ。或時千歳死を免れん事を祈つて居たが、満願三七日目の日、神靈が南祖坊の夢に現はれ「山麓にある金の鞋を履いて諸國の靈場聖地を巡錫せよ、然らば其功德により此世に於て最も美しい山と湖を見出すであらう。即ちその鞋の緒の切れ處を住家とすれば永生が送げられる」と告げられた。そこで南祖坊は山を下つてその草鞋を履いて東奔西走多年に及び鬚髮に霜を混へる頃、飄然と故郷永福寺に歸り、今は空しく一基の墓石と化して居る師の坊や兩親の菩提を弔ひ、附近の人々が大蛇が棲で居るとして怖るる近寄らぬ八甲田山、乗鞍岳、言分山などをさして登り、そこで見た世にも美しい大湖の畔に出るため、今の奥入瀬水流に出で、一夜を明かすべく一つの岩窟へと立寄つた。處が其處には前の世に背の君として南祖坊に仕へたと云ふ花も羞む美女が居て、善惡逆縁として

以上の傳説に因んで、十和田湖には明治の初年頃迄忌み言葉として參詣者も土地の人も絶対に口に出さぬ風習があつた。若し之を犯せば湖神の怒に觸れ大風雨が起るものと信じられて居た。それは南祖坊の神域となつてからは、一切八郎太郎を連想させる様な言葉を用ひるのは畏多いと云ふ敬虔な信仰心の發露からであるが、今の觀光客は其の様な忌み言葉のある事を知るものさへ稀である。即ちその忌み言葉とは「蛇、八、柴、赤、舟」等、八は八郎太郎の八に當るので、之に音を通ずる「お鉢」の事を「ワツパ」、數の八は八郎太郎の八に當るので、蛇の事を「長蟲」(八郎太郎が十和田湖の主であつた時代、蛇は彼の最も愛した腹心の臣下であつたから)柴を「小木」(八郎太郎の故郷が柴内であるから)、と云ひ、赤は八郎太郎が敗走した時、血を流して湖水を濁した色であり、舟は神聖な湖水に浮べる事は勿體ないと云ふので、湖畔の人々は木櫃(キツツイ)と呼んだのである。

さて八郎太郎は八郎瀨に漸く安住の地を見出したものの、過ぎ來し方の幸福な日を思ひ出すにつけ、己が人知れず二世を契つた田鶴子の事が思ひ出されるので近縣を隈なく探り歩いた處、田鶴子は程近い仙北郡の田澤湖に主となつてわびしく孤獨を守つて居るのであつた。そこで八郎太郎は田澤湖を訪れ此處に幾百年振りに再び相識する事を得たので、其後南祖坊に對する復讐の事などは忘れ果て、日夜田鶴子の許にばかり訪れ、自分の棲家である八郎瀨をば大方留守にして居るので、八郎瀨はだん／＼淺くなり、反對に田澤湖は年毎に深くなると云ふ事である。

田澤湖に流す「木根尻鱒」は、八郎太郎がとほして行つた松明の燃え差しが湖中に投げ捨てられたものから生れたものであると云ふ。鱒の軀は木根尻(薪の燃えさしの方言)に似て半分黒くなつて居る。八郎太郎が田澤湖を訪れる様になつてからは土地の人々は近年まで一切鱒類を湖水に入る、事を嚴禁し、舟も一本の釘をも使用しない獨木舟を浮べて居た。之は八郎太郎の敵である南祖坊の履いて居た草鞋が鐵であつたので「坊主憎くければ袈裟まで」の譬から、八郎太郎の心を察して彼等三柱の湖神の安らかな夢路を亂すまいとする心遣からであると云ふ事である。

探勝行路

十和田湖

坊に訴へたので、流石南祖坊も幾十年の間修業悟道を妨ぐる悪魔として五葉の奥に秘めてあつた愛慾の念が春の双葉の如く心の奥に芽ぐみ來るのであつたが、忽ち瞬時忘れ得なかつた熊野權現靈示の事を思ひ出して、夜の明くるをも待たず、跡を追ひ彼女を振り捨て、山頂の美しい湖畔に來た時草鞋の緒が切斷した。南祖坊は神のお告の永住の地は此處であつた事を知り、休屋附近の日本武尊を祀つた小さな御堂に笈を仰し、守護神熊野權現を此處に勧請し、湖畔に登ゆる巨岩(今の自籠の岩)の上で七日七夜の行を修して諸天に祈りを捧げ、慈々入定して此の湖の主となるべく丘を越えて今のお占ひ場の所に來り、身を龍神に代へて湖水に飛び込んだ。しかるに既に久しき以前に湖の主となつて居る八郎太郎が南祖坊を拒んだので、此處に大格闘が起り、七日七夜鏖を削つて争つたが、何時果つるとも見えなかつた。南祖坊思ふに、我がため此の様に永らく天地を騒がしては諸天の神々に對して誠に恐懼に堪へず、今は止むなく佛の慈悲に御頼りするより外なしとて法華經の一卷を取出し、之を頭上高く捧げしに、アラ不思議や、經卷の文字幾萬幾千、一字々々悉く箭となりて飛出し、八郎太郎の五體寸隙の残る所なく刺して深傷を負はしめた。八郎太郎は天下無双の勇者ではあつたが、惜むべし無學であつたので、有難い法華經には抗すべくもなく力盡きて敗走した。湖畔の五色岩や蠟燭岩その他赤いのは八郎太郎の流した血に染た爲であると云ふ。八郎太郎は十和田湖を立退いて鹿角郡に入り、米代川を堰き止めて郡下一圓を大湖に化せんと計畫したが、鹿角四十三箇所鎮守の神々は其評定の結果不讀成を決議して、月山の頂上から大石を散々に投ぜられたので、此處をもホウ／＼の熊で逃げ去り、漸く寒風山の麓に大湖を造つて安住の地を得たのであつた。八郎瀨は其の名に因で付けられたのである。現今古川と毛馬内の境の陣場に石塊が累々として居るのは月山から投下した時の石である傳へ、大湯温泉場附近の「集屋」集り宮堂には神々の大評定を開いた跡であると云ふ。斯くて南祖坊は希望通り十和田湖の主となつたと云ふ。中山半島にある熊野神社、南祖坊の堂は此の傳説に基いて建てられたものである。また今の松倉岬は、南祖坊の前の世の妻と稱する女性が、坊の後を慕ふて奥入瀬の岩窟から漸く十和田湖畔にたどり着いた時には、南祖坊は已に湖の主となつて了つた後なので、彼女は失望の餘り聲も涙も盡き果て、其儘湖邊の岩と化したものであると云ふ。岩上に建つ小祀は彼女をあらはれて禱つたものである。

一、古間木口

古間木驛―湖畔子の口間、五二軒九

▲古間木驛―三本木町間 一四軒九、自動車三〇分、乗合五〇分、貸切三圓。

▲三本木町―焼山間 二四軒、自動車五〇分、乗合一圓二〇分、貸切六圓。

▲焼山―子の口間 一四軒、自動車一時間、乗合七〇分、貸切三圓五〇分、徒歩四時間。

▲古間木―子の口間 自動車二時間二〇分、乗合二圓二〇分、貸切一圓五〇分。

東北本線古間木驛から奥入瀬溪流を経て子の口に達する行路である。此の口は所謂十和田湖の風光の半は奥入瀬にあると迄云はる、溪流美を探勝し乍らゆくの、由來十和田探勝の表口であり、諸行路中の第一にあげられて居る【三本木町】三本木町の中央に位し、安政年間南部藩士新渡戸傳氏(新渡戸博士の祖父)の經營した新開地の市街で、今は此處に軍馬補充部の支部が置かれ、商業が盛である。人口一、二九八八(昭五・一〇)。

【旅館】世界公園館(電三〇)、安野(電三本木五五、一泊二圓半―五圓、三圓)。

【焼山】曠野と森林との分岐點で、奥入瀬溪流の入口である。又八甲田越行路の岐れ路ともなつて居り四軒で馬温泉に達する。

尚焼山の四軒手前右手の丘に亭々枝を張つた銀杏の大樹がある。此處は善正寺跡と稱する所で、銀杏は南祖坊手植のものと云はれ、地上一米に於ける周圍一三米もあり、天然記念物に指定されて居る。

奥入瀬の溪流美

焼山から子の口に至る奥入瀬川の溪流約一四軒の仙境を賞するもので、之を幽谷の仙境(焼山―馬門岩五軒餘の間)激湍楓樹(馬門岩―裸渡の橋一軒七の間)澤山大澤(裸渡の橋―枳桐二軒半の間)懸崖瀑布(枳桐―銚子の口三軒餘の間)林泉

奇石(銚子の口一軒三の間)の五大景に大別して居る。十和田の美は只湖上に止るのみではなく、東方の裂罅を求め湖水の進る處は有名な奥入瀬の溪流となり、水分嶺の間隙を辿つて岩に遮られ、懸崖に縮められ、奔つて瀬となり

瀑へては潭となり、懸つては瀧となり、又溪中の岩石の水上に露ぼるゝ所、皆奇木を以て飾られて居る景は眞に天下の絶景で、十和田湖の靜的な美に對して、動的な美を展開し、千變萬化の妙を盡して行く人の目を飽くまで楽しまして居る。

燒山橋を渡つて對岸に馬川の落口を望み、南(右)に折れると右に紫明溪が眺められる(以前は絶勝筆紙に盡し難い處であつたが、大正六年の洪水のため一夜に空しく頼れ、現存の廢骸を殘した。橋、ぶな、栗、ほう、楓等の潤葉樹林の中を過ぎると惣邊橋を渡る。之から上流は殆ど支流がなく、河水は常に同水位を保ち、此處に特殊の植物景を見せて居る。「三亂の流」(河中にある岩石の爲に水が三分して流れる處)の勝を賞で、紫明溪から約一軒、右の林間に「石ケド」の窟がある。(ケドとは小舎の方言。厚さ三、四尺方四間許りの一大磐石が斜に傾き、天然の石窟をなして、廣さ數人を容る。昔、鬼神のお松と云ふ兇賊此の窟に巢くひ、附近に出没して旅人を悩ました處であると云ふ)之より尙進めば對岸に屏風岩の奇勝が迎へ、之と斜に向き合つて左に馬門岩がそそり立て居る。燒山から五軒餘。兩岸の懸崖數十丈相對立し、岩壁双方より迫り、樹梢相交る下に溪流涑々と流る。處、馬門岩の奇勝で昔時から往還の人の休憩所となつてゐる。此處は奥入瀨の中樞で、景幽邃に展開して行く。駒止橋を渡つて左岸に出で、裸渡橋に至る約一軒六、七分の間、水中岩石多く、而も奇木珍草其上に戯れ、宛然小松のやうであるから八十島と云ひ、或は楓樹が多いので楓谷とも云ふ。阿修羅の流、七瀬、抱返りの淵等の奇勝は此内に入り奥入瀨の一の勝處である。

裸渡橋を渡ると道は右岸に變る。川を渡ること茲に五回。燒山橋からは再び溪流を右に見て進む。舊時は道路此處で盡き、旅人は脱衣して川を涉つたもので、裸渡りの奇稱が生じた。橋から數百歩にして雲井橋に達す。左に一飛瀑雲井瀧があり、これから約四軒の間大小十數瀧を見る。次で右方對岸に白布の瀧が絶壁中腹の空洞から落下して居る。やがて河中の奔流白く泡立つ白銀の流れ、瀑流數百間、巡回環流して巴状を畫くバケ瀧を見、對岸に白絲瀧、不老瀧左に姫瀧、友白髮瀧、姉妹瀧を眺め、進んで奥入瀨の全流一大瀑布となつて落ちるのを見る。之を鏡子の瀧又は大瀧と云ふ。瀧は高さ二丈、巾一五間、海洋から

奥入瀨川を渡る瀧は此處で前途を阻まれ、龍壺に近いあたりでは長さ五〇糎に及ぶ大魚が釣れる。瀧を過ぎて寒瀧橋、荒瀧橋を渡り暫くして湖岸に達し天淵橋を渡つて子の口(排水口の左岸)に着く。鏡子瀧から一軒三。

二、毛馬内口

毛馬内口 毛馬内口 湖畔生出間三二軒  
▲奥羽本線大館驛—毛馬内口 秋田鐵道で約一時間一〇分(一九九軒二、實八二、三等)の別に乗合自動車の便もある。賃九〇錢、所要一時間一〇分。  
▲毛馬内口—大湯 七軒五、自動車二〇分、乗合四〇錢、賃切二圓五〇錢(毛馬内口驛—毛馬内口町間約二軒、乗合二〇錢)

▲大湯—生出間

▲大湯—生出間 二二軒、自動車一時間一〇分、乗合一圓三〇錢、賃切七圓。  
▲毛馬内口—生出間 二九軒五、一時間半、一圓七〇錢、賃切八圓。  
▲毛馬内口—生出間 約二時間、九圓。

▲大湯温泉

▲大湯温泉 米代川の一支流大湯川の畔に湧出する温泉場で、毛馬内から十和田湖に入る遊覽者の休憩地とされて居る。湯はアルカリ性鹽類泉で、四九度一七六度位、胃腸病・婦人病・皮膚病・リウマチス等に効がある。

▲旅館

▲旅館 大湯ホテル(室一五、普通一泊二圓—三圓、③三圓、電大湯七番、千葉甚(室一七、一泊同上、③三圓、電同八)、高島(電一九)、龜屋(電一〇)中村(電二四)、仙臺屋(電三六)、岩の湯(電二九)、丸井(電六)、一泊一圓乃至二圓。

▲發荷峠

▲發荷峠 大湯から先は徐々に上り道となり、中瀧の部落を経て峠にかゝり、約四軒で發荷峠に達す。

發荷峠は海拔六四七米、全山潤葉樹に覆はれ紅葉によいが、此處から俯瞰する湖景の美は一入で、殊に、右「白樺林道」二軒の甲岳臺、左「羽衣林道」一軒の紫明亭は展望所として好箇の位置を占め、眼下に中山、御倉の兩半島が並び、湖をかこむ山々はなだらかな尾根の線は、山水美の壯大さを増して居る汗知らずにて十和田湖の全景を見得る所は今の處此の峠のみである。

▲茶屋

▲茶屋 此處から湖畔發荷迄は急坂約二軒を下る、徒歩。毛馬内口からの探勝者は此處の見返りの茶屋から電話を以て休屋の旅館又は遊覽船の豫約をすることが出来る。

三、八甲田越口

▲八甲田越口 青森—湖畔子の口間六五軒五。峠を越しつゝ折なる坂道を下ること四軒で湖畔生出に出る。

東北本線青森驛とその隣の浦町驛で自動車に乗換へ、酸ヶ湯を経て八甲田連峯を越え、葛温泉から燒山に出て奥入瀨溪流口に合するのが此の行路である。

▲青森—酸ヶ湯間 三〇軒五、自動車二時間、乗合二圓(一日一回)賃切一〇圓

▲酸ヶ湯—葛温泉間 一六軒、自動車一時間四〇分、賃切五圓、道路不良、徒歩四時間半。

▲葛温泉—燒山間 五軒、徒歩五〇分。

▲葛温泉—燒山—萬一子の口間 賃切五人乗五圓、所要四〇分。

▲青森驛—スカ湯—萬一子の口間 五人乗賃切二〇圓。

▲青森から一〇軒で雲谷峠にかゝる。峠は海拔三五五米あり八甲田山の廣い裾野の中にあり附近一帯は放牧地で、牛馬が自然の儘に遊んで居り、反顧する北方に視野は展け、青森灣の遠景を望む事が出来る。

▲酸ヶ湯温泉 是古來「三日一週り」の温泉として知られ、美しい樹林に圍まれる、海拔約九二〇米の八甲田山の主峯酸ヶ湯嶽(大嶽)の西南山腹にあり、附近一帯はスキーの好スロープがある。積雪は二月から四月まで、二米に及び、雪質もよい。又附近には東北大學高山植物研究所、地獄沼などがある。温泉は酸性硫酸泉で五〇乃至六〇度、熱の湯、冷の湯、王の湯、鹿の湯等あり、リウマチス・婦人病・麻疾・痔疾・胃腸病・皮膚病に特效がある。

▲旅館 酸ヶ湯温泉館一軒六棟、室七〇、五〇〇人を收容す。一泊三食付二圓半。自炊客室料一日四〇錢乃至九〇錢、食費三五錢内外、布団料一日二〇錢—五〇錢、湯錢期間中一圓等、②二圓半。

▲八甲田山 酸ヶ湯から頂上迄凡五軒で往復三時間半位。小岳との鞍部迄は小さな唐檜や白樺の林が美しく續いて四軒許り緩やかな登りで、鞍部から餅

餅清水を經、林の茂みをくぐつて急な岩谷を過ぎ、優美な地帯に入り、夫から半軒許り登れば頂上である。山頂の眺望は雄大で、青森灣から下北半島の恐山が遠く太平洋の海岸線が望まれ、また津輕平野を隔て、遙かに岩木山が美しい山容を見せて居る。

▲八甲田山 前岳(海拔一二五二米)、田茂范(一三二四米)、赤倉(一五四八米)井戸(一五五〇米)、大岳(一五八五米)、小岳(一四七六米)、高田大岳(一五五

一米)、難岳(一二四〇米)等の個々の獨立した八峯の休火山群から成る那須火山帯中の雄をなすもので、東は三本木平野を隔て、太平洋に、西は津輕平野を挟んで日本海に、北は青森平野及陸奥灣を望んで居る。その中大岳(酸ヶ湯)は

最も高く、東方に偏して圓形の火口があり、直径約一四〇米、深さ約五〇米に及んで居る。

▲【葛温泉】 青森縣上北郡奥津村、女士大町桂月によりて名を知られた所で海拔約五百米、八甲田山と十和田湖との中心地を占め、此の大風景地帯を探勝するには最もよい足溜である。温泉は無色透明の鹽類泉で湧出量に富み、温度四八度、外傷性障害、リウマチス・皮膚病・神經衰弱・婦人病・中風等に効がある。

▲【旅館】 小笠原(葛温泉) (室三五、普通一泊二圓、二圓半、三圓、晝食六〇錢乃至一圓半。自炊、室代一日三〇錢—五〇錢、②二圓半)。

▲この温泉は保養向で自炊旅館双方の客を歓迎し、自炊客の爲には旅館で副食物を販賣し、また伺式もある。こゝでは名物金魚の天ぷらを食べさせる。

▲【附近名所】 温泉の北約半軒の所に葛沼があり、翠巒を繞らして水深く又清澄で極めて神祕的である。舟を浮かべ、いかなる釣る事が出来る。又附近四軒以内には月沼、鏡沼、長沼など所謂萬十沼があり、何れも密林に閉ざされ神祕の水を湛へて秋葉の頃は實に美しい。

四、淺瀨石口

▲淺瀨石口 黒石線黒石驛—十和田湖畔瀧の瀧間 三五軒

▲黒石驛—板留間 一〇軒、自動車四〇分、乗合三五錢、賃切二圓。

▲黒石—瀧の瀧間 自動車二時間半、賃切一四圓。

▲奥羽本線川部驛—黒石間(黒石線)汽車二一分(六軒六、三等二一錢)。

▲津輕平野の東南部に位して居る黒石町の街を出れば、右に津輕富士と呼ばれる岩木山の秀峯を眺め乍らゆくと、左右の山脚が次第に狭まり、道は前方の奥深い谷間に向つて伸びる。板留温泉まで一〇軒の間は乗合自動車の便があるがそれよりは徒歩による。板留から南に向ひ、淺瀨石川に沿ふて上り、九軒で西の方大瀧から来る道と合する。それより東に向ひ進むと五軒で平六の部落に入り、更に東南に折れゆくこと四軒で湯川温泉に達する。此處から五軒で瀧の瀧畔に至り、始めて湖水を望み、そこから二軒半東南に下ると湖畔瀧の瀧に着く。瀧の瀧畔は海拔六四九米、發荷峠と共に展望に勝れて居り、途中の沿道には温湯・板留・二庄内・沖浦・温川・切明・青荷等の諸温泉がある。

▲瀧の瀧には黒石館と云ふ旅館が一軒あり、此處から舟で湖の西岸を巡り生出を過つて休屋、子の口方面へ向ふのであるが、瀧の瀧から二軒程先の銀山には招仙閣と云ふ旅館があるから此處を足溜りにしてゐよ。

十和田湖 (遊覽日程案)

▲温泉(青森縣南津輕郡山形村) 黒石から東八軒三、自動車三〇錢、酸性硫黄泉で、脂肪過多症・皮膚病・胃腸病・婦人病・呼吸器病等に效くと云ふ。泉温四五度、湯は餘り豊富でないが共同浴場などの設備は整つて居る。

▲古澤館(電湯七、室九、一六)、一泊一圓八〇錢、二圓半、自炊制室料一週四圓。

▲板留温泉(同右) 黒石から東一〇軒二、自動車三五錢。地は淺瀬石川に臨んで幽邃、秋は紅葉が美しい。石膏性黄味泉で熱の湯・鹽の湯・淺瀬石の湯の三つに分れ、皮膚病・痔疾・胃腸病・婦人病などに效き、眼病に特効があると云はれて居る。泉温五六―五九度、泉量は餘り豊富でない。

▲旅館 丹羽(電湯一、室九、佐々木 一泊一圓八〇錢、二圓半。他に自炊制の宿屋五軒あり室料一週四圓。

▲二庄内温泉(同上山形村二庄内) 板留温泉から南二軒餘、極めて原始的な共同浴場一ヶ所と客舎數戸あるが、その地方農民の療養所に過ぎない。湯は單純泉で六三度。

▲沖浦温泉(同上山形村沖浦) 二庄内温泉を距ること約一軒三、淺瀬石川の流域にあつて温泉は河原の兩岸に湧出し、浴場も二ヶ所あるが客舎は不完全である。泉質効能は温湯と同じ。

十和田湖遊覽日程案 其一 (十和田湖遊覽の最 短日程案を示す)

(東京から四日)

日程	地名	發着時刻	記事
第1日	上野驛	發後 二・三五	東北本線經由青森行車中一泊
第2日	古間木驛	着前 四・五一 發前 五・〇〇	下車、乗換 乗合自動車
第3日	子ノ口	着前 七・三〇 發前 九・〇〇	下車、朝倉 遊覽船

▲上野―福島―古間木間急行一四時間一六分(六六―一軒七) 三等六圓七四錢(上記列車ニハ二、三等寢臺及和食堂車ガアル)

▲古間木―三本木―焼山―子ノ口間五三軒、自動車二時間半、乗合二圓二〇錢。(第一七七頁参照)

考

日程	地名	發着時刻	記事
第2日	十和田湖	着前 一〇・三〇 發後 〇・三〇	遊覽 第一七五頁参照 下船、晝食
第3日	大湯温泉	着後 二・〇〇 發後 三・〇〇	自動車 下車、宿泊

▲大湯―毛馬内驛間自動車二〇分(七軒五) 乗合四〇錢貸切二圓半

▲毛馬内驛―大館間(秋田鐵道) 一時間餘(二九軒) 賃七四錢。(並等車のみ)

▲大館―秋田―新津―宮内―澁川―上野間(上越線經由) 一九時間(六九―一軒)、賃三等六圓九四錢、上記列車には二等寢臺がある。

▲大館發後三・〇一ノ福島經由ノ上野・大阪行急行ニヨリ福島經由ノ列車ハ上野着翌朝七・五〇デ二、三等寢臺及和食堂車ガアル、賃六圓八三錢、(六七五軒)。

日程	地名	發着時刻	記事
第3日	大馬内驛	着前 九・〇〇 發前 九・二〇	乗合自動車 下
第4日	秋田驛	着前 一〇・一五 發後 二・一三	秋田鐵道大館行 乗米澤行列車 乗上越線經由 上野行列車

▲大館―秋田―新津―宮内―澁川―上野間(上越線經由) 一九時間(六九―一軒)、賃三等六圓九四錢、上記列車には二等寢臺がある。

▲大館發後三・〇一ノ福島經由ノ上野・大阪行急行ニヨリ福島經由ノ列車ハ上野着翌朝七・五〇デ二、三等寢臺及和食堂車ガアル、賃六圓八三錢、(六七五軒)。

旅行費用概算

二等 四五・八一  
三等 二五・六六

内譯 十和田探勝遊覽割引券(二等二六・八一、三等一五・八六)、急行料(二等二・〇〇、三等一・〇〇)、寢臺料(二等九・〇〇、三等上段一圓・八〇)、旅館券(三圓)ノ外食料其他トシテ概算五圓ツ、ヲ計上ス

十和田湖遊覽日程案 其二 (飯坂温泉、古虚平泉、花)

(東京から七日)

日程	地名	發着時刻	記事
第1日	上野驛	發後 二・三五	青森行 二、三等急行

▲上野―福島急行五時間二七分(二六―九軒二) 三等三圓四七錢。

▲福島驛前―飯坂温泉間乗合自動車二二五分(九軒八) 片道三〇

考

十和田湖 (遊覽日程案)

日 1	第 2 日	第 3 日
福島驛 飯坂温泉	飯坂温泉 伊達驛 平泉驛 花卷驛 花卷温泉	花卷温泉 花卷驛 古間木驛 三本木 燒山
着後 八・〇三 發後	發前 發前 八・〇二 着後 一・〇八 發後 三・五四 着後 五・二二 發後 五・一九	發前 九・五七 發前* 〇・二七 着後* 二・二三 發後 着後 四時頃 發後
下車、電車 又ハ乗合自動車 泊	自動車又ハ 電車 青森行列車 平泉古處見物 尻内行列車 電車ニ乗換 花卷温泉行 宿 泊	電車 青森行急行 下 動 車 自 動 車 自動車下車徒歩 (貸切自動車ナラハ 巴葛迄行ク)
錢(一日九回)、貸切五人乗一圓半。 ▲福島―飯坂間福島電車飯坂西線ヲ三〇分(九軒六)賃一八錢、 三〇分毎。 飯坂温泉(一五七頁参照)。	▲飯坂温泉―伊達驛間三軒三、自動車一五分、乗合二〇錢(每列車)貸切(五人乗一圓)。電車一五分、賃一三錢、三〇分毎ニ發。 ▲伊達―平泉間普通列車ヲ五時間餘(一七〇軒二) ▲平泉驛カラ中尊寺迄西北約一軒六、坂下(一軒)迄自動車ガ行ク、所要一〇分、乗合一〇錢(列車毎) 中尊寺(第一六九頁参照) ▲平泉―花卷驛間汽車一時間一八分(六八軒八) ▲花卷驛カラ花卷温泉マテ花卷温泉電氣鐵道デ二二分(七軒四)片道三三錢。 花卷温泉(一七二頁参照)	▲花卷―古間木間急行四時間(一六五軒四)三等急行料六五錢。 「註」(1)上記※印急行列車ハ七月頃カラ一〇月末頃迄ノミ古間木驛ニ停車ノ豫定ニ付花卷驛發の際右確ムルヲ要ス。 (2)上野―古間木間直通ノ場合ハ前記(1)ノ常磐線經由各等急行列車(各等發及洋食堂車アリ)ガ前晚一〇・三〇ニ上野ヲ出ル。急行料三等一圓。 ▲古間木―燒山(三八軒九)自動車一時間二〇分乗合一圓六〇錢 ▲燒山―葛温泉間五軒、徒歩約一時間半。 燒山橋ノ北詰ヲ西ニ向ヒ奥入瀨川ヲ左ニシテ進ム。間モナク右ニ折レ岩石ノ累々タル葛川ニ沿フテ上リ、右ニ穴吹ヲ見、左ニ昇天橋ヲ渡ツテ密林ノ中ニ入ル。ブナノ巨木多ク十和田山中第一ト稱スルモノガ路傍ノ右側ニアリ、いたや、かえで又甚ダ多ク秋季ハトリノ色ヲ示ス。漸ク平坦ニ出デ、樹木ノマバラナ處、右方ニヤヤ離レテ大町桂月ノ墓ガアリ、此處カラ間モナク葛温泉ニ着ク。 葛温泉(一七九頁参照)

日 4	第 5 日	日
十和田湖 休屋 又ハ生	燒山橋 葛温泉	葛温泉
發後 着後	發前 發前	着後 五時頃
遊覽船 遊覽 宿 泊	自動車又ハ 徒歩 徒 歩	宿 泊
▲十和田湖上遊覽船直航一時間(約一〇軒)乗合七〇錢、遊覽船一時間半、 ▲子ノ口―休屋間湖上遊覽船直航一時間(約一〇軒)乗合七〇錢、遊覽船一時間半、 (陸路)湖岸ニ沿フテ南下シ、途中五色濱、御鹽石、松倉之鼻等ノ名勝ヲ賞シテ行程約四軒、宇樽部ノ部落(旅館東湖館ガアル、室數一二、一泊二圓―三圓、②二圓半、尙此處ハ三戸口デ東北本線三戸驛カラ四軒、貸切自動車ガアル一八〇頁参照)ニ至リ、夫カラ約一軒ニシテ屏風坂(登路一軒半、降路一軒三)ヲ過キレバ伏屋ニ至ル。宇樽部カラ約六軒、自動車貸切子ノ口―休屋間三圓。 (休屋ノ旅館) 世界公園館(電十和田一三、室二〇、普通一泊二圓―三圓、③三圓)、太陽(電三、室一五、普通一泊四圓、五圓、④四圓)、十和田觀光館(電四、室九、三圓半、⑤三圓)、一ノ宮十和田館(電一、室七、二圓二圓半)、世界公園館別館大湖(電七、室一〇、二圓、三圓)。 ▲休屋―生出間湖上三軒、モーターボート二〇分、料金二〇錢 陸路 休屋カラ發荷マデ約四軒、夫カラ生出迄約一軒、自動車貸切一圓。 (生出ノ旅館) 和井内ホテル(電十和田一二、一泊二圓―五圓、⑥三圓)	▲燒山―子ノ口間一四軒、此區間ハ所謂オイヤセノ溪流美デ、之ヲ賞スル爲自動車ハ徐行シテ進ム、所要一時間、乗合六〇錢。然シ眞ニソノ美ヲ探ラントスルモノハ徒歩ニヨル。緩カナ爪先上リノ道ヲ恰モ幽邃ナ公園ヲ行クガ如ク、道々撮影シテラ緩歩スルモ四、五時間デ足ル。 【子ノ口】 八十和田湖ノ水落チテ奥入瀨川ノ溪流トナル所。燒山ニ葛川ヲ合セテ流ル、事七〇軒、太平洋ニ注イデ居ル。三本木カラ乗合一圓七〇錢、古間木カラ貸切二圓半。 (旅館) 子ノ口館(電十和田八、室一〇、二圓―三圓)、世界公園館支店(電一〇)安野、和井内ホテル支店。 ▲子ノ口―休屋間湖上遊覽船直航一時間(約一〇軒)乗合七〇錢、遊覽船一時間半、 (一六軒半)乗合一圓二〇錢、貸切一〇人乗七圓、定員ニヨリ三〇圓位迄。 (陸路)湖岸ニ沿フテ南下シ、途中五色濱、御鹽石、松倉之鼻等ノ名勝ヲ賞シテ行程約四軒、宇樽部ノ部落(旅館東湖館ガアル、室數一二、一泊二圓―三圓、②二圓半、尙此處ハ三戸口デ東北本線三戸驛カラ四軒、貸切自動車ガアル一八〇頁参照)ニ至リ、夫カラ約一軒ニシテ屏風坂(登路一軒半、降路一軒三)ヲ過キレバ伏屋ニ至ル。宇樽部カラ約六軒、自動車貸切子ノ口―休屋間三圓。 (休屋ノ旅館) 世界公園館(電十和田一三、室二〇、普通一泊二圓―三圓、③三圓)、太陽(電三、室一五、普通一泊四圓、五圓、④四圓)、十和田觀光館(電四、室九、三圓半、⑤三圓)、一ノ宮十和田館(電一、室七、二圓二圓半)、世界公園館別館大湖(電七、室一〇、二圓、三圓)。 ▲休屋―生出間湖上三軒、モーターボート二〇分、料金二〇錢 陸路 休屋カラ發荷マデ約四軒、夫カラ生出迄約一軒、自動車貸切一圓。 (生出ノ旅館) 和井内ホテル(電十和田一二、一泊二圓―五圓、⑥三圓)	

参考 (歸路、毛馬内町又ハ鏡山カラ小坂町ニ行キ、小坂驛山ヲ見學スルノモ興ガアル)  
▲毛馬内町―小坂町間六軒八、自動車乗合四〇錢、二五分。一日一五回、五人乗貸切二圓。



▲生出一鏡山間三軒、鏡山一鏡山峠間上り三軒、鏡山峠一小板町間一四軒。コノ道ハカナリ岐路ガアルカラ案内者ヲ要スル。鏡山峠ハ海拔八六〇米アリ、湖上ノ眺望ハ發荷峠ヨリ遙カニ優レテ居ル。ソシテ此カラノ眺望ヲ恣ニセントスルナラバ、此處デ交又シテ居ル峯廻リノ林道ヲ北二二、三百米程行クガヨイ。

【小板嶺山】 入口一三、八〇六(昭和五・一〇調)ヲ有シ藤田鑛業會社經營ノ鑛山トシテ著名デアリ。小板嶺山ハ文久元年ノ發見ニ係リ、初メハ鏡山デアツタガ明治三年カラ銅山ニ變ツタ。而シ今日デハ鑛床ノ大部分ヲ掘リ盡シ、花岡鑛山其他カラ鑛石ヲ仰イデ居ルト云フ。花岡鑛山ハ小板嶺道ノ一終點(大館町ノ北)花岡鑛ノ所在地ニアル藤田鑛業會社經營ノ銅山デ、明治一九年ノ發見デアリガ、其後試鑛ノ結果鑛質新鑛床ヲ發見シ、前途有望ト云ハレテ居ル。探掘サレタ鑛石ハ其儘小板嶺鑛所ニ移サレ、小板嶺山鑛鑛ノ七割ヲ供給シテ居ル。小板嶺ノ大規模ヲ露天掘ト、壯大ナ製鍊所トヲ以テ代表サレテ居ル。

第5日	生 出	發 荷	大湯温泉
	發	發	着後
	自動車	宿	泊
<p>▲生出一大湯間二二軒、自動車一時間一〇分、乗合一圓三〇錢 貨切七圓。(六月一〇月)。</p> <p>生出カラ常ニ林ノ中カラ湖水ヲ眺メ乍ラ西南ニ進ミ、右ニ轉ジ火山灰ノ堆積シタ所ヲ斜ニ東南ニ登レバ約四軒デ發荷峠ニ着ク。此處ハ海拔六四七米、湖面ヨリ高キコト二四六米、ぶなノ大樹ガ疎生シ、其間カラ十和田湖ノ大觀ガ出來ル。汗知ラズニテ十和田湖ノ全景ヲ見得ル處ハ今ノ處此ノ峠ノミデアリ。</p> <p>大湯温泉(一七八頁参照)</p>			

第6日	大湯温泉	毛馬内驛	大館驛	土崎驛	秋田驛
	發前 八・四〇	發前 九・二	着前 一〇・二五	發前 一〇・三五	發後 五・三〇
	自動車	秋田鐵道	乘 米澤行 列車	下 秋田市見物 車	上野行二三等急行 車中一泊
<p>▲大湯一毛馬内町一毛馬内驛七軒五、自動車二〇分、乗合四〇錢、貨切二圓半(毛馬内町カラ驛迄ハ約二軒、乗合二〇錢)</p> <p>▲毛馬内一館間秋田鐵道(三等車ノミ)デ一時間餘(二九軒二)三等七圓(並等車ノミ)</p> <p>別ニ乗合自動車ノ便モアリ、賃九〇錢、所要一時間一〇分。</p> <p>▲大館一土崎間二時間二七分、秋田迄二時間三八分(一〇四軒二)</p> <p>(秋田市見物) 土崎驛一土崎港一高清水公園一日吉神社一杉山平田篤胤墓一干秋公園一廣小路一物産館一秋田驛。第二〇〇頁参照。</p>					

▲秋田一福島一上野間急行一四時間三〇分(五七〇軒八、急行料三等一圓)(二、三等寢臺及和食堂車アリ)(大館一上野間三等六圓八三錢)

旅行費用概算

二等 六六・四八  
三等 四一・一七

注意

十和田湖遊覽季節遊覽券ハ六月ノ新線ノ季節カラ一〇月紅葉期迄發賣ノ豫定デアリガ割引率及ビ發賣期間ハ毎年多少ノ相違ガアルカラ出發ノ節ハ確ムルコト。左記運賃ハ本年(八年)季節遊覽券トシテ發賣サレタモノデアリ。

遊覽券	福島一飯坂一伊達(電車)	花巻驛一花巻温泉(電車往復)	中尊寺拜觀料及自動車賃
▲鐵道一上野一三木木間、毛馬内一上野間。▲自動車一三木木ノ口間、生出一毛馬内間▲渡船一子ノ口、休屋(半、三圓二〇錢) 休屋又ハ生出一(三圓) 大湯(三圓)ノ四泊ヲ含ム。以上二等(五圓、三等二圓二〇錢)	二等〇・三一 三等〇・三一	〇・六六 〇・六六	〇・八〇 〇・八〇
▲急行料(三回分) 二等四・六〇 三等二・三〇	〇・〇〇 〇・〇〇	〇・〇〇 〇・〇〇	〇・〇〇 〇・〇〇
▲泊料(寢臺料) 九・〇〇(下段) 二・五〇(上段)	〇・〇〇 〇・〇〇	〇・〇〇 〇・〇〇	〇・〇〇 〇・〇〇
▲食料其他概算	〇・〇〇 〇・〇〇	〇・〇〇 〇・〇〇	〇・〇〇 〇・〇〇

青森及其附近

【恐山】 青森縣下北半島にある標高七〇〇米餘の火山で、山頂の火口甚だ大きく、火口壁には起伏が多い。その東南の突起を屏風山と稱し、その南に北國山、その西に小轟、大轟、丸山と續き、更にその外側には二つの寄生火山がある。東南のものを釜臥岳(七八四米)、西北のものを朝比奈岳(八八〇米)と云ひ、何れも火口を缺いた圓頂岳である。

恐山の火口内には恐山湖と云ふ、直形二軒弱の圓形をなす火口湖がある。湖水はその東北端で火口壁を破り、「三途の川」の河口瀾となつて落下し、下流を正津川と呼んでゐる。

火口内には火山活動の名残を留め數多の硫黃噴氣孔があり、殊に湖の北岸に著しく、恐山温泉もある。その噴氣孔は懸崖地獄、鹽屋地獄、八幡地獄、金堀地獄、修羅王地獄などと稱され、その修羅王地獄はもと一定時間を置いて間歇的に温泉と水蒸氣とを噴出したものである。

【登路】 大湊線田名部驛から頂上迄約一六軒、安政年間(一八五九)に建てた里程表が一丁毎に現存して居るので便利がよい。また處々に清水が湧出して居る。登るに於て青森縣の誇りとするヒバの美林があり、谷間にはホウ、ナラ、赤松など

も繁つて居る。田名部から約六軒で、大湊からの道と合する處に休み場がありそこから南に陸奥灣、東北に太平洋が見え、田名部町一帯の山野が脚下に展開して珍らしい展望美を有して居る。更に針葉樹と闊葉樹の混生林を分けつて樹木の間から恐山湖の碧色の水面を始めて見る時は、神秘的な山靈に接する感じが深い。更に下つて樹木の盡きた處に湖面が展開する。湖水の吐口をなす三途川を渡つて湖畔北岸にある「恐山温泉」に達する。田名部驛から此處まで一五軒七、自動車を通ずる。所要一時間、賃二圓。温泉は酸性硫黃泉で七二度、リウマチス、婦人病・皮膚病等に効くと云ふ。地は内通寺の地藏堂靈堂内にあり、古瀧の湯・新瀧の湯・藥師の湯・冬坎の湯・花染の湯などがあり、別に湖畔に新浴場恐山ホテルがある。(一泊二圓一圓五〇錢)、自炊室料食費一日一圓一〇錢位)、寺内には數百人を宿泊させる事が出来る。(一泊一圓六〇錢位)。

▲恐山地藏堂 前記恐山湖北岸菩提寺にあり、毎年七月一八日から一週間の緣日に地藏尊を祈れば死者の苦難を救ふと信ぜられ、血盆經を誦し、或はこれを紙に包んで血の池に投ずる風習が今に行はれて居る。平安時代には越中中立の地獄が廣く信仰されて居たが、近世になつてから此の恐山が地獄の所在地として信仰される様になつた。

【下北半島の海岸】 下北半島の西半部即ち斧の頭に當る部分は沿岸一帯に海拔二〇乃至四〇米の海蝕階段が發達し、斷崖をもつて海に臨んで居る所が多い。

▲薬研温泉(下北郡大畑村) 大湊線田名部驛から西北二七軒五、途中大畑まで一五軒七は乗合がゆく、一時間、賃一圓。此處から温泉まで山道八軒、營林署のトロリーに便乗出来る。地は胡比奈岳の北麓、大畑川の上流にあり、浴槽は恰も薬研の様な岩の間にあるので此の名がある。泉質は鹽類泉で四八度、脂肪過多症・慢性便秘・肝臓肥大・婦人病等に効くと云ふ。

▲下風呂温泉(下北郡風間浦村) 同上田名部驛から西北三〇軒一、自動車二時間、乗合二圓。地は津輕海峡に面した海岸を占め、遙かに北海道南端の翠微を美しく眺められ、函館迄汽船・モーターボートの便もある。湯は外湯のみで大湯・鹽類泉と新湯(硫黄泉)とあり何れも七二度、リウマチス・皮膚病・婦人病等に効がある。【旅館】 角長、丸木、森脇、一泊一圓五〇錢、二圓五〇錢。此處から下北半島の北端大間崎へは約一八軒あり、一日の行樂によい。田名部尚驛・大間崎間四八軒、自動車四時間、乗合三圓。

▲佛ヶ浦の奇勝 下北半島の北端大間崎から南へ牛首崎に至るは第三紀又は火山岩の險崖で一部分には古生層が露出してゐる。中でも佐井村福浦岬の南にある佛ヶ浦は最も有名な奇勝地である。凝灰岩の絶壁二、三百米に及び海底二〇乃至四〇米の深線海岸に接し、之等の絶壁は浸蝕を受けて種々の奇形を呈し、親子岩・十三佛・地藏岩・如來の頸岩・天龍岩・片岩・五百羅漢・蓬萊岩・香爐岩・燭臺岩・燭燭岩等の名を附した奇岩が起伏して居る。

田名部驛から佐井迄五八軒九、自動車五時間、乗合四圓。夫から徒歩二〇軒。【浅虫温泉】 青森縣東津輕郡野内村、東北本線浅虫驛附近。青森から一三軒五自動車四分、乗合四〇錢(一日一圓)、賃切五人乗三圓半。地は東西の三方岡陸を連ね、西北は青森灣の青波に臨み、海上指呼の間に湯

ノ島・四島・裸島など大小の島嶼が散在してその島めぐりも面白い。四島の風光もよく、夏は涼しく冬は此の地方としては比較的暖かい。海水は清透で海水浴にも適して居る。又此處は内地と北海道を來往する人々が疲れを休めるに都合のよい場所があるので、脂肪の香が湯街に濃かに漂つてゐるのも此處の特色である。

湯は無色透明の鹽類泉で泉温七三度、腎臓病・リウマチス・皮膚病・神經諸病・婦人病等に効がある。【旅館】 東奥館(電浅虫二・一四、驛四五米、室二七、普通一泊四圓、五圓、六圓、④四圓)、南部館(電一八・五〇、驛一五七米、室二二、二圓半、三圓、四圓)、北見館(電一、驛八七米、室一四、二圓半、三圓)、仙波館(電一〇・七四、驛二四五米、室二〇、普通一泊三圓、五圓、七圓、③三圓)、椿館(電七、驛半軒、室七、二圓半)、清遊館(電四六・五六、驛三〇九米、室一八、三圓)、初音館(電一一、驛三四八米、室一九、二圓、二圓半)、泉遊館、松泉閣、丸山等。

▲水族館 浅虫驛の北約二軒、裸島の近くにある東北帝大理學部附屬の臨海實驗所構内にあり、一般の觀覽に供してゐる。大人一〇錢、前八時以後六時。【島めぐり船賃】 (一〇人迄)湯の島三圓、裸島三圓半、四島五圓、茂浦島七圓、双子島八圓、以上全島廻遊一八圓。▲賃切船(三人乗ボート)二時四〇錢、二時間八〇錢、四時間一圓五〇錢。

青森市

上野から急行列車で一六時間(七三六軒四)、三等七圓二六錢。地は本州最北の都會で、北は青森灣に臨み東は横川の流れを帯び、市街は東西に長く南北に狭く、海灣に沿つて長く連續して居る。東北、奥羽兩線鐵道の終點に當り、また北海道に聯絡する要點を占める東北唯一の開港市場であるため商業が盛んで、また工業も行はれて居る。人口七七、一〇三(昭五・一〇)。

青森はもと一漁村に過ぎなかつたが、寛文年間津輕民の臣森山彌七郎が始めて埠頭を築き港を開き、その經營宜しきを待たため忽ち繁盛な商業地とな

り、明治四年には青森縣廳を此處に置くや縣治の中心となり、更に北海道が開拓されて北門の重要性を加へるに及び、盛々惠まれた都市として發達した處である。

【旅館】 かぎや(安房町、驛前、電三六・三七六、室一九、一泊二圓、二圓半、三圓)、鹽谷本店(濱町、驛一軒半、電五四、室二二、一泊同上)、鹽谷支店(安房町、驛一六〇米、電五五、室一六、同上)、陸奥館本店(新町、驛八七〇米、電七三〇、室三二、同上)、陸奥館支店(古川町、驛一一〇米、電五三九、室二〇、一泊一圓半、二圓、二圓半)、其他。

【遊覽順路】 驛—新町—縣廳—善知鳥神社—松木屋吳服店—大町—濱町—聖徳公園—公會堂—堤橋—合浦公園—國道通—驛。以上自動車にて一時間位、賃切二圓五〇圓。バス利用二時間半位、徒歩四時間位。

【市營バス】 青森驛前から合浦公園、堤橋、沖館、筒井、八重田方面に六分乃至三〇分毎に運轉してゐる。料金一〇錢均一。タクシー市内八〇錢。賃切自動車一時間二圓半の割、半日一〇圓。

【名所】 ▲善知鳥神社(縣社) 驛の東約九五〇米、バス一〇錢。市内安房町にあり市村島姫命、多岐津姫命、多紀理姫命を祀る。南部氏及津輕氏の崇敬厚かつた處である。▲合浦公園 驛の東約四軒、バス一〇錢、三〇分、六分毎。東北本線浪打驛の北半軒にあり、青森灣に臨み、園内には相生松、傘松等の老松がある。

【名物】 林檎、鮎、津輕塗、あびぎ蔓細工。【娯樂場】 ▲劇場 歌舞伎座(鹽町、驛二軒一)、遊樂座(濱町、驛一軒七)、▲映畫館 青森館(浦町、驛二軒半)、文藝館(鹽町、驛二軒)、電氣館(長島町、驛半軒) (以上何れもバスの便あり)常設館(驛前)。

ネプタと稱する大きな張子の人物・鳥獸・惡魔・武人などの姿を作り、色彩を施し、之を屋臺に乗せ、中に數百挺の蠟燭を點じ、或は車に乗せ或は昇いで廻る。之に附添ふ男女數百人は一團となつて花笠を被り、美しく着飾り、または假装して笛、太鼓に調子を合せて市中を練り歩き、一市の男女悉く狂する如くである。そして七日の朝之を堤川に流すのである。傳説によれば坂上田村麿が東征の時、これを行ひ、その囁の面白さに敵をおびきよせて、その首魁を擒にしたのに始まると云ひ、また蝦夷を追ひ或は疫病を拂つた事に始まると云ひ傳へ、その起りについては種々の異説がある。弘前市のネプタも同様に盛大なもので、三、四百のネプタが列をなして見物人雜沓を極める。

【青函連絡】 青森・函館間を連絡するため鐵道省の經營する航路があり、日々三往復の運航を行つて居る。その距離は約一六一軒あり四時間を要する。驛との間には長いプラツトフォームがあり、その尖端には明るくて氣持のよい待合所があつて寒さにふるふ夜中でも暖かい飲食物を提供して呉れ、また風吹かぬ通路を直ちに船に乗り換へる事が出来る様現代の設備が整ひ、また浮動棧橋によつて貨車を其儘船腹に積込み得る様になつて居る。

(就航船と定員)

Table with columns: 船名 (Ship Name), 噸數 (Tonnage), 定員 (Passengers). Includes entries like 津輕丸 (3,484 tons), 松前丸 (3,429 tons), etc.

船内食料 (和食) 上辨五〇錢、並辨二〇錢、親子井四〇錢。(洋食) 朝食七五錢、晝食一圓、夕食一圓。

奥羽線に沿ふて

【吾妻山】阿武隈平原の西、福島市の西に發ゆる山群で、東西にその山脈を走らせて福島山形の縣境に跨り、東西の二大山群から成つて居る。火山地質學的に見れば、西吾妻火山群は極めて古く、東吾妻火山群は今尚活氣を呈する新火山である。東吾妻火山群は一切經山(一、九四八米九)を盟主としてその北に發ゆる家形山(一、八八〇米)との間に直徑三九〇米の五色沼の火口湖を擁し、一切經山の南には明治二六年爆發した大穴と稱する火口があり、現に盛に噴煙して硫黄が採取されて居る。一切經山の東南には吾妻富士(一、七〇四米六)と稱する秀峯があつて福島からの眺望最も美しい。山頂には徑五〇〇米の摺鉢火口がある。また一切經山の西南に狭長な鎌沼を距て、鈍圓錐形の東吾妻山(一、九七四米七)、吾妻富士の南に高山(一、八〇四米八)が聳えて居る。西吾妻火山群はその西北に蟠り、西吾妻山(二、〇二四米)を盟主として、西大巖(一、九八一米八)、東大巖(一、九二七米九)、などの高峯がある。が之等は一の連峯をなして特に突起した部分がなく、置賜方面から仰望する時は一大臥牛状を呈して居る。
之等の諸峯を奥羽線坂方面から望むときは板谷峠の南方を劃し、東吾妻吾妻富士・一切經山・東大巖・中吾妻・西吾妻・西大巖等の高峯を東から西へ連ねて居る。

一切經山の山頂は概ね砂礫帯であるが、其の他の山々は多く山頂まで樹、トド松等の疎林に蔽はれてゐる。山腹には白布高湯・新高湯・吾妻温泉等の諸温泉北に面して散在し、西吾妻、東吾妻の西群連嶺に源を發して居る松川の溪流には姥湯・滑川の温泉があり、その山峽は溪水瀑布となつて深山に懸り山氣峽谷に満ちて暑さを知らぬ仙境をなして居るので避暑の浴客頗る多く、秋葉満山を飾る美観は、羽陽第一の壯景と稱せられて居る。眺望は頗る廣く、一切經山に立てば眼下に吾妻富士を眺め、神祕の湖沼に影をうつす東吾妻から南に峯を連ねて安達太郎山、東は阿武隈川から福島市の街を見下し、北には栗子峠の山々に重なる蔵王山を望み、また北から西へかけては東磐梯の檜原三湖から遠く飯豊山の雄姿を望み、南はピラミッド形の磐梯山から猪苗代湖、若松平等の眺望がよい。

また附近には硫黄製錬所の小屋、谷地の平の小舎及家形山山腹に青木の小舎がある。登山者の休憩小屋で、冬期スキー登山にはよい根據地となる。夏期は一切經山から西吾妻山への縦走は限笹や森林で困難であるが、冬はスキーで一日に往復が出来、到る處好スロープを持つて居る。

【登山口】左の數口あり、何れの登路も皆途中に山の湯宿があり優劣はない吾妻山一帯は冬期積雪多く、特に五色温泉を中心とした附近一帯は我國有数のスキー地で、スキー登山は主に五色温泉を根據地とする。

所謂福島方面からの吾妻登山は吾妻富士・一切經山・家形山等への登山を云ふのであるが米澤方面からの白布高湯口、會津方面からの小野川口もある。

【庭坂口】福島からぬる湯を経て登る吾妻富士まで約二六六、上り九時間。福島からぬる湯まで約二二二、途中の姥堂まで二二二、上り九時間。乗合四〇、三五、一日數回。福島からぬる湯間貸切七圓(但雨天の日は出ぬ)。

【庭坂口】ぬる湯間坂路九村。別途庭坂路からぬる湯までは一三村である。貸切六圓。ぬる湯から吾妻富士まで約四四九(上り二時間半、下りは一時間半)一切經山迄は約六六村である。(上り三時間半、下りは二時間半)強力案内料一圓半。

【庭坂口】奥羽本線庭坂駅から高湯を経て登る。高湯まで約一〇村、途中姥堂を経て五村餘、砥石山まで自動車がある。高湯から天然記念物に指定されて居る八重白山石楠花の自生地を経て一切經山の北にある火口湖五色沼迄約八村、それから一切經山頂へも約二〇分を達する。高湯から上り六時間下り三時間位。

【坂谷口】奥羽本線坂谷駅から五色温泉を経て登る。家形山まで約二二村、上り約四時間。

【土湯口】福島・金谷川から土湯或は野地温泉を経て登る。此の登路は他の方面よりも景趣が勝れて居る。青森トドマツ洞葉場の森林帯を通り、鳥子平には特有の高山植物がある。

【米澤口】米澤駅から白布高湯迄約一八村、それから西吾妻まで約六六村あり(上り三時間半位)右すれば西大巖を経て小野川口に下り、左すれば權現岩・人形石・東大巖を経て湯川温泉に達し峠驛に出る。

【峠口】峠驛から西南三村七の滑川温泉を経て東大巖迄約一一村、上り四時間位。

右へ折れてゆく。地は五色温泉の西約半村を隔つた不忘山の山腹に位し、眼界は狭いが東に信達平野、西に米澤の曠野を瞰下する事が出来る。湯はアルカリ性炭酸泉で泉温五〇度内外、泉量豊富で五色と共に子供の出来る湯として喜ばれ、婦人病に効くと云ふ。

【旅館】佐藤館(室三五)、金子屋(室三五)、一泊一圓半以上。

▲五色温泉スキー場 明治四三年横濱のアルペンスキークラブ員ウエングラークラツツアなどの開發にかゝる古い歴史を有するスキー場で、雪質が理想的で且つ五色温泉を中心とする吾妻山は山岳スキーの練習には最も良い處である。

一日行程のスキー登山には鉢森山(一、〇〇三米)、高倉山(一、四六九米)などがあり熟達した人々は吾妻火山群を廻る幾つもの興味深いコースがある温泉から西へ八村の家形山中腹には立派なスキー小屋があり、此處を根據とすれば家形山・一切經山・吾妻富士・東大巖・西吾妻・樽森山等へ往復が出来吾妻山麓の信夫高湯、微湯、土湯などへの山越も出来る。五色温泉には設備完全な六華俱樂部がある。

【滑川温泉】南置賜郡山上村、峠驛から西南三村七、襦籠の便がある、一圓六〇錢。地は海拔約九〇〇米、高倉山の西北麓、吾妻山に源を發する松川の上流山峽の地にあり、人煙全く遠き仙郷で避暑によく、秋の紅葉は殊に美觀である。旅館福島屋は懸崖上にあつて溪流に臨み、只一軒ではあるが規模大きく數百人を收容する事が出来る。室敷七一、一泊一圓半一三圓。温泉は炭酸泉で五五度、胃腸病・脚氣・リウマチス等に効がある。

【姥湯温泉】同上山上村、峠驛から西南約七村、前記滑川を経てゆく。峠驛から山麓四圓。地は海拔約一二〇〇米、藥師森山の南麓吾妻山の北谷にあり、風光明媚で、その卓越した景勝は南置賜諸温泉中の首位に推されて居る。附近は奇岩怪石に富み、秋葉の美がまた勝れて居る。温泉は炭酸泉で五三度、胃腸病・皮膚病・リウマチス・婦人病等に効くと云ふ。

【旅館】升形屋、室一一、一泊一圓半、二圓半。

**米澤市** 上野から急行七時間五四分(三二二村二)・三等三圓九二錢。福島から普通二時間二〇分(四三村)・三等六八錢。山形から普通一時間半(四七村)・三等七四錢。

市は米澤盆地の南隅、吾妻火山群から流入する清川によ

【小野川口】磐越西線川桁驛から川上温泉に至り森林鐵道に依つて小野川部落迄約一二村、それから中澤を登つて八村、西大巖にて米口に合す。

【信夫高湯温泉】福島縣信夫郡庭坂村。奥羽本線庭坂駅から西一〇村、姥堂を経て温泉から二村手前の先達山まで自動車がよく、賃六〇錢、所要三〇分。地は吾妻山中腹、海拔七五〇米、三方展けて福島市から信達平野を一望に収める高燥の地で、避暑に適する。温泉は硫黄泉で泉量豊富、泉温五〇度、リウマチス、皮膚病、脚氣、神經諸病に特効があると云ふ。

【旅館】吾妻屋、安達屋、信夫、玉屋。

【ぬる湯温泉】信夫郡水保村、同上庭坂驛の西南約一三村。(交通は前記藏王登山福島口の項参照)又は前記高湯から六村。

地は吾妻山の南腹、海拔九〇〇米、三面に山岳重疊し、一方開いて信達の沃野が眼下に連り、高燥閑寂の別境をなして居るが、特に紅葉の美しさは浴客に喜ばれる處である。また春のツ、ジ、晩春の石楠花も美事である。夏は二七度を上らぬ涼しさで避暑に適する。

温泉は酸性硫黄泉で泉温三八度内外、眼病・神經病等に効くと云ふ。

【旅館】二階堂(室五〇)、吾妻屋、信夫屋、一泊一圓二〇錢以上、主として伺ひ式で、自炊室代一日四〇錢、湯錢五錢、夜具一組二〇錢。

▲庭坂驛附近は福島縣に於ける梨果の名産地で、早生赤、長十郎の二種を多く産し、木場梨と稱されて品質優良である。驛から發送する梨は年産約五百萬個千五百噸の多きに達する。

【五色温泉】山形縣南置賜郡山上村、奥羽本線坂谷駅から三村五、籠一圓一〇錢。途中一軒半は道路平坦である。

上野―坂谷間急行約七時間(二九一村二)・三等三圓七〇錢。地は吾妻山の北側、不忘山の南腹海拔約八四〇米の高地にあり北は板谷峠の峻険と相對し、南は吾妻の高峯に連り、東は信達の平野を望み風光に富んで居る。古來子供の出来る湯として知られて居るが近年はスキーの根據地として、より有名である。

温泉は單純泉で泉温五〇度内外、婦人病に特効があると云はれ、濕疹、貧血症等にも効があると云ふ。

【旅館】宗川(室一〇〇)、一泊一圓半以上、(二圓)

▲新五色温泉 前記坂谷驛から約四村あり、五色温泉に至る路を約一軒手前で

つて形成された複合扇状地の中心部に發達した都市で、最上川の支流松川に跨り、商工業が盛である。人口四四、七三一(昭五・一〇)

市内は町家と家中に分れ、最も繁華な街路は大町、停車場通、立町、桐町で官衙、銀行、會社、商店など軒を並べて居る。

米澤は、鎌倉時代に大江廣元の次子時廣が、長井の地頭となつて城を此處に築いたのが發展の源をなして居る。室町時代には伊達晴宗、輝宗、政宗が居り、その上杉謙信輝宗の養嗣景勝が會津で一三〇萬石を領して居た時、此の地はその巨直江兼續の居城であつた。然るに景勝は關ヶ原の戦に西軍に與した廉で慶長六年三〇萬石に削封され、その後上杉氏は歴代米澤の城主として明治維新に及び、一五萬石を領した。藩祖上杉謙信から第一〇代の城主治憲は鷹山公として有名な人であつたが、明和年中専ら産業奨励に力を致された結果、置賜地方一帯擧げて養蠶の地となり、市はその一大蠶業地として發達するに至つたのである。

〔旅館〕音羽屋(住ノ江町、驛二〇〇米、電二二四、室二〇、一泊一圓半―三圓)、音羽屋本館(立町、驛一軒八、バスあり、電二六四、室一五一泊同上)、茜屋(立町、同上、電一三一、室二二、一泊同上)、武藏屋(立町、同上、電一〇、室二二、一泊同上、丸万(立町、同上、電六四〇、室二二泊二圓)、其他。

〔名産〕甘露梅、のし梅、時雨の松、ゆべし(以上菓子)、笹野彫(玩具)。  
〔娯樂場〕松柳劇場(門東町下ノ丁)、遊樂館(立町)、常盤館(北堀端町)。  
〔遊覽巡路〕驛―住ノ江橋―市役所―門東町―松柳神社―松柳公園―米澤城址―上杉神社―上杉邸―高等工業學校―直江山城守兼續墓―北堀端片町―上杉家廟―立町―松川橋―佐氏泉公園―驛。  
以上貸切自動車にて二時間位、料金三圓。

〔交通機關〕市内乗合自動車(列車毎一〇錢均一、貸切自動車一時間二圓、以上一時間に付一圓増、半日八圓)。  
〔名所〕▲米澤城址 驛の西方約二軒半、南堀端町にあり、平地に築かれた城で舞鶴城又は松柳城と稱し、鎌倉時代に大江時廣の創築と傳へる。明治六年

れて居る。温泉は鹽類泉で泉温六三度、婦人病・皮膚病・胃腸病等に効がある。附近は秋葉に美しく、また吾妻山第一の赤倉堀や白布大堀・人形石・天狗石・イロハ沼等の勝地があり、二軒程離れた一、〇九〇米の地に新高湯温泉がある(阿部旅館)。尙此處は西吾妻登山者の足溜りで山頂迄約六軒、頂上から西大嶺山を経て檜原湖畔に出で檜原三湖の勝を探つて沼尻から磐越西線に出る旅は興味の多いコースである。

〔旅館〕東屋(室五)、中屋(室四)、西屋(室四)。一泊一圓五〇錢、二圓。  
山形縣東置賜郡赤湯町。奥羽本線赤湯驛から約一軒六、自動

車乗合一〇錢(列車毎貸切七人乗七〇錢)。  
地は置賜平野の北隅にあり、北に青嶽を貫き南は廣闊な沃野をなし、商舖櫛比する殷賑な町で、温泉情緒も濃かな處である。烏帽子山は今昔樂園となり縣社八幡神社があり、櫻が多く文眺望に富み、置賜の平野を一目に見渡せる。其他赤湯沼、二色根山(ニロネヤマ) 城址、薬師寺等の曳杖地がある。温泉は無色透明の鹽類泉で、泉源數ヶ所あり、丹波湯・甘湯・大湯は烏帽子山麓に、森の湯は街から少し離れた所に湧出し、新湯は其の中間にある。温度五八度、婦人病・痔疾・脚氣等に効がある。

〔旅館〕御殿守(電五、室三二、一泊二圓半、三圓、三圓半、③三圓)、丹波館(電一、室二五、一泊同上)、丹泉ホテル(電八、室二五、普通一泊同上、②二圓半)、松島館(電二七、室一七、一圓半―二圓)、榮屋(電三、室二三)、大文字屋(電七、室二八、二圓半、三圓半)、近江屋(電一六、櫻湯(電二二) 瀧波(電五一)、天ノ湯(電三七)、金湯(電四六、森ノ湯(電五七) (以上何れも内湯あり)、富田屋(電五六)、大和屋(電なし)等。一泊一圓半乃至三圓。

上の山は昔から東北地方第一の歡樂郷とされた所であるが、現在の赤湯は或はそれ以上に遊興氣分の漲つて居るものがあり、町から半軒許り離れた白龍湖畔には數軒の青樓さへあり、紅燈籠酒好夢を載せて、粉香黛影湯煙と共に漂ふと云つた所である。〔名物〕葡萄、葡萄酒、七色唐辛、櫻桃、薯蕷等。

〔朝日岳〕羽越山脈の北半をなす連嶺で、山形・新潟の縣境に跨り大朝日岳(一、八七〇米)を盟主としてその東北に小朝日岳(一、六四八米)、鳥原山(一、四三〇米)、西北に西朝日岳(一、八一四米)等から成り北西寒江山(一、六九五米)、以東ヶ岳(一、七七一米)に連り、大鳥池を抱きて連峯凡そ三〇軒に亘る。山は概ね花崗岩から成り、溪流美と雪溪の發達著しく、大鳥池は周四

濠の一部を残して他は悉く破毀し、遊園地として松柳公園と名づけた、今その大部分は上杉神社の境内である。▲上杉神社(別格官幣社) 驛の西方約二軒三バス停留所から約四〇〇米。舊城本丸址にあり、明治四年の創建で、藩祖上杉謙信を祀る。例祭は四月二十九日。▲松柳神社(縣社) 上杉神社の入口にあり、上杉景勝及治憲(鷹山公)を祀る。▲上杉家廟 驛の西方三軒半、御廟町にあり、板垣を廻らした杉林の中に藩祖上杉謙信以下累代の墓がある。▲佐氏泉公園 驛の西二〇〇米、此處は佐藤莊司正信の別荘地と傳へられ、その子、繼信、忠信の産湯の泉と云ふ泉水が園の中央に湧出し佐藤清水とも云ふ。

〔小野川温泉〕山形縣南置賜郡三澤村、米澤驛の西約八軒九、自動車三五分乗合片道二〇錢(一日五回、但二月―三月運休) 貸切一圓。又は米坂線西米澤驛から約六軒、自動車二〇分、乗合片道二〇錢(同上運休)。地は大樽川に臨み、巖岩・笹野の峯を貫いた山間に湯街をなして居る。  
仁明天皇の承和年間才色ともに優れた小野小町の父郡司良真が出家したので、小町はその時一八歳で宮仕へをして居たが、少時の暇を乞ひ父の行方を尋ねる路すがら病に罹り、淋しき旅の一夜こゝから北へ百里、吾妻川といふ川の岸邊に、名湯が湧き出て居る。之に浴せば病も治り、また父に出會ふ事が出来る」との薬師如來の靈夢により此の湯に來り、日ならずして病も平癒し、圖らずも此處で父にめぐり會ふ事が出来たので、翌年峯の薬師堂を建立して如來を觀請して開湯し、入浴したと云ふ傳説がある。小町が入浴したのは今の尼の湯であると云ふ。

温泉は弱鹽泉で五五度、皮膚病・リウマチス・婦人病に効く。泉量は極めて豊富で共同浴場としては尼の湯の外湯がある。  
附近には小野川スキー場や小野小町の傳説による薬師堂、大袈裟觀音などがある。

〔旅館〕扇屋(室三五)、小野川ホテル(室三一)、登府屋(室二八)、辻屋(室一二) 坂木屋(室一七)、山川屋、春木屋、吉野屋、龜屋、突戸屋、榮川屋、若松屋、梅屋、二階屋、旭屋、高砂屋、一泊一圓半―三圓。

〔白布高湯温泉〕南置賜郡南原村、米澤驛の南一八軒、自動車一時間乗合上り一圓、下り八〇錢往復一圓半(七月―九月)、貸切三圓半。信夫高湯、藏王(最上)高湯と併せて奥羽三高湯の一で、西吾妻山への登山口に當り海拔約八五〇米、前に鬼面川の溪流を控へ、後に吾妻山を貫き、東西南の三方は杉の森林に圍ま

れに及び、附近はキャンピングに適して居る。朝日岳は大正一一年山形高等學校生徒その他の登山により紹介せられ、比較的處女峯として登山者の愛好する深山地帯で、近頃朝日に登山家の間に東北アルプスの名を以て喧傳せらるゝに至り、今後東北に於ける登山興味の中心たらんとする趨勢にある。

〔登路〕朝日嶺泉口、大井澤口、柳川口などあるが、中でも朝日嶺泉口が最捷路で便利とされて居る。灌木多し、夏季の登山は容易でないが、冬期スキーによる登山は屢々企てられ、山岳美を紹介されて居る。

〔朝日嶺泉口〕奥羽本線赤湯驛で長井線に乘換へ鮎貝驛で下車する。鮎貝驛から朝日嶺泉口まで一八軒五(徒歩上り七時間、下りは五時間)。驛前に嶺泉案内所がある。道を西北に進むと約四軒半で黒鴨村に達する。(此處迄貸切自動車やゆく、五人乗二圓五〇錢)。それから道は急坂になつて日影部落を過ぎ尖山(九〇〇米)を右に見、頭殿山(一、二〇三米)の北を廻り朝日川の谷に下つて朝日嶺泉につく。

朝日嶺泉は山形縣西村山郡五百川村にあり、朝日岳登山の根據地に當り、全く深山幽谷の嶺泉場で、旅舎は朝日川に臨んで建てられた山の湯宿である。浴場は舊湯・新湯の二ヶ所あり、炭酸鐵泉の攝氏一二度、浴用加熱し、胃腸病、婦人病、神經痛に効くと云ふ。旅館は古川屋(室一七)、東北館(室一九)、朝日館(室一四)、の三軒あり一〇〇名内外の收容力がある。一泊一圓五〇錢位。  
嶺泉から大朝日岳までは近來開かれた朝日保道を約一〇軒で頂上に達する上り五時間、下り三時間位、強力案内料一圓半。(小朝日岳廻りは約二〇軒あり、上り七時間を要する)。まづ朝日川の溪流を溯るとブナの原生林と溪谷が美しく、嶺泉から約四軒で黒保澤と朝日保澤との合流點に達する。それから大朝日岳の急な尾根を上る。三軒ばかりはブナ・水楡・カヘデ等の茂つた狭い尾根で、次第に灌木帯に入り岳樺の中に入る。右手には黒保澤を隔て、鳥原山から小朝日岳が間近に迫つて美しく望まれる。海拔一、四〇〇米あたりから松帯となつて殆んど一直線に上つて行くと花崗岩の岩塊が露し、やがて大朝日岳の頂に達する。

山頂は狭長な尾根状をなして連嶺が東北・西南・西北の三方へ、遠く走つて居る。頂上の展望は雄大で、夏なほ残雪が輝き、北へ連る峯々は日本アルプスの景観に似て居る處から東北アルプスの名さへある。北へは以東岳までの峯が連り月山、鳥海山を望み、東は最上平野から藏王山東南に吾妻郡山を眺め、南

西指呼の間に飯豊山が壮麗な雄姿を表はしてゐる。西は羽越平野から日本海の眺望がよい。

大朝日岳から西朝日岳・寒江山を縦走して以東岳までは約二〇軒、一日行程である。以東岳から大鳥池までは尚六軒、大鳥池には鮭が多く、附近はキヤムピングに適して居る。此の間約三〇軒に亘り縦走は興味多い山旅である、途中小舎の設備もあるが食糧その他の携帯を要する。

歸路は朝日嶺から別路朝日川に沿うて下り、立木・曲淵を経て夏草まで二〇軒の間溪谷が美しい。夏草から宮宿まで四軒、宮宿から最上川に沿ふて左澤まで二軒の間自動車があり(八〇鐘、五〇分)、左澤から左澤線により山形に出られる。

**上ノ山温泉** 山形縣南村山郡上ノ山町。  
奥羽本線上ノ山驛から西北半軒乃至一軒三、自動車乗合一〇鐘(二〇分) 貸切五〇鐘。

上の山は松平氏の舊城下で、町の中央の城址は今は月岡公園となり、園内に月岡神社がある。附近に澤庵和尚の舊蹟と云はれる春雨庵及舊城主の觀光地であつたと云ふ松山御殿址などがある。温泉は無色透明の鹽類泉で、温度六三度、胃腸病・貧血症・皮膚病に效がある。

上の山は豪族武永義忠が、天文四年に天神森に月岡城を築いてから、松下信安に至るまで數百年間、所謂城下町として發達して來た所で、只單に温泉町と云ふのみでなく、此の附近物産の集散地となつて居る。温泉場に月岡城址を中にして、其北にあるのが舊温泉町の湯町で、其東にあるのが二日町、十日町、新町である。舊温泉は「出羽で庄内、最上で上の山、此處は會津の東山」と唄はれ、由來東北の三樂郷の一として知られた處で、その昔は紅燈絃歌の巷として、轉た遊子の心をそつたものであるが、今は享樂的氣分は漸次薄れて行き繁華な湯治湯となつて來て居る。新湯は元月岡城の外濠であつた所で、昔の口碑をたよりに大正十一年三月掘鑿を試みた處、首尾よく湧出口を發見したものであるが、急速な發展を示し、今は舊湯と代つて紅燈絃歌の歡樂境と云ふ感じの濃厚となり行く賑やかな温泉場を出現して居る。

一泊二圓一三圓、②二圓半、柴田屋(旅館町、驛一軒六、電四八、室一八、一泊二圓一三圓、②二圓半)、柴田屋支店(驛前、電一五七、室九、二圓一三圓)、杉山館(七日町、驛一軒半、電一一五、室三四、二圓一三圓)。  
〔名産〕山形織、山形鐵瓶、のし梅、甘露梅、やたら漬、櫻桃の罐詰。  
〔娛樂場〕千歳座(七日町、第二公園内)、旭座(七日町)、霞城館(七日町)、演藝館(七日町)、樂天地(七日町)。

〔遊覽順路〕驛—十日町—七日町—縣廳—三島通—千歳公園—山寺—專稱寺—高等學校—釋迦堂—唐松觀音—兵營—驛。

▲貸切自動車一時間三圓。▲タクシー市内五〇鐘。▲乗合自動車市内一〇鐘。  
〔名所〕▲千歳公園 驛の東北三軒、乗合自動車一〇鐘、馬見ヶ崎川に沿ひ園内に國分寺藥師堂があり五月八日の縁日が賑はふ。▲千歳山 驛の東三軒、海拔四二四米、満山松樹に掩はれ、北麓に萬松寺あり、慈惠大師作の觀音像を安置し阿古耶姫の開基古蹟。▲專稱寺 驛の東北二軒、乗合自動車一〇鐘、市内第一の伽藍。▲釋迦堂 驛の東五軒、東澤村にあり、自動車二〇鐘、日本三釋迦ノ一。

〔藏王高湯温泉〕山形縣南村山郡堀田村、奥羽本線金井驛(山形の驛南から東一軒、自動車五〇分、乗合七〇鐘、下り六〇鐘(一日七回) 貸切五人乗四圓。山形驛から一六軒、自動車五〇分、乗合上り九〇鐘、下り八〇鐘、往復一圓半(一日七回)、貸切五圓。  
地は藏王山の西腹海拔約九二〇米に位し、三方に峯巒を繞らして西の一方のみ展げて山形平野を望み、藏王登山の根據地となつて居る。温泉は酸性硫酸泉で泉温四二度、神經諸病・子供の疳・呼吸器病・眼病・關節病・皮膚病などに効く。此處はもと爆烈火口であつた處で硫氣が盛んで、東北の草津の稱もある。

〔旅館〕柏屋(室一七)、山形館(室五〇)、海老屋(室二九)、山形屋(室一九)、瀧見屋(室三〇)、塚屋(室四一)、壽屋(室三二)、松金屋(室二八)、鶴屋(室二〇)、吉田屋(室一〇)、若松屋(室一四)、中村屋(室一〇)、川原屋(室一六)、辻屋(室三三)、近江屋(室二〇)、岡崎屋(室二九)、高見屋(室二四)、以上一泊一圓五〇鐘乃至三圓、何れも内湯あり。

奥羽線に沿ふて (藏王高湯・山寺・天童温泉)

〔名物〕干柿、櫻桃、葡萄、黍園子、春雨饅頭、松茸等。

〔旅館〕村尾別館(電上ノ山二〇・二三・二〇二、驛七三)米、室三、普通一泊二圓、二圓半、三圓半、④四圓、村尾本館(③三圓)、米屋(電三三、驛七一〇米、室一七、同上、③三圓、貸切湯あり)、寒河江屋(電八、驛六九〇米、室一二、一泊一圓二〇鐘、一圓半、一圓八〇鐘)、月岡ホテル(電一一、室三〇、二圓一四圓、③三圓、貸切湯あり)、湯本(電一一、驛八三〇米、室三四、一圓八〇鐘、二圓半、貸切湯あり)、龜屋(電三〇、室一二、二圓一三圓)、登位屋(電一七、驛三九〇米、一圓半、二圓半)、川島屋(電二五、驛八二〇米、一圓半、二圓)、中村屋(電三五、驛五三〇米、一圓半、二圓)、材木榮屋(電一七二、驛七六〇米、一圓三〇鐘、二圓)、外二八軒、何れも内湯あり。

**山形市**

上野から急行九時間(三五九軒二)、三等四圓三四鐘。  
福島から急行三時間(一七九軒九)、三等一圓三八鐘。  
秋田から急行五時間(二二二軒六)、三等二圓八五鐘。  
市は山形盆地の東南部に位し、馬見ヶ崎川は市の東北部を流れ、山形縣治の中心で、商工業が榮えて居る。人口六三、四二三(昭和五・一〇調)。

此地はもと最上と稱し、驛家(ウマヤ)が置かれ、出羽の主要地であつた。即ち市の繁榮となつたのは、今から千二百餘年前、天平年間大野東人霞が城を創築したこと起源し、吉野時代斯波兼頼が出羽按察使として此處に居り、子孫相繼ぎ最上を氏とし、地名を山形と改めて次第に繁榮を來し、最上義光の時に至つて最盛となり、江戸時代に入つて元和八年鳥居忠政封此處に受け、兩後保科、松平、奥平、堀田、秋元、水野などの諸大名が相次いで入部し、その城下町として榮えた。また靈地三山の参拜者が全國から集り、是等の参詣者が寒河江街道、六十里越街道を辿つて三山参拜の途についたので、その途次、山形は全く大きな宿場となつたのである。

〔旅館〕後藤屋本店(旅館町、驛一軒六、電六一・七五二、室二六、一泊三圓一七圓、④四圓)、後藤屋支店(香澄町、驛前、電二〇二、室一一) 附近に龍淵又は高湯沼と稱される周一軒一の舟遊・釣魚に適する處があり、また藏王山へは東南一二軒、山を越えて更に一二軒で宮城縣の青根・峨々温泉等に出られるが此の方面からの路は険しい。此の行程は近來スキー家によつて行はれて居る。また温泉附近にはスキーの好スロープがある。

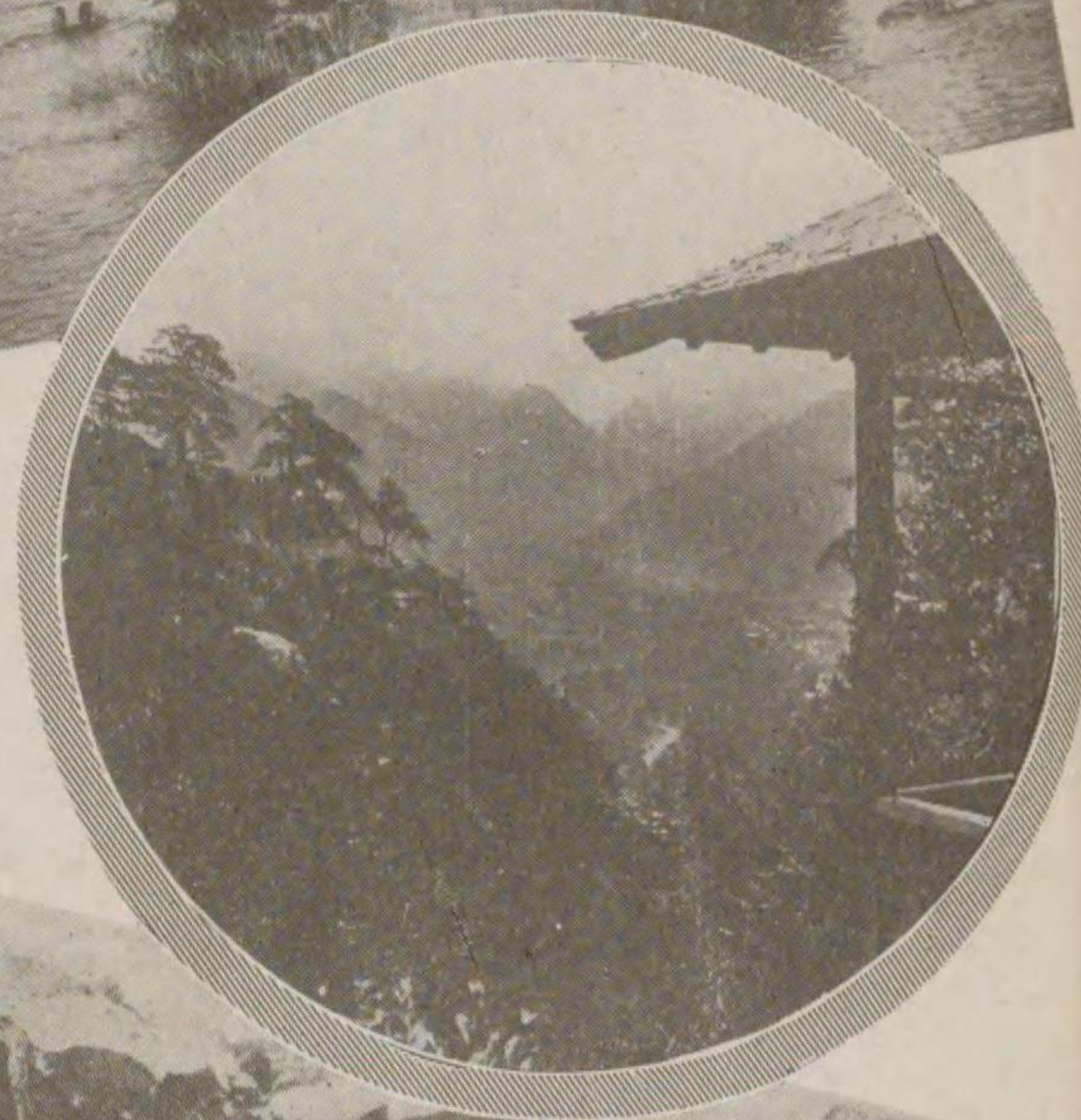
〔山寺〕山形縣東村山郡山寺村、山形驛から東北一四軒六、自動車貸切三圓。(四軒一)。  
▲奥羽本線前千歳驛から分岐する仙山西線で九軒二、山形から三等二四鐘(四軒一)。

天童驛から東南九軒餘、自動車二七分、乗合二五鐘、一日五回、貸切二圓半。俗に云ふ山寺とは寶珠山立石寺を中心とする上下約三〇軒に及ぶ一帯の奇勝を意味するもので、群巒の中にあつて立谷川の溪流が第三紀凝灰岩に浸蝕作用をなして奇岩の勝景を作つて居るもので、殊に高さ三〇米餘の天狗岩の如きは、恰も一大石柱を建てたるが如き奇觀を呈して居る。秋季紅葉の頃は風景が極めてよい。溪流の狭くなつた所に山寺の部落があり、立石寺は川の北岸に聳ゆる寶珠山の山腹にある。寺は貞觀二年(紀元一五二〇年)慈覺大師が清和天皇の勅願により草建せられたもので、古來比叡山の別院として東北に於ける天台宗の大寺院である。境内極めて廣く、河流に沿ふ對面石は慈覺大師が狩人警司と會見した古蹟と傳へ、其處から人家の間を東に進んで登山口から左に向つて登ると根本中堂がある。天正年間、斯波兼頼の再建で、桁行五間、梁間五間、高さ一八米の單層入母屋造柿葺、桃山式特徴を多少現はして居るが全體として粗大な建築で、今特別保護建造物となつて居る。其他清和天皇の供養塔一山の守護神として鎮座した日枝神社、念佛堂、鐘樓、姥堂、觀明院、性相院金乘院、釋迦堂、中性院、最上義光の靈屋があり、更に麓から約一軒登つた所に奥の院がある。此處には傳教大師が支那天台山から傳へて比叡山の根本中堂に點じた燈火を移して常燈として居る。〔山寺見物案内料〕三人迄五〇鐘。山寺から東北一二軒、山角をよぎ、所謂四十八瀧に沿ふて登つた所に面白山がある。山は宮城縣の境上に聳え、海拔一、二〇四米、金山輝石安山岩から成つて居る。此處に至る間紅葉川の溪谷には材木石其他奇岩が多く、長さ四五米、高さ二〇米の天然石橋などがある。

〔山寺の旅館〕山寺ホテル(室八、一圓半、二圓半)、高砂屋(室五、一圓一、一圓八〇鐘)、米澤屋(室六、同上)、藤屋(室七、同上)、晝食七五鐘、一圓。  
〔天童温泉〕山形縣東村山郡津山村、前記山寺から八軒半、自動車乗合二五



(中) 山寺  
(本文一九三頁)



秋(下) 田名物の露

奥羽線に沿ふて (大沼の浮島・抱返り・夏瀬・田澤湖)

鏡、貸切二圓半、徒歩二時間。天童驛から七〇〇米、自動車乗合一〇鏡(列車毎貸切五〇鏡。天童町はもと織田氏の城下で、町の南にある愛宕山には城址縣社愛宕神社及織田信長を祀る縣社建勳神社がある。町は將棋の駒の産地として名高く、年産五萬二千圓に及ぶと云ふ。温泉は灌漑用の水を得んとして発見したと云ふ新温泉で、鹽類泉、溫度四六度、神經痛・婦人病・痔・ヒステリ等々に効があると云ふ。

【旅館】天童ホテル(電天童七〇、室一五、一圓半—三圓、二見館(電六九、室一五、同上)、山口館(電六五、室一一、一圓—二圓半)、小關館(電一一九、室八、同上)、新庄館(電六六、室一一、同上)、寄際館(電一一九、室七、同上)、東松館(電五一、室九、同上)、其他。

【大沼の浮島】山形から分岐する左澤線左澤驛から西南一五軒、西村山郡大谷村大沼部落の東北にある指定の名勝地である。驛から七軒八の大谷迄自動車がある、賃四〇鏡、所要三〇分。

沼は第三紀層の臺地に横はり、橋南谿の「東遊記」などにも書かれて昔から有名な所で、浮島沼とも云はれ、沼の大きさは長さ(南北)二五〇米、幅一〇〇米乃至一五〇米位あり、水深は二米乃至三米で、湖底に植物の傘分解した腐泥の沈澱物があるため、常にメタンガスを發生して居る。此の沼の中に、小なるは長さ三〇〇米から大なるは長さ一米の浮島が五〇有餘浮遊し、芦の根が集結した上に植物の腐敗したものが重なり、つじ、かきつばた・山吹・藤・芦などがその上に生えて居る。太陽が昇ると氣温の變化に伴ふ湖流によつて移動して居るが、それは多く朝夕で日中は少いから之を充分に見んとするものは湖畔に近い浮島稻荷神社の宿坊で一泊しなければならぬ。

【抱返り】秋田縣仙北郡神代村、奥羽本線大曲驛から分岐する生保内線神代驛の西南三軒の抱返神社に始まり、夏瀬温泉、八木澤口を経て長内澤(オサナイザハ)口に至る間の玉川峽流の勝景で、此間清流を挾で東に廣久内嶽、西に小影山、大影山の連山兩側から押しかぶさる様に迫り、峽中奇岩峙ち、瀑布懸り、急流、深淵あり、兩側の山には松・杉・櫻・つじ、楓・檜・榎・藤などが密生し、四季のおおその趣きも見るも、特に秋季の紅葉が絶佳である。峽中には巫女岩・鞍掛松・大天岩窟・莫産岩・常願寺白糸瀧・回顧瀧・奥瀧・瞰下瀧・百尋瀧・小田巻・黒瀧・若狭の急流・大岩壁・藁倉の懸崖・長瀧などの勝

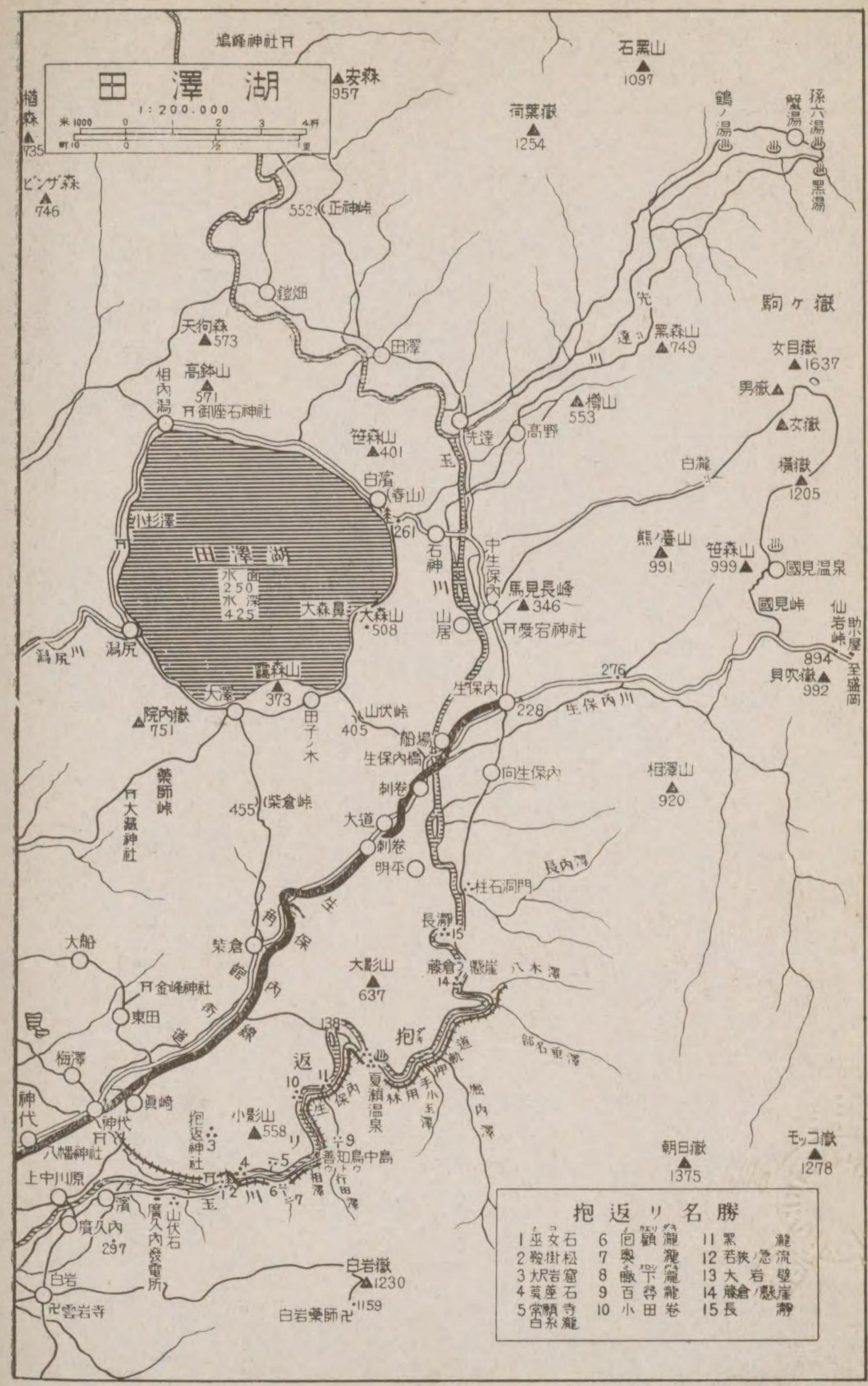
がある。  
神代驛から抱返り入口の抱返り神社迄三軒、夏瀬温泉迄一〇軒、八木澤口迄一四軒、徒歩四時間(此間林間軌道の手押トロがあり、日曜祭日には特に許可を得て便乗することが出来る。トロは無料であるが手押人夫賃として一人に付一圓位を要する)。八木澤から長内澤口を経て柱石トンネルを過ぎ、生保内盆地に入り、村落の間を通過して生保内驛に出る。此間七軒、徒歩一時間半。  
【夏瀬温泉】玉川河岸の自然石の間に浴場を設けられた甚だ原始的な温泉場で、泉質はアルカリ性鹽類泉、皮膚病・胃腸病・婦人病・リウマチス・眼病等に効がある。

【旅館】北田屋 一泊一圓半—二圓半、晝食五〇鏡、以上自炊制を主とする。  
**田澤湖** 奥羽本線大曲驛から分岐する生保内線生保内驛から田澤湖(畔(春山)まで西北六軒、夏季中列車に接続して乗合自動車がある、片道四〇鏡、所要三〇分、賃切三圓二〇鏡。

【田澤湖畔(春山)の旅館】蓬萊館、湖心亭、一泊一圓半、二圓、三圓、晝食一圓。

田澤湖は生保内村の西方に位し、海拔二五〇米に水を湛へ、様湖又は辰子湯の雅名がある。その面積二四・六九方軒餘で、餘り大であるとは云へないが、その深度は四二五米に達し、本邦では第一の深湖で、湖底は海面下一七五米に位し、これと同じ深さの海底は日本海の岸より五〇軒以上の沖合にあると云ふ。湖岸線は二〇軒に達せず、また長徑(東西)六、〇三六米、短徑(南北)六、〇〇〇米で殆んど圓形をなして居る。従つて湖畔に變化は少いが、しかし原始的樹林を控へて居るので、明るい水面にも拘らず幽邃な氣が溢れ、峯巒四周を繞る中に駒ヶ嶽の秀峯を東方に、湖上の勝景は實に幽邃そのものである。

湖盆は湖岸から直ちに深くなり、湖底は平坦で、之を切断して見ると度々桶を眞直に二つに割つた様な形をして居る。次に湖盆を涵養する受水區域は極めて小である爲、注入川の主なものがないから湖底に高水のある事を證す



るもので、満々と湛へられた水は西南岸に排水口を求めて瀧尻川となり、檜木内川に合し、玉川に入り、末は御物川となって日本海に注いで居る。湖の水色は非常に美しい瑠璃色を呈し、その鮮麗なること天下に比なく、實にフォーレル水色標準液の第一號に相當し、従つて透明度も世界一を以て誇るに足るので、秋季の最も清澄な時は三九米に及び、深度一〇〇米附近まで光線が到達して居ると云ふ。(十和田湖は七八米餘)

〔湖上舟遊〕湖畔香山(白濱)からモーターボートで湖上を一周することが出来る。料金一人一圓半、但最低料金は三人分とす。對岸瀧尻へ直行一圓。香山附近の湖岸には石英粗面岩の分解に依つて生じた石英質の砂が堆積して極めて美しいので此處を白濱とも云つて居る。背後に笹森山(海拔四〇一米)がある西に進めば右手東北八村にある荷葉岳(一、二五四米)の火山、その左に玉川の谷を隔て、高森(七九六米)が仰がれる。湖の北隅に進めば高鉢山(五七一米)の麓、湖岸に大樹の繁るあたりに近く、水中僅かの深さに灰白色を呈する一大凝灰岩の岩盤が長く湖中に突出して小半島状になつた處がある。之を御座の石と云ふ。其邊縁は直立の大絶壁をなし、其高さ殆ど四〇〇米に近く、紺碧の水が神秘的に湛へ、俯瞰するに心魂を寒からしめる。勢上平坦水際に鳥居があり、陸上木立の中に御座石神社がある。神社の傍には延命水と云ふ極めて冷かな清水の滾々と湧出して居る所がある。湖の西北隅に相内瀧の部落がある。

**田澤湖遊覽日程案** (東京から四日)

遊覽の好期——五月から一〇月末まで……新緑と紅葉の候最も佳

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發後 一〇〇〇	青森行二、三等急行 車中一泊	▲上野—大曲間一二時間四五分(五一九料一)、三等急行料一圓 ▲大曲—神代間五三分(二二料八)、上野—神代間三等五圓八五錢 ▲神代驛カラ抱返り入口ノ抱返り神社迄三料、夏瀨温泉迄一〇料、八木澤口迄一四料、徒歩四時間 (此間林間軌道ノ手押トロガア
第2日	大曲驛	着前 一〇〇〇 發前 一一〇〇 着後 一二〇〇	生保内線ニ乗換 生保内行列車 下 車	
第3日	神代驛	着前 一〇〇〇 發前 一一〇〇 着後 一二〇〇		

奥羽線に沿ふて (田澤湖遊覽日程案)





男鹿半島

▲秋田から船川ゆき列車により(奥羽線追分驛から分岐する船川線の終點)約一時間二〇分(三九六、片道六三錢(三等車のみ))。船川からモーター船を賃して半島を半周して大棧橋に至り引返すのが普通である。

男鹿半島は、秋田市の北方、日本海上に突出する一大半島で東西約二八軒、南北約二〇軒あり、半島の大部分には寒風山脈を載いて居る。東部、即ち頸部に當る部分には日本第二の大湖八郎湯を擁して居る。

寒風山脈は半島の南端に眞山及本山を越して北走し、北端に寒風山を時たしめて日本海に没して南・西・北麓は直ちに日本海の波濤に洗はれて居る。従つて是等の海岸は景の單調を破つて奥羽線中最も景色の雄大なところで、奇岩怪石に富み奇觀の極みを呈して居る。殊に南・西岸は二〇米乃至三〇〇米に及ぶ海蝕段丘の著しい發達を見せ居る處である。即ち船川・門前間は最も急峻な傾斜をなす所でその雄渾壯大は、世に松島を笑ふが如く、象潟を怨むが如く、男鹿を怒るが如しなどと讚美して「島めぐり」の興に輕舟を走らせるものが多い。

男鹿半島は、之を地質學上から見れば、海中から隆起して先づ島となり、次第に隆起すると共に其高さ及廣さを増し、同時に北方に於ては能代川、南方には雄物川が盛に砂を吐き出して砂堤を造つたので遂に本土と結び付いて半島となり、兩川砂堤の中間には海跡湖八郎湯を残すに至つたものであると云ふ。海中から隆起して島が出来た證據として、男鹿には海蝕段丘の發達が實に著しいものがある。即ち東北及東南部は前記の如く二條の砂堤に因つて陸地に結び付けられた部分であるが、現に日本海に接して居る處、殊に西部山地區域は隆起の最も著しかった處であるから、二〇米乃至三〇〇米に及ぶ海蝕段丘

稱し龍ヶ島、蒼雀ヶ島と共に男鹿の三大偉觀とされて居る。普通は此處で船川に引返す。

大棧橋から更に進んで二軒許り、小棧橋、支島、黒島、立島、蓮華島、豊島等を経て加茂に着く。此處から更に舟で二軒許りゆけば湯ノ濱温泉がある。温泉は海濱の岩石を積んで浴槽としたもので療養本位の旅館が二軒あり。此處に上陸して北進すれば約二軒で戸賀灣の見える所に達し、近くに三ノ目瀨を見下し、右方遠く二ノ目瀨を見、直下に楢圓形の一方の缺けた戸賀灣が眺められその北岸に戸賀の部落がある。加茂から戸賀迄七軒、旅館戸賀館がある。戸賀から陸上東方四軒に湯本温泉がある。道路急坂にて不良、自動車貸切一圓半、乗合は不定期にて、三〇錢。

▲湯本温泉(秋田縣南秋田郡北浦町)は大同年間田村將軍の發見と傳へ、炭酸石灰泉で三二度強、神經衰弱・リウマチス・婦人病・眼病等に効がある。

▲旅館 鴨神館(室六、一泊一圓半)、大淵館の二軒。

湯本温泉から約四軒で男鹿半島の北岸にある北浦町に出(乗合二〇錢、一日五回)そこから更に一軒八で船川線羽立驛に出る。(湯本一羽立驛間、一時間二〇分、賃一圓、一日五回、貸切五圓)。

【船川】男鹿半島の南岸に位し、冬季の西北北越風を避け、安全に碇泊するには最も理想的の港とされて居る。  
【旅館】諸井(船川二八、驛前、室二〇、一泊一圓半)三圓、普通團體收容九〇人位)、泉(電同二三、室一〇、一泊同上)、小林(電同五七、室七、一泊同上)、小玉(電二一、同上)、森長(電五〇、同上)、龜松(電四八、同上)。  
【男鹿のナマハゲ】また生剝とも云はれる珍らしい風習で、今は僅かに男鹿の西北隅に残つて居るに過ぎない。それは正月一五日の夕刻から鬼に假装した若者が各戸を訪問し、先づ戸外で奇聲を發して呼ばば、その家の主人は羽折袴の正装で之を迎へる。すると鬼は先づ神棚に向つて禮拜し、直ちに獨特の作法によつて足ふみならして躍りながら室々々を悉く廻つて歩く。此の際もし鬼が勢に乗じて家具や建物を破損する事ある時には、その家では反つて之を幸運として喜ぶと云ふ事である。この間に座敷には酒と餅とを供して鬼を鄭重にもてなす。鬼は酒を呑み、餅を從者に擔はせて次の家にゆくのである。鬼の服装や携帶品は村々により一定して居ない、即ち或る村では鐵をもち、或る所では鉋丁を携へ、または金棒を持つと云つた風である。鬼の數も夫婦二

の著しい發達を見せて居る。その船川、門前間は最も急峻な傾斜をなす處で、絶壁をなして海に下つて居る處も少くない。その絶壁の下には海蝕洞穴や、天然橋や岩島が澤山あつて、謂所男鹿の島巡りの勝地とされて居る處である。此の西海岸に露出する岩石は第三紀の下部(舊成統)に屬する双六火山砕片岩類であつて、その中には凝灰岩あり、集塊岩あり、安山岩あり、また之を貫く玄武岩脈あり、柱長岩脈などありて、岩石の種類が頗る多く、従つて島の形や色が千差萬別で、一つ一つ別の鬼神の手に成つたかと思はれる程實に變化に富んで居る。

【島めぐり】半島の南・西岸は前述の如く二〇米乃至三〇〇米の海蝕段丘をなして斷崖直ちに海に枕み、陸上は寒風山脈重疊して交通機關を欠くため、男鹿の探勝には海上風波の靜かなる日を撰んで發動機船を走らせるのである。その普通のコースは船川から海上約一八軒の「大棧橋」の勝又は二〇軒の加茂迄を往復するのである。

船賃一人三圓、二人一七人位迄八圓位、一五人位迄一五圓位、二〇人位迄二〇圓位で以上一人増毎に一圓増位、乗合は無い。

「註」右の船賃は確定のものではなく、その時の人數、天候その他の状況によりその都度當業者間によつて取極められるものである。

所要時間 往復四時間位(大棧橋往復)。

船川からモーターボートに依り半島の南岸に沿つて船川、女川の部落を過ぎ龍ヶ島、龍ヶ島、金ヶ島を経て楢の部落に至れば能登山と云ふ丘があり金山椿で掩はれた花季には美觀を呈する。龍ヶ島に御前落しの懸崖を眺め、双六灣に入り小瀨の部落を過ぎれば巨大な帆掛島を仰ぐ。その左には鹽瀨崎が突出し、附近に幾多の奇岩が散在して雄大な風景を見せて居る。その次の部落は門前で、北四軒に本山の赤城神社がある。これを過ぎて半島の西南端に出ると高さ二〇米ばかりの龍ヶ島がありそれから幾多の奇岩を眺めて北に進めば深さ四〇米ばかりの蒼雀ヶ島があり、やがて巨大な石門を船で渡る。これを大棧橋と

匹の所、子鬼を加へて三四の所、更に青鬼夫婦を加へて五四の所もある。本來は五四のもので、本山の傳説から來たものと云ふ。その傳説によれば昔支那から漢の武帝が五四の鬼を引き連れて本山に渡來し、その鬼共は平素は武帝のためにあらゆる苦役に従事したが、正月一五日は村里に出て、彼等の怨ずるものを何でも自由に探し求める事を許されて居たと云ふ事である。今それ等の鬼を祀つてある祠五社堂が本山の登山口門前部落にある。

【八郎湯】男鹿半島の頸部に位する大湖で、東西二軒半、南北二軒、周圍八軒の楢圓形を呈し、面積二二一平方軒を占め、琵琶湖の約三分の一に當り全國第二の大湖であるが、潟湖としては日本隨一のものである。然し其の深度は極めて小であつて最大四米半に過ぎぬ。此の湖は前記の如く、もと男鹿島との中間に挟まれた日本海の一部であつたが、長い年月の間に東北及東南の兩方面に二本の砂嘴が發達して、遂に其中に取殘されて生じた海跡湖で、大小二〇餘川に注ぎ、長さ二四〇間の八郎橋架る處に日本海に通じて居る。湖水は淡水湖で、南部に於ては海水を混じて多少鹹味を帯びて居るが、此の地方に於ける淡水漁業の豊庫であつて、殆ど四季を通じて漁獲がある。殊に冬期水上漁業は、其漁具及漁法が獨特なので有名である。魚族はわかさぎ、こりばら、ふな、えび等。結氷期は一月下旬になれば湖畔の浅い處に薄氷が張り一月下旬には全湖面が凍結し、湖上人馬が通れる。解氷は二月下旬に始まり三月中旬には全く融ける。

【寒風山】偏心二重式構造を有し、山頂圓形をなし長く緩かな裾野を曳いて居る。登山は船川線船本驛から西北三軒で、往復徒歩三時間を要する。頂上には二個の火口跡があり、舊火口は北に、新火口はその南部の火口壁を破つて生じたもので、火口底の中央から西に偏して小さな沼がある。山頂から四方を眺めれば「パノラマ的風景」は此の山獨特のもので、先づ東南を望めば船本船越間に發達する砂丘の列、拂戸村附近の舊湖底に取殘された多數の水溜りを前景としてその向に八郎湯を眺め、東北に轉すれば若い堆積海岸の緩かな曲線と、八郎湖岸の鯉齒状の線とが互に背中合せとなつて奇觀を見せ、西北には美しい曲線を描く壯年期の海岸線、西方には男鹿の最高峯本山の圓頂丘を中央にして其右に眞山、左に毛無山の丸い流紋岩の火山が、何れも杉の天然林に包まれて翠巒を描き、其の前方から西南にかけて段丘に削られた傾斜地があり實に變化の多い眺めである。

秋田市

上野・高崎・長岡・秋田間急行一三時間四分五七〇秒(八)、上野・高崎・長岡・秋田間急行一三時間五十分五八六秒(八)、三等五時間九七秒。

秋田市は雄物川下流の秋田平野に位し、その支流旭川は市内を貫流し、東南は雄物川河谷に連り、西北に近く土崎港を控へて居る。羽越本線の開通に依り物資の集散愈々盛になり、現に石油業、製材業の一中心をなし、人口五一、〇七〇(昭和五年十月國勢調査)を算し、縣廳の外市役所、旅團司令部、歩兵第一七聯隊、地方裁判所及釧山専門學校等がある。市街は旭川に依つて東西に區分され、東を外町と稱し、西を内町と稱し、西を内町と稱し、舊藩時代の武家町で、官公廳、學校などがある。

此地はもと久保田(蓬田)と稱し、今から約千二百年前、即ち聖武天皇天平五年二月(紀元一三九三年)の秋田城設置に初まるものである。秋田城は秋田縣の西北四軒半、土崎縣の東南三軒、今の寺内村(當時の秋田村)高清水間にあり、其の頃は此處が蝦夷國と日本國との國境に當り、國防の爲出羽の柵を今の庄内地方から此處に移して設けられたもので、城は寺内村丘陵の北半を占め、東西、南北共に一軒餘に及ぶ大規模な城廓であつた。天平實字の頃城廓整備し國府また次いで此處に移されたが、永承五年(紀元一七一〇年)初めて秋田城介を任命した。しかし次第に蝦夷の勢力が北方に衰退するに従ひ城も次第に荒廢した。慶長七年(紀元一六二二年)秋田氏が常陸赤松に封を移し、佐竹義宣代りて領した時は城は全く荒れ果て居たので、翌年約六軒南なる久保田郷の神明山(今の千秋公園)に城を築き、二〇萬石を食て爾來二七〇年間子孫相繼ぎて明治維新に至る迄此處に居住したので、秋田の城下町は此の城を中心として發達したものである。

〔秋田市内の主なる旅館〕 小林(電秋田一五、驛へ約九百米、土手長町、室二四、一泊二圓、三圓、四圓半、③三圓六〇錢)、石橋達摩館(電同四〇、驛へ八百米、土手長町、室二〇、一泊同上、③三圓六〇錢)、敦

館、〔蕨館〕 仙遊館、福島館、公遊館。  
▲大鶴スキー場 温泉の東南にある阿闍羅山一帯は、一二月下旬から三月中旬まで一米半乃至二米の積雪があり、雪質も優良で立派なジャムプ場があり、東北有数のスキー場として年々競技會が催される。

弘前市

上野から山形經由急行で約一七時間半(七一九秒二)、三等七時間四分、秋田から急行三時間二分(一四八秒四)、三等二時間一六秒、青森から普通列車で一時間四分(三七秒四)、三等六〇秒。

弘前市は岩木山の東南麓、津輕平野の南に位し、岩木川に臨んで居る。もと津輕氏一〇萬石の城府として發達した處であるが、慶應後大いに衰へ、のち鐵道の開通と第八師團の設置によつて漸く盛運に戻つた。市内の最も繁華なのは土手町、一番町、親方町などで、林檎、米などの集散盛んで、商況も活潑である。名産には津輕塗、木通、細工などがある。また民俗には一種の津輕氣質があつて古都の風が遺つて居る。人口四三、三三八(昭・五・一〇調)。  
〔旅館〕 齊吉(元寺町三九、驛七〇〇米、電三九、室一八)、石場(元寺町、同上、電三〇二、室一七)、竹内(中土手町、驛半軒、電二一七、室一八)、佐々木(一番町、驛七〇〇米、電三三九)、大室(木店一番町、驛七〇〇米、電二二八)、大室支店(驛前、電五三四)、以上一泊二圓乃至五圓、小堀(木町、電二一九、驛一軒、一圓八〇錢一三圓)、小山内(百石町、驛半軒、電二三四、同上)、千葉(驛前、電九一三、一泊一圓半一三圓半)、鈴木(親方町、電二二二)。  
〔遊覽順路〕 驛—代官町—土手町—物産陳列所—公園—公會堂—長勝寺—最勝院—高等學校—師團—驛。

〔市内乗合自動車〕 前六時から午後九時迄凡一〇分毎に運轉、一〇錢。  
▲弘前城址 驛の西方約二軒、慶長年中津輕信牧の築城にかゝり、爾來津輕氏累代の居城であつた。明治維新廢城ののち三の丸に陸軍兵器支廠が設けられ、本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部は公園として保存せられ、鷹揚園と稱されて居る。現在本丸・二ノ丸・三ノ丸の周濠土壁石壁などもその儘に存し、本丸址には追手門を始め東門、北門及天守閣の建物を存し、眺望に富んで居る。▲最勝院 驛の西方一軒半、市内銅屋町にある。境内に寛文年中津輕信政の建立した五重塔婆があり、國寶となつて居る。▲長勝寺 驛の西方約三軒半、市内西茂森町にある津輕氏の菩提寺で、大永年中大浦盛信の創建に係る。曹洞宗。▲第八師團師令

賀屋(電同三〇、驛へ一軒一、本町三丁目、室二三、一泊一圓八〇錢、二圓八〇錢、三圓半、③三圓)、山田(電同二二、驛へ一軒一、本町三丁目、室一六、一泊同上)、關根屋(電同六三、驛前、室一八、一泊同上)、木村(電同六九、驛前、室一一、一泊同上)等其他。

〔遊覽順路〕 秋田驛—廣小路—土手長町—物産館—大町二丁目—一丁目—上通町—廣小路—中土橋—記念館—千秋公園—手形山—平田篤胤墓—農事試験所—日吉神社—全良寺—辰官軍戰歿者墳墓—寺内村古四王神社—高清水公園—土崎港町—土崎驛。

〔名所〕 ▲千秋公園 驛の西北二二〇米、舊久保田氏の城址で、本丸、二丸及帯曲輪を範圍とし、自然の勝景を利用され、東北第一の公園と云はれて居る。此の城は慶長年間佐竹義宣が、市街の東北なる丘陵を利用して築造されたもので、園上から秋田全市が一目に見渡せる。また園内には櫻樹が多く、舊藩祖を祀る縣社秋田神社がある。▲平田篤胤墓 驛の東北二軒、手形山の西腹にある。篤胤は江戸時代の有名な國學者で、且神道家で著書百餘部に及び、安永五年秋田城下に生れ、天保一三年歿した人である。▲日吉八幡神社(縣社) 驛の西約三軒、自動車の便がある。境内廣く八橋公園となつて居る。▲古四王神社(國幣小社) 驛の西北四軒半、寺内村高清水間の舊秋田城址附近にある。▲手形山スキー場 驛の東一軒半で手形山の斜面に達する。一二月下旬から二月末迄一米内外の積雪があり、初心者の練習に適する處である。

〔名物〕 秋田蕨、諸越、葛砂糖漬、畝織、八丈織、金銀細工、羽二重等。秋田蕨は頗る大形で、大なるものは高さ三米、葉の大きき直径二米に及ぶものがあり、之を製したものに砂糖漬・菓子・ステッキ等がある。

〔大鶴・蕨館温泉〕 青森縣南津輕郡大鶴町、奥羽本線大鶴驛の東南半軒乃至一軒、自動車がある。地は古來津輕の勝地として、また歡樂郷として名高いところ、前に平川を擁し、川を隔て、南に大鶴、北に蕨館の温泉街がある。東北に楢ヶ峯、西南に甚吉森の諸山を繞らし、岩木山を西に望んで風色優れた一區をなして居る。附近の茶臼山公園は眺望が廣く、その麓に狐森のスキー場がある。温泉は弱鹽類泉で四九度内外、脂肪過多症、婦人病・リウマチス等に効がある。特色は療養並に行樂向。

〔旅館〕 大鶴(大鶴ホテル) ③三圓、加賀助 ③三圓、後藤金森、一一三三

部 驛の西南二軒、市外富田町。▲物産陳列所 驛の西一軒半、市内師團町。

〔津輕塗〕 元祿年間池田源兵衛の發明したもので、藩主の保護を受けて發達して來たもので、弘前の名産として古い歴史を有して居る。一名バカ塗とも稱し、下塗から仕上げまで三八回乃至四〇回の塗り重ねるので、色彩の優雅なものと堅牢なものと珍重されて居る。

〔林檎〕 弘前及二、に近い浪岡、川部、石川、大鶴、碓ヶ關、黒石、蕨館、板柳、陸奥鶴田各驛附近は此の地方林檎の主産地で、車窓から見渡す限り林檎が續き、年産一千二百萬圓に達し、主に東京、大阪及浦鹽、上海方面に發送されて居る。青森縣の林檎は明治七年に米國インディアナ州から米人ウオルフ・リング氏の齎せる種樹を試植したのが始めである。

〔岩木山神社〕 國幣小社。青森縣中津輕郡岩木村百澤。弘前驛の西約一三軒、自動車四五分、乗合片道五〇錢、往復八〇錢(一日三回)、貸切五人乗四圓。

岩木山の南麓にあり、宇都志國玉命(大國主命)、多都比呂賣命、宇賀能賣命を祀る。社傳によれば宗龜年中岩木山上に鎮祭せしものとひ、今も山頂に奥宮を有し、當社を下居宮といふ。津輕氏累代の崇敬篤く、社殿の莊嚴華麗なること津輕地方隨一で「奥の日光」の稱があり。樓門、拜殿は共に國寶に指定されて居る。例祭八月一日。

奥宮は此處から六軒一の岩木山頂にあり俗に御室と稱し、隔年毎に改造するものにて、舊六月二日にその奉建祭がある。また毎年七月二十五日に山開祭があり、八月一日に山納祭がある。此の二〇日間は古來御山參詣と稱し登山するものが多く七月二十九日から八月一日に至る三日間は奥宮神賑祭があるので登山者が最も多い。山頂迄約六軒一、上り三時間。

〔岩木山〕 青森縣の西部にある火山で、津輕平野の西南に位し、東から見れば美しい圓錐形を呈して富士山に似て居るので津輕富士と稱され、山頂は巖木山(北、一四五六米)、鳥海山(南、一五〇二米)、岩木山(中央、一六二五米)の三峯に岐れて居る。三峯中岩木山最も高く、舊火口の南方に偏して噴出した中央火丘で完全な圓錐形をなし、山頂には火口がなく、全山熔岩から成る塊状火山である。山頂は奇岩林立してその間に岩木山神社奥宮及休憩小舎がある。山頂からは東に八甲田の群峯を望み、東北は青森灣から淺虫海岸などが見え、北方には遙に十三湯及津輕半島の諸山を望み、西北には鯉ヶ澤方面から日本海の碧波が美しく見える。

磐越線に沿ふて(東山温泉遊覽日程案)

磐梯登山又はと東山温泉遊覽日程案

(東京から二日)  
汽車二泊、旅館一泊

11011

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發後 二・二五	郡山經由新瀉行列車 車中一泊	▲上野—郡山—會津若松間八時間〇四分(二八八軒三) 三等三圓六七錢。上記列車ニハ二等寢臺車ガアル。
第2日	上戸驛 猪苗代驛 翁島驛 會津若松驛 東山温泉	着前 六・三 着前 六・六 發後 着後 着後	猪苗代湖遊覽 下車 磐梯山登山 下車 汽 下 乘 合 自 動 車 宿 泊	▲上野—上戸間汽車七時間〇六分、三等三圓二七錢。 ▲上戸驛カラ猪苗代湖遊覽船發着所迄約半軒、上戸カラ長濱迄湖上凡一二軒、約二時間。 ▲猪苗代湖(二〇四頁参照)。自動車一〇分、乗合三〇錢、一日八往復、貸切一圓半。 ▲長濱カラ翁島驛迄五軒、五分(二軒五)。 ▲翁島—會津若松間汽車五〇分(二軒五)。 ▲長濱カラ會津若松迄貸切自動車五人乗四圓(約一六軒)。 ▲上野—猪苗代間汽車七時間二三分(二六〇軒四)三等三圓三七錢。 ▲猪苗代—梯山頂約七軒。登山案内料一圓半。 ▲猪苗代カラ登山口見様山迄列車毎ニ乗合自動車(二〇錢)ノ便アリ。 ▲歸路ハ山上カラ西南押立温泉ヲ經テ約一〇軒デ翁島驛ニ出ル。 ▲會津若松驛カラ東山温泉へ東南約五軒。 ▲自動車二五分、乗合二〇錢(列車毎)、貸切一圓二〇錢。
第3日	東山温泉 會津若松驛	發 發後 一〇・五	上野行列車 車中一泊	上記列車ニ二等寢臺車アリ 會津若松—上野七時間三五分(二八八軒三) 三等三圓六七錢。
第4日	上野驛	着前 六・二〇	歸宅	

旅行費用概算

二等 三四・九八  
三等 一五・一四

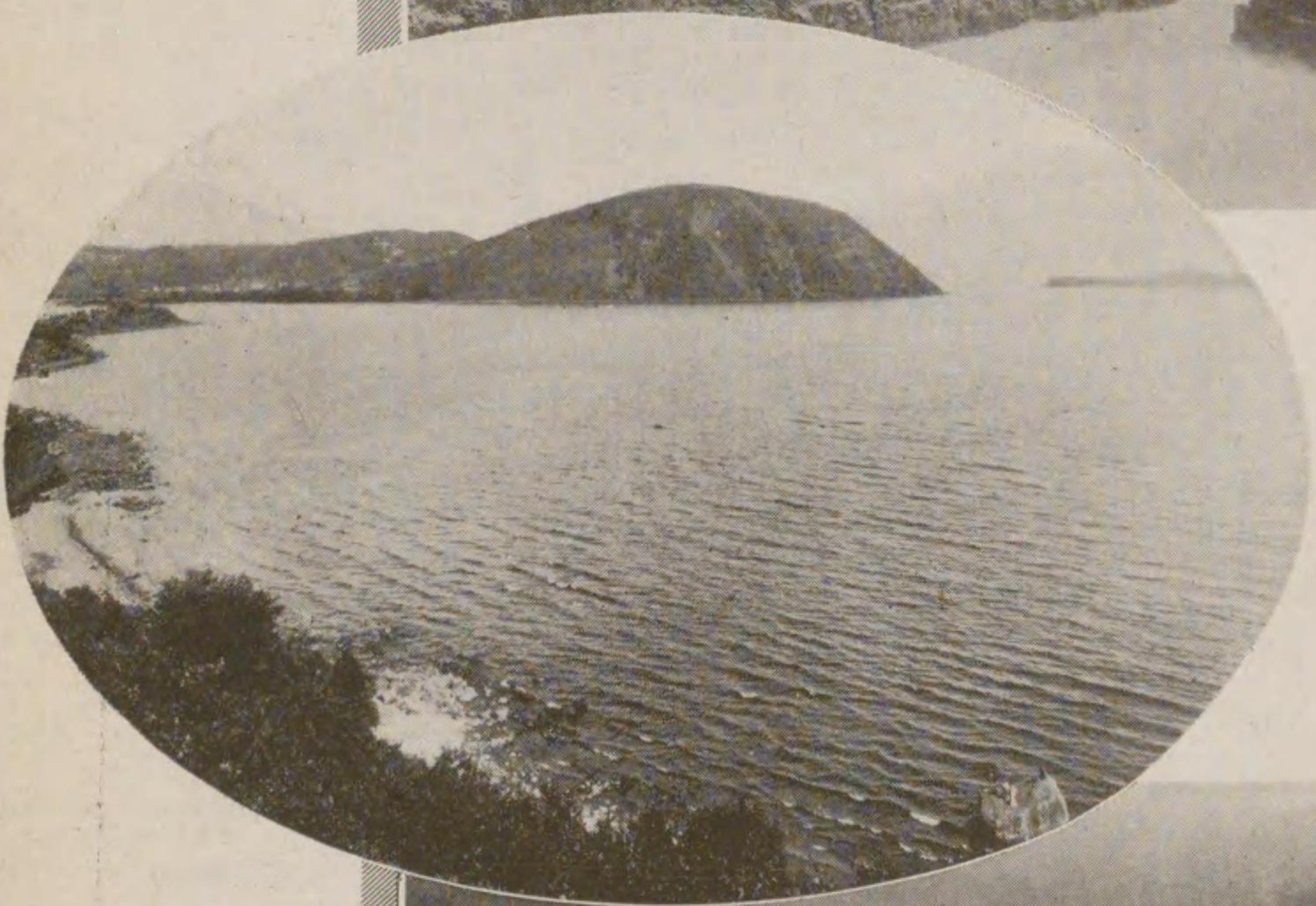
内譯

上野—會津若松間汽車往復、東山温泉自動車往復、(備考参照)及東山温泉一泊二等五圓、三等三圓半、汽車賃料二等六圓、三等四圓ヲ計上ス、シテ概算二等六圓、三等四圓ヲ計上ス

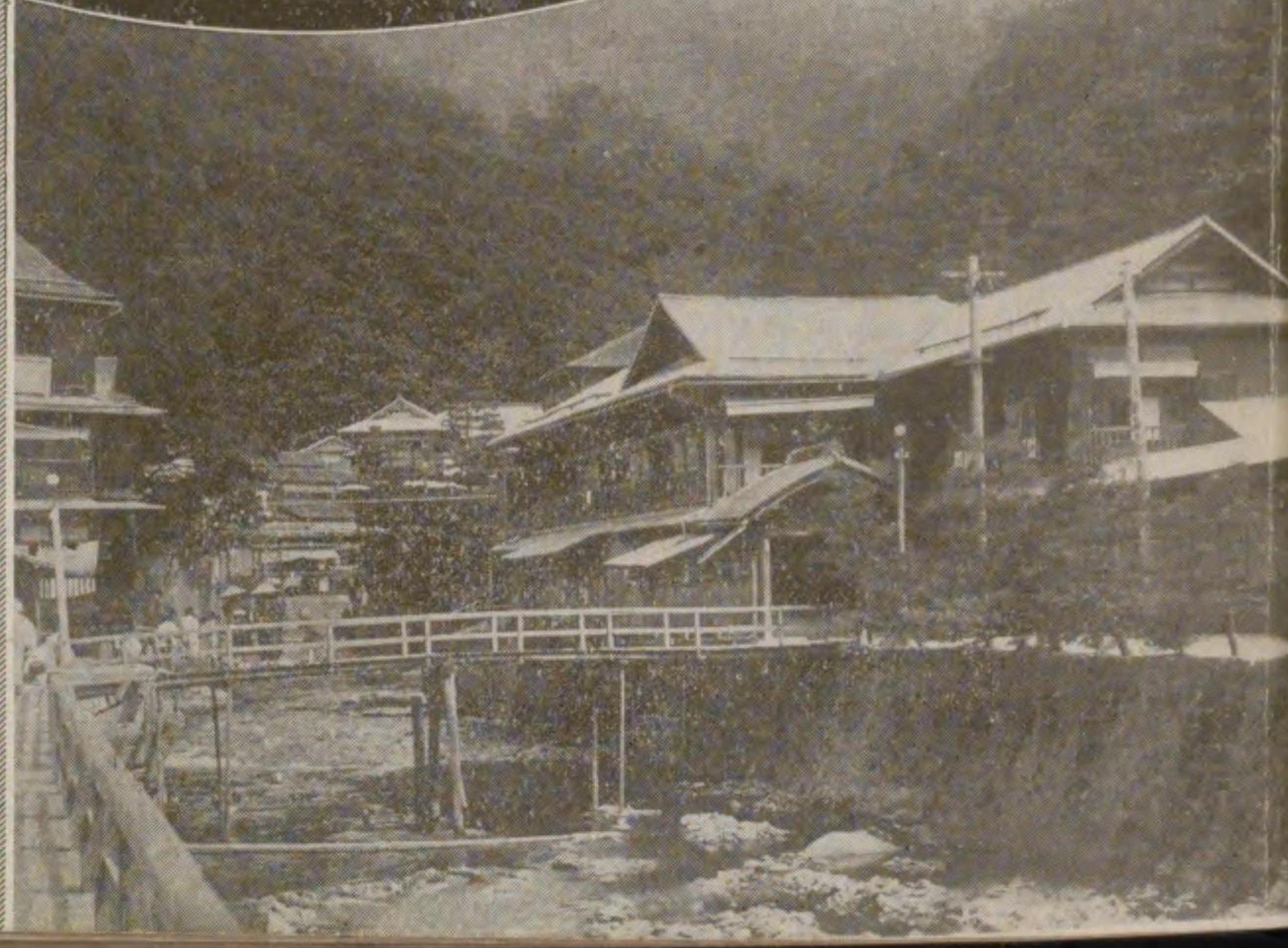
「註」右ノ外ニ猪苗代湖遊覽ノ場合ハ乗合船賃及自動車代七〇錢、磐梯登山ニハ自動車代一五錢及登山用品代ヲ要ス



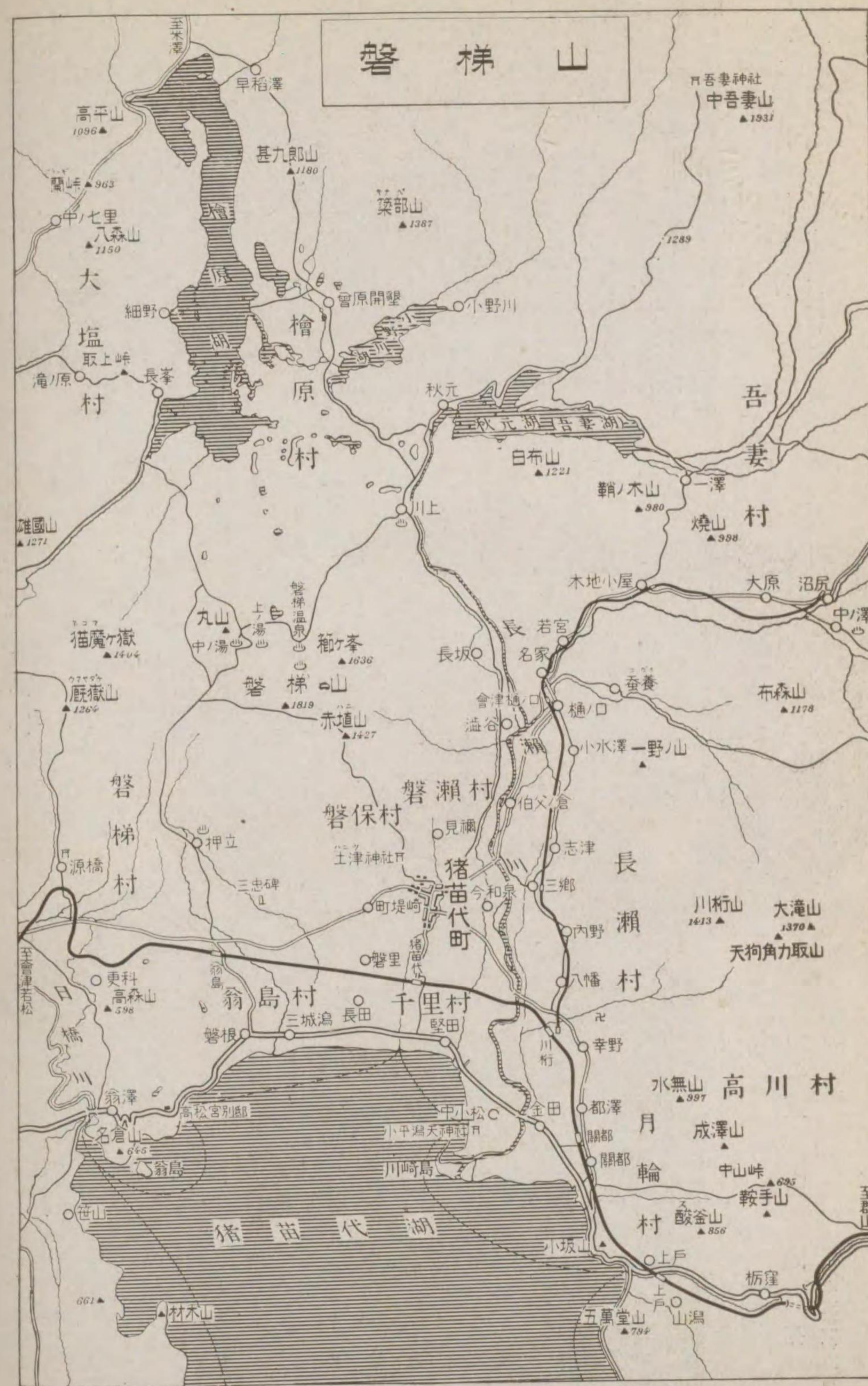
會津白虎隊の墓 (本文二〇三頁)



(中) 猪苗代湖 (本文二〇四頁)



(下) 東山温泉 (本文二〇三頁)



**東山温泉**

福島縣北會津郡東山村。  
會津若松驛から東南約五軒、自動車二分五、乗合二〇錢(列車毎)、貸切一圓二〇錢。

東山温泉は四面殆んど青巒に圍まれ西の一方纔に開けて湯川の溪流、町の中央を流れ、川を隔て、兩側に大厦高樓軒を連れ、崖に倚り水に沈んで風光の美を恣にして居る。古來有名な温泉で、奥羽三樂郷の一として四時股販を極めたる。特色は行樂向。

附近には屏風岩、雨降瀧、登仙岩、傘岩等の佳景多く、有名な白虎塚墳墓のある飯盛山も近くにある。  
泉質は無色透明の鹽類泉で、瀧ノ湯・菅ノ湯・狐ノ湯・猿湯・貉湯・漣湯・櫛ノ湯・總湯・穴湯・隅ノ湯・目洗湯等十餘口の泉源を有し、温度三八度乃至六〇度、婦人病・リウマチス・神經諸病等に效がある。

〔旅館〕新瀧(電東山三・三三、室二二、普通一泊三、四、五、七圓、④四圓半)、向瀧(電四・三四、室一五、一泊同上、④四圓)、不動瀧(電六、室本館一二、別館六、一泊同上、③三圓)、福住(電七、室一五、一泊二圓一三圓半、②二圓半)、二八屋(電八、室一二、一泊同上、②二圓)、原瀧(電二五、和室一四、洋室二、一泊同上③三圓)、天龜(電一〇、室一一、一泊同上)、有馬屋(電一、室一二、一泊同上)、山水館(電三五、室一〇、一泊同上)、高橋館(電一四、室八、一泊同上)、寶屋(電一七、樹屋(電二)、古瀧(電一三)、瀧見屋(電二三)、玉ノ湯(電五)、目洗湯(電三五)、惣湯(電一一)、近江屋(電なし)、刃(電一八)以上一泊一圓半乃至二圓半。  
〔若松市〕人口四三、七三二(昭和五・一〇調)、會津盆地の東南に位し、城下町として發達した處で、史蹟が多い。此處は會津藩の本場で、其製造が盛に行

磐越線に沿ふて(東山温泉・若松市)

はれ、大町、七日町、榮町は商業地區として賑はつて居る。

市はもと黒川と稱し、至徳元年(紀元二〇四四年)芦名直盛が築城以來、子孫相傳いで據つたが、天正一七年六月(紀元二二四九年)伊達政宗のために攻略せられ、翌年豊臣秀吉は之を收めて蒲生氏郷に與へ、氏郷が更に規模を改めて若松城と改稱した。慶長三年(二二五八年)上杉景勝之に代り、石田三成と策應して徳川家康を除かんと圖つたが、關ヶ原の敗戦のため志を遂げず、同五年米澤に移され蒲生秀行が復封した。寛永年中には加藤嘉明が此處に據り、後山形の保科正之が入國して以來會津藩の城下として、設置を極めた。明治維新の際藩主容保が幕府の恢復を策し賊名を受けて官軍の攻伐する處となり、城陥り、市街悉く灰燼となつたが、後次第に恢復して今日に至つたのである。

〔旅館〕清水屋(榮町一丁目、驛から二軒、電三四、一泊二圓半一六圓)、たはこ屋(驛牛軒、電七七六、一圓一圓二圓)、森川(二ノ町、驛一軒三、電五五一圓半一三圓)、玉川(大町、電一五二)等。

〔土産物〕五郎兵衛餡、柿羊羹、會津豆、白虎飴、漆器、漆蠟燭、白虎人形等。  
▲會津塗 古來有名なもので、その特色とする處は豆柿から搾取した漆に漆液を加へて下地として居るため、堅牢で耐久性を有することである。  
〔名所〕▲若松城址 驛の南方約二軒、乗合自動車八錢(凡三〇分毎)鶴ヶ城とも稱し内廓の大部分即ち本丸、帶郭、北出丸、西出丸などの濠、石垣、石塔、城門址など整然として遺存し殊に太鼓門の石垣、天守の宏壯な石壁を始め、本丸内には大書院、小書院、茶室などの礎礎、庭石を存し、尙よく全國屈指の名城たりし當年の規模をうかがふ事が出来る。▲山鹿藩行跡生地碑 驛の南約二軒市内榮町一之丁通の南側にある。素行は江戸時代初期の有名な軍學者で、殊に山鹿流兵法の創始者として知られた人である。碑は大正一五年に自然石で建てられ、一の玉垣を結んである。▲蒲生氏郷墓 驛の南一軒半、市内榮町興徳寺境内本堂の後方に位し、方形の積石塚で、上に五輪塔を建て、ある。氏郷は織田、豊臣二氏に仕へ、天正年中奥羽の守護に任じ、百二十萬石を領して此地に據り、勇名を馳せ、文祿四年(二二五五年)二月七日京都に於て卒去し、紫野の大徳寺に葬られたが、此地は舊領地なので、分骨を納めた所である。▲白虎塚墓 驛の東三軒、乗合自動車一〇錢(一日六回)市外一箕村、飯盛山の中腹會津盆地市街を見下して眺望のよい所にある。明治元年戊辰の役に死力を盡して官軍に抗した會津藩士が朱雀、青龍、玄武、白虎の四隊を編成して戦つた

時、一五歳から一七歳までの少年が白虎隊となり八月二三日死を決して戦つたが利あらずして隊士多く死傷し、城の陥落も且夕に迫つた。此時僅かに残つた一九人の少年等は、瀧澤村の戦場から引返し城中降服の議有るを聞いて、激越の情禁する能はず、若松を距る東二軒餘、飯盛山に登り城を拜して自刃し悲愴の最期を遂げた處である。昭和三年、伊國の鐵腕宰相ムツリニ氏が深く少年等の義に感じ寄贈されたと云ふ記念碑が建てられて居る。「武士の赤き心を秋ごとに、紅葉に見する飯盛の山」小川清胤。▲榮螺堂 驛の東三軒、前記飯盛山麓、白虎隊墓に至る途中にある。圓通三匠堂と稱し、六角形三層樓で高さ一六米、旋回して昇降段を附けたのが螺殼に似るので、俗に「サマエ堂」と云ふ。

**猪苗代湖** 磐梯山の南麓に一〇三方軒の水面を開いて居る本邦第四位の大湖で(琵琶湖、八郎湯、霞ヶ浦に次ぐ)東西一六軒、南北一八軒。然し湖岸線に於ては其面積十分の一にも充たぬ磐梯山北の堰止湖檜原湖(面積は一〇方キ口餘、湖周四七軒餘)より僅かに九軒程長いと云ふに過ぎぬ。即ち湖岸線に變化の少いことを示すものである。されど四周概ね山を繞らし、北方の磐梯山はその姿を湖水に浸し、南方からの眺望がよい。湖面は十和田湖を抜くこと一

一三軒の海拔五一四米あり、湖盆はその南部と、北東部長瀬川の注入口から長濱に向つて居る區域とに緩斜面を見るのみで、その他は一般に急斜して湖心に向つて居る。そして最深點は中央部より少し南に偏し、一〇二米に達して居る。水温は温帯湖の標式をとるが、水面の大なること、冬季の風力強さが爲、全面の凍結を見ることはない。湖岸各所には特に寒冷なる冬季には一部分の凍結はあるが、それとも長期間に亘ることはない。水色は四一五號附近で、藍色湖の最も低級な部に屬し、透明度は普通一二米内外である。猪苗代湖は、その東方に望んで南北に横く川桁山の西斜面と、之に對して湖

の西縁の赤井谷地を瞰下す背負山の東斜面の地盤に挟まれ、その中間に長溝状をなして陥没した部分に、北方猫魔、磐梯の兩火山の噴出岩が地溝の北側を埋めた結果初めて生じた大湖であると云ひ、その注入河長瀬川は上流にある沼尻硫黄鑛山から悪質の水を齎し來るので、注入河口附近即ち湖の北岸の水は南岸の水に比して水中に含まれて居る硫化物の量が多く、南岸よりも北岸は流濁が少いと云ふ。

〔湖上遊覽〕

▲磐越西線上戸驛から猪苗代湖遊覽船發着所迄約半軒、上戸から長濱迄湖上凡一二軒、遊覽船約二時間貸切(五〇人又は八〇人)大體一〇人迄は一五圓、二〇人造二〇圓、三〇人造二五圓、五〇人造三〇圓位で人員と廻り方に依て異なる。

**磐梯山** 猪苗代湖の北方に秀峰高く聳ゆる會津の名山で、その輪廓富士山に似て居るので一に會津富士の名がある。その南側及東側には長く裾野を曳き、山上には沼の平の舊火口と爆裂火口とがある。沼の平は北に櫛ヶ峰、東南に赤埴山、西南に大磐梯山を圍らし、大磐梯山は海拔一、八一九米に達し最高點をなして居る。爆裂火口は沼の平の西北に位し、もと小磐梯山のあつた所である。明治二一年七月一五日朝七時頃から突如静寂を破つて轟々たる鳴音あり、續いて猛烈な地震起り、七時四五分小磐梯は爆裂して去大爆音と共に一條の黒煙天に沖し小磐梯の一角を爆散し去

つて生じたもので、一大泥流これと同時に谷を襲ひ(泥流の奔下する速度は一時間約七六八軒の速さであつたと云ふから、勿論避難するなどの餘地がなかつたと云ふ)瞬時にして數個の村落と四六一人の人命とを熱灰泥土の下に埋めた跡である。火口は北に開いた蹄鐵状をなし、東南西の三面は約五百米の懸崖をなし、今は再び火口の中に温泉場を設けられてある。當時飛散した灰泥は北西の溪谷を埋め、流水を堰き止めて原、小野川、秋元の三湖その他數多の池沼を作つたが、之等の地も亦その頃迄人家のあつた所である。

〔登路〕▲磐梯山登山路は東口、西口、北口の三つあり、東口(猪苗代から登る)は道程最も近く亦登山容易で指道標も完備して居り案内者の要がない。途上に土津神社、天の庭、赤埴山、沼ノ平の舊噴火口、弘法清水等の名所がある。磐越西線 猪苗代驛—磐梯山頂約七軒。

驛(三軒、此間殆平垣)—土津神社(夫から坂路となつて馬返を過ぎると急坂となり約三軒にて一合目の天の庭に達し、更に約一軒で海拔一四二七米の赤埴山に達す。此處は二合目と云はれ前面に大磐梯の山容が美しく眺められる)一二合目(一軒七)—三合目(〇軒六、天狗岩がある)—四合目(弘法清水があつて良い休場となつて居る。夫から道は峻しく胸突坂と云ふ處がある、約六百米)—一合目(五合目即ち山頂には磐梯明神の石祠がある)

▲一合目(五合目)即ち山頂には磐梯明神の石祠がある。全部猪苗代町にて用意するを要す。四合目に弘法清水あり。歸路は山上から西南押立温泉を経て約七軒半で翁島驛に出る。又猛烈火口を経て約六軒半で川上温泉に出る。山頂の眺望は實に此の山獨特のもので、南方には猪苗代湖が鏡の如に美しく輝き、之を圍んだ山々の末には那須、高原の山々も見え、また北方の目の下には巨神の大顎のやうに北に開いた一大火口の環壁が連り、その奥深く只累々たる崩岩のみなたに檜原、秋元、小野川の三湖が、吾妻連山の谷々に深く霞で居る。

〔猪苗代町の旅館〕山本(電猪苗代一七)、伊勢屋(電一〇)、江戸龜(電二八)奥田屋(電三〇)、山口屋(電二四)、一泊一圓二〇錢、一圓半、二圓。

磐越線に沿ふて (檜原三湖・磐梯温泉・押立温泉・熱海温泉)

〔磐梯山北麓の堰止湖〕 磐梯山の北麓に多數散在して居る檜原、小野川、秋元の三湖を始め其他群小の沼池は、明治二一年小磐梯山の爆散に依る泥流が溪水を堰止めて生じたもので、何れも狭長な水面を成し、また湖中には幾多の島嶼(流れ山)が散在して他にその類を見ぬ風景美を見せて居る。檜原湖はその内最も大なるもので、最深水三〇米、面積一〇方軒餘であるが湖周四七軒餘に達し、その面積に於て猪苗代湖の十分の一に過ぎぬが、湖周は出入の變化に富み猪苗代湖の夫より僅かに九軒許り短いのみである。

〔龜ヶ城址〕 猪苗代驛の北方約二軒。猪苗代町にあり、自動車の便がある。城は鎌倉時代に佐原經連が築城した處で、天正以後は會津若松の支城として蒲生氏以後歴代の藩主が何れも城代を置いて會津の東門を扼して居たが、明治戊辰の役に城廓全部を焼失し、今公園地となり、櫻の名所(福島縣十ヶ所の内)となつて居る。西北に磐梯山の秀峯を仰ぎ、その裾野には伊達氏と齊名氏の戦つた檜原古戦場の東端が見え、南方は近く猪苗代湖を望み風光の美に富んで居る。

〔磐梯温泉〕 耶麻郡磐梯村、翁島驛から北八軒、道路峻しく徒歩三時間を要する、又は後記川上温泉からゆく四軒の道もある。地は海拔一、二〇〇米、磐梯山の北山腹、爆裂火口の中にあり、猪苗代湖を始め會津盆地、檜原三湖等の眺望が絶佳である。温泉は含鐵硫黄線で、一〇〇度、胃腸病・性病に効がある。

〔旅館〕 中の湯(一泊一圓、五月—一〇月迄營業)。

〔押立温泉〕 耶麻郡翁島村、磐梯山頂から南約八軒、翁島驛から北二軒、自動車貸切一圓。磐梯山の裾野にある炭酸泉で三七度、神經諸病・火傷・創傷に効があると云ふ。〔旅館〕 鷺ノ湯、山形屋、住吉館、一泊一圓半—三圓半。

〔熱海温泉〕 福島縣安達郡高川村、磐越西線岩代熱海驛附近。地は五百川の清流に臨み、若松街道に沿ひ、三方山に圍まれ東南の一方展けて遠く安達・安積の平野を望んで居る。温泉は弱鹽類泉で三十六度、浴用加熱し、胃腸病・神經諸病・婦人病・皮膚病などに効がある。特色は行樂向。

〔旅館〕 一力ホテル(電熱海五、室二〇、④四圓)、松木屋(電同三〇、室一〇、一泊二圓均一)、東館(電一三、室一九、二圓—三圓)、信夫屋(電三、自炊専門)榮樂館(電二二、二圓均一)、紙屋(電六、一圓半—二圓半)尙驛の北約一軒に高玉温泉がある、自動車一〇錢。泉質効能同前。蓬萊館(電熱海二、室

二三、二圃一三圃) 春山館(電同一七、室九、一圃半均一)。  
 【川上温泉】 福島縣耶麻郡磐瀨村、川桁驛の北東一〇軒、川桁から分岐する耶麻軌道津種口の驛(四〇分、片道三〇錢)から西北山路徒歩約七軒、駄馬二圃、徒歩約二時間。地は磐梯登山の北口で、また檜原、三湖の眺めがよい温泉は鹽類泉で三四度、リウマチス、胃腸病、神經痛に効がある。  
 【旅館】 瀧ノ湯(室二〇)、湯本(室一五)、一泊一圃半、一圃七〇錢。

【中ノ澤温泉】 同上吾妻村、川桁驛から北一七軒、同上耶麻軌道終點沼尻驛の東約六五〇米、自動車八錢(列車毎、貸切四〇錢)。地は四方に山を繞らした別天地、冬季はスキー地として知られて居る。また附近に耶麻軌道會社經營の遊園地があり、中に姫沼があつて舟遊の設備がある。温泉は酸性硫酸泉で四度、胃腸病・皮膚病・創傷・火傷等に効がある。(旅館) 西村屋(室四一、一圃二〇錢)、白城屋(室一七、二圃)、花見屋(室一五、扇屋(室二二、二圃)、安積屋(室一七)、平澤屋(室二二)、朝日屋(室一九、二圃)、小川屋(室一一)、以上何れも内湯あり、一泊一圃半以上。

【沼尻温泉】 同上吾妻村、同上沼尻驛の東二軒七、自動車一〇分、乗合二五錢(列車毎)貸切五人乗一圃二五錢。中の澤から約一軒。酸性硫酸泉で皮膚病婦人病・胃腸病・創傷・火傷に効がある。(旅館) 田村屋(室二七、二圃)、岩瀨屋(室一一)一泊一圃半以上。附近に湯沼、白糸瀧の名勝がある。  
 ▲沼尻、中ノ澤温泉は共に東に安達太郎山、北に吾妻の山群を繞らし、西南は磐梯の雄姿を望み、冬から春にかけては積雪が多く、また雪質が非常によく、附近一帯はスキー場として初心者にも熟達者にも適する多種多様なスロープがあり、ジヤムプ臺及貸スキーの設備もあり我國有数のスキー場である。

【柳津虚空蔵】 臨濟宗妙心寺派) 福島縣河沼郡柳津村柳津、同上會津線會津柳津驛から東南約八五〇米、自動車一〇錢(一日五回)、貸切五〇錢。寺は露巖山園藏寺と號し、會津地方屈指の大寺である。本尊虚空藏菩薩は日本三虚空藏の一として參詣人常に多く、二月八日及四月一四日の縁日には雜沓を極める。現在の堂宇は文政元年の火災後松平氏保護の下に建立されたもので、木殿は只見川の碧潭に臨む崖上に建てられた舞臺造の大堂宇で壯大を極めて居る  
 【柳津の旅館】 月本(電柳津三三、一圃半一三圃)、内田(電二二、一圃半一圃)、東屋(電二三、同上)、鈴木屋(電二〇、同上)、小川(電一六、同上)。

【飯豊山】 山形・新潟・福島の三縣に跨る山群で、飯豊山(二、一〇五米)を主峯として西ヶ岳(二、〇二二米)、大日岳(二、二八八米)、種詩山(一、七九一米)、三國岳(一、六三二米)などの連峯を連ねて東北有数の深山地帯をなして居る。磐越西線で會津若松から北行する時列車の窓から遠く西北に此の廣大な山嶺が眺められ、また羽越線新發田附近からも間近に望むことが出来る。東北では鳥海山に次ぐ高山で、信仰的な登山は古くから行はれて居るが、峻峻なので比較的登拜者が少い。しかし近來登山家の憧れる深山として知られ、山中に高山植物の繁茂が非常に多く、盛夏でも櫻などを見る事が出来る。  
 【登路】 磐越西線山都驛口、徳澤驛口及羽越線の新發田から分岐して居る赤谷線赤谷驛口などがある。何れの登路も夏季は途中に休泊所が出来、山頂にも宿泊が出来る。

【山都口】 山都驛から山頂まで約三二軒、全部徒歩による。縣道を一ノ木川に沿ふて東北に進むこと七軒で相川の部落に達する。こゝから一ノ木川に沿ふて五軒で一ノ木村一ノ木戸に達する。此處には縣社飯豊神社の遙拜所があり、旅館も十數軒ある(一泊一圃五〇錢位)。此處から一ノ木川の溪流に沿ふて森林軌道が八軒ばかりの間敷設されて居るが、その七軒の所にある橋の手前から右に八〇〇米程入ると山間の一部落川入に達する。川入は十餘戸の寒村で、普通の民家が兼業する木質宿が二軒ある。飯豊登山は此處を根據とするが便利である。食料品その他物資は得られないが、案内者は一〇人許り居る。川入から山頂迄は約二二軒、約二軒の御深から道は急な登りとなり、北に折れて美しいブナ林の中を進み下十五里、中十五里、上十五里及積峯の小屋場を経て地蔵山に達する。此の間を長坂と云つて居る。此處迄登ると磐梯山から會津盆地、猪苗代湖などが望まれ、飯豊山は指呼の間迫る。やがて三國岳、種詩山を経て飯豊山頂に達する。山都から上り約一五時間、下り一二時間位。  
 【徳澤口】 徳澤驛から彌平四郎の部落に到り、三國岳を経て頂上迄約三〇軒  
 【新發田口】 赤谷線赤谷驛から加治川に沿ふて湯の平温泉まで二〇軒、それから頂上まで約一六軒。赤谷から上り約一四時間、下り一二時間位。  
 山頂には縣社飯豊神社の本社と避難小屋がある。頂上の展望は實に雄大で、東に吾妻連峯、東南に磐梯山・猪苗代湖・若松平を望み、西に新潟、新發田市街と羽越平原や日本海を望み佐渡ヶ島をも眺め、北東間近に朝日連峯の山地が指呼の中に雄偉な山容を見せて居る。



習奇の北東

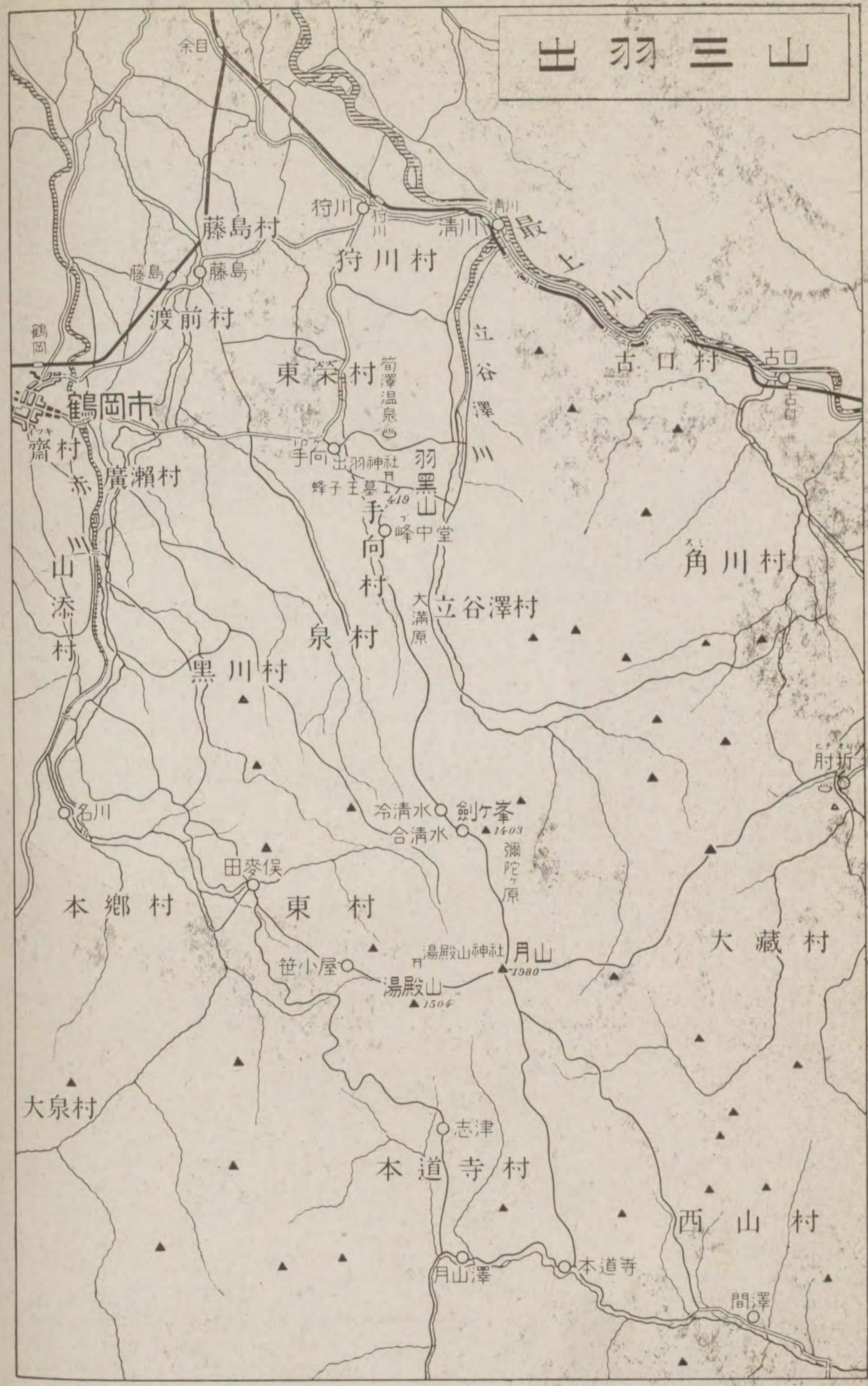
月正なクステログの島半鹿男(上)

しげはまな「事行

列行の祭たぶねの近附前弘・森青(中)

坊ん赤たつ入に中の「こぞえ」(下)





出羽三山登山日程案

(東京から五日、表口から裏口に出で、上山又は赤湯温泉に一浴して歸京)

「註」裏口から登山する場合は間瀬から月山湯迄自動車で行き、夫から徒歩で志津に出で一泊、翌早朝志津出發、湯殿山、月山を経て羽黒へ下る。

日程	地名	發着時刻	記	事
第1日	上野驛	發後 一〇・三五	秋田行列車上越線廻リ 車中一等一泊 二等寢臺アリ	
第2日	新津驛 村上驛 鶴岡驛 手向村	發前 七・〇七 發前 八・三五 發前 一〇・二六 發午後	下車、遊覽 乗合自動車 宿泊	
第3日	手向村 羽黒山 月山	發前 七時頃 發前 八・三〇 發前 九時頃 着後 六時頃	徒歩 徒歩 頂上 宿泊	

出羽三山登山(日程案)

▲上野―水上―鶴岡間一二時間餘(四五四軒五)三等五圓一七錢。  
上記列車ニハ二等寢臺アリ。  
「註」上野發後一〇・〇〇ノ秋田行ノ急行ニテ發、新庄及余目乗換 鶴岡着前一〇・  
〇九ノ列車ニヨラレルモヨイ。上野カラ三等五圓三八錢(通用六日)  
余目ノ一驛手前狩川カラ手向迄九軒八、自動車四〇分、乗合四〇錢(一日五回)、  
七人乗切二圓半。上野―狩川間三等五圓一八錢。  
▲鶴岡市内見物(第二二五頁參照、乗合自動車一〇錢均一)  
▲鶴岡驛カラ手向村迄一五軒七、自動車五〇分、乗合三五錢。  
(二〇回)貸切二圓半。  
▲手向村ノ旅館 羽黒館(電手向一一番)、多聞亭(電手向一五)みやま  
館(以上一泊一圓半、二圓半、三圓、團體一圓二〇錢乃至二圓)、三山ホテル  
(二圓半―三圓半) 其他宿坊多數アリ。  
手向村端レノ出羽神社隨神門ヲ潜ツテ石段ヲ下レバ祓川ノ橋ヲ渡リコレヨリ石段  
ハ老杉ノ間ヲ縫フテ一軒半ノ急坂ヲナシテ頂上出羽神社ニ達スル、所要四〇分位。  
石段ノ途中半軒ノ所ニ慶長五年最上氏ノ建立ニ係ル國寶五重ノ塔ガアル。  
▲羽黒山(二〇九頁參照)。  
▲羽黒山―月山一四軒(山道六里ト稱ス)途中六合目ノ合清水  
迄徒歩六時間、茲カラ頂上迄徒歩三時間、途中數ヶ所ニ掛茶  
屋アリ、宿泊中食ニ便ス。  
▲山中宿舎宿料 一圓半乃至二圓二〇錢。登山案内料二圓。  
月山(二〇九頁參照)。

第 4 日	第 5 日
月山 湯殿山 玄海 志津 月山澤 間澤 羽前高松 山形 上山 赤湯	上山 赤湯 上野
發 早曉 發前九時頃	發前二・四〇 發前二・二四 着後九・三
徒歩 徒歩 徒歩 徒歩 徒歩 徒歩 徒歩 徒歩	上野行 列車 歸宅
▲月山 湯殿山間約四軒(山道二里ト稱ス)徒歩約一時間半位。 ▲湯殿山 支海約五軒、徒歩約二時間、玄海 志津約一軒四、徒歩三〇分位(志津ノ旅館―布袋屋、葛屋、仙臺屋、一泊一圓半位) ▲湯殿山カラ鶴岡方面へ出ル場合ハ、湯殿山(三軒三、徒歩五〇分)―笹小屋(八軒、二時間)―田舎保(三軒五、一時間餘)―大日坊(六軒五、一時間五〇分)―上名川(六軒、鶴岡驛迄貸切自動車三圓、五五分)―落合(一六軒、自動車乗合三五錢、一四回、四〇分)―鶴岡驛。 ▲志津―月山澤間五軒七、徒歩約一時間(上りは一時間一〇分)貸切自動車二圓半。 ▲月山澤―本尊寺―間澤驛間一五軒九、三山電車ニ接續シテ乗合自動車ガアル、所要約五〇分、乗合八〇錢。貸切六人乗五圓。 ▲間澤―羽前高松間三山電車ヲ三四分(一軒四)三五錢。 ▲羽前高松―山形間(左澤線)五三分(二軒二)三等車ノミ。 ▲山形―上山間二五分(一軒一) ▲上山―赤湯間一時間(三軒一) ▲山形―赤湯カラ温泉場迄北西半軒乃至二軒餘、自動車乗合一〇錢、貸切七〇錢。 ▲赤湯カラ温泉場迄一軒六、自動車乗合一〇錢(列車毎)貸切七〇錢。 ▲上山温泉(一九二頁參照)、赤湯温泉(一九二頁參照)。 上山―上野一〇時間四三分(三四七軒一、三等四圓二四錢) 赤湯―上野一〇時間〇七分(三二八軒二、三等四圓八錢) 間澤―上野間三等四圓八八錢、二等九圓二二錢(通用五日)	

内譯 上野―鶴岡、間澤―上野間汽車賃、鶴岡―手向、月山―間澤間自動車賃(備考參照)、二等車賃下段一夜四圓半及旅館其他ニテ三圓分二等一〇圓、三等八圓、食料強カ其費用トシテ概算一〇圓宛テ計上ス

出羽三山

羽黒山・月山・湯殿山之を出羽の三山と呼び、勝れた靈場として昔く世に知られて居る。三山中月山は盛夏尙山頂に斑雪を見る程で、羽黒山以外は夏季の外登山する事が出来ぬ。地形上の山岳としては月山ひとり秀峯を峙て、他は全く丘陵と谷底に祀られた神社によつて山と呼ばれるに過ぎぬ。  
【羽黒山】山頂に國幣小社出羽神社があり伊弉波神を祀る。出羽神社は羽黒神社とも云ひ、本殿は莊内藩主酒井忠器が文化八年(二四七一年)工を起し文政元年(二四七八)竣工した大建築で、中央に月山神、右に羽黒山神、左に湯殿山神を合祀して居る。月山及湯殿山は高嶺にして夏季の外は登ることが困難であるから此處に合祀して三山神社合祀殿と稱して居る。三山の奉仕には古來修験者が關係し、僧徒と共に奉仕して大和の大峯、豊前の英彦山、加賀の白山などの修験に相對して殊に有名で、東北無比の祭壇であつた。従つて其信仰の厚いこと、報賽の盛であつたことは、實に奥羽、坂東、北陸を傾けた程である。境内に三山神社の山祖と傳へらる、蟻子皇子の社殿と御墓がある。例祭は毎年七月一五日に三山の例祭を同時に此處で行ふ。當日奉納の黒川能は古雅愛すべきものがある。また一月三〇日には松例祭がある。農作物の豊饒を祈る爲に行はれる特殊の神事で、百日間の參籠の役色々な勝負を争ふ古式があつて、特に百松明の神事は、巨火が暗黒の山を白晝に變ずるかと思はれる程の壯觀である。羽黒山は手向村の東部、月山登路表坂の北に連る丘陵であつて海拔四一九米、出羽山脈第三紀頁岩層から成る裂片地塊で、山麓の手向山は月山火山の泥流層上に發達した聚落であつて、羽黒山の第三紀層とは祇川に依り明に界されて居る。

手向村は三山神社參詣人の宿場で、村の中央羽黒山一の鳥居の北側に特別保護建造物の黄金堂があり、また近時郷土研究會の發見に係ると云ふ手向の百穴は古墳の疑を以て研究されて居る。黄金堂は源頼朝が奥州藤原氏を討伐した時に建立したものといはれ、細部の手法に鎌倉時代の特徴を存してゐる。また堂前には辨慶の柏鍋と傳ふるものがある。  
【月山】山頂累々たる石垣の中央に國幣大社月山神社があり、祭神は天照大

出羽三山

神の御同胞に在り月靈命を奉祀す。山開七月十五日、山開九月十五日。  
月山は羽前の中央に屹立する羽越山脈の一雄峯で、海拔、九八〇米、純頂圓錐形をなし、我國稀有のアスピーテ型火山であつて、西は湯殿山の境内を過ぎて遙に朝日嶽に連り、北は羽黒山を経て鳥海山を望み、盛夏尙斑雪が山を飾る處は、鳥海山と共に奥羽の山嶽を兩斷するの概がある。中世、羽黒修験者の行道所で、今も尚七、八月の頃は羽黒山へ七里、湯殿山へ二里の所謂三山懸越九里の道程、淨衣の賽者が絡驛として通るのは當時の名蹟とも見られる。頂上の本社は、境内石圍ひで、御室といはれ、尙頂上に高山植物研究の爲に月山高植物園を設けて斯學者に便して居る。  
【登路】羽黒山―月山間一四軒(山道六里と稱す)、途中六合目の合清水迄徒歩六時間、茲から頂上迄徒歩三時間、途中敷ヶ所掛茶屋あり、宿泊中食に便す。山中宿舎宿料一圓半乃至二圓二〇錢。登山案内料二圓。  
【湯殿山】大山祇命を祭神とする國幣小社湯殿山神社を祀り、古來山中の湯瀧を以て御神體となし、之を寶前と稱へて社殿がない。山開四月八日、山開一〇月二〇日。  
湯殿山は月山の西南山腹一局部の稱で、海拔一五〇四米、梵字川の川蝕によつて出来た深谷である。月山の頂上から西南、蟻ヶ岳(一六七〇米)の中腹を下つて、裝束場と云ふ平地に至れば、梵字川源流の深谷に臨んだ崖頂に立つ。此處は三山參拜の最難所である月光坂の嶮所で、鐵鎖にすがり乍ら下ること二百餘米、梵字川の谷に出れば間もなく、谷底に湯殿山神社の奥宮である所謂寶前がある。此處に礫石安山岩の塊片を混ぜる泥流の中から炭酸鐵泉の湧湯溢流して赤褐色の酸化鐵華がその周圍に沈澱堆積し、所謂靈岩の御神體を形成し、參詣人は五色の幣を納め、鐘を詩散し、寶前積んで山をなして居る。  
【登路】月山―湯殿山間下り約四軒(山道二里と稱す)徒歩約三時間位。  
【裏口】(本尊寺口)奥羽線山形驛から分岐する左澤線による羽前高松驛下車山形―羽前高松間汽車一時間(二軒二)、三等三五錢(三等車のみ)。  
羽前高松―間澤間(三山電車鐵道線)三四分(一軒四)、三五錢。▲間澤―本尊寺―月山澤間一五軒九、三山電車に接續して乗合自動車がある、所要約五〇分、賃八〇錢、貸切五圓。▲月山澤―志津間五軒七、徒歩一時間一〇分位、志津には旅館がある。▲志津―玄海間一軒四、徒歩三〇分位。▲玄海―湯殿山間約五軒、徒歩二時間半位。▲湯殿山―月山間約四軒、徒歩上り二時間位。



羽越温泉めぐり日程案 (東京から一週間)

秋田から西南に岐れて本荘・酒田・鶴岡・三瀬・鼠ヶ關・村上を経て新津に至る羽越線は、殆んど日本海岸に沿うて走るので、到るところ風光美に富み、三瀬から南西鼠ヶ關を経て村上に至る間は、越後山脈の海に迫れる間を縫ふて走り、琴平石、暮坪の立岩・鼠ヶ關の辨天鳥・海府浦・笹川流れなど幾多の風光美姿を變へて眼界に入り、粟島の青螺遙かに泛びて其背景美をなすなど車窓の眼を樂しませるものが多い。特に日本海に美しい裾野を曳いて西奥州に君臨してゐる鳥海山の秀容は幾度か車窓の眺めに入り、飛鳥の青螺墨繪の如く波上に泛んで景趣を添へ、また、酒田・鶴岡をすぐるあたり庄内平野の東に其の雄姿を見する月山の靈峰など、此の地旅行者の忘れる事の出来ぬ印象を與へるのである。

Table with 4 columns: 日程 (Itinerary), 地名 (Location Name), 發着時刻 (Departure Time), 記事 (Notes). It details the route from 上野驛 to 湯田川温泉, including stops at 新庄驛, 酒田驛, 鶴岡驛, and 湯田川温泉.

Table with 4 columns: 日程 (Itinerary), 地名 (Location Name), 發着時刻 (Departure Time), 記事 (Notes). It details the route from 湯田川温泉 to 湯野濱温泉, including stops at 鶴岡驛, 善寶寺驛, and 湯野濱温泉.

Table with 4 columns: 日程 (Itinerary), 地名 (Location Name), 發着時刻 (Departure Time), 記事 (Notes). It details the route from 湯野濱温泉 to 湯野濱温泉, including stops at 湯野濱温泉, 湯野濱温泉, 湯野濱温泉, and 湯野濱温泉.

日	第 6 日	第 7 日
桑川驛 村上驛 瀨波温泉	瀨波温泉 村上驛 新津驛 新湊驛 會津若松驛 東山温泉	東山驛 會津若松驛 郡山驛 上野驛 上野驛
發後 着後 發後	發前 着前 發前 着前 發後 着後 發後 着後	發 着後 着後 着後 着後
新湯行列車 下合自動車 乗泊	自動車 新津行 新湊行 新湯行 下山行 郡山行 泊車	郡山行列車 乗野行 上野行 乗泊
五人乗七〇錢。 瀨波温泉(二二八頁参照) 旅館 萩野屋(三三圖)、天野屋(三二圖牛)。	▲村上—新湯間汽車二時間半(七六軒四)(新津—新湯一七軒) ▲新湯—會津若松間汽車四時間八分(一一八軒) ▲會津若松驛—東山温泉間東南約五軒、自動車二五分、乗合二〇錢(列車毎) ▲東山温泉(二〇三頁参照)。 ▲旅館 新瀧(四四圖牛)、向瀧(四四圖)、不動瀧(三三圖)、福住、二八屋(三三圖)。	▲會津若松—郡山—上野八時間一五分(二八八軒三。新湯—上野間三等四四圖八四錢) 「註」上越線ヲ經由シテ沿線ノ温泉ニ一浴シテ歸京スルモヨイ。汽車賃三等新瀧—水上—上野四四圖一錢。

旅行費用概算

内 汽車賃(週遊券三等一圓五九錢、二等三圓一八錢、急行料一回分三等一圓、二等二圓。養蠶料下段一夜分二等四圓五〇錢) 三〇・三八 一等 一四・〇九  
 宿泊料(五泊、二等一泊五圓) 二五・〇〇 船車賃(波各温泉行乗合自動車賃、備考欄参照) 二・四五  
 食事料其他(其味シメ、中食等) 一〇・〇〇 七・〇〇

二等 六七・八三  
 三等 四一・〇四

羽越線に沿ふて

酒田市 ▲鶴岡から汽車二四分(二七軒五) ▲秋田から汽車急行二時

市は最上川の河口北岸に位する港市で、古來米の搬出地として著はれ、人口三〇、二八〇(昭和五・一〇調)、昭和八年四月市制が布かれた。

陸上交通機關の備はらなかつた時代—殊に江戸時代には、最上川が中央地帯の主要運搬路であつて、置賜盆地の輸出入も殆ど之によつた程で、從つて山形縣全體の物資の集散地となり、各地方から運出する米は最上川、赤川によつて悉く此處に積み下され、一旦倉庫に收め、帆船の入港する毎に之を積込んで大阪及江戸に運送し、奥羽屈指の要港として繁榮を極め、日本海の商權を一手に握るの觀があつた。然し今日では港として着船の便が悪い爲に陸上運輸機關と競争し難く、昔日の盛況は見られないが、古來蓄積せる絶大の富力が依然として米の集散地たる面目を保持し、在來の山居倉庫の外に國立倉庫も營まれ、加ふるに最上川の河口改善工事も進捗し、酒田水道工事も完成し、築港計畫も建てらるゝに至つたので、前途商況の發展を期待されて居る。

▲旅館 酒田ホテル(電二〇八、一泊二圓一五圓半、三圓半)、中川屋(電二六、二圓一五圓、三圓七〇錢)、村上屋(電二〇六、二圓一五圓半、三圓)、矢口(電四〇四、二圓一三圓、三圓半)。

▲名所 ▲龜ヶ崎城址 驛の南方一軒半、新井田川の東畔にあり。酒井氏の番城として明治維新に至つたもので、今城址に中學校、舊二の丸址に鎮守八幡社がある。▲日枝神社(縣社) 驛の西方一軒半、市街の南端、日和山公園にある。▲光丘神社(郷社) 驛の西一軒半、日枝神社の東北に當り、大正一三年の創建で、木間四郎三郎光丘を祀る。▲日和山公園 驛の西方二軒、町の西部砂丘の上にある、日本海及最上川を望み、展望がよい。

▲山居倉庫 驛の西南一軒半、山居にある酒田米穀取引所の附屬倉庫で、一米券倉庫とも稱し、その米券法は全國の模範となつて居る。元和八年酒井氏封を得て以來、その貢納米につき近江の大江で行はれる米券制度を採用して、酒田城外新井田沿岸に新井田倉、通稱いろは倉四十八戸前を建て、貢米の七割

を之に納入せしめて米札を發行して米の受授及賣買等に便ならしめ、且米質の改良を圖る目的で建設せられたものである。倉庫一四棟、建坪二千坪、收容石数は九千石に及び、其位置、構造等は周密な注意の下に建設せられ、舟楫の便も亦申分がない。享保年間大阪の堂島、加賀の金澤と共に此處に米會所設置を許され、米の取引愈々發達し、米券は紙幣同様に流通し、米問屋は臨時新井田蔵に至り現米と引替へ多くは、大阪方面へ移出した。明治二六年酒田米穀取引所が創設せられ、舊米券法による米穀の保管を繼承し、定期の賣買、米受授の圓滑、地方産米の改良を圖り、近年鐵道の發達に伴ひ販路が擴張して來た。一ヶ年の保管高三五萬石と云ふ。▲出羽の柵趾 本柵附近にあり、酒田から自動車往復二圓。「名物」 栞餅、核無柿等。

【庄内平野】 出羽丘陵を東部に控へ、その北部には出羽富士島海山、東南には靈峯月山聳え、洋々たる日本海の西風に常に濕る、庄内平野は、古來米の産地として天下に名高い。此の盆地は瀧湖であつたものが、月山、島海山等の火山から崩壊携入する砂礫の外に最上川、赤川等の水系による注入河流の埋積と共に、陸地隆起が加はつて、瀧湖は遂に平野を形成するに至つたが、この際日本海よりの西風は、波浪に依て海岸砂丘を生ぜしめたものであると云ふ。平野は南北四〇軒、東西二〇軒、南に廣く北に狭き略三角形を呈し、面積約五百餘平方軒、平野の殆全部は只水田、其盤の目の如く整然たる田圃、樹林に圍まれた村落の適當なる配置、盆地縁邊の丘下から直ちに展開する平々坦々たる沃野は、遙に海岸に盡る所幽かに地水一髮の線を劃してまた水天を分たさるものは庄内平野の大觀で、之等三萬六千町歩の耕地から年九〇萬石の米が收穫されて居る。これ天惠の然らしむる所とは云へ、藩主酒井忠勝が農政に意を用ひ、倉庫米券の法を定め、累代亦之にならひ來たことを忘れてはならぬ。又忠徳の頭には木間四郎三郎光丘が、海岸一帯の砂防に(日本海岸には延長約三五軒に亘つて中一軒半乃至三軒の砂丘があり、殊に北部は吹浦の名に明なる如く海風強く、砂丘は内地に浸入したが、年來の努力によつて砂防植林が行はれ、之を防止し得て風光の美をさへ加ふるに至つた)、酒田港の改修に、農政の改善に偉大な功績を盡し、また幕府の命を受けて酒田から京阪廻米の策を建て、所謂大廻りに下關を経て大阪に廻船し、十四、五日で五ヶ所結び二重依裝の莊内米が堂島に着く事に成功した河村瑞軒等の力に俟つ事が少くない藩主酒井忠勝は元和八年、封を莊内にうけて鶴岡をその居城地と定め、代

々庄内米の好収入により、諸侯羨望の的となつた程の裕福が災して、遂に天保一二年忠節の代に轉封事件が起つた。そして領民の熱烈な反對運動が直訴にまで及ばんとし、移封中止になつたと云ふ歴史的事實は、此の地方産米の如何に豊富であるかを物語つて居る。

【飛島】酒田港の西北三八軒の海上に位する、山形縣下唯一の島嶼で、その間發動機船(三〇人乗)が毎日二往復し三時間で達せられる、賃金片道一圓。飛島本島と其西方にある御積島、鳥帽子群島等幾多の離れ島から成つて居る。本島は周囲一〇軒、面積僅かに二、三方軒で、全面積の九割迄が第三紀層から成る凝灰岩又は凝灰質頁岩から成り、全島は一の海蝕臺地をなして東西南北に各岬角を突出して居る。西岸は数段の海蝕段丘から成り、強き西風のため樹木茂らず草地をなして居るので人家は全くなく、低段丘上に僅かに水田が耕作されて居るのみである。北部と東岸一帯は海面から四〇米餘の海蝕崖が發達して居るので、西風を避くる關係上、熱帯性潤葉植物など繁茂して西海岸とは全く別天地をなし、人文の發達は此の方面に限られて居る。此の東南岸にある飛島港は天然の良港で、現在所帯數一八四、人口一、二四五(昭和五・一〇調)を有し、島民悉く漁業に従事して居るのである。此處は暖流と寒流が上下に交叉反流するので漁業の垂直分布が大きく、縣下第一の漁業地であつて、島の氣象も著しく温暖化されて居る。

島の成因に關しては幾多の傳説があり、中には島海嶺火に因縁を有するもの多く、山の一角が飛散して海中に落下したと云ふもの、また往時までは女鹿山から飛島まで羽越線と稱する半島が存在したが嘉祥三年強震によつて羽越線四〇軒四方悉く陥没して、大海と化しその一角又墜つて飛島を作つたと云ふ。加ふるに近時の調査によつて先住民の遺跡が発見され、時代不明の石器等も発見されたので、今後は益々興味ある研究地と云はれて居る。

本島の西方海上にある御積島は石英粗面岩が屹立すること七七米の圓筒狀の島で、北岸に海蝕洞窟があり、島は「うみねこ」の棲息地となつて居る。洞窟は入口の高さ一二米、奥五五米に及び、洞奥に窟穴があり水を湛へ、その底に圓石が存して居る。此處に遠賀美神社を祀り、此の窟穴を俱利伽羅不動尊の御手洗と稱して島民が崇敬して居る。洞奥には鱗紋狀の凝灰土が壁面を被ひ夕陽に照されて輝き、御手洗の清水に映じて其状恰も白龍の鱗の如き奇觀をなし天井からは水が滴り美音を發して居る。此の凝灰土は島上に群成する龜

龜坂、八丁坂の嶮はあるが、途中一般に變化に、富み河原宿には日本唯一の高山植物園あり、笹小舎も四ヶ所あり飲料水も豊富であり、其他の設備等もある。「蘇岡口」遊佐驛一蘇岡間三軒、徒歩一時間、自動車(不定期)五〇錢、それから山頂迄一九軒、登山所要約六時間下り三時間。「蘇岡ノ旅館」一泊三軒、玉泉坊、磐若坊(一泊一圓半、二圓半)、登山案内料一日二圓、強力賃一日三圓。「吹浦口」吹浦驛から賽の河原迄約一八軒夫から頂上迄約二軒、上り九時間、下り六時間。登山案内料五人迄二圓。

【小瀧口】羽越線蘇岡驛一山頂約二五軒、登り約八時間、下り約四時間。途中九軒の山麓上郷村宇小瀧迄夏期中乗合が行く二〇分、片道五〇錢、貸切二圓。蘇岡の旅館 岡本屋、秋田屋、一圓半、二圓半。「矢島口」羽後本莊驛から分岐する横莊鐵道の前郷驛から矢島まで約一三軒自動車が行く。四五分、乗合一圓(列車毎)、貸切四圓。それから山頂迄約二三軒、上り一〇時間下り五時間、登山案内料一〇人迄二圓半。登山道は變化が多いので登山客に喜ばれる。途中祇川の小屋場は七、八月には宿泊が出来る。▲登山は七月上旬から九月中旬まで、其他の時期は寒氣と雪の爲に登攀が困難である。一般の登山者は暑苦を避くるため大抵午前二時頃發足、午後三時頃歸着するものが多い。

【大物忌神社】(國幣中社) 島海山頂にあり出羽國一ノ宮として崇敬せられ、今も多く登山客があり、御本前に宿泊所がある(一圓八〇錢)。山頂からは東に栗駒山、東北に駒ヶ岳北に太平山が眺められ、南は近く月山を望み、また東南は遠く山形盆地を隔てて蔵王山を見、西南に莊内平野を俯瞰し、西は日本海上の男鹿半島、飛島、佐渡ヶ島を眺めた景が雄大である。【吹浦の羅漢岩】吹浦の附近は島海火山の熔岩が海に達して斷崖をなして居るが、その中に熔岩の自然石を其儘使用して五百羅漢像を彫刻したものがあつて、その状千姿萬態、他に多く類を見ない奇觀をなして居る。吹浦驛から六五〇米。自動車乗合二〇錢。

**鶴岡市** 新津から急行二時間四五分(一三九軒四)、三等二圓〇四錢、秋田から急行二時間三〇分(一三三軒三)、三等一圓九五錢。市は莊内平野の南部に位し東方に赤川を控へ西南に金峯山を背ひ、商工業盛んに行はれ、特に羽二重の機業と米の取

羽越線に沿ふて (鶴岡市)

が裸岩の上に「グアノ」を形成せしめて、それが溶解せしめるものが洞窟を傳ふて滴り、粗面岩の分解物と化合して銀星石質の鱗酸アルミナ礦物を鱗狀に沈澱せしめたものである。島人は此處を神域として女人を禁制し、飛島第一の靈地とされて居る。

【島海山】山形、秋田の兩縣に跨り、出羽丘陵の島海火山脈の主峯であつてコニデー型の美しい山容は日本海に裾を曳き、悠然東北の天に君臨する最高峯である。形狀富士に酷似するにより一に出羽富士とも稱せられる。山は二重武層狀火山で、山上は舊火山、新火山及稻倉岳の三火山に岐れて居る。舊火山は一名西島海とも呼び西部に位し、笹ヶ岳、月山森、扇子森等を連ねる外輪山の馬蹄口を南西莊内平野に開き、中央火口丘鍋森をその中に蔽して居る。そして火口湖「水ノ又」は笹ヶ岳と月山森の間を破つて西南に流れ、途中に二ノ瀧一ノ瀧等の瀑布を形成して月光川に合して居る。中央火口丘の鍋森は鈍圓錐形を呈し、直徑約五〇米の圓形火口には水を湛へて鳥の海を形成し、排水口がなく、所謂眠湖をなし地下流により南に流出して居る。新火山即ち島海本山は更に大なるカルデラをなし、二、二〇〇餘米の廣大なる火口壁は七高山、行者岳を外輪山として北方に向つて開け、新山・荒神ヶ岳を中央火口丘として居る。新山は海拔二、二三〇米に達し、東北地方の最高地點をなして居る。此の峯は享和年間噴出で、に享和岳と稱せられる。山勢急峻削が如く、山上に圓形の火口がある。その直徑約一二〇米、その西に峙つ荒神ヶ岳は史前の噴出で山體の一部は新山の熔岩で掩はれて居る。七高山は外輪山の最高部をなす弧狀の山列で、急峻なる内側には噴山岩類の成層が明かに認められ、火口原の水は千蛇谷の火口湖から、鳥越川となつて北流して居る。山上、七高出と新山と相對峙する盆地に國幣中社大物忌神社を祀り、山麓遊佐驛から約三軒の蘇岡村杉澤及吹浦驛の北半軒に口ノ宮がある、例祭は隔年毎にこの兩口ノ宮で行はれる(蘇岡口は五月三日、吹浦口は五月八日に行ふ)。又山頂附近には木州高山に類似なき高山植物「テフカヒフスマ」繁殖し、山形高等學校の徽章に選定せられ誇りの花となつて居る。稻倉岳は西北部に位し、孤峯をなし、成生最も古きものと云はれて居る。

【登路】登山口は左の數口あり、何れも登山口から山頂まで二〇軒乃至二五軒、登路は比較的容易であるが、願路として口ノ宮のある蘇岡又は吹浦を選ぶが便利である。此處では一切の周旋をなし案内等萬事差支がない。蘇岡口は引が著しい。人口三四、三一六(昭和五・一〇調)市内で繁華なのは荒町・下肴町・十日町・一日市町・七日町・上肴町等である。市は往時の大和郷で、地頭大寶寺氏の統治下であつた時は城名を大寶寺と稱し、大寶寺武藤氏の居城であつたが(起原は詳でない)天正一二年から村上義光に屬し城代が置かれ、翌年上杉謙信之を陥入れ部將下治右衛門をして守らしめたが、慶長六年に至り再び義光の有となつたので、同八年其名を鶴岡城と改めた。其後元和八年最上家改易せらるるに及び酒井忠勝新に封を得て信濃國松代城から移つて之を治するに及び、莊内藩と稱し、當時東北の雄を以て自任し、街區を改め産業を興す等、名實共に莊内の首邑たるべくつとめた。元治元年左衛門尉忠篤江戸市中警衛の勞を以て二萬七千石加賜、前封を併せて一七萬石、明治維新に至り廢城となつた酒井氏の舊城下である。

【遊覽順路】驛―日枝神社―荒町―下肴町―一日市町―常念寺―本住寺―大督寺―鶴岡公園―驛。

【名所】▲鶴岡城址 驛の西南二軒、市の中央にある。今木丸、二ノ丸の礎及濠の大半を遺し、城址は公園となり、松杉の大木多く、また櫻樹は濠に沿ふて長く連り別に菖蒲園などもある。木丸址には莊内神社(藩主酒井忠勝及父祖家次忠次の靈を祈る縣社)があり、その南側に招魂社と明治天皇御駐蹕記念碑があり、園内の大寶館には集會所、圖書館、物産陳列所などがある。

【旅館】伊勢屋(電三六、驛から一軒六、③三圓、鶴岡ホテル(電三五、驛から一軒三、③三圓)、兼子(電五六、驛から九〇〇米)、伊勢屋支店(電五五八、驛から一軒)、一泊二圓半―七圓。

二一五

【名物】板餅、平核無柿、民田茄子、竹塗(塗器)、味淋漬、のし梅(菓子)等【湯田川温泉】山形縣西田川郡湯田川村、羽越線鶴岡驛から西南八軒五、自

動車二分乗合一五錢。地は莊内平野の丘陵の間に介在する温泉場で、金峰山の水くひいた裾野にあり、三面翠巒に圍まれ只西の一方廣々とした田圃となつて鶴岡市と續いて居る。その昔股賑を極めた當時の豪華な面影が残り、大きな建物は設計の凝つた古風な匂ひのするものが多くまたそれと並んであり落付きのある保養及遊山に好適の地である。

泉質は無色透明のアルカリ性硫酸泉で温度四〇度、腦神経諸病・眼病・婦人病・リウマチス・皮膚病等に特效あり、由來中風の湯と呼ばれて居る。

【旅館】鷺見閣(電一、②二圓半)、白鷺軒(電一〇)、司屋(電一七)、石倉屋(電二二)、穂積屋(電四)、鳳雲閣(電一九)、ときわや(電一六)、たみ屋(電二二)、瀧湯屋(電一八)、田の湯元(電九)、大國屋(電一五)、大井屋(電三〇)、御殿(電一)、宮五館(電一三)等。何れも内湯がある。一泊二圓乃至六圓。

【善賢寺】曹洞宗。山形縣西田川郡西郷村字下川、羽越線大山驛の北約三軒三、自動車一五錢、同上鶴岡驛から湯之濱温泉に至る庄内電車で善賢寺驛下車す(一四、二四錢)。約一千年前妙達上人の開基と傳へ、下川丘陵高館山の麓から中腹にかけて多くの堂塔伽藍を遺して居る。龍潭山と號し、曹洞宗大本山總持寺直末の常恒會轉法輪の道場で、寺に祭祀する龍王・龍女の靈驗あらたかりとして大漁・航海安全・五穀豐稔・營業繁榮・當病平癒を祈るために遠近から集る參詣者毎年一〇萬を越える。

堂塔の數二字、その主なるものは本堂・龍王殿・五重塔・五百羅漢堂・山門・五重塔婆で、多くは明治年間建造に係るものである。

湯野濱温泉 山形縣西田川郡加茂町湯野濱、羽越線羽前大山驛の西北約七軒二、自動車四〇分、乗合一三〇錢。同上鶴岡驛から庄内電車で善賢寺驛由二四(一三軒二)、片道三五錢。又は前記善賢寺から開道徒歩約二軒。

古來奥羽三樂郷として上の山、東山と共に謳はれた地で昔に高館山一帯の翠巒を負ひ、前は漂渺たる日本海の碧波に面し、南方二軒に加茂港を控へ、遠く北走せる砂丘の直線状砂濱は海波に洗はれて酒田港を煙霞の中に望み、更に鳥海の雄峯滄海に裾曳くを仰ぎ乍ら海水浴を試むべき日本海隨一の温泉勝地である。(海岸は遠淺で危険なく、東北では稀に見

る好海水浴場で、夏季は湯治客と海水浴の人達で旅館は何れも賑つて居る。温泉は鹽類泉に屬し、無色清澄、温度四八度、胃腸病・婦人病・リウマチス・神經衰弱等に特效がある。

【旅館】龜屋(貸切湯あり、電一〇、室九)、③三圓、恵比壽屋(電一、室四五、③三圓)、岩本屋(電一九)、大屋(電五)、大黒屋(電二五)湯ノ濱ホテル(電一七)、富士屋(電一五)、宮島屋(電二八)、都屋(電二二)、富屋(電六)、岩崎屋(電二四)、一泊二圓一六圓。

【加茂港】湯野濱の南二軒半、自動車乗合片道一〇錢、貸切一圓。酒田港と共に莊内重要の港灣をなし、莊内漁業の中心地で、縣水産試験場がある。近時築港成つて二千噸級の汽船も安全に碇泊し得る様になつた。加茂から北方湯野濱に至る二軒餘の海岸は懸崖高く海岸の岩礁も甚しく風景極めて佳い。

【旅館】石野屋、一圓半一三圓半。▲加茂水族館入場料二〇錢。

温海温泉

山形縣西田川郡温海村湯温海。

羽越線温海驛のある所は日本海の波打際、(七〇一及七〇二の急行列車停車する)そこから温海川の清流に沿ふて谿谷を二軒半許り遡つた所にあり(自動車、乗合一五錢、貸切七〇錢)町の背後には海拔七三五米の安山岩々峯温海嶽聳え、天魄・八方等の峯巒は東南北の三方を圍み、西の一方僅かに開けて日本海に向けて開けた山峽の靜かな湯町で、保養・遊山何れにも好適の温泉郷である。

温泉は食鹽含有硫化水素泉で、温度八二度、湧出量頗る豊富で、湯色が時に灰・淡黄・淡青等に變化するので古來温海七色の奇稱がある。皮膚病・外傷・火傷・リウマチス神經病・花柳病・婦人病・痔疾・胃腸病・諸病恢復期等に效がある。

【旅館】橋屋本店(電温海温泉一、室二六、③三圓)、橋屋別館(電同四、室一〇)、橋屋新館(電同七二、室三三)、萬國屋(電同三、室五〇)、④三圓、温海ホテル(電同五、室三九、④三圓)、鶴屋(電同二八、室一九、④三圓半)、瀧乃屋本館(電同二五、室一三)、同別館(電同三五、室七)、朝日屋(電同二、室一八)、新玉屋(電同七、室二〇)、越後屋(電同六一、室一六)、其他壽屋、龜屋、萬屋、富士屋(電二二)、柏屋、泉屋、櫻屋、海老屋外五軒あり。【温海驛前旅館】賀懸屋、一泊一圓一三圓。

温海には此處獨特の頗る鄙びた情緒のある朝市がある。毎朝未明の頃から附近の漁夫や農夫の女房達が思ひ(に)街路の傍に店を張り、自炊客達は季節季節の新鮮な野菜や、山の名産、海産物等を買物に出掛ける野趣に富たものである。【名物】漆器、柿餅、そば、あつみ蕪等。

【附近名所】大清水・熊野神社・紅葉ヶ岡・臥龍園・一ノ瀧、湯見ヶ浦等。健脚家には温海嶽登攀も興が多い。夏は温海驛附近に海水浴の快があり、冬は鳥臺及長嶺等スキーの好スロープあり、秋は紅葉郷としてまた知られて居る。▲蕪坪の立岩 温海驛の北三軒、温海村字蕪坪の海岸にある直立一五〇米の玄武岩島で、柱状節理がよく露はれ、天然記念物に指定されて居る。

【鼠ヶ關】山形縣西田川郡念珠關村、羽越線鼠ヶ關驛所在、新津から汽車二時間半(一〇一軒)、鶴岡から汽車一時間五分(三八軒四)。地は格子谷の一つである鼠ヶ關川が、その河口に横はる大岩島辨天島の勝が恰も防波堤の役目を演じて出來た羽越線唯一のデルタに發達した聚落で、辨天島の擁する鼠ヶ關港に面し、風光明媚である。此處はまた羽越の國境に當り、古くから鼠ヶ關の關所が置かれ勿來及白河の關と共に奥羽三大關門の一として知られたところである。【旅館】村上屋、丸長。

【名所】辨天島 驛の西北八〇〇米、砂嘴によつて連ねられた玄武岩の半島で、海水浴に適する灣入がある。此島は海岸隆起に基いて砂嘴の發達を來し陸地と連つてトンボロ地形をなしたもので今は半島となり、その西南端に燈臺があり、北側には老松に圍まれた嚴島神社があり展望絶佳で、日本海岸有数の勝地として近時著しく知られて來た。

笹川流 新潟縣岩船郡下海府村附近海岸、羽越線桑川驛

羽越線に沿ふて (鼠ヶ關・笹川流れ・村上町)

の北約四軒の板貝一笹川間の海岸地域二軒の稱で、海府浦景勝の一中心部を爲すものである。桑川驛の南方一軒半の鳥越山から北方の寒川驛の西南半軒餘の狐崎に至る延長九軒の間を絶景とされ、名勝地に指定されて居る。此のあたりを俗に笹川流れと呼んで居るが河の流れではなく、沿岸漁業地帯を漁夫達が呼びならはした名稱である。

鼠ヶ關から西南瀨波町の海岸三面川の注ぐ處、岩ヶ崎迄は、西の親不知に對する北越の難險、海府浦の地で、北部越後山系に雁行して海に迫る葡萄山系の沿岸一帯の岩石海岸地域、笹川流れを中心に外海府の景勝延長二〇數軒に亙て居る。此處は葡萄山塊を構成する黒雲母花崗岩の日本海に没入する處の特殊構造と、第三紀末からの地盤隆起と海蝕によつて、一帯の地形は稀に見る景觀を形成して居る岸崖海に迫り、岬角參差起伏し、青松を頂ける岩礁海上に點綴して浪に洗はれ、且つ海蝕洞穴内には鐘乳洞あり、石筍あり、また鐘乳酸化鐵華に満された洞穴などあり、海岸線は凹凸を極めて越後特有の單調を破り日本海の荒波に對するなど、實に壯絶を極めて居る。

▲桑川驛前下海府村板貝間約八軒笹川舟遊料、往復三〇錢。上下各列車に出帆し遊覽に約二時間を要する。遊覽船は桑川驛前各旅館にて斡旋す。

【桑川驛前旅館】笹川ホテル(室一三)、龜屋(室八)、九一(室八)、大山(室四)、一泊一圓半、二圓、二圓半。

【村上町】新潟縣岩船郡、新瀨から二時間二〇分(七六軒四門前川の川岸、臥牛山の麓に位し、もと本莊と呼んだ内藤氏五萬石の舊城下町で、越後東北部の主要な都邑である。町は我國では宇和島町と此處のみと云はれる環狀放射式となり、今尙封建的保守氣分の昔を夢みる村上本町と、經濟的に進出した商

人階級の村上町とに分れ、人口九、九三三(昭和五・一〇調)を有して居る。
【旅館】 扇屋本店(電村上二二〇)、丸屋(電二八、驛一軒半)、渡邊(電五二...

瀬波温泉 新潟縣岩船郡瀬波町、羽越線村上驛から西南二軒四、自動車...

瀬波町松山にある丘陵の北斜面海拔六〇米、海岸から五〇米の地に、明治三十七年石油井鑿掘の目的で深さ二五〇...

地は後に翠巒を負ひ、前は展けた田園にて限りなき豊饒を示し、また松籟颯々たる所を過ぐれば渺々たる日本海に...

【旅館】 萩野屋(電村上二〇六番、室數三三、③三圓)、大和屋(電同二〇、室一八)、三島屋(電同二六六、室一五、②二圓半)、臨海ホテ...

赤城登山日程案 (東京から二日)

Table with columns: 日程, 地名, 發着時刻, 記事, 備考. It details a two-day mountain climbing itinerary from Tokyo, including stops like 上野驛, 前橋驛, 箕輪驛, 赤城大洞, 梨木鑛泉, 赤城山, 上野山, 桐生, 小野, and 上野驛. It includes departure times, activities like hiking and sightseeing, and a detailed cost breakdown for various services and meals.

ら三五軒、漁用を主とする定期船がある、一日一回、片道一圓半、四時間。
全島黒色の頁岩又は矽岩の岩床からなり、傾動地塊が間歇的の隆起により...

【加治川堤の櫻】 此處の櫻は、加治川の氷害を豫防するため新發田の西北に當る眞野原から...

【旅館】 長谷川(電新發田四七、材甚(電六一)、石川(電一四九)。
【新發田町】 新潟縣北蒲原郡、新津から三〇分(二六軒)、新發田から一時間一...

赤城山及附近(赤城山・前橋市・桐生市)

赤城山 前橋の北方に聳ゆる二重式火山で、外輪山は最高峰の黒檜山(海拔一、八二八米、上毛三山中の最景遺にして山頂開

〔登路〕前橋口・敷島口・沼田口・岩室口・水沼口・大間々口などがある。〔前橋口〕「大間々口」前記日程案備考参照。

三山中最も幽邃且つ眺望美に富み、また白樺や檜の林に出没する放牧の姿や、一〇月初旬から初まる紅葉の美しさは幾度行つても佳い所である。

赤城は結氷期が早く、水の質も非常に良いので、スケーターの理想郷である。赤城湖は一月中旬から全面結氷し、小沼は稍遅れて一月下旬結氷、大沼は全面に結氷を見るのは二月下旬である。

大沼は地蔵岳の北麓にあり東南より西北に長く、長徑一軒半、短徑之に半し東岸に近く小島ヶ島がある。湖面は海拔一、三二〇米、湖の東南隅の湖畔を大洞と稱し、此處に赤城神社がある。湖水は西北隅から沼尾川の火口瀨によつて桑柄山の北に於て外輪山を破り、急瀨をなして西流して利根川に注いで居る。

〔前橋市〕上野から高崎廻り汽車二時間五分(一一一軒二)、三等一圓六七錢、向小山廻り三時間二五分(一五八軒九)、三等二圓二九錢。

伊香保遊覽日程案

(遊覽券利用東京から二日)

Table with columns: 日程, 地名, 發着時刻, 記事, 備考. It details the itinerary for a two-day trip from Tokyo, including stops at Utsunomiya, Maibara, and Ikkawake, and activities like sightseeing and train rides.

旅行費用概算

三二 等 一六・九二

内譯 遊覽券 一六・九二 乗車券 一・九二 入館料 一・〇〇 食料 二・〇〇

上越線に沿ふて(伊香保遊覽日程案)

草津と吾妻溪谷廻り日程案 (遊覧券利用東京から三日)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發前 一〇・五	小山富山行列車	▲上野 輕井澤四時間二五分(一四二軒三)、三等普通片道二圓
	輕井澤驛	着後 二・三〇 發後 二・五五	草津電車ニ乗換 草津行電車	▲輕井澤 上野發前七時四五分、輕井澤着二時二四分及上野發後一〇時二〇分、輕井澤着前二時五二分ノ不定期列車アリ、乗車ノ節ハ運轉ノ有無ヲ確ムルコト。
	草津驛	着後 六・〇〇	宿泊	▲輕井澤 草津間 草津鐵道電車ヲ三時間〇五分(五五軒五)、三等二圓(三等車ノミ)、一日七往復運轉。
第2日	草津町	發前 一〇・二五	乗合自動車	▲草津驛カラ溫泉場迄二〇〇米餘。
	川原湯	着前 二・一〇 發後 二・四〇	遊覽、晝食 濇川行自動車	▲草津 長野原 川原湯間 湯一丸九軒三、自動車ヲ五五分、乗合一圓二〇錢、貸切五人乗七圓。
	濇川	着後 四・三〇 發後 四・三〇	乗換 自動車泊	▲草津カラ長野原ニ出テ川原湯ヲ經テ中ノ條ニ至ル間ハ常ニ吾妻川ノ深淵溪流ニ沿フテ下ルノテ沿道ノ風光ガヨク、關東耶馬溪ノ稱ガアル。殊ニ秋葉嶺ニ染マル頃ハ山腰ト云ハズ総谷ト云ハズ一様ニ錦ヲ織リ出シ、吾妻ノ溪流其ノ間ヲ縫フテ走り、奔流ト激シ碧潭ト瀉ミテ流ル、佳景ハ一度此地ニ遊ヘル者ノ忘レ得ヌ景趣デアアル。
第3日	伊香保	發後 三・三九	乗合自動車	▲川原湯 原町 濇川間 約四〇軒一、自動車ヲ二時間五〇分、乗合一圓五〇錢、貸切八圓。
	上野驛	着後 六・〇〇	歸宅	▲濇川 伊香保間 一〇軒、自動車ヲ一〇分、乗合往復九〇錢。

旅行費用概算

二等 二六・九一

内譯

遊覧券 一圓、草津溫泉間、濇川、上野間、自動車券、草津、川原湯、濇川間及伊香保、濇川往復、宿泊券、二泊、食料、二等、一等、二等、三等、一六圓九一錢。外ニ食料其他費用トシテ五圓宛ヲ計上ス。

上越線に沿ふて

伊香保溫泉 群馬縣群馬郡伊香保町

▲上野から急行列車で濇川驛まで二時間二〇分(三軒三、三等一圓八二錢) ▲濇川驛から伊香保溫泉迄約一〇軒、自動車二〇分、乗合片道五〇錢、往復九〇錢(一〇回以上)、貸切五人乗三圓。又は電車で約五〇分、賃三五錢(三〇分乃至一時間毎)。

伊香保町は群馬縣の西北部、榛名連山の東腹、海拔八五〇米の高地に在り、三方は廣漠たる眺望にて前に吾妻川を隔てて利根、吾妻兩郡の諸峰を望み、北から東にかけて小野子、子持の山々から蜿蜒たる赤城の翠黛を眺め、東は遠く前橋、高崎の粉壁を目睫の間に見渡す景勝の地である。夏は八〇度を越ゆることなく、避暑によく、秋は紅葉の美に聞えて居る。浴舎は懸崖に凭つて建てられ、街路は階段の様に石段で刻まれ、屋並は層一層と漸次高く、一樓は一館の屋上に聳えて居る。

溫泉は鹽類性含鐵炭酸泉に屬し、貧血症・胃腸病・婦人病・腺病・リウマチス・神經諸病に效があると云ふ。温度四六度乃至四八度。

泉源は湯元と稱する溪谷中、集塊岩と浮石層の間に八箇所あり、それが集まつて各旅館の内湯として木桶で曳かれて居る。湯元には水酸化鐵の沈澱物があるので、これを布に塗沫して伊香保染として居る。

〔旅館〕 木暮館(室一七〇、電話一〇、別館四一、③三圓半)、蓬萊館(室八〇、電二〇、③三圓半)、千明仁泉亭(室一五〇、電六、③三圓半)、塚越(香雲館、室八四、電七、③三圓半)、塚越別荘(電七〇、③三圓半)、岸權旅館(浴蘭樓、室一一八、電二、③三圓半)、福一樓(室六一、電四、

上越線に沿ふて (伊香保・榛名)

③三圓半、森田館(室一二四、電三、③三圓半)、鏡榮館(石坂、室五二、電一、③三圓半)、横手館(室一七電八、③三圓半)、千登世館(唐瀨、室三〇、電九、③三圓半)、香山樓(村松、室二四、電一三、③三圓半)、古久家(森田、電五、③三圓半)(以上普通宿泊料二圓半、三圓、四圓、五圓)、丸本館(萩原、室一四、電三一、③二圓)、藤野屋(齋藤、室二五、③二圓)(以上普通宿泊料二圓、二圓半、三圓、四圓)、伊香保ホテル(電四六、洋式③六圓)、橋本ホテル(電三五、一人室六、三食付七圓半、二人室六、三食付一五圓、③五圓)、市川館、新井屋、河内屋、橋屋、油屋、其他一五軒、以上宿泊料一圓半、二圓半、三圓。

〔附近名所〕 湯元公園、伊香保神社、物開山、見晴し、七重瀧、辨天瀧、大瀧などあり、榛名山、榛名湖、榛名神社にかけては一日の遊覽地として好適の處である。 〔榛名山〕 古來妙義、赤城と共に上毛三山に數へられて居る名山である。山は群馬縣の中央から稍西に偏して噴出した代表的の二重式火山で、水室山硯岩、鬘柳、烏帽子等の諸山は外輪山、即ち火山壁で、その外輪山の鞍部に當るヤセオネ峠から里餘に亘る大きな平原沼の原は、何時の世にか今より高く富士の如くに聳えて居た榛名火山の頂上部を爆發してそこに生じた火山口原である。其後更にその中央部に榛名富士を生じ、その一部には水を湛へて榛名湖一名伊香保沼を生じ、榛名湖から東北に流れる沼尾川は即ち火山口湖である。また此の火山には寄生火山が多く、外輪山上にある相馬岳(最高峰で海拔一四一一米)、掃部ヶ嶽とその外斜面の淺間山や鏡臺山等がそれである。中央火山口丘榛名富士は海拔一、三九〇米七、美しい圓錐形を呈し、三〇度内外の傾斜をなし、榛名湖畔に屹立して居る。山頂には東に向つて欠けた蹄鐵形の火山口を有して居る。 〔榛名湖〕 直徑南北一軒八、東西一軒、周圍四軒、殆ど圓に近い橢圓形をなして居る火山口原で、水深は榛名富士に偏する處最も大で二〇米(一二尋)あり湖面海拔一、〇八四米、湖水は沼尾川となつて北隅の少しく突出した所から排水して居る。

湖上は藤名富士の姿を映じて風景がよく、湖邊には菖蒲の野生した所がある。湖面は二月下旬から翌春四月頃迄結氷するので、湖畔の旅館湖畔亭、富士屋等を根據地としてスケート練習に適し、また湖畔の東北に聳ゆる藤名富士のスキー場は積雪は少いが(〇・五米位)草地で、雪質がよいので、二月中はスキーも出来る。また湖畔は夏季最高温度八五度最低六〇度位で、晝夜の差が僅少であるからキャンプの好適地とされて居る。

〔交通〕伊香保町から藤名山鞍部ヤセオネ峠(一一七九米)迄ケーブルカーの便がある、所要一〇分(二杆)、賃金片道六〇銭往復一圓、三〇分毎に運轉ヤセオネ峠から湖畔迄約三杆、乗合自動車の便あり、所要一〇分、賃三〇銭、往復五〇銭(三〇分毎)、五人乗切二圓、往復三圓。

〔藤名神社〕藤名湖の西南二杆餘、湖を右に見て天神峠(一一二二米)の小坂を登り、夫からダラ／＼坂を下ること一杆八、ヤセオネ峠ケーブル終點から自動車五分、乗合六〇銭、往復一圓(三〇分毎)、賃切四圓、往復六圓。坂路の途中に葛籠岩、佛體岩、鐘岩などの奇岩が多く、また神社から藤名山町に至る途中、東方溪流の向ふに天然橋をなす鞍掛岩等、集成岩の巨大なものが多く、有名である。

神社は掃部ヶ岳の南斜面にあり、谷間に臨み、老杉巨岩に包まれた閑寂の神境にある。嘗ては二千餘坊を有して關八州を睥睨したと傳へる延喜式の古社で、今の社殿は寛政年間になり、本殿は一種の春日造り、拜殿は八棟造りである。本殿は背後の巨岩に接續して營まれ、その巨岩は神體岩と稱し、本殿から岩中の洞穴に通じ、そこに神靈が奉安されて居ると云ふ。祭神は火流靈神、植山毘賣神を祀る神社である。

此處から更に少し下れば山の斜面に藤名山町の人家があり、尚下れば室田、里見の町々を経て高崎に出る道がある。

藤名町―高崎間直通自動車がある、一時間二〇分(二八杆餘)、料金片道一圓、往復一圓九〇銭(一時間乃至二時間毎に一日六回あり、但途中下室田から高崎迄は一時間毎にある)賃切五人乗六圓。

草津温泉

群馬縣吾妻郡草津町。

▲上野―澁川間汽車二時間四分(一二二杆五)、三等一圓八二銭。  
▲澁川―川原湯―草津間自動車二時間四分(五九杆四)、乗合片道二圓七〇銭(一日七回)、賃切五人乗一五圓(省線と連帶乗車券を發賣する、片

土地乾燥開豁なるが故に日照時間多く、空氣乾燥清澄にて健康に適し、氣温は盛夏と雖日中八〇度を越ゆることがない。

温泉の歴史は頗る古く景行天皇四〇年(約千八百年前)日本武尊の發見とも云ひ、又養老年間(約千二百年前)行基菩薩が藥師如來の示現に依つて發見したとも傳へて居る。湧泉量は非常に多く、その主なるものは八代將軍吉宗公の御波上の湯(松の湯)を中心として熱の湯、御座の湯(白旗の湯)鶯の湯、地蔵の湯の五ヶ所あり、何れも酸性明礬泉で、その一ヶ所中には明礬の主成分たる硫酸アルミニウム一グラム以上を含む上に遊離の硫酸二瓦位を含んで居るので、皮膚病に効くのも、草津獨特な時間湯と云つて入浴時刻を制限したりするものもこの爲であると云ふ。温度五四度乃至五九度、花柳病、皮膚病に特效ありと云はれ、胃腸病、眼病、痔疾、リウマチス、神經衰弱等にも効くと云ふ。

草津名物の時間湯と云ふのは、五ヶ所の共同浴場があり、そこに一日四回一定の時刻に湯長の指揮の下に、入浴者は各自に長い板を持つて「草津よ」と一度はおいでトツコイシヨ、お湯の中にもコリヤ花が咲くよチヨイナ／＼の節面白く唄はれる歌の調子に合せて一同湯を揉み合ひ、温泉に一定の温度を保たしめて規律的に入浴するものである。入浴時間は三分間に限られ、野趣満々、草津獨特の奇觀である。

〔旅館〕草津ホテル(電草津二〇番、和室一五、一泊二圓半―五圓洋室三〇、七圓―九圓、③三圓)、大阪屋(電八・二三、室六六、③三圓)、一井(電一、室六二、③三圓、日新館(電一・一三、室五五、③三圓)大東館(電一八、室五三、③三圓)、望雲館(電一〇・一一〇、室五五、③四圓)、きり山(電二・一〇四、室四〇、③三圓)、奈良屋(電三、室三五、③一圓八〇銭)、細野(電二、室三一)、山本館(電一九、室三〇、③二圓半)、古久長(電二八、室二三)、山幸(電三五、室二二、③二圓)、ての字屋(電二二、室一五)(以上普通一泊二圓乃至五圓)、富久住(電三四室三二)其他。

〔附近の名所〕▲白根神社 日本武尊を祀る郷社で境内閑寂、平家の化燈籠

道二圓四〇銭往復四圓七〇銭。

▲上野―輕井澤間汽車四時間二五分(四二杆三)、三等二圓八錢。

輕井澤―草津温泉間電車約三時間(五五杆五)、三等二圓。

▲香掛驛から峯ノ茶屋・鬼押出・石津等を經て草津迄箱根土地會社の乗合自動車一時間半(四三杆餘、二七哩)、一日二回自五月一五日至一月一五日運轉、七月―九月は三回發(但グリーンホテルから三原までは専用自動車路につき他社の乗用車によるときは通行料一圓を要す)、料金片道二圓、往復三圓。

▲信越線上田驛―真田驛間上田温泉電軌で三分(二二杆八)賃四〇銭。真田驛―鳥居峠六杆六、上田温泉電軌自動車にて、夫から他社に乘換き草津電車新鹿澤温泉口驛迄約一杆、自動車一時間二〇分、乗合一圓五〇銭(一日四回)。

新鹿澤驛―草津間電車約一時間(一八杆七)、賃六八錢。

上田―草津間六人乗切二圓(二時間)。

草津からは白根山を越えて萬座温泉へ下る道もあり、澁峠を越えて信州の平穩の温泉郷に下る道もあり、花敷温泉(二二六頁参照)を経て四萬へ行く山道、葛阪峠を越えて澤渡温泉(二二六頁参照)へ行く道もあり、長野原を經て川原湯方面へは自動車を通じて居る。

▲草津から澁温泉に出るには山道約三二杆ある。上り二二杆下り二〇杆で約一日を要する。冬季積雪期にはスキーに上達せる人ならば行く事が出来る。

草津は海拔一、二〇八米の高地にあり、古來攝津の有馬に對して東國第一の名湯と稱せられて居る。地は上州吾妻郡の中でも特に信濃國境に近い山嶺重疊の間にあつて、白根山西に聳立し澁峠は北に、吾妻・岩蓼・萬座・淺間の諸峰蜿蜒として繞り、東北は入山村を隔て越後と界し、東南には一望廣漠たる大高原が展開して遠く起伏する八州の山岳を望んで居る。殊に白根・淺間の白煙碧天に漲る様は實に壯觀である。

と云ふものがあり近くには草津公園及草津町を一目に眺める見晴茶屋がある。▲高山植物園 白根神社の石段を右折して二〇〇米許り、はまれ亭の後庭にある。▲賽の河原 白根神社から琴平神社を經て六、七百米、温泉が到る所から湧出し奇石面白く散在して居る。▲動搖石 賽の河原から三〇〇米、一抱程の巨石が指頭でユラ／＼動く奇石である。▲獅子岳 賽の河原から約四杆、殺生河原にあり、白根噴火の熔岩が固つて其の形を爲して居るものを云ふ。其他香草の湯、澁峠の途中にある小蓋の池、町から東三杆の所にある堀仙の淵等がある。

▲草津スキー場 運動茶屋附近、天狗山附近、白根山麓の各斜面、香草の湯附近等に好スロップがあり、賽の河原上、天狗山の麓にはシャントエがある。積雪量は大概二、三尺で、二月下旬から三月下旬迄出来る。▲「白根山」草津の西方に位置する活火山で、一に草津白根と稱し南北二つの火山から成つて居る。南にあるのは木白根山(海拔二、一七六米)、北に並ぶのは白根山(二、一六二米)で、共に秀麗なる雄峯をなす。前者はむしろ熔岩臺とも云ふべく、後者は層岩體である。白根山の頂上には巨大な火口があり、東西に長い楕圓形を呈し長徑八〇〇米、短徑四〇〇米、口底に三個の火口湖を有し、中央を湯釜、西を湯釜、東を水釜と稱して居る。湯釜には酸性の熱水が湧き、其水色黄青色であるが、湯釜、水釜には黄濁の冷水を湛へ、湯釜の西部には硫黄を混する泥土が堆積して居る。この火山は明治以來に於ても小爆發を繰返し、湯沼は明治一五年に、弓池は同三六年にも活動をなし、山頂の南に多くの爆裂火口がある。

登山には草津町から山頂迄約八杆、上り約三時間、下り二時間位。澁峠道の途中、芳ヶ平から左折して約四杆で頂上に達す。その途上に硫黄採取の小屋があり(草津から此處まで駄馬で登る事が出来る)そこから西に向へば三杆下つて萬座温泉に行かれる。山頂からは日光群山、北アルプス、妙高から淺間の噴煙を望み眺望開豁である。

【香草温泉】草津町にあり、草津温泉場から徒歩約三杆半、海拔一、三五〇米の高地にあり、酸性硫黄泉で慢性胃腸病、婦人病、痔疾、蓄膿症、神經衰弱、リウマチス、貧血症に効く。〔旅館〕山樂園、三食付一圓半。  
【湯の平温泉】吾妻郡六合村入山。草津から徒歩約四杆、入峯と全く隔絶した山奥の仙境で、湯は須川の河底に湧出するものを電力で四〇米の高所に於る浴槽に汲み上げて居る。無色透明の石膏性苦味泉で、温度五四度、腦病・胃



腸病・脚氣・リウマチス・便秘に効がある。「旅館」松泉閣一泊二圓均一。  
 【藤徳温泉】前記湯の平温泉から須川に沿ふて約半軒許り登つた所に近年再興した温泉である。硫黄泉に屬し、四九度、ネプト・梅毒・皮膚病・婦人病・痛風等に効く。「旅館」朝日館、一泊一圓二〇錢位。  
 【花敷温泉】前記藤徳温泉から更に須川に沿ふて進むこと約八軒、無色透明の鹽類泉で五〇度乃至六〇度、子宮病・瘰癧・産前産後血の道に効くと云ふ。「旅館」中村屋、關晴館、一圓半位。尚此處から約半軒の上流に尻髭温泉がある。地方の人々が各自食料器具を持参し、痔疾や婦人病になやむ者が臀部の入る丈の穴を掘つて其患部のみを湯に浸して療治する事云ふ事である。

四萬温泉

群馬縣吾妻郡澤田村四萬。  
 前記澁川驛の西北四〇軒一、自動車約一時間半、乗合片道一圓五〇錢(六回以上)貸切八圓、省線と連絡切符發賣する(片道一圓三五錢、往復二圓六〇錢)。前記伊香保と同様クーポン式遊覽券を發賣してゐる。旅館一泊を含めて上野から三等八圓五〇錢。

温泉は新湯を中心として下流に山口、上流に日向見あり之等を總稱して四萬温泉と云ふ。地は海拔七六〇餘米、山巒四周、西に高野東に水晶の翠巒繞り、四萬川、新湯川、日向見川の溪流美と秋季に於ける紅葉の美觀と旅館の設備と相俟つて、上毛温泉中の白眉として、伊香保・草津と並稱せられ、療養的温泉地として知られてゐる。温泉は無色透明の弱食鹽泉で、温度五四度乃至八五度、胃腸病・リウマチス・婦人病に特效があり、蒸風呂、痔蒸しの設備や、プールの設けもあり、旅館の内湯の外に河原の湯・鹽の湯・上の湯・天然風呂がある。

【旅館】田村賽陵館(電四萬五・六・七、室二六、一泊二圓半一圓五) ③三圓、積善館(電同二・三・四、室一五六、一泊同上、④三圓)(以上新湯) 山口館(電同八・一、室八四、一泊二圓一圓四、⑤三圓)、鐘壽館(電同二・三、室七二、一泊同上、⑥三圓)、四萬館(電二二、室五、一泊同上、⑦三圓)

本館(電五、室三〇、一圓半一圓半)、養壽館(電二、室三〇、一圓半一圓半)、①一圓八〇錢、山木屋(電四、室一〇、一圓半一圓半)、柏屋(内湯なし)、高田屋(同上)自炊向、

【鳩の湯温泉】群馬縣吾妻郡坂上村本宿。高崎驛から自動車乗合一圓六〇錢。地は温川の流に臨んだ青巒四周の地である。温泉は炭酸泉で、四三度、痔疾、座骨神経痛に特效がある。

【旅館】三鳩樓一戸、室二二、一泊一圓二〇錢一圓二圓。

【松の湯・川中温泉】群馬縣吾妻郡岩島村。澁川から前記川原湯に向ふ途中川中迄約三三軒、自動車一時間二〇分、一圓二〇錢。そこから右折する事約半軒の所に松の湯、一軒三の所に川中温泉がある。共に鹽類性硫黄泉で温度三三度、浴用加熱す。皮膚病・胃腸病・腺病・婦人病・花柳病・呼吸器等に効があると云ふ。

【旅館】松溪館(松の湯)、颯鳴館(川中)、一泊一圓乃至二圓位。

【大塚温泉】群馬縣吾妻郡名久田村大塚。澁川驛から北二八軒、途中二三軒の中の條迄自動車四〇分、七〇錢、又は電車で一時間二〇分、三六錢。中の條から北へ名久田川を渡る事約五軒。硫黄泉で皮膚病・腺病・梅毒・リウマチス等に効があると云ふ。

【旅館】金井旅館一戸、一圓一圓二圓位。

【鹽川温泉】群馬縣小野上村鹽川。澁川驛から約一一軒、電車二七錢、自動車五〇錢。吾妻川の左岸に沿ふた景勝の地で、火傷及一般皮膚病に効くといふ。

【旅館】高田館一戸(室八、一泊一圓位)

【我樂目温泉】群馬郡相馬村。高崎驛一箕輪町九軒七、自動車三〇分、乗合片道三〇錢、往復五〇錢、一時間毎。前橋驛一箕輪町間一軒三、自動車三五分、乗合片道三〇錢、往復五〇錢、一時間毎。箕輪町から相馬ヶ原金明水迄約六軒、貸切り五人乗一圓半。金明水からガラメキ温泉迄徒歩約四軒。或は伊香保の南約六軒(駄馬三四位)、また隣名山ヶ原峠終點ヤセオネ峠から摺臼峠を経て約四軒下つて行く道もある。地は相馬ヶ岳の東南麓にある。無色透明の鹽類泉で火傷・皮膚病・梅毒等に効がある。

【旅館】富士見館(室八、一泊八〇錢一圓二圓)、阿蘇山館(室六、一泊八〇錢一圓半)、の二戸。

上山口湯、三木屋(電同二七、室二五、一圓二〇錢一圓三圓)、日向見館(電同二五、同上)、豐島屋(電同二六、室一三、同上)、玉泉館(電同三)。  
 【附近名所】嘉滿ヶ淵・澁砥泉・風泉峽などあり、新湯川、日向見川の上流には瀑布多く、中に摩耶ヶ淵・小倉の淵・神仙の淵等有名である。日向見の薬師堂は鎌倉時代の建築で國寶となつて居る。

四萬から山越に草津へは二八軒徒歩七時間、法師へは一軒半、徒歩五時間(二八頁参照)の山道があり、共に殆ど一本筋の道である。

【澤渡温泉】群馬縣吾妻郡澤田村上澤渡。前記澁川驛の西北三二軒七、自動車一時間二〇分、乗合一圓二〇錢(一日四回)、貸切七圓。

地は秋葉、有笠の翠巒に挟まれ、蛇野川がその間を緩流して居る海拔七〇〇米の地にあり、療養地として適して居る。温泉は無色透明の鹽類泉で、温度五二度内外、皮膚病・神経諸病・婦人病・花柳病などに効がある。

【旅館】福田屋、龍鳴館、萬屋、丸木、虎屋、新叶屋、一泊一圓二〇錢乃至二圓半。

川原湯温泉

群馬縣吾妻郡長野町川原湯。

澁川驛の西約四〇軒一、自動車一時間五〇分、乗合一圓五〇錢(一日九回)、貸切八圓。(省線と連絡券發賣する、片道一圓三五錢往復二圓六〇錢)

草津からは東南約一九軒三、自動車五五分、乗合一圓二〇錢(一日七回、貸切七圓)。

無色透明の硫黄泉で、三ヶ所から湧出し、温度七一度、皮膚病・子宮病・胃腸病・リウマチス・神経痛等に効がある。

地は金鷄山の中腹、吾妻川の溪谷を左にする勝景の地で關東耶馬溪として世に知られて居る。東の入口の八場大橋千歳新橋の大鐵橋及び温泉場の西二軒餘に架けられた辨天橋は共に溪流を眺むる勝地で其他周圍五〇尺もある神代石獅子宰の瀧、坂上村の仙人窟など杖を曳くべき名所がある。

【旅館】敬業館(電川原湯六、室五〇、一泊二圓一圓四圓、③三圓)、山

【總社温泉】群馬郡總社町。前橋市から三軒餘、上越南線群馬縣驛から約三百米、利根河にあり、北東に近く赤城の秀嶺を望んで風光がよい。赤褐色の弱アルカリ性鐵泉で、リウマチス・神経痛・胃腸病・婦人病等に効がある。

【川場温泉】利根郡川場村。沼田驛の東北一三軒、自動車乗合片道六〇錢、四〇分(一日三回)。(上野一沼田汽車三時間、三等片道二圓八錢)

無色透明の鹽類泉で三八度、昔から脚氣川湯と云はれ、脚氣・リウマチスに特效がある。「旅館」關、山市屋。二圓一圓半。

川場への途中二軒許り手前薄根川の畔に鹽河原温泉があり、婦人病、創傷に効があるといふ。また川場から東北二軒、薄根川の上流に小住温泉がある。

【老神温泉】利根郡老神村。同上沼田驛の東北一六軒、大原新町まで自動車あり(乗合片道一圓、往復一圓六〇錢、貸切五圓)、街道から右へ六、七百米離れた片品川の溪を下る、徒歩一軒三。硫黄泉で花柳病・皮膚病に特效があり、旅館には内湯がある。

【旅館】朝日館(電追員一四、上田屋、老神館(電追員一三)、上の湯元館(電同上)、下の湯元館(電追員一二)、末廣館、山口館、榮屋。一圓半一圓二圓)別に白雲閣には赤城温泉、關場館には關場温泉があり專屬浴場を有して獨立してゐる。

【穴原温泉】利根郡東村穴原。前記老神の對岸にあり、同じく硫黄泉で四六度、リウマチス・花柳病・皮膚病に効く。

【旅館】東秀館(電追員二四、室一六、一圓半一圓半、自炊五〇一七〇錢)。

【白根温泉】利根郡片品村。同上沼田驛の東北三六軒、追員を経て自動車の便あり一圓半、一五五頁参照。

【湯宿温泉】利根郡新治村布施。後閑驛の西北約八軒、自動車約三〇分、乗合片道三〇錢、往復五〇錢(一日七回)貸切一圓半上野一後閑汽車三時間一四分、三等片道二圓一圓四錢途中赤谷川に沿ふて走る三國街道の月夜野橋を渡つた所に義民磯茂左衛門を祀つた地藏堂があり(領主眞田氏の苛政を憤慨して將軍に直訴し、終に磔刑に處せられた人)、下新田には鹽原多助の墳墓、紀念碑があり、生家は愛馬青との別れ松と共に今も残つて居る。

温泉は無色透明の弱鹽類泉で温度六〇度、胃腸病・婦人病・リウマチス等に効があると云ふ。

〔旅館〕金田屋、湯元館、常磐屋、大瀧屋、太陽館、一泊八〇錢—一圓半。前記後閉驛の西北二一軒餘、自動

車四五分、乗合六〇錢(一日數回)、往復一圓、貸切三圓。前記湯宿から赤谷川に沿うて上流四軒、赤谷川の奇勝相

生橋下の風景美の地を占めて居る。温泉は鹽類泉に屬し六〇度位、もと眼疾に效くと云ふ微温湯のみであつたが、近年上流約半軒の湯島温泉から熱泉を引いた。胃腸病・リウ

マチス・婦人病に效がある。〔旅館〕相生館(室二、二圓、二圓半、②二圓)。

〔湯島温泉〕前記笹の湯から北へ徒歩約半軒。赤谷川の流に臨んだ所にあり、温泉は鹽類泉で八八度、湧出量頗る多く、胃腸病・婦人病・脚氣に效がある。別に近くに見晴温泉がある。

〔川古温泉〕利根郡新治村赤谷道。前記笹の湯から北へ徒歩四軒餘、赤谷川の上流海拔九〇四米の地にあり、旅館は木質式の齋屋一戸、(室九、一泊八〇錢—一圓二〇錢)温泉は鹽類性硫酸泉で九〇度弱、腫物に特效があると云ふ。

法師温泉 利根郡新治村法師。前記後閉驛の西北二二軒、湯宿、笹の湯を経てゆく。後閉驛—猿ヶ京間一二軒は、坂東自動車の大形バス一日七回往復す、所要約四八分、乗合片道六五錢。往復一圓一〇錢、貸切五人乗三圓。猿ヶ京—法師間約一〇軒は夏季中に限り小型自動車不定期運轉す、所要約四〇分、乗合片道六〇錢。後閉—法師間貸切六圓。

地は上越國境三國峠の南麓、大利根の支流赤谷川に注ぐ西川の溪流に臨み、海拔八〇七米、四面全く翠巒に圍まれた閑寂境である。

温泉は弘法大師發見の傳説を傳へて法師の名を負ひ、河床の一部に浴場を設けた原始的なもので、泉質は單純泉で玲瓏玉の如く清澄無比、旭の湯、壽の湯に分れ、旭の湯は腦病、眼疾によく、逆上引き下げに特效があると云はれ、胃腸病に效がある。

〔旅館〕菊富士ホテル(電湯原一〇、室二三、一泊一圓半—四圓、②二圓半)、藤屋(電二〇、室一一、一泊一圓半—三圓、②二圓半)、古屋(電同七、室四〇、一泊二圓—五圓、②二圓半)、白雲館(電同三九、室二〇、一圓半—三圓)、米屋(電同三三、室一〇、同上)、大國屋(電なし、室一一)

〔小日向温泉〕利根郡水上村小日向、水上驛の南約七百米、自動車乗合一〇錢。利根川を挟んで前記湯原温泉と相對してゐるので附近の風光など湯原と大差ないが、温泉は鹽類泉で六〇度、皮膚病に特效があると云ふ。

〔旅館〕水上館(電湯原三七、室二六、一泊一圓半—三圓半、②二圓半)。

大穴・鵜の瀬温泉 利根郡水上村、水上驛から七〇〇米—二軒半、乗合一〇錢—一五錢。

温泉は無色透明の弱鹽類泉で胃腸病・婦人病・下痢症・リウマチス・脊髄病・腺病・諸神経病に效がある。

〔旅館〕奥利根館(電湯原二五、室二五、一圓半—三圓)、鳴瀧別館(電同二八、室二八、同上、②二圓半)、かの澤館(電同二・三、室二二、三圓—五圓、大廣間あり、②三圓)、蒼海ホテル支店(電二五、室一〇、一圓半—三圓)、山景館(室五、同上)、神峽樓(電ユビソ七、湯原五二、水上驛から二軒半、バス一五錢、一泊三、四、五圓)。

谷川温泉 利根郡水上村谷川、水上驛の西北二軒七、自動車貸切一圓二〇錢。

上越線に沿ふて (水上温泉)

壽の湯は胃腸病・リウマチス・婦人病に效くといふ。〔旅館〕長壽館一軒(室五〇、普通一泊一圓半—四圓、②一圓八〇錢)。

附近には箱淵、大般若塚、明治戊辰役古戰場、百間瀧、三國権現瀧等の名所がある。権現瀧は三國峠上にあり、温泉場から登り四軒二、峠は上越國境の分水嶺で海拔一、二四四米、此處から遙かに日本海が雲烟模様の彼方に眺められ、湯島温泉を経て(二三〇頁参照)湯島温泉に出られる、行程約三三軒、此の道は所謂三國街道で、往時は長岡、新發田、與板城主などの江戸への参勤の折通行した道で、健脚者には興のある行路である。三國峠附近は狩獵期には兎、山鳥の獲物が多く、秋の茸狩によく、また温泉場への途中、西川に沿うて八軒の間は紅葉の美観が實によい。

尚法師入口から赤澤林道を約一軒半、五時間で四萬温泉に出る事も出来る。法師—赤澤峠間六軒、上り二時間半(下りは二時間)、赤澤峠—日向見温泉入口間四軒、石楠木尾根を下る、二時間(上りは二時間半)、それから四萬迄一軒半、三〇分位。此の林道は平日行程に樂な山旅で、新緑・紅葉が殊によい、途中数ヶ所に休憩所がある。

〔利根温泉〕利根郡古馬牧村上牧。上牧驛の西方二二〇米、(上野—上牧汽車三時間二五分、三等片道二圓二五錢)利根川の西畔にあり、近年繁栄したものである。温泉は石膏苦味泉で、三八度、リウマチス・神経痛・皮膚病に效く。

〔旅館〕辰巳館(室三三、一泊一圓半—二圓半)。

〔大室温泉〕利根郡桃野村石倉。前記上牧驛の西方三三〇米位、前記利根温泉の對岸にあり、利根温泉と同じ泉脈であるから泉質及効能は同様であるが温度は稍高く、五〇度である。〔旅館〕大室館(室一五、一泊一圓半—二圓半)右兩温泉とも利根入諸温泉の關門をなす所で、清流に沿ひ、溪谷美に富み、夏は避暑によく、春秋の蕨狩や茸狩を兼て附近利根溪谷諏訪峽の探訪に、また高橋お傳の生家、白木屋お駒の墓を探るのも一興である。冬季は温泉場から一軒の上牧スキー場の好スロープがある。

尚驛から東四軒に奈女温泉があり、神経痛・リウマチスに效がある。湯原温泉 利根郡水上村湯原。水上驛の南八〇〇米、驛側の小日向温泉迄自動車で行く、乗合一〇錢、貸切五〇錢。(上野—水上汽車三時間三五分、三等片道二圓三錢)。

ふものもある。附近にはスキーの好適地がある。〔旅館〕谷川館(電湯原三一、室五〇、一泊一圓半—二圓半、②二圓)共盛館(室一五、一圓半—二圓半)、紅葉館(室一七、一圓半—二圓半、②二圓)、金盛館(電同二六、室一七、一泊一圓半—二圓半)、向島館(室一〇、一圓半—三圓)。

〔寶川温泉〕利根郡水上村寶川。水上驛の東北約一九軒、途中大穴迄二軒の間自動車の便があり、利根本流に沿うて湧ること一七軒、それから支流寶川の上流二軒の地にあり、歐馬二圓。但今秋頃には湯檜曾から温泉場の二軒手前まで自動車路開通の豫定である。無色透明の鹽類泉で、温度六五度、眼病・腦病・疝氣・婦人諸病等に效があるといふ。

〔旅館〕木質式の温泉館一戸(室一一、一泊八〇錢—一圓二〇錢)。

〔湯の小屋温泉〕水上村湯の小屋。前記寶川温泉から東北四軒徒歩の地にあり(今秋迄は六軒手前の所まで湯檜曾から自動車路開通の豫定)、峻樹重疊してゐる文殊岳の麓、海拔七六〇米の地で、五、六月の候櫻花一時に開く仙郷である。世に藤原郷と呼ばれる傳統的美人郷は即ち此の附近であるといふ。温泉は清澄な鹽類泉で泉量豊富、温度五四度、腦病・皮膚病・胃腸病・リウマチス等に效があるといふ。〔旅館〕湯元館(室五、一泊一圓一戸)。

湯檜曾温泉 利根郡水上村湯檜曾。湯檜曾から坂路約一〇〇米下る又は前記水上驛から約四軒半、列車毎に自動車の便もある(一〇分、片道二〇錢、貸切一圓)(上野—湯檜曾約五時間、三等片道二圓三九錢)地は清水峠の入口で、此處から約二軒上ると有名な清水大トンネルの入口がある。利根川の支流湯檜曾川に臨み、後方には上越國境の群山連り、空氣清く、静寂の境で、療養に好適の地である。温泉は昔陸奥の豪族安倍貞任が此の

地に逃れて発見したものと傳へ、湧泉豊富で、旅館の設備も比較的整つてゐる。

上越線の湯檜曾驛は温泉の後山のトンネル内でループ式となり、トンネルを出た所であり、今迄走つて来た線路が俄に眼下に瞰下されるので一種奇異の感を抱かしめる。附近は狩獵に適し、山鳥や雉の獲物が多く、冬期は土合、大穴等の好スキー場が近くにある。(水上―湯澤間の乗車券所持のスキーヤーは土合信號所で乗降する事が出来る。湯檜曾―土合間約三軒半)。

温泉は無色透明の鹽類泉で、泉温六五度、胃腸病・婦人病・脳病・神経痛等に效がある。

湯澤温泉

越後湯澤驛から西北へ約一軒二、自動車六分、乗合五錢、五人乗一臺五〇錢。尙急行列車停車驛の石打驛前三〇〇米の石打村からも自動車が出く、所要二〇分(六軒)、乗合一四錢(八回)。

上野―越後湯澤間約五時間四〇分、三等片道二圓六八錢。  
地は温泉岳の麓、海拔約三六〇米の所にあり、東に飯土山の秀峰聳え、遙かに上越國境の太源太、七ツ小屋、茂倉、萬太郎、谷川富士などの連峰を眺め、魚野川の清流を見下して環境雄大である。温泉は千年以上の昔に発見されたものと傳はり、無色透明の單純泉で、温度約三八度、中風・痛風・リウマチス・胃腸病・性病・貧血諸症に效があると云ふ。

〔旅館〕 高牛(電湯澤九、室五〇、②三圓)、湯澤ホテル(電四四、

室二五、舞臺付七〇疊の大廣間及内湯、家族風呂がある。②二圓、中屋(電一四、室一四)、碓屋(電二五、室一一)、岸野(電三三、室七)、福泉(電四七、室五)、西仁(電二八、室六)、玉泉、廣川屋、熊野館(以上一泊一圓半乃至三圓。何れも内湯がある)。

此處は以前は三國街道の驛路にあたり、その旅人の疲勞を癒す處として相當賑はひ、山間にある割合に昔から人に知られた處で、今も當時の宿驛の建物が残つてゐる。

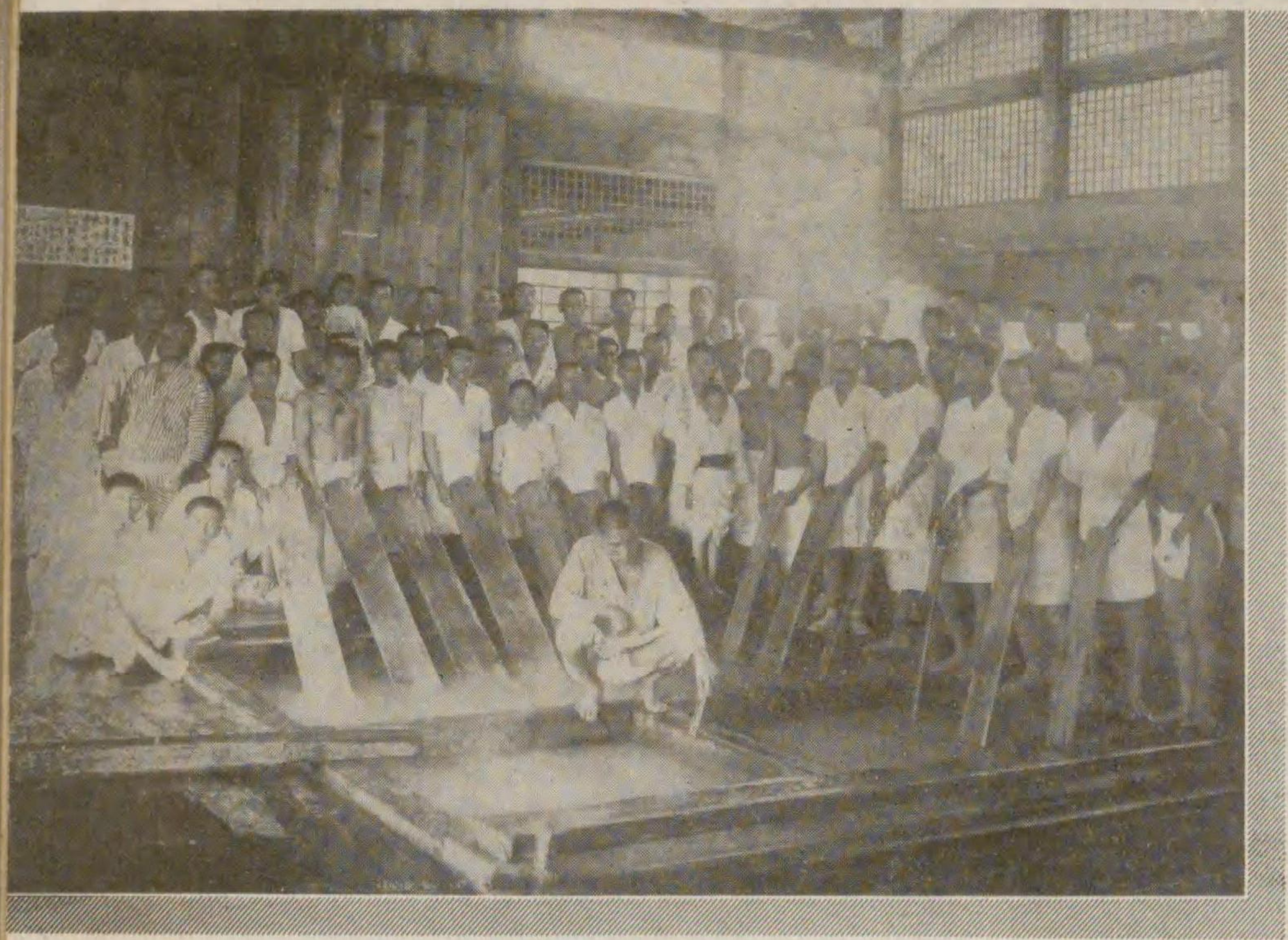
附近には諏訪公園、瀧澤の瀧、藥師堂があり、温泉の裏山に續く「布場」はスキー場として知られて居る。此の地方は妙高山麓や高田地方と同じく、日本有数の降雪地で、二月下旬から四月上旬まで約三米以上の積雪があり、奥地上越國境に近づくに従つてその量を増し、到る處スキーの好スロープがある。

大峯山麓の布場は初心者によく、熟達者には大峯山(一、一七〇米)の山歩道も面白く、附近の山々や苗場山へのスキー登山は、最も興味あるものである。また清水峠又は蓬峠を越えて、土合又は湯檜曾方面へのスキー旅行は、山好きの人々の捨て難いプログラムである。

湯澤から三國峠の北麓淺貝まで約二〇軒、途中約一二軒の所に眼疾に特效のある貝掛温泉がある。  
〔貝掛温泉〕 新潟縣南魚沼郡三俣村。越後湯澤驛から約一二軒、自動車五〇分、乗合四五錢(一日四回)、貸切四圓半。地は清津川の左岸にあつて湯澤川の落口に當つて風光がよく、清津川沿岸の櫻花及紅葉の美觀が特に勝れて居る。また三國街道に當つてゐるので、法師から三國峠越しの探勝者の疲れを醫するによい所である。温泉は無色透明の鹽類泉で、微温ではあるが、眼病に卓効があるので賑はつてゐる。其他腦病・ヒステリー・呼吸器病等にも効がある。

〔旅館〕 茂木館一軒、室一四、一泊一圓半、二圓、二圓半。

此處から三國峠の麓淺貝まで約一二軒、湯澤驛から此處まで貸切自動車を通ずる事が出来る。五人乗一臺九圓、淺貝から三國峠迄上り約六軒、徒歩約二時間、夫から法師温泉迄下り約四軒、徒歩一時間位。



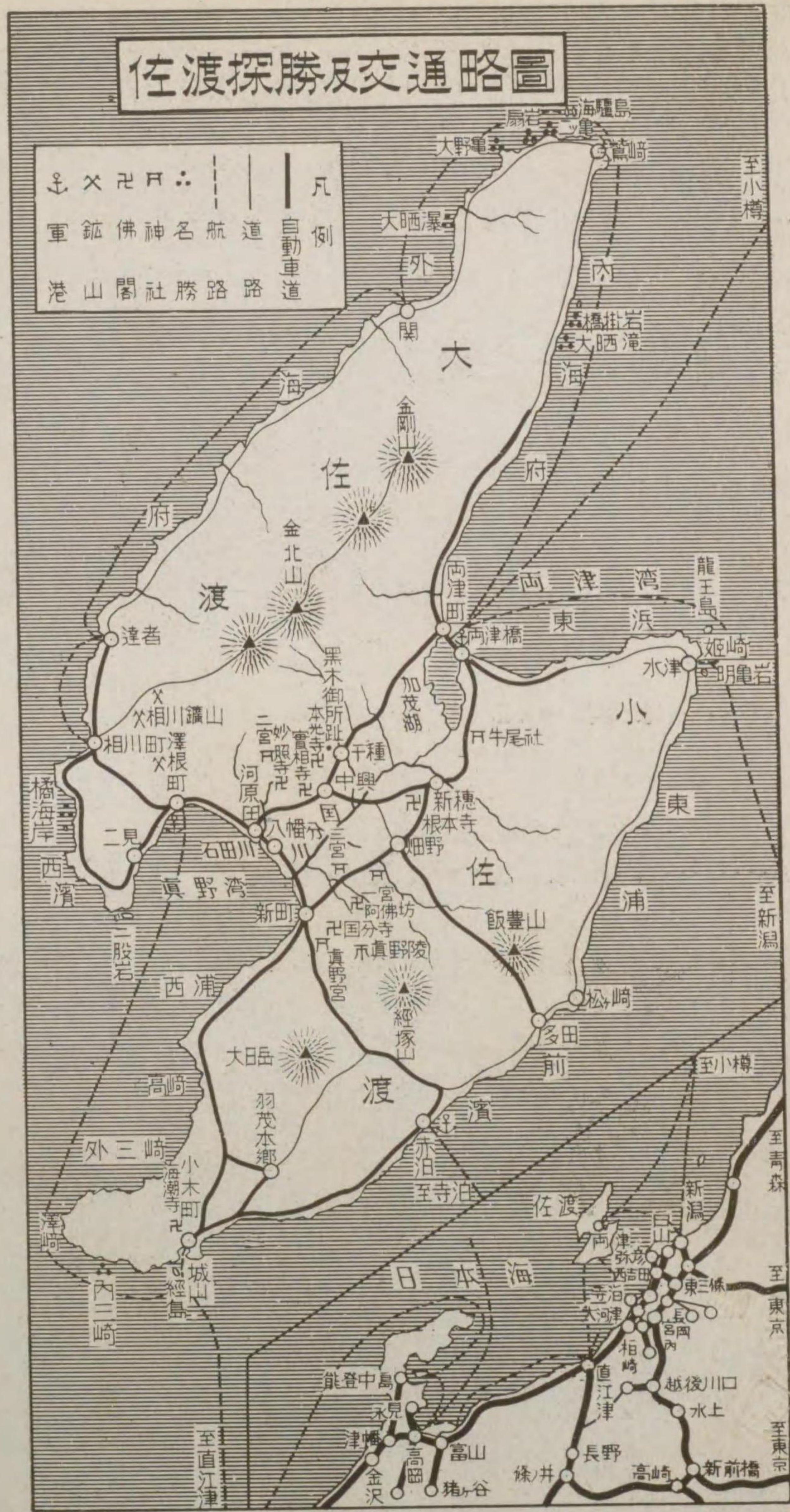
(上) 草津の時間湯

津 草 津 一 度 一 こといよ津 草

佐 渡 佐 渡 へ と 草 木 も



(下) 佐渡のおけさ踊



佐渡ヶ島遊覽日程案 (東京から四日)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發後 一〇・五	上越線經由秋田及新潟行列車、車中泊、二等寢臺アリ	▲上野—新潟九時間〇二分(三三二軒一)三等四圓一錢。 「註」前晚水上温泉ニ泊(二九頁参照)、水上驛發前八時一八分、新潟着後一時一三分ノ列車ニ乗り、新潟市内一瞥後おけさ丸ニ乗船サルモヨイ。
第2日	新潟驛 新潟港 佐渡(夷)	着前 七・七 發後 四・三 着後 七・〇	下車、遊覽 佐渡汽船 (四月—九月) 宿 泊	▲新潟驛カラ市街へ乗合自動車一區三錢、四區以上ハ一〇錢均一。 ▲新潟—佐渡夷間汽船テ二時間半(三三運)佐渡汽船會社おけさ丸 毎日就航(四九〇噸、定員特別室八人、二等七人、三等三人)、船賃片道三等一圓半、二等二圓五〇錢、特等三圓五〇錢。 「註」▲一〇月カラ三月迄ハ新潟午後二時發、夷四時半着アル。 ▲別ニ新潟發前八時、兩津着 一・三〇ノ第八佐渡丸毎日就航シテ居ル(二三〇噸定員特別室二人、二等五人、三等一五人、船賃同上)。 ▲縣營埠頭カラ乗・下船ノ場合ハ船賃ヲ要セ又ガ西新潟下船ノ際ハ一〇錢ヲ要スル。 兩津旅館 丸屋(二圓半)、木間(二圓半)(三三四頁参照)
第3日	兩津町 河原町 相川町	發前 七・〇 着前 一〇・〇 發後 二・〇	乘合又ハ貸切自動車 金山見物 晝食 乘合又ハ貸切自動車	「遊覽順序」 根本寺—井戸堂—黒木御所跡—實相寺—妙照寺—川原田町—相川町—金山見物ノヲ晝食。 ▲乗合自動車 兩津—新穂(一〇軒五)三分、乗合二五錢(一時間毎)貸切二圓。 ▲新穂—中興(五軒一)五分、中興—相川(三軒七)五分、三〇錢。 ▲貸切自動車 兩津—新穂—川原田—相川(一九軒)一圓六圓、兩津—相川間乗合前六・四〇—後五・四〇(兩津發は七時迄)四〇分毎に發、實五〇錢、一日貸切二〇圓。 相川町(三三五頁参照)。 「遊覽順序」 河原田—八幡—越ノ松原—境風城址—阿佛坊—國分寺—眞野宮—眞野御陵—戀ヶ浦—蓮華峯寺—小木町安隆寺—箭島—經島—小木ニテ夕食—夜一時小木港出帆—直江津へ。

佐渡(遊覽日程案)

日	第 4 日	日
上野驛	直江津驛	小木港
着後 四・五	發前 六・五	發中夜 一・〇〇
歸 宅	上野行列車	第一佐渡丸
		下 船

▲乗合自動車 相川―河原田(九料八)三〇分、二五錢。直江津―上野(七料二)三〇分、二五錢。新町―小木(三料五)一時間半、九〇錢。  
 ▲河原田―新町(五料二)二〇分、一〇錢。新町―小木(三料五)一時間半、九〇錢。  
 ▲相川―新町(五料二)二〇分、一〇錢。新町―小木(三料五)一時間半、九〇錢。  
 ▲貸切自動車 相川―新町―小木(三料五)一時間半、九〇錢。相川―新町―小木(三料五)一時間半、九〇錢。  
 ▲小木―直江津間佐渡汽船會社第一佐渡丸(七〇噸)自四月至一〇月毎日定期運行ス、所要四時間(三六哩)船賃一等三圓、二等二圓三〇錢、三等一圓五〇錢、外ニ船賃トシテ小木一〇錢、直江津二〇錢ヲ要シ、船八本船出帆ヨリ三〇分前ニ出ル。  
 「註」▲小木發午前八時、赤泊發九時半、寺泊着一時半ノ佐渡汽船會社第二佐渡丸(一八〇噸)ノ便アリ、赤泊迄並等三〇錢、二等四五錢、特等六〇錢、寺泊迄並等一圓五〇錢、二等二圓三〇錢、特等三圓。  
 ▲直江津着船場カラ直江津驛へ約一料。  
 ▲直江津―長野―上野間一〇時間二〇分(二九二料二、三等三圓七一錢)。

(參考)

一、直江津―高田を回遊シテ高田發後一七時一七分の急行ニ乗車(金澤發二、三等急行、二、三等發臺アリ)、第五日午前七時上野着、又ハ途中赤倉温泉ニ泊(二五五頁參照)、或ハ長野下車善光寺(二五三頁參照)ニ參拜シテ歸ルモヨイ。  
 二、第四日小木ニ泊、第五日午前六時半頃自動車ニテ小木發同八時半兩津着(四四料、一臺一〇圓)兩津發午前九時ノおけさ丸ニ乗船、正午新潟着、磐越線ヲ廻ツテ東山温泉(二〇三頁參照)ニ一浴ノ上歸京スルモヨイ。新潟―郡山―上野三等四圓八四錢。

旅行費用概算

二等 三九・七九  
 三等 二六・一七

内譯

上野―新潟二等八圓二二錢三等四圓一一錢。直江津―上野二等七圓四二錢三等三圓七圓七一錢。自動車賃二圓〇五錢(備考參照)汽船賃新町―兩津二等二圓五〇錢三等一圓五〇錢。小木―直江津二等二圓三〇錢三等一圓五〇錢。外ニ船賃三〇錢宛。宿泊料二泊分二圓三〇錢。食料其他雜費トシテ概算二圓一〇圓三等八圓ヲ計上ス。

佐 渡

佐渡ヶ島は新潟市の西方なる角田崎の沖合三一料の日本海上にある周約二一〇料、東西約五〇料、南北五九料、最大幅三一料、面積八五二方料の環島の孤島で、今、新潟縣の管轄に屬して居る。人口一〇六、二六二人(昭和五・二〇)、五ヶ町(相川、兩津、小木、河原田、澤根)二〇ヶ村ある。

『地勢』北は大佐渡、南は小佐渡、中の國中米と、(こ)と云ふ佐渡の地形を良く言ひ表はして居る名句の通り、東南から西南に雁行的に連延する二列の山脈と、其中間に横はる一帯の平地とから成つてゐる。

北の地壘は大佐渡と云ひ金北山脈が縦走し、稍中央部に海拔一、一七三米の金北山が聳えてゐる。南の地壘は小佐渡と呼び海拔六七九米の飯出山を最高峰とする國見山脈が横はつて居る。之等の地壘は主として第三紀層と火山岩(石英粗面岩及安山岩等)から成り、海濱に接する所は殆ど平地を残さず斷崖直ちに海に臨んでゐる。殊に著しいのは北端の「外海府」地方で、海岸に沿うて數段の段丘の跡や、時には三百米に達する段丘(相川の北方漆笠山附近)が連続してゐる。

中間の平地帯は「國中」と呼び、佐渡に於ける最も地味の豊かな、又、人口密集の地で、東北の海岸は兩津灣となつて西南に深く凹入し、尙其餘勢として加茂湖が残つてゐる。西南の海岸は眞野灣が入込んでゐる。

『風土・經濟』佐渡は海洋的風土と暖流の關係で、比較的

暖く、年平均氣温一二度九分、盛夏の平均二五度四分、嚴冬平均二度三分で、積雪も亦少く對岸越後の比ではない。此の風土が農林に島人を精進せしめた動因でもあらうか。生産總額年一三、五一〇、〇〇〇圓中殆ど其半分六、四六〇、〇〇〇圓(米一八六、三九七石の五、〇七三、九五一圓。麥二〇、五八二石の二二〇、〇〇〇圓。大豆九、五二一石の四六、五五〇圓。甘藷其他も成績がよい)が農産物で、水産業は農産額の三分の一にも充たぬのは(一、八二二、二〇圓)環海の孤島に似合はしからぬ面白い現象である。

(佐渡全體の耕地一萬三千町歩中、半分以上を國中が占め、其他の大部は段丘上の田である。其他林業一、一六〇、八八〇圓。工業三、二〇八、九三八圓。鐵業八七三、二二六圓)。

『史の國、佐渡の景觀』佐渡は幾多の優れた特色のある自然的景觀を持つてゐる。大佐渡、小佐渡の周縁は實に美事に展開してゐる大棧敷を幾重にも重ねた様な段丘と、其丘脚を洗ふ白浪の面白き調和は繪にも筆にも盡せぬ山水美の絶勝を見せてゐる。そして其段丘は或は米田となり或は牧場となり島の經濟をも構成してゐるのである。

佐渡の名勝は主に順徳天皇と日蓮上人に由緒のあるものである。承久三年痛はしくも、順徳帝の遷幸を始めとして日蓮上人、日野中納言資朝、小倉大納言、冷泉院大納言泰郷、觀世元清等の配流されたところ、それ等流人の文學と金山の文明、絶海の孤島の段丘を舞臺として生れた佐渡の人文上には幾多のロマンティックな物語が残されて居る。夫等の由來深い遺跡は島の隅々に至る迄分布され、景勝と合せて近代人の旅情を深く唆るものがある。旅すべきは佐

渡ヶ島——佐渡は四十九里波の上……と歌はれたのは既に過去のこと、今は新潟、寺泊、直江津等から僅か数時間で渡島し得るのである。島内また至る所道路が修理され自動車も定期に運轉して居るからそれを利用すれば旅程は如何様にも立てる事が出来る。

〔佐渡への交通路〕

▲新潟—佐渡汽船(佐渡汽船會社)毎日二往復運航、所要三時間半、(三二運) 新潟發前八・〇〇 後四・三〇(但自一〇月至三月後二時發)

▲新潟發前九・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

▲新潟發前八・〇〇 后一・三〇(但自一〇月至三月後一時發)

み、掬すべき好風景である。

町はもと一漁村であつたが、日本海の單調な海岸には伏木港以北良港がないので、慶應三年新潟港が開港された時、こゝがその繋船場となり、爾來次第に發展して今日を爲したものである。殊に冬季に於ける避難港としては近海に是以上の良港なく、新潟に碇泊すべき船舶もまた外洋を航行中の巨船も多きは此處に避難するので、今は佐渡の表玄関として眼覚しい發展をなして居る。港は水深く、船は直ちに棧橋へ横着けされ、數多の自動車が並んで客を待つて居る。人口六、八六七(昭和五・一〇調)。「名物」竹細工、このわた、櫻餅、櫻干。

〔旅館〕丸金(電一・二六、室八、②二圓半)、本間(電四、②二圓半、室一〇)、野村(電八)、推屋(電一八)、以上一泊二圓半—五圓。山形屋(電六六)、白山屋(電一一三)、二圓—四圓。

〔加茂湖〕大佐渡小佐渡の二山脈の間に挟まれた、曾ては海峡だつたと云ふ國中平野の北東端に位し、その東側は一條の狭長な地帯(兩津町所在)に依つて兩津灣と隔つて居る。湖は南北に長く(六軒、東岸に比して西岸は湖岸の出入が多い。東西の幅二軒、湖岸の周囲一七軒、面積四、九方キロ、佐渡唯一の大湖で、最深八米餘に達するが、湖の全體に亘つては概して浅い。湖は又日本百景の一として世に知られた佐渡代表的の明風光で、所謂「加茂湖の八勝」:

●金岳の春雪、兩峯の晴嵐、兩津橋の曉輝、稚崎の夕照、木崎の神祠、鷗洲の閉鳴、天王の秋月、湖鏡の晚鐘……等々、輕舟を浮べて湖山の風光を探るによい。

〔金北山〕大佐渡山脈の中央部から西南に偏する島中第一の高峯で海拔一七三・四米、兩津から山頂まで一二軒。夏季登山するものが多い。頂上に迦具突智命、大彦命を祀る小祀があり、一國の鎮守として古來尊崇篤く、男子七歳に至れば御山詣りと稱して登山せしめ、山上に群生する「石楠花」の枝を持歸る風習がある。頂上からは殆ど島の全容を望まれ、晴れた空には南に加越、北に粟生島を超えて南部の連山が雲の如くに浮んで見える。山麓には牛馬が放牧されて居る。

〔根本寺〕兩津町から南九軒八、新穂村大野にある。日蓮上人が文永八年に流竄された當時、迫害の多い中であつて、阿佛坊夫妻の被護を受けて風雪をしのぎ、一念法を修した所である。日蓮自筆其他寶物が多い。〔井戸堂〕中興にあ

り、根本寺から五軒、日蓮上人流竄中地頭近藤信重の請に依り認めたま茶室に用ひた井戸である。〔黒木御所跡〕國中平野の北西側を走る縣道相川線に近く金澤村泉に拜する。順徳天皇御遷幸の後(承久年中)國分寺から此處に移らせ給ひ、しばらく御座せられたと傳ふる所、御遺蹟はよく保存せられ常に清淨の一區をなして居る。〔妙照寺〕二宮村一の邊にある日蓮宗の靈場で、日蓮上人が文永九年四月から同一一年三月迄二ヶ年間塚原から此處に移され近藤伊豫守清久の預として請居した所である。伊豫守の族日輝は深く上人に歸依して配居の地に此寺を開基したものである。〔河原田町〕佐渡の西岸眞野灣の奥に丁字形をなして展開する國中平野の物資の集散地で交通の衝に當つて居る。人口二千五百。縣道は此處で弧狀の眞野灣を繞つて西は澤根町を経て相川町に至り、南は蔬菜の産地八幡村を經、國中第一の國府川を渡つて眞野村の新町に至り赤泊及小木港に通じて居る。

相川町 大佐渡の西北岸、日本一の海岸美「海府」の將に盡んとする南西端に近く、段丘の上の小平地に發達した鐵山町で、佐渡の名の普く知られた金山の所在地である。今人口七、一六一(昭和五・一〇調)金山の最盛期慶長一八年頃には人口十萬を數へ殆んど現今の佐渡全體の人口に匹敵し、官設坑三百餘坑もあつた。佐渡支廳を始め其他官衙の所在地で、國の中心市街として榮えて居る。町の四近には千疊敷や春日崎の勝地があつて何れも岩石と波浪の豪壯な風景美を見せて居る。町に名物無名異焼を産し、佐渡情緒(おけさ)の本場である。

〔土産物〕銅器、無名異焼、海産物加工品。

〔旅館〕出雲屋(電相川二九、室一七、一圓八〇錢—四圓半、②二圓半)、高田屋(電二八、室一七、一圓八〇錢—四圓半)、澤瀉屋(電三七、室一五、同上)、久保田(電一六、室一三、同上)、山長(電五三、室九、一圓半—三圓)、立身屋(電三二、室一三、同上)、佐州館(電三八、同上)、土屋(電一一七、同上)。

に委る事となり現在に及んで居る。現今その産額は昔の倍を止めないが、しかし尚鐵區三三萬アル餘に跨り、坑道の深さ五百餘米、年額六〇萬圓の金銀銅を出して居る。全盛期の慶長から元和の頃にかけては金含有量百分の一を示したが、現在では百萬分の五と云ふ。鐵山見物所要二時間位。

〔佐渡情緒おけさ〕佐渡は金山の國であると同時に、また「おけさ」節で知られて居る。お盆が來ると日暮を待つて町々の廣場、鎮守様の境内などで盆踊が行はれる。十五、十六に最も盛で、其頃になるとお盆は過ぎて法要や祭禮のある毎に「おけさ」踊りが開かれ、男も女も、老も若きも、かの哀調を含んだ歌に合せて圓舞するのである。かくして夏の佐渡の夜は暑さも知らず涼風そぞろに吹くうちに、踊りに明け、踊りに更け行くのである。相川町には鐵山技師や町の人達で「立浪會」と云ふのを組織して旅行者の求に應じて居る。謝禮一回一〇圓と定められて居るが、定職のある人達であるから夜間に限られて居る。

佐渡へ——と草木もなびく  
来いと云ふたとて行かりよか佐渡へ  
波の上でも來る氣があれば  
島の乙女の黒髪懸し  
沖の漁火すゞしく更けて  
佐渡は居よいか住みよいか  
佐渡は四十九里波の上  
舟に櫂もある權もある  
一度行きたや佐渡が島  
夢か見るよな佐渡が島

〔澤根町〕相川から河原田に行く途中、眞野灣の北岸にある町で、漁業の盛んな所である。灣内に於ける重要な港で水深く、直江津との航路が開けて居る。此町に産する銅器「班紫銅」は高雅まことに拘すべきものがあり、世界的に名譽を博して居る。〔越の松原〕河原田の海岸、八幡の海岸、その白砂うち續くところ青松の盡くるなきが即ち「越の松原」「雪の高濱」で、眞野の入江を一陣の裡に收め、白帆靜かに去來する靜かな風景は佐渡の他の海岸では味ふ事の出來ぬ女性的な海岸である。〔眞野村〕順徳帝に最もゆかりの深い所で、聚落を形づくる新町の程近し所には帝を奉祀する「眞野宮」があり、また宇野田の海岸には「懸方浦」と云はれる一區がある。順徳帝承久三年卯月、御年二五歳にて御遷幸の朝、御舟の着御あらせられた所と傳へられ、御製「いざさらばいそうつ浪に言問はん、おきの方には何事がある」の句を刻んだ石碑が建てられてある。〔眞野宮〕新町の南東にあり順徳天皇を奉祀した菅原道真及日野資朝

の兩脚を附祭する。宮はもと眞論寺と號し、帝の山陵を守り四時の祭事を掌つて居たが明治七年縣社に列し、更に近年宏壯な社殿に改められたものである。近くに御遺跡「石抱の梅」「眞野山陵」「御所跡」がある。「壇風城址」(新町の北東約一軒の所、國中平野の一端に草茫茫として居る所に城址がある。城は木間氏の居城で、日野中納言實朝の子阿新が木間三郎を刺殺したと云はれる所である。【國分寺】城址の南東約一軒の所にある。天平九年聖武天皇の勅願に成るもの、木島最古の巨刹で順徳帝御遷幸の初め、木寺を假宮とされ、また崩御(御在島二年、聖壽四六歳)後は本寺で山陵の事を司つて居たのである。雷火出火により堂塔その他焼失したが今尙國內有数の大伽藍で、本尊藥師如來は國寶となつて居る。【阿佛坊妙宣寺】弘安元年日得上人の開基と云はれ、國分寺の近くにある。日蓮宗の主要な寺院で、境内の五重塔は佐渡唯一のもので老樹茂る中に聳立して結構壯麗松の緑と相和して居る。開基日得上人は順徳帝に奉仕せる遠藤左衛門尉爲盛と云つた北面の武士で、帝崩御の後入道して陵下に心喪すること三〇年、其子盛綱亦入道して日滿上人となり、父子相計つて其の宅を寺となせしものである。なほ境内に北條高時のために此島に講居八年、遂に斬され南朝の忠臣「日野資朝卿ノ墓」がある。資朝は藤原俊基と共に後醍醐天皇を襲し奉り北條討滅の軍を起さんと成らず、正中二年二月八日此の佐渡に流され、木間山城兵衛尉の居城壇風城内に幽閉されたが遂に正慶元年五月二九日本間三郎のために斬られたのであつた。資朝の子阿新丸(後に南朝の忠臣日野中納言邦光となる)一三歳にして都より來り、父の仇を報じた史實は人皆知る處である。【蓮華峯寺】小木町の北三軒の小比叡山にあり古來國分寺と共に佐渡第一の大寺で、眞言宗の名刹である。金堂及弘法堂は佐渡唯一の國寶建造物に指定されて居る。

**小木町** 佐渡島の西南岸にあり、兩津へ次ぐ佐渡の門戸で、城山の半島に因つて「内の澗」「外の澗」に分れ、共に水深く相川金山の全盛期——和舟交通時代には佐渡隨一の良港として段賑を極めた地である。人口五、五五六、(昭和五・一〇調)往時の俤は見られないが尙此地方の中心地で、對岸直江津との定期航路が開けて居る。此地、附近の景殊に

勝れ、矢島、經島は美しく小木港口の佳景をなし、宿根木琴浦の奇竹林や椿の茂るところ、大佐渡の海岸とは全く景趣を異にし、南國に遊ぶかの趣きがある。「木行寺」は文永八年一〇月二八日、日蓮上人流謫の折着陸した所で、安隆寺は文永一三年三月七日、日蓮上人赦免の使者として日朝上人着島の舊蹟である。「土産物」いか鹽から、竹細工。小木にも「運會」と云ふおけき蹄の組合が出来て居る、謝禮金一〇圓。

〔旅館〕 權座屋(電小木二〇、室一〇、一泊一圓八〇錢)三圓五〇錢  
 ②二圓半、きばち屋(電一八、室一二、同上) ③二圓半、はりま屋(電二二、一圓半) ④二圓半、古田屋(電二四) 小一館(電九、同上) 鍋屋(電二五、同上) 赤梨屋(電二八、一圓一二圓)。

〔簡島と經島〕 矢島が古來矢竹を産するので著名、經島は日蓮上人の高弟日朝が赦免状を持つて此島に着き、島嶽に一夜を明して讀經したと傳へらる、ので此の名がある。共に陸地から岩嶼傳ひに渡ることが出来るが、モーターボートを備へば一時間で見物が出来る。

【海府の絶勝】 大佐渡の海に没するところは、豪壯な海岸美の極致をなし、之を内浦及外浦と呼ぶ。兩津から北にモーターボートを進める事約二時間、間て佐渡の北端鷲島に着く。此處迄の海岸を内浦と稱し、奇岩巒波に映する處、斷崖の直ちに水に臨む處、其の間に砂濱を求めて營む漁家などありて眺め飽かぬ所である。北端鷲島には港があり、矢崎を繞れば彈崎で、波濤岩に砕けて壯觀を極めて居る。此處から關崎に至る約二四軒の間(一時間半)は佐渡隨一日本無双の海岸美「外浦」の絶勝である。ついで高下崎から相川に至る約四〇軒の間も素晴らしい景勝である。

すれば「關の寒戸」と呼ぶ猪の傳説で知られた所や弘法大師が護摩を修したと云ふ「膳棚岩」があり、「打帆浦」「影ノ神」「片邊ノ立岩」や絶勝「勝ノ浦」が吹雪のやうな怒濤の中に隱見して居るなど、かうした奇岩と岩波は外浦の特徴で、西北に面した海岸にはどこ迄も續いて居るのである。

右海府の勝を探る場合は前掲日程案の第三日午前七時頃別仕立てのモーターボートで兩津發、海路を北にとつて大佐渡の北端鷲島を廻つて相川に船を着ける。直航すれば正午頃に着くが途中絶勝の地に停船上陸しても夕方には相川の人となる事ができる。同地一泊。

第五日 相川金山見物—河原田—妙照寺—實相寺—黒木御所跡—中興—新穂—根本寺—阿佛坊—國分寺址—新町—小木着、前記日程に依り第六日午後五時上野着のコースによらる、がよい。

信 越 線 (新潟—直江津間)

新潟市

▲上野から上越線經由急行で七時間一〇分 (三三二軒一)、三等四圓一錢。

▲秋田から急行六時間二〇分 (二八八軒七)、三等三圓六七錢。

市は北に葡萄酒塊、南に角田、彌彦、多寶地塊の岩石海岸を縁どる砂丘を控へ、中央に信濃川斜に吐き口を開くその兩岸に發達した港市で、市内には溝渠が縦横に通じ水運の便がよく且つ水邊の柳は「柳の都」と呼ばれる程風情を添へて居る。永く五港の一と謳はれ、現に北陸の門港をなす新潟は、寛文年間河村瑞軒が幕命により東北沿岸の航路を開いてからその寄港地として開けたもので(酒田市の項参照)その後信濃川改修工事に附帶する大河津分水の大工事が完成せられ、縣營埠頭には六千噸級以上の汽船も自由に横づけされ、北越第一の繁華を呈して居る。

信越線(新潟—直江津間)

濠に柳の影うつす情緒纏綿たる遊樂の街として、民謡佐渡おけき、新潟甚句、越後追分や越後美人のほかに、また渡れば長い萬代橋の思ひ出としてのみの土地ではなく、近代産業の都としても亦著しいものがあり、漆器(年額で六萬餘圓)・佛壇(一〇萬餘圓)・履物(三六萬圓)・味噌・醤油・石油類・鐵器・肥料・雨傘・綿織物・硫酸・壘・梨果等を産する。人口一二五、一〇八(五・一〇)、市内の繁華街は古町通・本町通である。

〔旅館〕 篠田(驛から一軒半、電二〇四、④四圓、小甚(同一軒六、電二一八、④四圓)、大野屋(同一軒八、電六七九、④四圓、同別館(同一軒八、電二二二)、室長(同一軒一、電六三)、くし清(同一軒八、電二八)野口(同一軒五、電二〇〇七、③三圓)、菊池屋(同一軒二、電二三〇)、新潟ホテル(同六〇〇米、電一一、③三圓)、以上何れも市内一流旅館にて一泊三圓半、四圓、五圓。

〔廻遊順路〕 驛—萬代橋—本町通り—白山公園—古町通り—日和山—驛。

▲萬代橋 驛の北約半軒、江東沼垂町から江西藩市街に連絡する爲め信濃川に架けられた長橋で、以前は七八二米の長い木橋であつたが昭和四年八月無幸式六連橋のコンクリート製眼鏡橋となつた。長さは十四、五米の陸橋について二七三米あり、中二二米ある。▲白山公園 驛の西二軒半、乗合自動車一五分、一〇錢。信濃河畔にある。園の西隅に白山神社があり、木像聖觀音一軀は國寶に指定されて居る。近くに醫科大學、高等學校がある。▲日和山 驛の西北二軒八、自動車一〇錢、海岸の砂丘にあり眺望がよい。

〔名物〕 梨果、五穀糖、油香里、〔娛樂場〕 新潟劇場、大竹座、松竹館、電氣館、新潟館、大明座、富士座。

彌彦神社(國幣中社) 新潟縣西蒲原郡彌彦村





妙義山

妙義山は榛名、赤城と共に上毛三山の一にして就中妙義は山勢秀拔、峨々たる奇峭天表に聳え、石門の妙景神斧鬼鑿を極め火山岩の奇秀を極め盡すを以て、普く人口に膾炙してゐる。妙義山は群馬縣の西部に位し、全山三峰に岐れその東南部を金鷄山、東北部を白雲山、西部を金洞山と呼び、ほぼ半圓形に彎曲する第三期層に屬する火山群で、その中央部にある窪地は舊時の噴火口であると云ふ。春、新緑の妙義に鶯の聲、夏、麓の若葉蔭に郭公を聞くも妙なれども、更に秋全山錦の粧をこらす紅葉の大美觀は他に得がたい趣である。紅葉期十月上旬から。

妙義山の巖地は第三紀層で、山體は荒船火山の一部を造る集塊岩の一部であるといはれるが、これらの岩は直立節理を存し、且つ岩質脆弱なるにより、ながの歲月風雨水害作用により、容易に峨々たる山峯を彫刻したもので、堅固なる岩塊の介在するにより、絶壁に近い傾斜面の瓦解が防がれ、今日の奇景を保存してゐるものである。

【登路】▲信越本線松井田驛口及磯部口(前記日程案参照)▲高崎から分岐する上信電鐵下仁田驛から上小坂まで約八杆(自動車二五分、乗合四〇鐘、貸切二圓五〇鐘)▲上小坂から中ノ岳神社迄約三杆、登り約一時間(緩坂)▲中ノ岳石門めぐり約二時間、一本杉から妙義町へ急坂約六杆、二時間位。【登山案内料(妙義町から)】▲白雲山大之字迄七〇鐘、頂上迄一圓半。▲奥山廻り二圓半。▲金洞山中之岳迄一圓半、頂上迄二圓。▲金鷄山全山二圓半、筆頭岩は五〇鐘増。▲妙義山縦走五圓。(以上八年六月調)▲白雲山 妙義神社の背後に登え、海拔一、〇〇三米上に達し、甚だ急峻な傾斜をなし、山軸は南北に近く走り、絶壁面はその兩側の上部、特に東側によく發達して居る。その山頂は東方關東平野を展望するに上。山麓妙義神社から急坂約一杆にて大の字岩に出で、更に辨天岩を経て奥の

院、四つ這等の難所を経て山頂に達す。往復三時間以上、五杆餘。▲金洞山(中ノ岳) 白雲山の西南にあたり、や、低き連峯で相連り、山軸は東西に走り、上部の絶壁面も之に沿ふて居る。その最高點は一、一〇四米に達し三山中最も高い。その山腹には數個の石門その他奇岩があるので、それに登るものが多い。妙義町—山頂五杆、往復五時間位。▲金鷄山 金洞山から東南に走る一肢脈で、山軸は略東南に走り、最高八五六米で三山中最も低く、絶壁面の發達も他の二山には及ばないが、しかし何故折かの屏風を立てたる如く、崩立膝行尙難んするが如き箇所もある。妙義町山頂六杆、往復五時間位。

【磯部磯泉】群馬縣碓氷郡磯部町、信越本線磯部驛から半杆、自動車二〇鐘地は碓氷川の南に面し、榛名山を望み、西南一〇杆を隔て、妙義の奇峯を望み、淺間の噴煙を仰ぐ一望廣々たる菜園の中に位して居る。磯泉はアルカリ性食鹽泉で湧出量豊富、浴用飲用共に胃腸病に特效があり、また神經諸病、リウマチス、婦人病にも効がある。湯はまた製菓の材料及薬用ともなる。浴用は加熱して居る。

此地はまた妙義の登山口にも當る處から妙義登山者の休憩地として紅葉期には殊に賑はひ、また九、一〇月頃には此處から妙義山の嵐氣が見られる。附近には佐々木盛綱の城址と傳へる城山、松岸寺(自動車二〇鐘)があり、同寺には盛綱の墓、忠臣蔵の大野九郎兵衛の墓と稱するものがある、また前記豊前神社へは六杆、自動車(四五鐘)がある。

【旅館】磯部館電磯部五、室四五、②二圓半、風來館電同三、四、室四七②二圓、林屋對岳樓電一〇、室三一、②二圓半(以上普通一泊一圓半—三圓、團體一圓二〇鐘)、長壽館電一四、室二二、一泊一圓半—二圓半、一新館電二七、室二五、一泊同上、小島屋電二、室四一、一泊一圓均一、旭館電三一、室二〇、一圓均一、東泉館電一三、一圓—三圓)。

高崎市 上野から汽車二時間餘(一〇杆四、三等一圓五四鐘)市は群馬縣西部に於ける交通の要點を占め、生糸、生絹太織繭の産出等が盛んで商況活潑、人口五九、九二八(五、一〇調)を有して居る。此地はもと大河内氏八萬二千石の

城下で、その城址に今歩兵第一五聯隊の兵營があり、周圍に外濠が残つて居る。

【旅館】信濃屋(新町八八、驛二二〇米、電一二四、室三〇、一泊二圓半—六圓)、豊田屋(八島町六八、驛一八〇米、電一三七、二圓—三圓)、安田屋(八島町六八、驛一五〇米、電六四八、一圓半—三圓)、田島屋(八島町一七、驛一五〇米、電六七四、同上)、上越館(驛前、電九二二、二圓—三圓)、錦山莊(石原町二八九二、電九一六、四圓—六圓)、堺谷(本町一ノ二八、電六三、室二二、二圓—三圓半)等。

【名所】▲高崎公園 驛の西南約半杆、城址の南隣にあり、内に舊城主大河内氏の祖源三位頼政を祀る頼政神社がある。▲清水觀音堂 西約二杆、郊外觀音山の中腹にあり、附近景勝第一の地である。養蠶の爲祈願するもの多く、花季及一月二日、一〇月一〇日の縁日には大いに賑はふ。

【名物】竹の子餅、鉢の木等。【黒瀧山不動寺】群馬縣北甘樂郡野村、上信電鐵下仁田驛から一二杆、途中六杆の小瀧まで自動車が行く、二〇分、乗合二〇鐘(一日二回)、貸切五人乗一圓五〇鐘。小瀧から黒瀧山迄六杆、上り一時間半。

西上州の一角、黒瀧山(八七〇米)の中腹俗氣を離れた幽邃境にあり關東高野山の稱がある。寺は元正天皇の朝、行基作の不動明王を安置し、饒賊天皇の勅願寺となつた。寛延年間中興開山湖音禪寺の時伽藍備はり、朝廷諸侯の歸依を受け、黒瀧派と稱し末寺二〇餘に及んだ。今は諸堂宇荒廢し、就中庫裡方丈等は大破して目下修理計畫中との事である。

山中奇巖怪石多く、殊に日東、星中、月西の三岩最も奇拔である。その他三三觀音、九九谷などの勝があり、紅葉の頃は美觀を呈する。四月二七、八日は不動尊大祭、一〇月二四日は開山忌が行はれる。

【荒船山】下仁田の西、上信の國境に發ゆる海拔一、四二二米五の大山で、之を東から仰ぐときは「船ノ南天二行ニ似たり」と云ふので此の名があると云ふ。山頂は幅八〇〇米、長さ一杆六程の安山岩の熔岩臺地から成り、之を志賀越方面(北側)から見る時は、その垂々しいまでに赤錆色をした怪奇な岩肌が頗る人目を惹いて居る。

【登路】下仁田から西牧川に沿ふて、本宿を経て小屋場から登ると、下仁田から南牧川を過つて羽瀧から登ると二つの道がある。

【本宿口】下仁田驛—本宿—市野査間約一五杆、自動車四〇分、乗合片道五〇鐘、往復八〇鐘(一日六回以上)、貸切五人乗三圓。

市野査—荒船頂上約八杆、急坂徒歩約三時間。頂上麓廻り、船の今日坂登り約一時間半。

【羽瀧】下仁田驛—小瀧—羽瀧間約一五杆、自動車五〇分、乗合七〇鐘(一日六回)、貸切五人乗三圓。

羽瀧—星尾峠約一〇杆、徒歩約二時間半。

星尾峠—今日塚(經塚)麓上り約一杆六、徒歩四〇分。

【神津牧場】物見山(一、三七五米四)山麓四方九六に亘る高原地帯を取入れた、素時しく綺麗な牧場で、澄切つた碧空の下に陽光をあびて居る風物は、なんとも云へぬ潤しみに満ちたものであるが、冬の積雪期に於ては強い魅力を持つて居る所である。變化に富んだ、雄大なスロープをかつかつと直滑降の快は附近至る處に得られる。スキー季節は二月下旬から翌春三月下旬頃まで、積雪量は年末で一米前後、一二月で二米近くあり、雪質も全く乾粉雪で、本州のスキー場としては頗る良質のものである。

【交通其他】下仁田驛から本宿經由市野査までバスがゆく、(荒船の項参照)錢、市野査から神津牧場本館まで約六杆(急坂あり)、徒歩約二時間(途中から約二杆はスキーが穿ける)。

神津牧場本館(収容人員六〇名、一泊三食付一圓五〇鐘)。

【神津牧場から荒船の縦走】神津牧場—(急坂一杆六、三〇分)—物見山(降坂八杆、一時間半)—小屋場—(急坂二時間)—荒船頂上—(麓廻り經塚登攀約一時間半)—經塚麓—(降坂一杆六、二〇分)—星尾峠分岐點—(降坂一杆、三時間)—羽瀧—(バス五〇分)—下仁田驛。

【下仁田町】群馬縣北甘樂郡、上信電氣鐵道の終端驛所在地で高崎から約一時間で達する(三三杆七、三等片道七九鐘)。地は信州街道及妙義山裏登山口の要衝である。こんにやくの産地として知られ、また砥石、石灰、石材、木材、薪炭の産も多し。人口五、一九八(昭和五、一〇)附近に名利黒瀧山がある。【旅館】常盤館(下仁田二二、室一四、一泊二圓—三圓、②二圓半)、新形原(電二〇、室一二、同上)、下仁田館(電三一、室一五、一圓半—二圓半)。

淺間登山日程案(東京から一日)

地名	發着時刻	記事	備考
上野驛	前夜 發後 二・五〇	米原行列車	▲上野―沓掛間五時間半(一四六軒三)、三等二圓一三錢。 ▲沓掛驛カラ淺間山頂迄約一三軒、登路ハ比較的容易デ婦女子ニモ安全ニ登ラレル。峯ノ茶屋迄自動車ヲ利用スレバ頂上ヘ僅二時間半テ登ラレル。 ▲驛前ニミヤ支店アリ、登山準備ガ出來ル、電燈井澤二三、一泊料ハ一圓、二圓半 ▲沓掛驛カラ星野温泉、千ヶ瀬遊園地ヲ經テ、小淺間山南腹ニアル峯ノ茶屋迄約七軒ノ間自動車ガ通ズル、所要二五分、貸切五圓、乗合五〇錢、但乗合ハ七月―九月一日三回(箱根土地會社草津行定期自動車)此ノ道ハ輕井澤及沓掛カラ草津ヘノ街道テ、自動車ノドライブニヨリ道デアル。峯ノ茶屋ハ標高一、四〇六米デ、可ナリ眺望ガ開ケテ居ル。 淺間山頂ハ最モ平易ニ登レル山岳ノ展望臺デ、眺望ハ頗ル廣イ。東北ニハ遠ク日光及奥上州ノ諸山ヲ、近ク赤城、榛名山ヲ望ミ、北ハ草津白根山カラ四阿山ニ續ク峯々カラ稍西ニ妙高、戸隠山方面、西ニハ北アルプスノ連嶺群風ノ如ク立並ビ、間近ニハ淺間カラ嶺嶺キノ黒斑、三方、湯ノ丸等ノ諸山ヲ望ミ、南ハ千曲川ノ谷ヤ上田平原ヲ俯瞰シテハケ岳、秩父カラ南アルプス、富士山ナドガ一眸ニ集リ、東南近ク妙義ノ奇峯及荒船火山ヲ見下シ、ソノ東ニ關東平野ガ俯瞰サレル。 ▲頂上―小諸驛一五軒、下リ四時間位(上リハ五、六時間位、乘馬貫火山館迄八圓、案内料晝間三圓五〇錢夜間四圓五〇錢) 小諸口ハ勝地アリ、飲料水アリ、温泉アリ、小屋アリ、風景佳ニシテ又案内標札モ備ハツテ居ル。 山中ノ休憩宿泊所 淺間館(驛カラ八軒、主トシテ休憩客ヲ扱フ)。淺岳ホテル(驛カラ八軒七、海拔一四〇〇米餘、眺望ヨロシキ地ヲ占メホテルノ百米手前ニ專屬ノシノ湯温泉ガアル。二食附一泊七五錢、泊リ丈ハ二五錢五百人ヲ收容シ得。朝二時頃出發スレバユツクリ御來光ヲ拜スル事ガ出來ル)。火山館(驛カラ一三軒餘、海拔一九〇〇米餘、胸突八丁ノ上百米程登ツタ眺望絶佳ノ地ニアル。泊リ丈ニテ三〇錢、二食一泊九〇錢。朝三時頃此所ヲ出發スレバ御來光ニアフ事ガ出來ル)。
沓掛驛	着前 五・一九 發 五・一九	下 自動車又は徒歩	
峯ノ茶屋	發前	徒歩	
淺間山頂	發着		
小諸驛	着後 四・〇八 發後 四・〇八	上野行列車	
赤羽驛	着後 五・〇〇 (歸宅)		

上野驛

着後 九・一五

歸

宅

旅行費用概算

三二 等 等

一・九六  
六・九八

内譯

汽車賃二等八圓九六錢三等四圓四八錢(備考欄参照)及食  
事費登山用品費トシテ二等三圓三等二圓五〇錢ヲ計上ス

MEMO

淺間山

淺間山は長野(北佐久郡)、群馬(吾妻郡)二縣に跨る三重式の活火山である。最舊の火口壁は僅に西方の一部を残存し(二四〇五米の黒斑山及牙山がそれである)第二次の火口壁も西部が著しき隆起を示して前掛山(二五二一米)となつてゐる。現今の火口は即ち第三次のものでお釜と稱し、直径三五〇米の圓形を描き(深さ六〇米、其底は堅實な燔岩から成り、火口壁から墜落した岩塊が累積し、基底及側壁の裂隙からは絶えず水蒸氣、亞硫酸瓦斯、硫化水素瓦斯を噴出し、時には灰または砂礫を飛散することがある)その東邊が淺間山の最高點となつて海拔二、五四二米に達してゐる。

此の山は昔からの噴火山で、日本紀略に「天仁元年戊子、上野國言、麻間峰燒、降砂礫灰燼、埋没田園」とあり、昔から絶えず噴煙し、屢々破裂して灰を降らし、山麓に災害を及ぼしてゐる。中にも天明三年(紀元二二四三年、西暦一七八三年)の噴火は特に有名で、降灰は關東、東北の地方に及び、燔岩を北方へ押し流し、吾妻川を塞ぎ、續いて缺潰して利根川に流れ、沿岸諸村を滅ぼし、夥しい人畜の死傷を來した。火口の北にある「鬼の押出し」と稱するもの

は、その時流出したもので、熔岩流が長く延びて石塊の磊々たる荒野になつてゐる。その熔岩は冷却の際表面に多數の龜裂を生じて「カルメラ状」になつてゐるものがある。

山側には浮石、火山礫などが堆積し、麓には赤松の林があり、中腹以上は草木帯となり、山頂は新古の噴出岩のみである。裾野は南北の兩麓よく發達し南を追分原、北を六里ヶ原と云ひ、山腹東方の小淺間山(一六五五米)、南腹の石尊山(一六六八米)は寄生火山であるといふ。

【登路】沓掛口、追分口、御代田口、小諸口などあり、何れも長所短所があるが、中でも追分口が比較的距離も短かくまた危険性も少い。

【沓掛口】「小諸口」前記日程案の項参照。  
「追分口」信濃追分驛(上野から片道三等二圓一七錢)から山頂迄約一〇軒、驛から六軒の石尊山麓まで貸切自動車はゆく(四圓)、それから山頂迄二時間位(下りは四〇分位)、登山案内料往復晝間三圓半夜間四圓半。追分宿は海拔約一、〇〇〇米あり、夏期避暑に適し、旅館本陣(室一一)、油屋(室三五)、がある、一泊一圓八〇錢、二圓、二圓半。

【御代田口】御代田驛(上野から片道三等二圓二五錢)から山頂迄約一二軒、上り普通三時間位。登山案内料朝出發二圓、夜出發二圓半。  
【御代田の旅館】井幹屋(電御代田二五、室一一)、一圓二〇錢(二圓)、竹屋(電四〇、一圓一圓八〇錢)、料理兼業。

信越・北陸名所巡り日程案 (遊覽券利用東京から七日)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	上野驛	發後 一〇・五	神戸行六〇三列車、車中一泊	▲上野—長野間七時間〇五分(二一七軒二)三等二圓九二錢。 (上記第六〇三列車ニハ寢臺車ナシ) (参考) 上野發後一〇時五〇分米原行ノ終列車ハ長野着前七時三九分
第2日	長野驛	着前 六・〇〇	下車、參拜	▲長野驛カラ善光寺迄二軒。自動車一〇分、乗合一〇錢(九人乃至一六人乗、一日三五回)貸切五〇錢(五人乗)
	長野驛	發後 一〇・四	新湯行 三〇五列車	▲長野—田口間一時間二〇分(三七軒三) ▲田口驛カラ赤倉へ五軒、自動車二五分、乗合五〇錢(五月—一〇月、貸切二圓半。妙高温泉へ西南七〇〇米、自動車貸切五〇錢、乗合一〇錢、赤倉温泉(二五五頁参照)妙高温泉(二五五頁参照)。
第3日	田口驛	着後 二・三	赤倉又は妙高温泉一泊	▲田口—直江津—富山—金澤間約六時間(二一七軒六分) (註) 前野上野發八・五〇ノ金澤急行ニ乗レバ午前八・〇〇金澤ニ着ク。三等急行料一圓。
	金澤驛	着後 一・三三 發後 四・五四 六・〇五	下車、遊覽 福井行 福井行	▲金澤市内ニハ電車ガアリ、遊覽ニハ三、四時間モアレバ足りル。二五九頁参照。
第4日	大聖寺驛	着後 六・〇五	電車換	▲金澤—大聖寺一時間一分(四六軒四)。 ▲大聖寺—山中間(八軒九分)温泉電軌線電車デ二八分(前五・三一—後一・五七迄省線列車着毎ニ發車)片道二八錢。電車終點から旅館迄徒歩約半軒。大聖寺驛カラ自動車貸切四圓。
	山中温泉	着後	宿泊	▲山中—大聖寺間電車二八分。 ▲大聖寺—金津間汽車一九分(一二軒六分)。
第5日	山中温泉	發前	電車	

日	第	日	第
第4日	大聖寺驛	發前 九・四七	姫路行列車
第5日	金津驛	着前 一〇・二二 發前 一〇・一七	乘換 三國港行列車
	三國港驛	着前 一〇・三五	東尋坊遊覽
第6日	三國港驛	發後 一・二六	金津行列車
	蘆原驛	着後 一・三六	蘆原温泉ニ宿泊
第7日	蘆原驛	發前 九・三〇	金津行列車
	金津驛	着前 九・三七 發前 一〇・二四	乘換 姫路行列車
第8日	福井驛	着前 一〇・四	下車、遊覽
	永平寺口	發後 二・三五	電車
第9日	永平寺前	着後 三・〇五	宿泊
	永平寺驛		

▲蘆原—金津七分(三國線、四軒五)  
▲金津—福井間二七分(一七軒八)  
(註) 三國—蘆原—福井間電車ノ便アリ、(各省線驛ト接続ス)蘆原迄七分、一〇錢、福井迄四分、五七錢。  
金津カラ丸岡町ヲ經テ永平寺門前迄永平寺電車ノ便アリ、所要五一分(二四軒二)賃五九錢。  
▲省線福井驛カラ永平寺門前迄電車片道四二錢、一六軒五分。  
四〇分、前六時半—後五時半迄直通電車一時間毎ニ運轉ス。  
(大野行電車ハ前五時カラ一時間毎ニ發車シ、永平寺口驛ニテ接続ス)  
▲福井—永平寺口—大野町間 京都電燈越前電線線電車。福井、永平寺口間二七分二四錢、(大野町迄 一時間二五分、三六軒三、片道八〇錢)  
▲永平寺口カラ永平寺門前迄電車(永平寺鐵道線)三分、(五軒八)片道一八錢。  
▲永平寺門前驛カラ永平寺迄半軒、自動車一人一五錢。  
▲永平寺(二六四頁参照)

日7第	日6第
東京驛	永平寺驛 福井驛 米原驛 名古屋驛
着前 七・二五	發前 八・一五 發前 八・五五 發後 八・六八 發後 二・〇〇 發後 二・〇〇
歸	直通電車 米原名古屋 行列車 下車、遊覽 各等急行列車
宅	▲福井—米原三時間餘(一〇九軒八) ▲米原—名古屋一時間五分(七九軒九) ▲名古屋市見物(三五頁參照) △名古屋市内電車六錢(均一)、乘合自動車一〇錢(均一)。 ▲東京行各等急行ニハ各等寢臺及洋食堂車アリ。(洋食朝七五錢) 「註」福井發前七時五五分大阪行ニテ出發、米原ニテ急行ニ乘繼テ其後八時二五分ニ東京ニ着ク(一、三等急行第一〇列車)

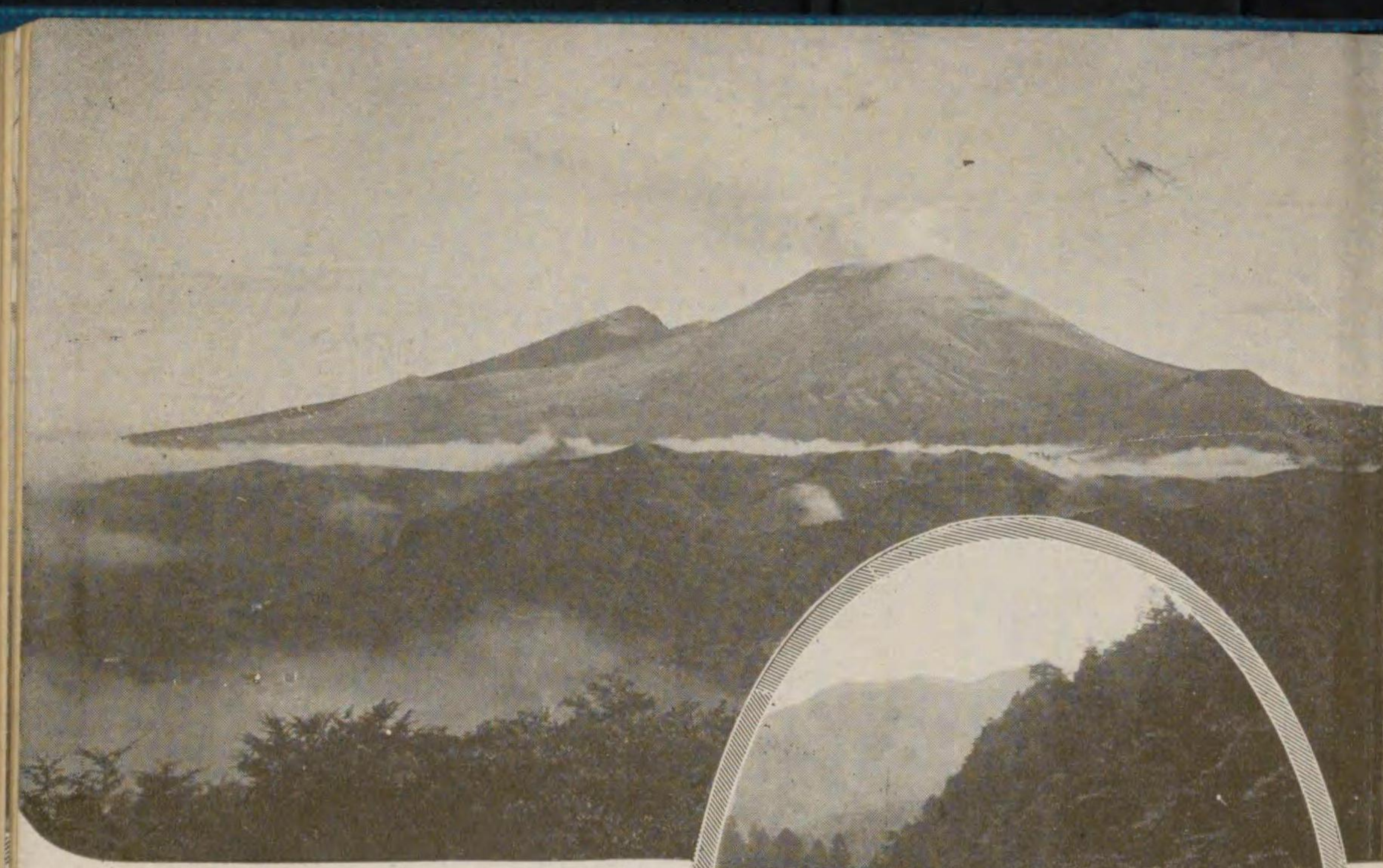
旅行費用概算

三等 三四・〇五  
二等 三五・九一

内 譯

遊覽券 ▲鐵道賃 上野—長野—金澤—三國港間、三國港—米原—東京間、大聖寺—山中及福井—永平寺門前電車往復ニ  
一等九圓四五錢、二等九圓九四錢。▲自動車賃 田口驛—赤倉溫泉往復、三國港驛—東尋坊往復以上一圓一六錢  
▲宿泊料 赤倉溫泉、山中溫泉、蘆原溫泉ノ三泊 二等一圓二圓ヲ含ム。  
急行料(名古屋—東京) 二等 一・三〇 三等 〇・六五 車中寢臺料(夜分) 二等 四・五〇 三等 〇・八〇  
永平寺宿坊一泊料 一・五〇 // 一・五〇 食料及其他乗物賃 二等 一五・〇〇 三等 一〇・〇〇  
(參考) 敦賀ノ氣比神社及小濱蘇洞門ニ遊覽サル、場合ハ、ソノ自動車券、渡船券及宿泊券ノク「ボン」ヲモ含メテ遊覽券ヲ求メル事ガ出來ル。

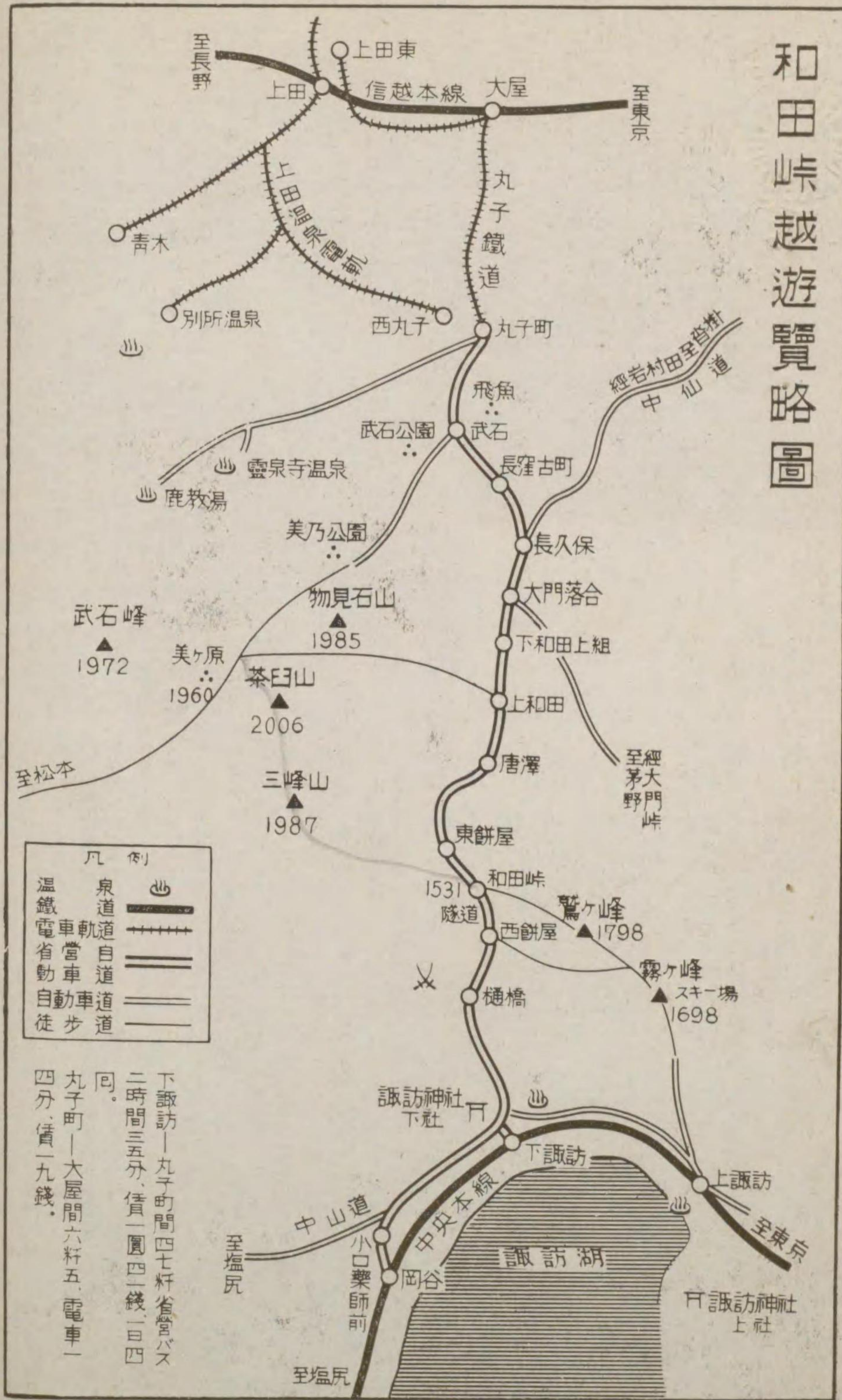
MEMO



信州の山々  
(上) 淺間山 (本文二四三頁)  
(中) 蓼科高原 親湯(巖)溫泉  
(下) 霧ヶ峰スキー場より蓼科山を望む (本文三〇頁)  
足立源一郎畫伯



# 和田峠越遊覽路圖



【輕井澤】長野縣北佐久郡、上野から急行列車で三時間半、普通列車で四時間半（二四二軒三）、三等二圓八錢。町は舊輕井澤（驛から約一軒四離れ、草津電車及夏期乗合自動車の便がある）、新輕井澤（驛附近）、矢ヶ崎、雨宮新田、鹽澤、難山、沓掛、古宿、小瀨等の部落から成る東西七軒、南北一三軒の地域で、人口五、六一八（昭和五、一〇調）別荘七百餘軒を有して居る。

地は碓氷峠の南麓、海拔九四二米（三千八十呎）の地にある高原で、荒船の開析火山の北麓と、浅間の活火山の南麓との間の窪地が、浅間の南麓追分原泥流の噴出によつてその西口を塞ぎ止められ、其後頻々と繰返された浅間火山の活動により火山灰砂礫等の厚い堆積を見るに至つた埋積性火山高原で、地積約八軒、周囲には碓氷嶺から南走する城尾根山、池頭山、矢ヶ崎山等の峰巒連り、又長倉山、留夫山は北走して小瀨山と連つて上信の國境をなして居る。又近くには愛宕山、深山、西山等四方に連り浅間山麓を走つて難山に接して居る。河川は川越石川、雲場川、湯川等が南流し、之等の山川と原野は巧に調和して天然美——所謂高原美の快味を親しく味ふ事が出来る。土地高燥なれば空氣亦清澄、盛夏尙八〇度を越ゆることなきが故に「サンマールレット」として廣く内外人に知られて居る。

輕井澤は中山道碓氷峠の難所と共に古くから知られた地で、殊に徳川末期には非常に繁榮したる所であるが其後甚だしく淋れたのを明治一九年夏、英人シャウ氏及デクソン氏等に依つて氣候風土共に避暑地として好適地なることを世に宣傳せられてから再び繁榮し、遂に大正一二年八月町制を布くに至つたものである。

【旅館】萬平ホテル（驛から一軒六、電輕井澤二二、三食付九圓一〇圓）、輕井澤ホテル（驛から一軒四、電同二〇、米式一二圓一四圓）、三笠ホテル（驛から三軒三、電同二五、室代三圓一六圓）、パークホテル（驛の南三軒、室代三圓一八圓）鶴屋（驛から一軒六、電五三、室七〇、一泊五圓、七圓、一〇圓）、要屋（驛から一軒二、電同五九）、油屋（驛前、電同二三、室一五、一泊二圓半、三圓、四圓、六圓）等其他。

【霧積温泉】群馬縣碓氷郡坂本町。横川驛から西北一四軒、坂本町まで乗合自動車がある、一五錢、一日一五圓。夫から一二軒（駄馬二圓半、籠四圓）。輕井澤から約一〇軒、碓氷嶺の東方約三軒の山間にあり、徒歩約二時間半、鼻曲山の東麓、霧積川の上流海拔一、一八〇米、碓氷嶺後を廻る山川明媚の境で、

殊に秋葉美は人を酔はしめる。泉質は透明な硫酸泉で温度三九度、皮膚病一切筋骨の病外傷に特效があり、神經衰弱、腦病、食慾不振、婦人病、貧血症にも効がある。【旅館】金湯館（室二〇、一軒一圓、一圓二〇錢、一圓半、自炊一日四〇錢一八〇錢）。

【小瀨温泉】長野縣北佐久郡輕井澤町、草津電車小瀨驛（舊輕井澤から卅分）から約半軒、浅間山の東南麓、小瀨山の麓にあり、四面峯巒聳り、湯川の清流其間を流る、高燥の地である海拔一、二〇〇米。無色透明アルカリ性炭酸泉で温度二七度、浴用加熱、胃腸病、貧血病、皮膚病、神經衰弱等に効がある。

【旅館】蓬萊館。

【萬座温泉】群馬縣吾妻郡嬭懸村萬座。草津電車萬座温泉口驛（新輕井澤から二時間二分、並等一圓六〇錢）の西北約一六軒、駄馬賃二圓、二人乗馬一圓三圓。又は山田温泉（二五二頁参照）から約一六軒、乗牛二圓五〇錢、カゴ五圓。草津から一六軒。地は上信國境の萬座山（一、九八六米）と、草津白根との裾合の谷、萬座川の水源地海拔一、五五五米の地にあり、日本に於ける有数の高山温泉の一つである。温泉は溪流となつて滔々と流れ去る程豊富で、弱酸性硫酸泉と含鐵硫酸泉の二種あり、雑湯・苦湯・鐵湯・蒸湯などに分れ、腦病、胃腸病に特效があり婦人病、皮膚病、リウマチス等にも効があると云ふ。温度三七度乃至六〇度。【旅館】豐國館（室五三）、常盤屋（室四六）、日進館（室三九）、一泊一圓半乃至三圓。

【新鹿温泉】群馬縣吾妻郡嬭懸村。草津電車新鹿温泉口驛の西南一六軒夏季自動車がある、八〇錢、（新輕井澤—新鹿温泉口間二時間、並等一圓三六圓）或は信州上田驛から東北二四軒、上田驛—眞田間上田電車で三六分（一二軒八、賃四〇錢、眞田驛—鳥居峠—新鹿温泉間約一軒、自動車一時間乗合一圓二〇錢一日四回、但鳥居峠にて乗継ぎ）貸切五人乗六圓。

地は浅間山麓の高原で海拔約一、二〇〇米、近く鳥居峠から四阿、萬座、白根を右に、籠の登、鍋蓋を左に、村上山を隔て、浅間の噴煙を眺め眺望雄大である。冬季は好箇のスキー場として賑はふ。温泉は西南約四軒にあり、鹿澤から引湯したもので、アルカリ性炭酸泉に屬し、胃腸病、腦病、婦人病、リウマチス、多血症に効く。【旅館】増屋（一圓半）、鹿鳴館（一圓半）、宮崎屋、小柳屋、三食付一圓半一圓。

【鹿澤温泉】前記新鹿温泉から徒歩約六軒許り奥にある。又は田中驛から

信越沿線（輕井澤・霧積・小瀨・萬座・嬭懸）

一六軒途中横堰迄八軒、自動車がゆく、三〇分、五〇分、夫から徒歩又は乗馬(一泊半)新鹿澤の泉源であるから効能は同前。

【旅館】紅葉館(室三三、一泊一圓半以上、スキー期には三食付一圓半)。

【千ヶ瀬遊園】軽井澤の次隣者掛懸の北方約二軒九、星野温泉へ約半軒、浅間山麓の高原地海抜一、〇六〇米の地にある。此處は軽井澤よりも海抜高く、眺望は頗る開闊雄大、絶好の避暑地である。遊園は箱根土地會社の經營で、ホテル、貸別荘等の設備が整つて居る。千ヶ瀬は香掛懸から約六軒、千曲川の支流湯川の溪流に沿ひ、浅間の雄姿を望む幽邃の地である。七月下旬から九月中旬まで各列車に接続して香掛懸―千ヶ瀬遊園迄乗合が出る、片道三〇錢。

【旅館】グリーンホテル(泊二食付五圓)。

【星野温泉】長野縣北佐久郡輕井澤町、輕井澤の西北五軒、香掛懸の北約一軒半、共に自動車が行く。香掛懸から乗合一〇錢、貸切五〇錢。浅間登山道から右へ約一〇〇米程入つた湯川の溪流に沈み、輕井澤に續く浅間山麓の高原で、海抜一、〇三三米、温泉は蛋白石濁を帯びたアルカリ性泉で、温度二三度、胃腸病・糖尿病・皮膚病・リウマチス・神経痛・婦人病等に効く。【旅館】明星館(電輕井澤五二、室三〇、一泊二圓、三圓、四圓)②二圓八〇錢。貸別荘もある。【松原湖】長野縣南佐久郡、信越本線小諸驛から分岐する佐久鐵道經由小海線松原湖驛下車約一軒半(小諸―小海―松原湖驛間一時間三五分、三四軒、片道八三錢)。

松原湖とは北牧村松原附近の湖沼の總稱で、猪名湖が最も大きく、その南の長湖に次ぎ、その他は小諸水である。その成因は八ヶ岳火山の一峯根石岳方面から流出した噴出物が数多の窪地を作つた所に水の溜つたものである。北西南の三面は高い山を繞り、東岸の一部排水口附近は低い丘陵となつて居る。松原湖の西南には八ヶ岳から壱科山に續く連嶺發立、東は千曲川上流の谷を隔て、秩父連嶺や荒船山を望み、北は佐久平野を隔て、浅間山を望んで眺望が廣く、湖邊の風光また明媚である。

猪名湖は八ヶ岳の東北山腹海抜一、二二二米の高所にあり、湖面は僅か八二平方メートルに過ぎず、深度また小さいので冬季はよく結氷してスキーの好遊地となる。即ち一月中旬から三月まで結氷約三〇〇日乃至五〇〇日に達し、氷質また非常によく殊に降雪が少ないのでスケートの理想地として知られ、毎年一月全日本學生スケート聯盟大會が催される。湖畔には一〇〇名位收容出来る旅館あり、種以内の積雪でも充分にスキーが出来る。また気温が常に低いところから、雪質は信越國境附近に比して遙かに良く、附近にはその他大小の起伏重疊して相當變化あるスロープも多く、猫岳山麓全體隨所に好スロープを持つて居る。向此地の特長は、猫岳登山の最も容易な事である。(猫の七合目に休憩小舎がある)山頂の樹水は美観は特筆すべきものであり、また此の山頂からの展望は實に雄大である。スキー期は三月中旬から翌年四月中旬まで。

【交通】信越本線上山驛から上山温泉電軌により終點眞田驛下車(三六分、賃四〇錢、一、二軒八、そこからバスで菅平口(土合)迄二〇分、二〇錢、一日一回(六軒)、菅平口からは大洞川の溪谷に沿ふ六軒許りの山道を登る。六月から一〇月迄は眞田驛からホテル前迄乗合自動車がある、四五分、五〇錢(四回)、上山驛―菅平間貸切五人乗四圓。冬期はスキーを穿いて一時間でスキー場にゆけるが、馬槽の便があり、各宿泊所の玄関迄乗る事が出来る、賃金片道上り三〇錢下り二五錢、荷物一ヶ一〇錢。

【旅館】菅平ホテル(防寒装置、浴場、乾燥室、社交室等完備し、室二九、二〇人以上の收容があり、貸スキーも二百臺位ある。一泊三食付一圓五〇錢③三食付一圓半)。

名鐵山の家(菅平ホテルの横にあり、室二三、收容定員一五八名、男女別浴場、食堂及炬燵の設備がある、一泊五〇錢、休息料二〇錢、朝食二〇錢、晝食二五錢、夕食三五錢、三食付一圓一〇錢)。

その他志満家(室六、三食付一圓)及民家に凡そ三〇〇人、北信牧場内にあり青年訓練所にも宿泊出来る。

【別所温泉】長野縣小縣郡別所村。上山驛の西南一軒五、上山温泉電軌の別所線電車で二八分、賃片道三五錢、往復五五錢、又は自動車で三〇分、乗合三五錢(一日二回)五人乗貸切二圓。電車終點驛から凡そ一〇〇米程の所で道は二つに岐れ、右に約四〇〇米で院内、左すれば約二〇〇米で大湯に出る。別所とは此の部落を合せて呼ぶもので、兩者相異つた色がある。院内の方は遊樂氣分があつて絃歌の聲を聞くが、大湯の方は全くの療養客で賑つて居る。温泉は夫神岳の東麓、湯川の右岸に湧出し、旅館の内湯の外に院内には石湯(浴槽は天然の岩石其儘である)大師湯、大湯には大湯と女湯の共同浴場がある。泉質は無色透明の硫黄泉で温度四一―四四度、胃腸病、婦人病に特效がある。【旅館】花屋ホテル(電別所一三、室三六、③三圓)、柏屋、和泉屋、玉屋、

があり、温泉、浴場の設備もある。夏期は避暑及キャンピングの適地として秋期は紅葉地として知られ、貸別荘もある。

長湖は猪名湖の西にあり、湖面二四平方メートルあり、此處もスケートによい。

【湖畔及附近の旅館】萬屋(驛から一八五〇米、室一三、一泊八〇錢―三圓)田島鐵泉旅館(驛一九七〇米、室一六、一泊同上)、松湖屋(驛一六三〇米、室五、一泊同上)、宮本屋(驛一四二〇米、室三〇、一泊同上)、さざなみや。

【上山市】上野から急行四時間四〇分、普通列車で五時間四〇分(一八二軒七、三等二圓五錢)。

市は千曲川の北、上山盆地の中央に位し、信州に於ける養蠶業の中心都市をなし、養蠶専門學校がある。人口三五、一三八(昭和五二)。

上山はもと城下町として發生し、發達し來つたもので、維新前は松平氏五萬八千石の城下であつた。城は始め眞田信幸幸村の父である安房守昌幸が築いたもので(天正一二年)、伊勢山の地を利用し、千曲川の深淵尼ヶ淵に突出して築城されたので伊勢崎城とも尼ヶ淵城とも呼ばれた。關ヶ原の役に昌幸及幸村の父は大坂方に與したが、信幸は徳川家康の謀臣本多正信の女婿であるところから關東方に味方した。徳川家康が三子秀忠に兵三萬八千を率ゐて中仙道を上らしめるに對し、眞田昌幸、幸村の父子は此の上田に遮り、信幸、正信の勦除をも願としてきかず敵を憐まし、遂に秀忠をして關ヶ原の戰期におくらしめた事は史上有名な話である。しかし眞田氏はのち徳川に仕へて此の地に封ぜられ、元和以後は仙石、松平兩氏を経て維新に及んだ。

【旅館】上村館(天神町、驛前、電上山三四、室一四、一泊一圓半、二圓)上村ホテル(海野町、驛から八〇〇米、室二一、一圓五〇錢以上)。

【菅平】上信國境の雄峯四阿山(一、三三二米九)とその西北に相接する猫岳(二、一九五米)の西側一帯の裾に展開された廣袤七七方軒に亘る茫漠たる高原で、海抜平均一、二五〇米を維持し、見渡す限りの原や丘はみな柔軟な芝草を以て蔽はれた美しい草原である。菅平の部落まで凡そ六軒の間三五度乃至一五度の緩傾斜が續き、その間は殆ど無樹帯で何等の障害物もなく、痛快な滑降が出来るところから近時「日本ダボス」などの名稱を附されスキーの絶好地として名聲があり、夏季は青嵐漲る暑さ知らずの此の高原は天與のキャンパスイトとして喜ばれて居る。

積雪は一米乃至一米半であるが、斜面全體が放牧地の草原であるから、五〇あさひホテル、中松屋、みどりや、以上一泊一圓二〇錢乃至三圓。附近には安樂寺の八角四重塔(國寶)、北上山觀世音、常樂寺、愛宕山遊園などがある。

【戸倉温泉】長野縣埴科郡戸倉村。戸倉驛の南約一軒半、自動車乗合一〇錢(列車毎賃切五〇錢。前は千曲の清流に臨み、背後に冠著山を望み、温泉は無色透明の硫黄泉で、外傷性創傷・梅毒・皮膚病一切等に效がある)。

【旅館】笹屋ホテル(電戸倉三、室二六、普通一泊二圓半、三圓、③三圓)戸倉ホテル(電一九九室二、二圓、三圓)、上山屋(電二七、室二〇、二圓三〇錢、三圓、②二圓八〇錢)、千曲館(電四四、室二〇、二圓半、三圓、都屋(電三九、室二〇、一圓半、二圓半)。

觀月の名勝地捨山へは此處から自動車で行く、約四軒。

【上山田温泉】長野縣更級郡上山田村。戸倉驛の西南二軒、自動車乗合一〇錢(列車毎賃切五〇錢。前は千曲の清流に臨み、背後に冠著山を望み、温泉は無色透明の硫黄泉で、外傷性創傷・梅毒・皮膚病一切等に效がある)。

【旅館】三好屋(電上山三、室三五、③三圓)、清風園(電戸倉三六、上山田一六・五六、室六六、一泊二圓一五圓)、上山田ホテル(電上山田五、室二五、二圓、二圓半)、萩原館(電同一八、室一九、一圓三〇錢、二圓半)、龜屋(電二、室二五、一圓半、一圓八〇錢)。

【川中島の古戰場】川中島は篠の井驛及川中島驛の東南、更級郡の東北部、千曲川及犀川の合流する附近の中洲の名稱で、善光寺平の中心を占め、上田、松本、長野三街道の相會する交通の要路に當つて居る。古來戰略上にも重要位置を占めて居るので、壽永の横田河原の合戦、應永中の大塔合戦等歴々交戦の場所となつたが、中でも永祿四年十月、謙信、信玄の甲越合戦が最も有名である。その起因は、信濃高尾山の城主にて、附近の數郡を領して居た舊族村上義清が武田信玄に逐はれて上杉謙信に投托せしに因るものである(天文二二年八月)。弘治元年七月から十月に亘つて第一戰が行はれ、第二戰は永祿四年十月に戦はれた。當時謙信は東方妻女山に陣取り、信玄は西方茶臼山に陣を控へ最も激戦の行はれたのは小島田村八幡原である。「劇敵兩軍殺傷算なく、甲軍敗れ信玄の弟信繁之に死し、殆ど危し、時に小島田彌三郎横撃し、因て以て支ふるを得たり」と、山本入道勘助の討死したのも此處である。信繁の墓は水澤の典隆寺境内に、山本勘助の墓は柴村にある。

### 平穩温泉郷

長野縣下高井郡平穩村、信濃川の支流夜間瀬川に沿つて、湖ること約一六軒、星川と角間川との合流する附近を中心として、其上流敷料の間に点在する湯田中、安代、澁、上林、地獄谷と帯の様に長く地続きになつて居る五つの温泉と、山の上の養鴨、熊の湯の二温泉を合せた七湯が平穩村にあるので、之等を總稱して平穩温泉と稱し、是に川を距てた對岸の穂波村の角間及穂波の二温泉を加へて山の内温泉とも呼んで居る。

地は何れも海拔七五〇米乃至一、三〇〇米の高所にありて山水の美に富み、夏の避暑地としては勿論のこと、秋、紅葉のシーズンには、此温泉郷一帯の山岳、山陵溪谷の殆ど羅錦繡の粧ひをこらし、又冬季は上林を中心とする丘陵の各所には長野電鐵で開いた理想的なスキー場がある。此の地の他に誇る點は、宿泊料の廉い點と最も経済的な自炊制度の設けられて居る事である。

〔交通〕

▲長野―湯田中温泉間 長野電鐵一時間三分(三三軒三)片道九四錢、往復一圓五〇錢。

▲屋代―湯田中温泉間 長野電鐵一時間二分(四五軒一)片道一圓一八錢(途中須坂にて乗換を要す)往復一圓九八錢。

▲湯田中温泉 湯田中驛から湯田中温泉の中心まで半軒、自動車乗合五錢(途切五〇錢)。

地は平穩温泉郷の關門をなし、東北に山を背負ひ、前に星川の廣やかな河原を控へる海拔八〇〇米の地にあり、大湯を圍んで一五軒の旅館及百戸餘りの人家が櫛比して居る。此處には長野電鐵經營の遊園地があり、また山之内劇場、湯の宮神社があり、村役場の一角には當地澁出身明治南畫壇の巨匠兒玉果亭翁の記念に建てた「果亭文庫」がある。温泉は各旅館の内湯の外、鶴の湯・綿の湯・鷺の湯・瀧の湯・鹽の湯・大瀧湯・脚氣の湯・千代の湯・河原の湯等の浴場があり、各々多少泉質を異にして居るが、概ね硫

黄泉及鹽類泉で、泉温の高きこと信州第一と云はれ、七八度、子宮病・皮膚病・リウマチス・痛風・神経痛に效がある。

〔旅館〕 萬屋(電湯田中四三番、室二三、③三圓、古久屋(電四四番室一六、湯本(電五番、室三〇)、湯田中ホテル(電五九番、室一二)、中屋(同九番、室一五)、見崎屋(同三三番)、中見崎(同二七番)、鳥屋(同八番)、大和屋(同四二番)、金子屋(同二〇二番)、坂本屋(同四四番、丁字屋(同四七番)、大和屋(同四二番)、加命の湯(同五三番)笹屋(同二九番)。以上標準宿泊料一泊二食付二圓内外、三食付二圓半内外。

安代温泉 湯田中驛から凡一軒、乗合自動車一〇錢。湯田中から五、六百米、湯町に續いた星川縁の大道を曲り坂を下つた所にあり、大湯を中央に七軒の風雅な旅館が、松や楓の奥床しい植込に圍繞された静かな所である。温泉は無色透明の鹽類泉で六〇度、效能は湯田中と同じである。

〔旅館〕 山口屋(電湯田中三、一五五、室四〇、②二圓半)、山崎屋(同二二五)、鹿表開支店(同二〇二)、榊屋(同二二)、萬屋(同九)、安代館(同二〇)、越後屋(同二〇三)、普通一泊一圓半、四圓。

澁温泉 湯田中驛から一軒半、乗合自動車一〇錢。安代とは小橋一つを界にした湯町の宿の軒續きで、日用品や土産物を賣る店が二〇餘戸、二〇餘軒の内湯館と、大湯を始め初湯・笹の湯・神明の湯・七操湯・目洗湯・千代の湯等の湯等の浴場等が一小市街を形成して居る。此地は平穩温泉中最も古い温泉場で、嘉元二年現温泉寺の開山である虎關禪師及練國禪師が浴場の經營を始めたのによると云は

に效がある。

〔旅館〕 仙臺閣(電湯田中一四九、室三九、②二圓半)、鹿表開本店(同二〇一、室二五)、關屋(室一〇)一泊一圓半、四圓。

〔地獄谷温泉〕 上林から約二軒徒歩。横湯川上流の河床から約十米の高きに噴出して居る温泉で天然紀念物に指定されて居る。此處には名物として噴泉で蒸したちまきがあり、探訪者に喜ばれて居る。泉質は鹽類泉、硫酸泉の二種、效能は湯田中と同じ。〔旅館〕 後樂館一戸(室一四)一泊三食付二圓内外。

此處から約四軒の旭屋(一五二〇米)は先年秩父宮殿下御成りの光榮に輝き山上展望臺は四望廣闊、冬季は積雪一軒半に及ぶスキーの好スロープを持つて居る。

〔養鴨温泉〕 上林温泉から徒歩約六軒。地は海拔一、六〇〇米の高所にあり背後は深い原生林で遮られ、前面は曠野な展望を有し、日本アルプスの群峯を見渡す事が出来る。温泉は鹽類泉、無色透明の鹽類泉に屬し、泉温五四度、效能は湯田中と略同一である。〔旅館〕 天狗の湯、薬師の湯。

〔熊の湯〕 上林温泉から徒歩九軒、笠岳の麓、海拔一、七〇〇餘米の地にあり香打茶屋から草津街道を直に登つて行く、その途上に潤満瀾、幕岩等の名勝がある。此の温泉の特長は、含有して居る鐵質物が湯の表面に浮き出て、それが次第に厚さを増し、薄い雲母の様な膜が張り詰ると云ふ。今は此浮遊物は湯の花として賣出されて居る。上林から駄馬片道一圓半。〔旅館〕 熊の湯温泉旅館一戸、一泊一圓五〇錢、二圓。

〔穂波温泉〕 湯田中から徒歩三〇〇米、湯田中ホテルの所から真直に下つた所、横湯川と角間川との落合に近い川床の中に湧出した新しい温泉である。泉質は無色透明の鹽類泉で六〇度、胃腸病、疝氣、脚氣、リウマチス、神経痛等によいと云ふ。〔旅館〕 穂波館一戸、一泊三食付一圓二〇錢。

〔角間温泉〕 湯田中驛から穂波温泉を経て徒歩二軒餘、又は澁から和合橋を渡つて徒歩七、八百米。角間川の對岸、稍高みの所に位し、上林、澁、安代等の湯町を眺める事が出来る。温泉は無色透明の弱鹽類泉で、五〇度餘、脚氣に特效があり、胃腸病、常習便秘、神經衰弱、ヒステリー、火傷、眼病にも效くと云ふ。〔旅館〕 越後屋(内湯あり、電湯田中一五八、室三九)、高島屋(室八、同六一)、福島屋、養田屋、和泉屋、一泊一圓半以上。

れ、温泉寺は町の中央から左へ數十尺の石段を登つた所に建ち、様々な傳説が郷人の間に物語られて居る。又此地には素朴な盆踊り(八月一五、一六日)が盛んで、その純真な、田舎情緒のこまやかな風習が今に残つて居る。温泉は白微濁を呈する鹽類泉で、温度五〇度乃至七〇度、神経痛・中風・リウマチス等其他痔疾・胃腸病等に效があると云ふ。

〔旅館〕 金具屋(電湯田中四、室五五、②二圓半)、山本館(同、室五〇、②二圓半)、古久屋(同二五、室三四)、龜屋(同六五、室三四)、津幡屋(同二八)、天屋、もとや、松屋、ひしや、かどや、石の湯、西山館、いかりや、白銀屋、井筒屋、松坂屋、さかえ屋、たまりや、瀧本、小澤屋、小石屋、大丸屋、丸屋、大和屋、若松屋等。標準宿泊料一泊二食付二圓位、三食付二圓半位。

此處から草津へは澁峠を越えて二八軒、道は比較的良く澁から上り一六軒下り一二軒ある。人夫賃一日三圓(宿料雇主持)

〔上林温泉〕 湯田中驛から二八軒、自動車二〇分、乗合二〇錢。地は八五〇米の臺地をなした森の中にあり、西南低く開けて戸隠、妙高、黒姫の諸峯を望み、東に笠ヶ岳、岩管山等重なり、星川の清流美しく、坐り乍らにして山水の大觀を獨占して居る。此處には長野電鐵經營の遊園地があり(茶菓子付入園料二〇錢)大温泉プール、萬人風呂、食堂、運動場、遊戯場、一般休憩用の二階建大廣間等があり、旅館部(仙臺閣)もある。仙臺閣の直ぐ上には明治畫壇の巨匠寺崎廣業氏のアトリエを其徳寺院(尼寺)とした長壽山廣業禪寺がある。日置黙仙禪師の開山で、畫伯遺愛の佛像を木尊とし、側に畫伯夫妻の畫像を安置して居る。此地一帯冬はスキーの好練習地で、安造練習所にはシャンツェの設備もある。(宿には貸スキーの設備もある)。

温泉は無色透明の鹽類泉で温度六〇度、リウマチス・痛風・輸入病・貧血等

【中野温泉】長野県下高井郡中野町。長野電線平糶線と本島線との分岐点、信州中野駅から東四〇〇米(自動車六人乗五〇〇米)の所にある。電車賃長野から七二銭。又は信越線野澤駅から自動車二五分、乗合四五銭(二二回)、貸切六人乗二圓半。此の温泉は百數十萬圓の巨費を投じて五軒餘の平糶村上川原から湧出する熱湯を曳いたもので、白濁の弱酸性泉に属し、胃腸病、皮膚病、關節・リウマチス・ヒステリー・神經衰弱・婦人病等に効があると云ふ。中野町は製絲と柘柳竹細工業が盛んで人口約一萬五千、附近に高梨城址、如法寺遊園地、川東善光寺等がある。

【旅館】中野館(室三二、一泊一圓六〇銭)二圓半、電中野三五、内湯あり)翠山亭(電六二、室二二、一泊同上)。

【野澤温泉】長野県下高井郡野澤村、信越線野澤から直通貸切自動車八圓一時間半、又は長野電線河東線終點木島驛(長野から一時間一〇分、七五銭)から北へ二二軒、自動車乗合四五銭。或は飯山鐵道(野澤から分岐)により上鏡驛下車、それから三軒、自動車二五銭、又は同鐵道飯山驛から一二軒、自動車五〇銭。

地は海拔七六〇米、東南北は山に圍まれ、西は開けて北アルプス連峰の眺めがよい。温泉は温度高く(九〇度乃至一二〇度)また非常に豊富で、出口二五ヶ所を有し、八つの共同浴場がある。泉質は硫酸泉及鹽類泉の二種、胃腸・皮膚病・リウマチス等に効があると云ふ。附近には湯澤神社・健命寺・觀音山公園及麻釜の噴湯などがある。麻釜は熱湯が五つあり、其中三個の釜には年産十萬圓を輸出する木通細工の原料を浸し、他の二個は村人の調理用として茹物に使はれて居る。町は戸數五百、旅館三〇軒、冬季はスキーが盛んである。

【旅館】酒屋(三食付一圓半)、常盤屋(同上)、千蔵館、岩井屋、龜屋、林田屋、岩戸屋、山屋、島屋、枕屋、末廣屋、桐屋、電野澤二〇、三食付一圓半、住吉屋(電野澤五、一泊一圓半)、奈良屋、麻屋、湖月、港屋、角屋、松木屋、永樂屋、大丸屋、藤屋、大和屋、中島屋、河木屋等。一泊二食付二圓内外。(三食付料金はスキー季節に限る)。

【山田温泉】長野県上高井郡山田村。長野電線須坂驛(長野から三六銭)から東北一軒、自動車三五分、乗合六〇銭(一日一回)、貸切六人乗四圓。此處は白根山の西麓、海拔八〇〇米の地にあり、脚下に松川を控へ、三方は山に圍まれ、西は遠く開けて善光寺平を展望した眺めがよい。此處から五色温泉へ

軒五、電三一四、室二六、同上)、山屋(大門町二六、電一七五、電一二七、同上)、池紋(大門町三九、電一七五、電三三六、室二二、同上)、清水屋(大門町、電一七五、電六七二、室二二、同上)、恵比壽屋(末廣町五、電六六四、一泊二圓半、三圓)。

【娯樂場】長野劇場(箱清水)、菊田劇場(西鶴賀)、相生座(權堂町)、長野演藝館(大門町)、長野活動館(石堂町)等。

【廻覽順路】(A) 驛―刈萱堂―善光寺―城山公園―往生寺―驛。(B) 驛―西光寺―大木願―大勸進―善光寺―記念公園―往生寺―裾花峽―戸隠神社―長野驛(又は柏原驛)。

以上自動車にて九時間位、料金二〇圓。自動車貸切一時間三圓、半日九圓、一日(午前七時―後五時)一八圓。

善光寺 長野驛から二軒、自動車一〇分、乗合一〇銭(一日三三回) 市の北端大峰山麓にあり、南面して市街を俯瞰して居る寺は別當職大勸進と稱する天台宗(寛永末)の僧寺と、寺務職大本願と稱する淨土宗(別格寺)の尼寺とに依つて守られて居る。今の堂宇は約三百餘年前の寛永四年七月(紀元二二八七年)に幕府が松代藩に命じて建立せしめたもので、金堂は特別保護建造物に指定され、東西二七米餘、南北五三米弱高さ三五米の大伽藍は賽者の目を驚かし、柱數一三六、垂木六萬九千三百八十四、以て法華經字數に准へて居る。本尊は三國傳來の一光三尊神と稱せらるゝ御丈一尺五寸、閻浮檀金の阿彌陀如來の尊像である。人若し生を享けて善光寺に詣でなければ彌陀の淨土に至つて其光明に浴する事が出来ぬと云はれ、四時善男善女の賽者で雑路を極めて居る。善光寺如來の尊像は今を距る一三八〇餘年前、欽明天皇一三年(紀元一二二二年、西歷五五二年)百濟國王から經卷と共に我邦に始めて奉獻せられたもので、大臣蘇我稻目その子馬子は之を深く信仰したが、物部、中臣二氏の

は六軒、七味温泉へは八軒、松川の溪谷に沿ふてゆくので、秋は紅葉が實に美しい。萬座温泉(二四七頁参照)はへ一六軒ある。温泉は無色透明の鹽類泉で、五〇度、脂肪過多、痔疾、胃腸病、リウマチス、婦人病、外傷等に効があると云ふ。

【旅館】山田館(室三〇、二圓半)、湯本ホテル(室四〇、二圓半)、風景館(二圓半)、藤井(室三三)、北信館(室三〇)、湊屋(室四〇)、伊賀屋(室八)、るま小室(二七)等。一泊一圓半以上。(電話は須坂局呼出し)。

長野市

長野市は飯繩、戸隠の二山を背にして善光寺平の一角に位して居る。市は往時越後、越中から江戸に通ずる驛路にも當つて居たが、主として海内著名の靈刹善光寺を中心としてその門前町として發達した佛都で、昔は善光寺町と稱し、長野驛から善光寺、仁王門に達す南北約二軒の一直線街路は、市のメインストリートとなつて居る。今長野縣廳が置かれ、その他裁判所・營業署・稅務署・測候所・鐵道保線・運輸兩事務所等の官公廳又ラヂオ放送局があり、銀行會社、工場等が多い。人口七三、九一二(昭和五・一〇調) 陶土、箆筒、柘柳、木通細工、麻絲、干杏を産する。

【名物】そば、林檎、杏羊羹等。

【旅館】藤屋ホテル本店(大門町、驛から一軒六、電話二二、室八〇、外に洋室二、一泊二圓半、三、四、五圓、三圓半)、藤屋ホテル支店(末廣町、驛前、電三〇四、三圓半)、犀北館(縣町、驛から八〇〇米、電一五、和室二八、洋室四、一泊三圓一五圓、洋室々代三圓一〇圓)、五明館扇屋本店(大門町、驛から一軒六、電一二二、室二七、一泊二圓半、三、四、五圓)、扇屋支店(驛前、電五七〇、室一五)、花房屋(權堂町九五、電三一、驛から八〇〇米、室一六、一泊同上)、白木屋(大門町、驛一

反對に連ひ、難波の堀江に投ぜられたものを、推古天皇の御代、信濃の人本田善光が拾ひ上げて持ち歸り、之を一時伊那聖光寺村に奉じ、次で麻績郷今沼村に小堂を建て、安置したが、皇極天皇の九年今の地に移された云ふ善光寺由來は人のよく知る處である。善光寺の名は本田善光の名に因んだものである。その後武田信玄は此の像を甲府に移して新善光寺を建て、武田氏滅亡の後織田信長が岐阜に移し、徳川家康は濱松に、豊臣秀吉は京都にと、更に諸國を轉々として最後に慶長三年秀吉によつてまた舊地長野に戻されたものであると云ふ。

寺内には末派寺院及僧坊約四〇、納骨堂、毘沙門堂、阿闍梨の池、法然上人及親鸞上人の舊蹟、聖徳太子鏡の御影、御靈屋、接待所等がある。境内は今公園となり(一萬八千二百七十三坪)其東に續いて城山公園がある、城山の中腹には城山館があり(長野市公會堂)善光寺平一帯を俯瞰して風光がよい。

▲大勸進 山門の西側にあり善光寺別當職で天台宗に屬し住職は比叡山、東叡山から薦舉せらるるを常とする。▲大木願 二王門下西側にある善光寺寺務職で淨土宗、住職は代々尼公と定められて居る。▲釋迦堂 山門世尊院にあり國寶金剛の釋迦涅槃像を安置す。▲刈萱山西光寺 石堂丸が父を訪ねて來て寂滅せる所、加藤重氏の開基にか、り石堂町にある。(驛から半軒、善光寺への途中にある)。▲往生等 善光寺の北西八〇〇米、驛の北西約二軒八の往生寺山の南麓にある、自動車善光寺前にて下車。もと筑前の國主加藤左衛門重氏等阿と云ふ)が草庵を結び入寂した所である。

【裾花峽】長野驛から西北五軒餘の茂菅から裾花川の上流四〇軒ばかりの間、峽谷を云ひ、市内大門町から裏無里村迄二軒自動車便がある(一日五回)、驛から茂菅まで二〇軒、峽の終點下祖山まで八五軒。

峽谷は第三紀層流紋岩、安山岩の集塊岩を侵蝕して生じた若年谷の風景地で、兩岸の峭壁相迫つて奇岩百出するところ、溪流曲折して或は奔流となり、或は深潭を作つて山水の勝をなし、秋葉霜に染むる頃は殊に美觀を呈する。風景の勝れた所は觀音岩附近、小鍋峽一帶、銚子口溪谷、奥裾花の深溪である。奥裾花は黄無里の文珠堂から上流を云ひ、溪谷二〇軒あまり、岩から岩、溪から溪を傳ふて高妻山の裏に出て五地蔵岳に達するのであるが、此處に入るには充分の準備と案内者の必要がある。



【戸隠山・戸隠神社】

戸隠山は長野市の西北、信越國境に近く聳ゆる名山であるが、飯縄(一、九一七米)、高妻(二、三三三米)、乙妻(二、三二五米)、黒姫(二、〇五三米)、妙高(二、四四六米)、の諸峯に續く一帯の火山帯、所謂高妻火山群中の一峯で、しかも俗に戸隠山と稱するは五地藏岳(一、九九五米)、高妻山、乙妻山を戸隠山とする前山にすぎぬ。

戸隠前山即ち俗に云ふ戸隠山は海拔一、九一一米、全山輝石安山岩から成り東に飯縄山、東北に黒姫の火山近く聳え、北は高妻山を経て信越の名山妙高山に接し、西は松川の谷を隔て、日本北アルプスの白馬岳に接して居る。稍西南に連る西岳(二、〇三五米)から戸隠山を経て北の五地藏山に至る凡そ一〇軒の山列は、東南面が著しく懸崖、奇峯をなして全山凝灰質集塊岩からなり、妙義山式の奇景を呈して壯麗を極めて居る。山麓には國幣小社戸隠神社中社、山頂にその奥社があり、古來信仰登山者が多し。

戸隠山は神代の昔、天照皇大神天岩戸に隠れさせ給ふた時、神力雄命が岩戸を押し開いて投げられたのが、茲に落ちて山となつたものだと傳へられ、また中古平維茂が戸隠山の鬼女を退治したなどと云ふ傳説を有し、山中に天の岩戸、鬼女退治の古蹟、釜添岩、落岩、木曾殿古蹟等の名所がある。

【交通】一、長野縣から戸隠中社まで一六軒、自動車七〇分、乗合一圓四〇錢、貸切七圓、奥社まで約一九軒、自動車は奥社の一軒半許り手前の鳥居前までゆく、所要八〇分、乗合一圓六〇錢(五圓)、貸切八圓。

二、信越本線柏原驛から西へ飯縄山と黒姫山の裾谷を流る、鳥居川に沿ふて戸隠中社及寶光社まで約一七軒、奥社迄一七軒、自動車奥社鳥居前迄一時間半、乗合片道一圓六五錢、往復二圓五〇錢(二日一回)、貸切五人乗一〇圓。

【長野口】長野から西北に大峯の峻坂を越え、荒安村から飯縄山麓の高原を経て山道につく。此の飯縄原は六八軒に亘つて起伏する一帯の裾野で、八個の湖沼が散在し、タヌキ藻、モウセンゴケ等食虫植物が生育して居る。原の最高に「戸隠神社」の扁額を掲げた一ノ鳥居がある。長野から約一〇軒、一ノ鳥居を落ると戸隠山が西方に現はれて来る。正面から少し左に見える、突兀の山は謡曲や芝居にある平維茂が鬼女を退治した荒倉山である。一ノ鳥居から約八〇〇米下ると大久保部落がある、そこに二、三の茶店がある。更に一軒許りゆくと二又道があり、左すれば寶光社、右すれば六軒で中社に達する。

湖上舟遊

貸切モーターボート一時間二圓半、和舟一時間三〇錢。貸ボート一時間三〇錢。

【旅館】

室川館(バス終點から一〇〇米、室八、一泊一圓二圓半、②二圓半)、小松屋(室一二)、藤屋(室一〇)、坂木屋(室六)、一圓二圓半。

妙高温泉

新潟縣中頸城郡名香山村。信越線田口驛から二〇〇米、自動車五分、乗合一〇錢、列車毎、貸切五〇錢。

地は越後富士の稱ある妙高山を負ひ、黒姫、長範、袴岳斑尾山の峻嶺重疊の間にあり關川に臨んで風光絶佳である。冬季はスキーの好適地として赤倉、關温泉と共に全國に知られて居る。(二月中旬から四月中旬頃迄滑れる。雪量二一三米)温泉は妙高山の北地獄から曳湯したものであるが、今は専ら南地獄から曳いて居る。泉質は弱鹽類泉で無色透明、筋及關節リウマチス・腺病・慢性濕疹・婦人病等に效がある。

【旅館】石田館(電關川二、室二六、②二圓半)、鶴屋ホテル(電同七、室二四)、加島屋(電同三、室二六)、若尾(電同四、室二〇)、かねた館(電同二、室一九)、小林館(電同二、室二二)、香風館(電四六、室一八)、(以上普通宿泊料一圓半乃至三圓半)。

赤倉温泉 新潟縣中頸城郡名香山村赤倉。信越線田口驛から約五軒、自動車一五分、乗合片道五〇錢往復九〇錢(前七時から後八時迄列車毎、貸切五人乗二圓半)。

地は海拔七五八米の妙高山腹にあり、北方は廣々と開け頸城平原遠く展開して遙かに日本海の蒼海を眺め、佐渡ヶ島迄指摘される。西方は妙高山雲表に聳え、南方、黒姫、飯綱の高峰櫛立して居る其の中に、野尻湖の明鏡が隠見して居る。土地高燥、四季野に山に興が盡きない。附近はスキーの好適地で一二月月上旬から四月上旬まで滑れる。泉源は温泉場の西六軒、妙高山中の北地獄から曳いたもので泉

中社には八意思兼命を、寶光社には天表春命を祀り、天手力雄命を祀る奥社を併せて戸隠三社と稱ふ。中社は長野縣上水内郡戸隠村戸隠、海拔一、一六五米、盛夏も尙暑熱を知らぬ仙郷にあり、道を挟んで兩側に神官の居宅が並び、登拜者に宿泊の便宜を興へて居る。神社は孝元天皇即位五年の鎮座と傳へて居るが、神佛混淆時代には修驗道者が多く入峯して主奉し、佛神の靈蹟を説いた處である。別當天台宗の顯光寺は、俗に戸隠三千坊と云はれ、明治維新前には尙三六坊もあつた。寺傳には役行者此の山に九頭龍を封じたと傳へて居る。維新後修驗山伏停止せられ、神佛混淆を一洗して縣社としたが、二三年國幣小社に列せられた。例祭は八月一四日、奥社では同一五日、寶光社では一六日に祭事がある。

中社から寶光社までは一軒、中社から奥社までは約三軒三、御手洗川の石橋の所で柏原からの道と會ふ。橋を渡ると鳥居があり、杉や樺の並木道を約一軒半もゆき更に赤塗の隨神門を潜れば登りとなり、五十間長屋、百間長屋、蟻の戸渡り、銀の双渡り等の懸崖絶壁を登れば、普通戸隠山の絶頂と稱する前山の西端なる八方院に達する。本社は霧々たる大巖石の下に立てられて居る。山頂からは近くは戸隠・鬼無里の諸村落、高妻、乙妻の二山を始め、西には日本アルプスの白馬岳からその南へ一列に連るアルプス連嶺のパノラマは實に美觀である。

これより更に乙妻、高妻の山頂をきはめるのを戸隠裏山又は奥山登山と稱し、その縦走は極めて興味があるが、必ず案内者を伴はねばならぬ。登山者は中社及奥社に宿泊が出来る。中社には二一戸、寶光社には一六戸あり、概ね寺坊が宿舎となつたもので、信州をばは特に此處の名物である。

【野尻湖】信越線柏原驛から約四軒、自動車一五分、乗合片道二五錢往復四〇錢(一日一回)貸切五人乗一圓。湖は南北兩岸に丘陵を示す第三紀層山地の間にあつた谷が、東の斑尾火山、西の黒姫火山が噴出して上流下流ともに埋められて生じた堰塞湖で、湖面は海拔六五四米、面積三・八五五方米、最深三八・五米、湖岸は頗る出入に富み芙蓉湖の名がある。湖中には琵琶島があり辨天祠を祀り、湖面には斑尾山の翠巒が影を映じ、遠くは妙高、黒姫、飯縄等の諸山を仰いで風光がよい。近來避暑地として外人間に喜ばれ、冬はスケート場として賑はひ(一月中旬一月上旬、三月には全部解氷する)スキーの好スロ―プもある。

質效能は妙高と同じである。

【旅館】赤倉ホテル(電赤倉一、室五六、一泊一圓半、四圓、③三圓、洋室三、一泊四圓位)、香嶽樓(電同三、室三六、一泊同上)、香雲館(電六、室二九、一圓半、二圓半)、高田屋(電一〇、室一六、一泊一圓半、三圓)、廣島屋(電五、室八、一圓半、二圓)、泉屋、あたらし屋、清水屋、豆腐屋(以上一泊一圓半、二圓)、妙高クラブ(電なし、室一七)。

【池の平温泉】中頸城郡名香山村。田口驛の西南三軒三、自動車一五分、乗合三五錢、前七時一後八時迄列車毎、貸切一圓八〇錢(五月一十月)妙高山の東南麓海拔七〇〇米の高所にあるので眺望がよいのは勿論、冬期雪量は妙高より一米餘も多く、附近妙高の大斜面、茅場、一本松、三つ瀧等のスキー場がある。温泉は妙高山から曳湯したものであるから泉質は妙高と同様である。

【旅館】妙高閣(電關川八、室二九、一圓半、三圓半、②二圓半)、加島ホテル(電同二九、室二六、一圓半、二圓半)、上越館、川越屋、エビス屋等。

【關温泉】中頸城郡關山村。田口の次驛關山驛から西南六軒半、自動車上り六〇錢、下り四〇錢、貸切上り四圓、下り二圓。地は海拔約九〇〇米の高所にあり、西は妙高山聳え、神奈山、前山、黒姫、戸隠の高嶺南北に重疊して眺望雄大であるが、北方には山波が打返して居る日本海の方面は充分に眺める事が出来ない。此處もスキーの練習地として知られて居る。温泉は含鐵鹽類泉で温度五〇度、胃腸病・呼吸器病・子宮病・皮膚病に効がある。旅館は笹屋、富山屋、柳屋、初音屋、中村屋、小松屋、吉野屋、花屋等。(一泊一圓半、二圓半)。

【燕温泉】關温泉から更に徒歩約一軒七許り登つた所にあり、此處から妙高山頂迄は約六軒、途中に地獄谷や光明の瀧などの稱がある。温泉は帶黃色半透明の硫黄泉で、温度五〇度内外、リウマチス・子宮病・皮膚病・外傷等に效がある。旅館 中村屋、明治屋、岡木屋、笹屋、岩戸屋、一圓半、二圓半。

【妙高山】赤倉温泉から山頂まで一二軒、七時間で上下する事が出来る。山は海拔二、四四五・九米のコンニデー型の中央火口丘が屹然と頭角を聳え、その前方には前山、南方には赤倉山、北方には神奈山が圓陣をつつて取回み、二重式火山の典型をハッキリと認める事が出来る。山頂には阿彌陀堂があり、富士・淺間・八ツ岳・白根・戸隠の高峯・佐渡ヶ島など眼裏に入る。

北陸沿線

【親不知・子不知】新瀉縣西頸城郡歌外波村及市振村海濱。北陸本線親不知驛から市振驛に至る間、白馬山脈の走つて海に迫る所を云ふ。峭壁亂峙するこ

【小川温泉】富山縣下新川郡泊町。北陸本線泊驛の東北約一杆九、自動車五分、一〇錢(列車ごと)。

元湯宿館一泊二圓一〇圓半。

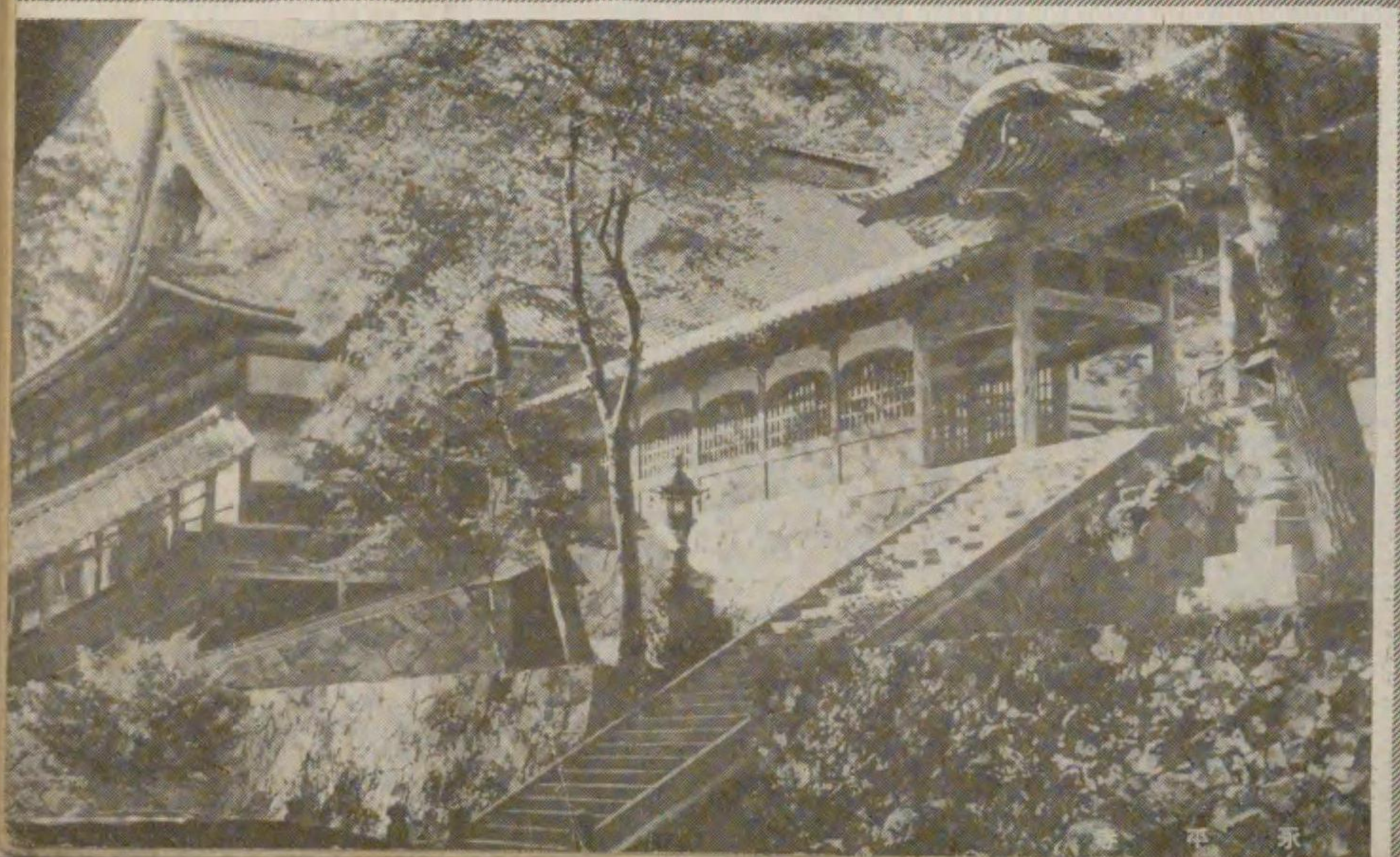
富山市 上野から急行列車で八時間四九分(四一二杆四)、三等、四圓八

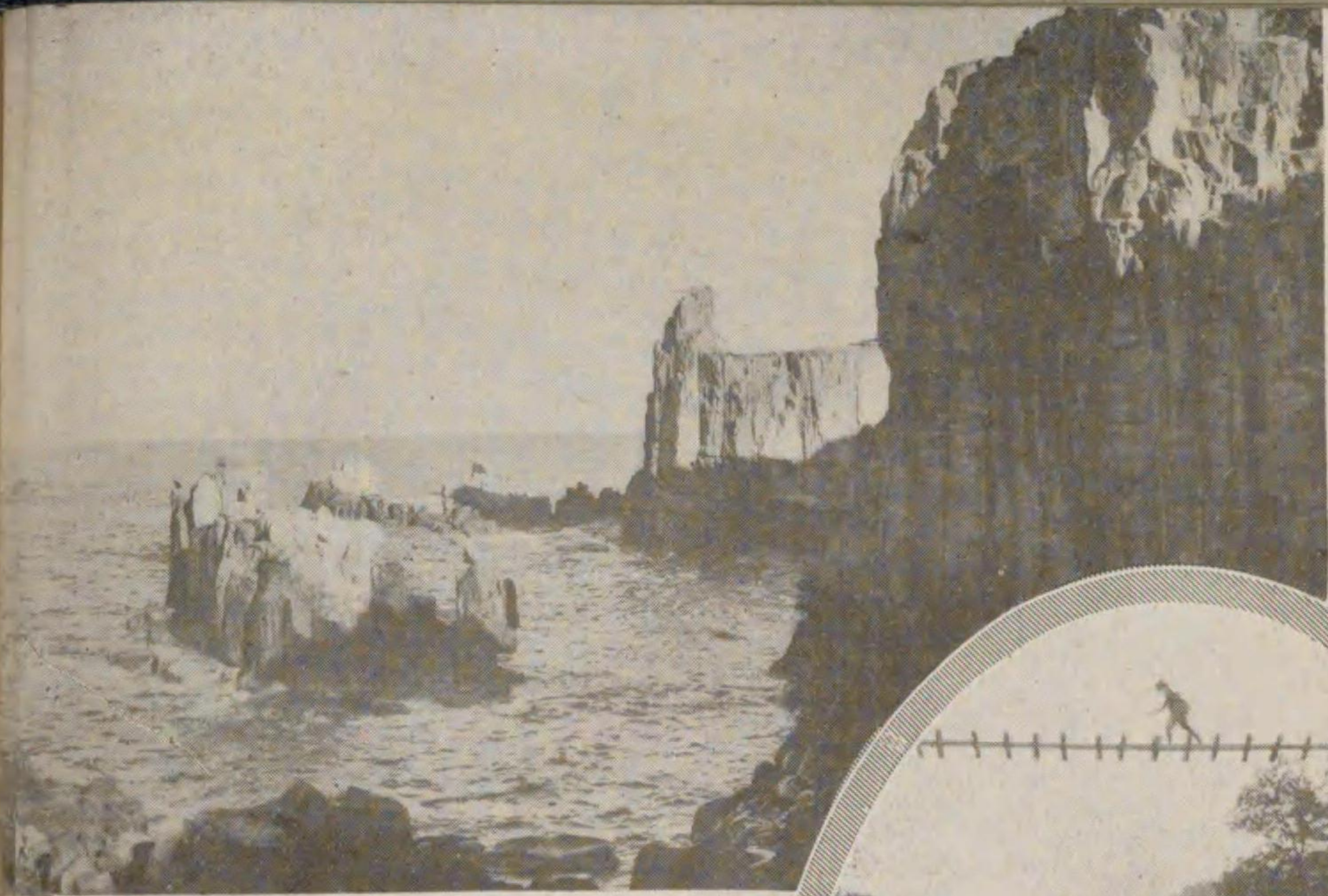
一〇調) 富山はもと藤井と呼ばれ、眞言宗の一寺隆井富山寺のあつた一麥村であつ



北陸の旅

- (上) 野尻湖 (本文二五四頁)
(中) 妙高山麓 倉のスキ (本文二五五頁)
(下) 福井の永平寺 (本文二六五頁)





北陸名所

(上) 東尋坊

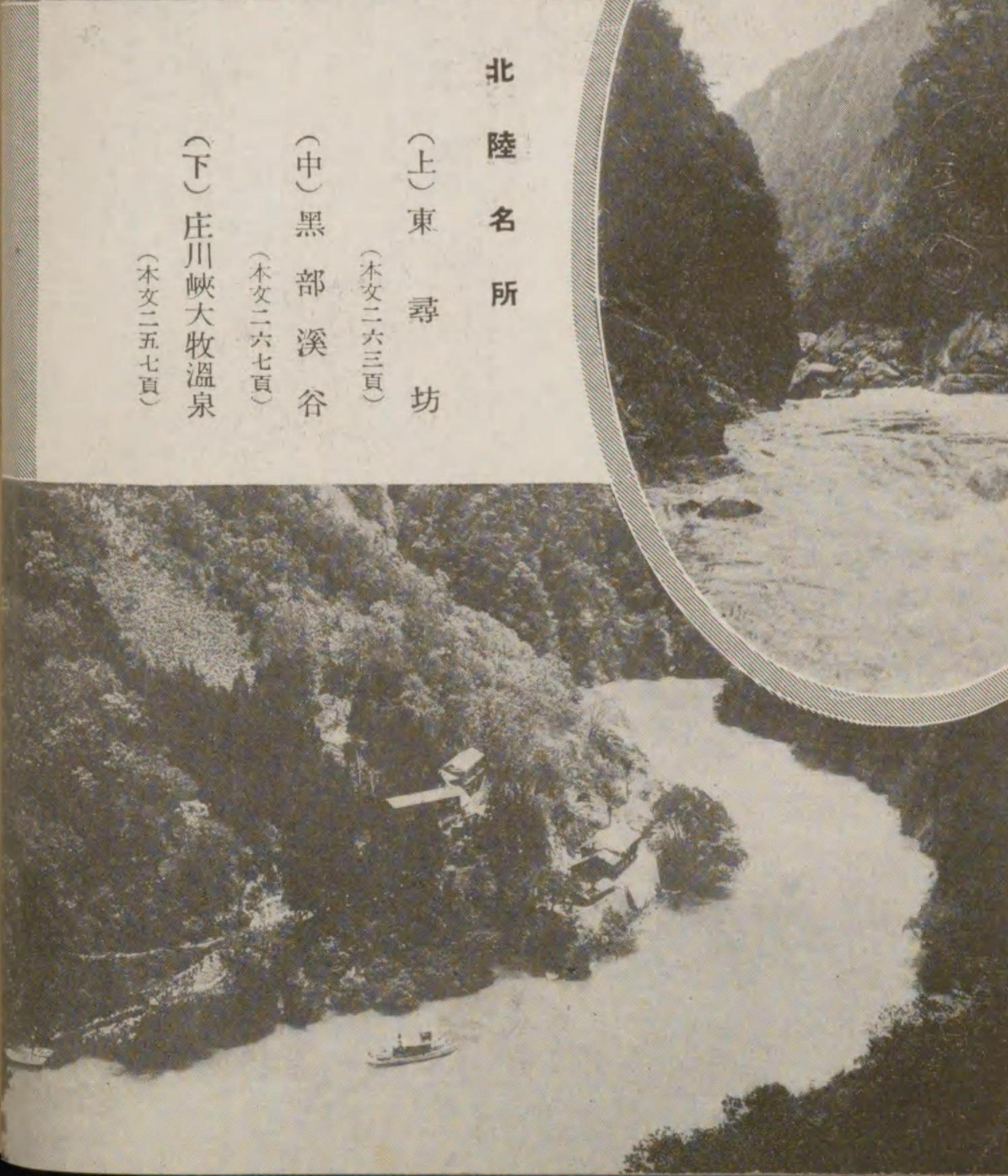
(本文二六三頁)

(中) 黒部溪谷

(本文二六七頁)

(下) 庄川峽大牧温泉

(本文二五七頁)



で電車の便がある。山は海拔八〇米、市の西列に當り、北アルプスや市街の展望がよい。

【富山の賣藥】反魂丹や熊膽丸、感應丸などで全國津々浦々から海外にまで知られてゐる富山の賣藥は、天和六年富山二代の藩主正甫が慈善的に病者を救療するため斯業の隆盛を圖つたのに始まる。此の業は始めは富山のみに限られて居たが、漸次上市・東岩瀬・滑川・水橋・四方・小杉・中田等の各地にも擴がり、今では縣下の總産額二千萬圓に上り、内地は勿論朝鮮・臺灣・支那・印度・南洋・布哇等迄も販路を擴張してゐる。

【立山】(二七一頁参照)。

【高岡市】北陸本線高岡驛の所在地で中越線の支線を出し、北方一二軒に日本海岸屈指の要港伏木港を控へ、富山縣西部の交通、經濟、文化の中心をなし商工業の盛んで、銅鐵器の産地として名高い。人口五一、七六〇(昭五・一〇)。

【旅館】延對寺(末廣町、驛一〇〇米、電二六〇、一泊二圓五〇錢、三圓、四圓)、梅松園(末廣町、驛二〇〇米、電一三八、一泊同上)、高岡ホテル(坂下町、驛一軒半、電五七、一泊同上)、木津樓(定塚町、驛一軒三、電五六、一泊同上)、大昌樓(堀上町、驛一軒、電二一〇、一泊同上)、富士館、福水樓(片原町、驛七〇〇米、同上)以上料理兼業。高岡館(驛前、電二三八、一泊一圓半)、二圓半、官吏學生向、光陽館(驛前、電二八八、一泊同上、商人向)、角久(定塚町、驛四一〇米、電三五四、一泊二圓均一、商人向)。

【廻遊順路】驛―櫻馬場―高岡公園(城址及射水神社)―前田利長墓―瑞龍寺―驛。以上貸切自動車にて一時間位、料金一圓五〇錢。

【名所】▲櫻馬場 驛から公園に至る街路で、往時前田利長が此の兩側に櫻樹を移植して調馬場とせしより此の名があり、櫻樹數凡五〇〇株、多くは二三〇年前のものに屬し、花季には壯觀である。▲高岡公園 驛から東六六〇米、慶長一四年九月加賀二代侯前田利長の築城した城址で、面積七萬餘坪、加越能三州中最も形勝の地を下して營んだ處と云はれ、天然の風光絶佳である。城は慶長一四年五月利長薨去と共に廢城となつた。

【射水神社】(國幣中社) 驛から東七七〇米、高岡城本丸址にあり、延喜制の名神大社で二上神を祀る。當社はもと二上山麓にあり、養老元年僧行基が二上山に養老寺を創草して勸請したものと云ひ、明治八年此處に遷座された。現在の本堂及拜殿は明治三五年八月の再建である、例祭は四月二三日。

二上山は伏木港の西方四軒にある高さ二五九米の小丘陵であるが、秀麗形を有し、古くから月、紅葉の名所として古歌にも多く詠まれ、山頂からは日本海上遠く佐渡ヶ島をも望み、眺望實に絶佳である。

▲瑞龍寺 驛の南八八〇米、市内下關にあり、明暦年間前田利常が先代利長の菩提所として建立したものと云ひ、往時は加越能三州中第一の寺格を有する曹洞宗の巨刹であつた。佛殿、法堂及總門は今尙當初のものも存し、佛殿は國寶となつてゐる。

【大牧温泉】富山縣東礪波郡利賀村大牧。北陸本線石動驛から加越鐵道で青島町まで四〇分(一九軒五)、四九錢。又は北陸線高岡から分岐して居る中越線の福野驛(高岡から四九分、一九軒四、三二錢)で前記加越鐵道に乗換へ、それから青島町まで一三分(六軒七)、一七錢。青島町から庄川水力發電所専用電車で二〇分、小牧の發電所堰堤下に達し(賃一五錢)、夫から庄川峽の絶勝を賞し乍ら汽船で三五分で大牧温泉に着く、汽船賃三五錢。(専用電車は加越鐵道の各列車及大牧・祖山行汽船と連絡して居る。汽船は一日六七回往復あり貸切五人迄三圓)。

大牧温泉は庄川水力電氣會社の大ダムにより生じた一大峽湖庄川峽の絶勝に臨む仙郷にあり、温泉は弱鹽類泉で、泉温三九度、胃腸病・リウマチスに特效がある。

【旅館】大牧温泉旅館、室二三、一泊一圓五〇錢以上、外に自炊部四〇室あり湯間賃(食事道具及薪代共)一人一日三五錢、五〇錢、蒲團賃料二枚上等一日二〇錢、木炭一箱一〇錢、電話井波園一一番。

庄川は遠く濃飛の國境烏帽子岳に源を發し、大白川を併せ、沿岸至る處奇峭絶壁をなす中を或は躍り或は左曲右折して途中幾多の絶景をなして北流し、富山平野を灌溉して富山灣に注いで居る。

庄川峽は庄川水力電氣會社の大ダム(高さ二六〇呎、長さ一、〇〇〇呎)により庄川の清流を堰き止めて溢へられた延長七哩の一大峽湖で、碧潭峽間に張りて漣さへも立たぬ深澄な山水湖を現出して絶勝をなし、小牧から大牧を経て祖山まで一日數回汽船の便が開かれて居る。

汽船賃、小牧―大牧間三五錢、小牧―祖山間四五錢、大牧―祖山間一〇錢。大牧から尙上流約二軒の平村大字祖山には祖山温泉があり、此處は加賀國の發頭人大槻傳藏最期の地である。泉質は大牧と同じ。尙庄川の上流飛騨國

境に至れば平氏の末裔が住むと傳ふる五箇村があり、大牧、祖山附近あたりで唄はれる「姿や節」は平氏の殘黨が都の榮華を思ふ心から生れたものといひ一種の哀調を帯び、また平家踊と云ふものがある。

浪の屋敷をのがれ来て、薪木採るてふ深山邊に鳥帽子狩衣脱ぎ捨て、今は越路の袖家かな

―姿や節―

【俱利伽羅古戰場】北陸本線俱利伽羅驛の東南約五軒、加越の國境、河北郡俱利伽羅村瀨波山中にあり(二七七米)、壽永二年五月(皇紀一八四三年)木曾義仲の軍が大牛の奇計を以て平維盛の率ふる平氏の軍を破つた有名な古戰場で、西南二軒の埴生庄の護國八幡宮には義仲が戦勝を祈つたと云ふ願文が今尙存し、またそのすぐ南の蓮沼村關野谷には、義仲の愛妾巴及葵兩女の墳墓がある。

(能登半島)

七尾港

七尾線七尾驛所在、金澤から汽車二時間餘(六六軒)三等一圓三錢。

地は能登半島の咽喉を扼する重要都邑で七尾灣頭に位し前面に横はる能登島は日本海の激流を防いで良港をなしてゐる。人口一、二〇、〇一六(昭五・一〇調)産物には海鼠及能登上布がある。名物 大豆餡。

【旅館】 惠比壽屋(電七七一、室一六、一圓六〇錢)二圓八〇錢 小山屋(電二五、ふじや電四三)、大津屋(電五二)、佐田美屋(電四三四)、まつなぎや(電七〇)一泊一圓半以上。

【附近名所】 ▲七尾城址 驛の東南約五軒半、矢田郷村石動山の北にあり慶永年間畠山滿則が能登の守護に補せられた時築城したもので、城址は眺望がよい。▲能登國分寺址 驛の南二軒、徳田村字國分にあり、小徑の傍に塔の礎石が残つてゐる。▲能登島 七尾灣の中心に横はる大島で、東西約一、一軒七、南北約六軒、面積四六方軒餘あり、全島低樹叢生する丘陵で鹿島郡に屬し、三ヶ村の部落がある。汽船二〇錢。

六二)其他。以上一泊一圓乃至二圓。

【穴水町】(石川縣鳳至郡) 七尾線の終點で、分岐點津幡から約三時間、金澤から三時間一五分(九九軒)、三等一圓五錢で達し、此處から飯田、輪島、門前等の各地に定期乗合自動車を出してゐる。

地は能登の中部に位し、七尾北灣に面する漁港で、人口六、二五九(昭五・一〇調)を有す。

【旅館】 山下(電穴水三三、一圓一圓半)、新谷電一〇、同上、大島(電一七、一圓一圓半)、辻木(電六六、六〇錢)一圓二〇錢、勝田(電一五、八〇錢)一圓半、毛利(電五八、六〇錢)一圓二〇錢、吉田(電五一、同上)。

【門前町と總持寺別院】 町は穴水驛の北西約二〇軒にあり、一日七回定期自動車があり、所要一時間、乗合片道七〇錢、貸切六人乗三圓(西へ約四軒で半島の西岸黒島村に達する。町は人口三千三百餘を有し、もと曹洞宗の大木山總持寺のあつた所である。同寺は明治三一年焼失後、大木山は神奈川縣鶴見に移され、今は別院として觀音堂・五院址・門前諸寺址等が残つて居る。

輪島町

穴水驛から北二五軒、前九時一後一〇時過迄一日七回定期自動車がある。所要一時間一五分、乗合片道八〇錢、貸切六人乗四圓。

地は能登半島の北端に位し、日本海に面した小港町をなしてゐるが、風波が荒く、町の西部の海士町が漁業に従事する外、他は殆んど漆器業に従事し、輪島塗の産地として知られて居る。人口一三、九一一(昭五・一〇調)

【旅館】 富士屋(電輪島五九、廣谷(電三六、濱忠(電二五)、川端(電一四)、長岡(電三三)其他、一泊一圓七〇錢、二圓二〇錢、三圓九〇錢。何れも料理兼業。

▲輪島塗 遠く應永年間に、土人某が九州根來から髹漆の法を傳へたのに初まると傳へ、堅牢な製品を出すのを特色として居る。近年沈金、象眼細工、調刻等の精巧な漆器も出すが、髹、髹類を主として出し、年額三百萬圓に達する。

北陸沿線 (穴水・輪島・金澤市)

【九十九灣】 七尾港から丸中汽船で小木港まで九〇錢(二一連)、その東方海岸の複雑な彎曲をなす部分を九十九灣と稱し、規模は小さいが風光勝れてゐる。

和倉温泉

石川縣鹿島郡端村。

七尾線和倉驛から北二軒、自動車六分、乗合一〇錢(列車毎)五人乗貸切五〇錢。

七尾町から七軒九、乗合一〇錢、貸切一圓。地は七尾灣を南灣、西灣に劃する辨天岬の尖端にあり、能登島の南端屏風崎前面に横はり、衝立島・雄島・辨天島・机島・種ヶ島・猿島・唐島などが静かな海に翠松を頂いて散在し、風光明媚の境を占めた海岸温泉で、夏季は海水浴に、灣内周遊によく、また釣魚は浴客の楽しみとするところである。尙此處は遊覽地としての外に遊樂的氣分にも富んで居て脂粉の香も相當濃やかである。

温泉はヨードブローム及鹽化土類含有の食鹽泉で、泉温八三度、リウマチス・婦人病・貧血症・萎黃病・濕疹などに效がある。

【旅館】 和歌崎本館(電和倉六、室一九、一泊二圓半一五圓)和歌崎別館(電五、室九、一泊同上、④四圓)、銀水閣(電四五、室一四、一泊二圓半一五圓、④四圓)、柴端別館(電一四、室三〇、一泊一圓半一三圓五〇錢、③三圓三〇錢)、加賀屋(電一九、室二六、一泊二圓二〇錢、三圓三〇錢、③三圓二〇錢)、多田館(電二、室一五、一泊二圓、三圓、②二圓八〇錢)、都石館(電一〇、室一六、一泊二圓半一四圓)、小泉館(電一六、室一二、二圓、三圓)、柴端本館(電一四、室一二、一圓八〇錢、二圓五〇錢)、直木館(電一五)、海望館(電二〇)、田中館(電一七)、松屋(電二三)、大井館(電四〇)、大徳館(電二七)、和歌政館(電三一)、多喜館(電五二)、室屋(電三七)、竹屋(電九)、本田館(電一一)、奥田屋(電

海士の祖先是早く九州邊から漂着したものと傳へ、彼等の言語は附近の住民とは異り、風儀は勿論粗野朴訥で、貯蓄心は頗る乏し、また男子は女子を助けて只舟を操縦するのみであるところから、女尊男卑の風が強いとの事である。之等海士達は春も終りに近づき、北海の波のや、銀まる頃、男女約七〇〇人、海士町を文字通り空虚にして、家族は勿論、財産も、警察も、學校も僧侶も共に同舟して、町から約四八軒の北の沖合にある船倉島に引移り、一〇月下旬頃にまた町に引上げるのである。

女子の海士は一八才位から四五才迄で、水中で悪魚の難を掃ひ得ると云ふ信念から姪も娘も一樣に觀音髻に結び、身にはサイジと云ふ巻褌をまとい、「く」の字型の貝金を腰に押し外は全くの赤裸々で一五尋乃至二〇尋の海中に躍り込む。朝から海に入ったものは午後は他の海士と交代するのであるが一日百圓の収入を得るものも少なくない云ふ事であり、その主なる收穫は鮑の一八、〇〇〇圓、エデ草の一六、〇〇〇圓で、船島のみで六萬圓、海士町全體では二〇萬圓に達すると云ふ。

船島は輪島から海上約四八軒(發動機船一日貸切往復一五圓位)周圍僅かに六軒の孤島で、最高海拔一二米に過ぎない平坦な地であるが、冬期は氣候酷烈で、漁業も不可能であるから、夏季のみ輪島から海士が渡來し、此處に初めて聚落が形成され、冬季はまた無人島となるのである。島の窪地からは淡水が湧出し、島の附近の淺灘一帯には海藻が繁茂し、魚族も豊富である。

金澤市

▲上野から急行列車で一時間一〇分(四七二軒)、三等五圓三三錢。▲大阪から急行列車で六時間五三分(二九七軒)、三等三圓七六錢。

市は石川平野と丘陵性山地との境に位し、北に淺野川、南に犀川が市を貫流し、外國貿易の先覺者、錢屋五兵衛の居住した金石港を西北に控ゆる北國第一の大都市である。現在人口一五七、三〇九(昭和五・一〇調)産物には羽二重を始め、絹織物・箔(金・銀・銅・洋箔)の四種で、全國生産の七割五分を占め

海外へも輸出する。漆器・銅器(意匠及色彩の純爛を以て著はれて居る九谷焼、雅趣ある樂焼の一種大樋焼があり、また硬質陶器をも産す)を産し、商況活潑である。

市はもと前田氏百萬石、三百年間の舊居城で、代表的な舊城下町である。市の發祥地は今の兼六園附近で、山崎と呼ばれた村落であつた。厩橋康永の頃親鸞三世の裔覺如上入此地に來りて一小利を今の城址の地に建立したのが創まりで、戰國時代の文明三年本願寺第八世の蓮如上入亦來りて此處に住し、伽藍本願寺を創立して別院とし、土壘を設け、木柵を繞らし、御山(或は尾山)と稱し、遂に勢力を得、長享二年守護富樫政親を亡し、兵革防衛のため堡障を設け近江山科から下間頼善を招いて堡守と爲した。その後天正八年織田信長の將佐久間信盛、主命を受けて之を陥れ、大いに修築を加へて居城と爲し、居山城と稱した。然るに天正十年信長は本能寺の變に仆れ、羽柴秀吉が其後をうけて天下の實權を握るや、忽ち信長の宿將等との間に衝突が起り、賤ヶ岳の戦となつた。此役に信盛は柴田勝家の部將として亡び秀吉は加賀二郡の地を能登の領主前田利家に加封した。依て利家は翌一年六月一日能登七尾城から此の地尾山城に居を移し、文祿元年土木を起して巖壁を築き、金澤城と改稱し、子孫繼承して明治に至つたのである。

前田氏が入城してからは、越前、尾張等から參集するもの多く、忽ち城下町として急に其面目を改めた。利家は夙く秀吉と共に信長に仕へ、また秀吉の晩年には徳川家康等と共にその五大老の重任を擔つたのであるが、家康が江戸幕府を開くに及び、他の外様大名と共に、幕府に臣禮をとらなければならなかつた。然し前田氏は外様大名中の最雄藩であつたので、自然自己防衛策から常に徳川氏に對し恭順の意を表し、また他方に於ては名工匠を招いて建築土木を起し、或は茗茶を張り名器を連ねて風流雅事を事として幕府の鋭鋒を避くるに力めたものの如くであつた。されば當時、木阿彌光悅、光瑛、光甫、後藤顯乘・即乘・程乘・小堀遠州等、豐臣氏の保護を受けた巨匠で金澤に集つたものが多い。今日市が美術、工藝の上に於て京都、東京に次ぐ優越の地位を占むるは、此の時代の餘瀝である。また能樂は、舊藩時代に於ける金澤人士の娛樂の中心であつたので、今日も尙實生流謡曲の隆盛な事は特筆に値し、茶道、生花も亦盛んで、市人の魚釣道樂の習慣などと共に、金澤は如何にも古い町である。

るとの感を深からしめ、金澤は人情の優しく住よい町であるとは他郷の人々のよく言ふ處である。

〔旅館〕 安井屋(金澤ホテル、驛前、電二四八・五三三、和室三二、一泊二圓半、洋室三、室代三圓一五圓。階下に和洋食堂あり、②三圓半) 源圓(上松原町一、驛へ一軒半、電一二三・二七七〇、和室一七、一泊四圓一八圓、洋室二、室代三圓)、藤屋(上柿木島町、驛へ一軒八、電一六〇・三一三、室一、三圓一五圓、③三圓半)、宮保(下柿木島町、驛へ一軒八、電一二一八、室一七、三圓一五圓)、茶屋(驛前、電四七五、室一八、洋室一あり、二圓一三圓)、朝井屋(仙石町、驛へ一軒半、電七三三、室一七、一泊二圓半、一五圓)等。

〔廻遊順路〕 驛—妙蓮寺—本願寺別院—卯辰山公園—兼六園—天徳院—大乘寺—野田山—香林坊—尾山神社—驛。六園—天徳院—大乘寺—野田山—香林坊—尾山神社—驛。持妙院の妙蓮池 驛前、木の新保六番町持妙院の境内にある。池は三九七方米及七三方米の二個あり、共に所謂妙蓮が群生してゐる。此の蓮は淡紅色の花を一莖に三乃至八輪、中には十數輪もつけるので珍奇なものとして天然紀念物になつてゐる。花期は八月上・中旬頃。▲東本願寺別院 東約一軒、市内横安江町にあり、市の起原と因縁の深い寺で、眞宗の盛んな市の寺として參詣者が多い。今の本堂は昭和二年の建立になり、市内第一の大伽藍である。▲卯辰山公園 驛の東約二軒半、淺野川を隔て、東北に蜿蜒連る丘陵で、向山又は東山遊園とも稱し、面積八萬アル餘の森林公園である。園中起伏に富み、觀湖臺と名づくるあたりが最も眺望に富み、河北濱から日本海を望み、脚下には金澤市を一眸に收める。▲兼六園 驛の東南二軒、電車公園前下車(五錢)、城址の東南に隣接し、小立野臺地の西北端を占め、日本三公園の一に數へられる名園である。もとの御遊殿の址で、文政二年(紀元二四七九年)前田齊廣の開いたもので、洛陽名園記の「園圃之勝不能相兼者六、務宏大者少幽邃、人力勝者少蒼古、多水泉者艱眺望、兼此六者惟湖園而已」と云ふ句に因り松平定信(樂翁公)の命名したものと云ふ。園内を二大部に分ち低部を蓮池庭、高所を千歳臺と呼ぶ。總面積凡そ三萬五百坪、明治七年五月太政官布告により萬人借樂の公園として公開されたもので、千歳臺の東部、日本武尊の銅像前には根廻り二米半、

温泉は無色透明の鹽類泉で泉温四九・五度、消化器病・神經衰弱・皮膚病・呼吸器病・腎臟炎等に效があり、特に脚氣山中の稱がある。

- 〔旅館〕 吉野屋(黒谷川畔、山中驛から八七二米、電山中一・四、和室四一、一泊四圓、四圓半、五圓、洋室二、和食付五圓一七圓、⑤五圓、聽泉閣(黒谷川畔、同二八米、電五・七、和室五〇、一泊二圓、二圓半、三圓、四圓、洋室五、和食付一泊三圓半、四圓、五圓、④四圓)、たあらや(黒谷川畔、同二〇九米、電三八・三三八、室一六、一泊二圓半、三圓、三圓半)、五明館(同上、總湯附近、同三二七米、電二、室三〇、一泊二圓半、三圓、四圓、④四圓)、山田屋(同上、同三二七米、電三二、室一五、一泊二、二半、三圓)、こんや(共同浴場附近、同三二〇米、電三一、室一九、二圓一三圓)、越後屋(同上、同三四〇米、電一四八、室一五、二圓一三圓)、近江屋(同上、同三二七米、電二二、室七、二圓一三圓)、かつらや(同上、同三〇〇米、電一六、室一八、二圓一三圓)、きく屋(同上、同三四〇米、電四七、室九、一圓半一三圓半)、小間物屋(同上、同三三〇米、電三五、室一三、二圓一三圓)、山下屋(同上、同三四〇米、電九、室九、一圓半一三圓半)(以上八、三、大聖寺驛調)

〔附近名所〕 小富士、促織橋、味谷、道明淵、高瀬、桂泉、采石巖、水無山大巖等の十景及蝶蜂橋の奇景其他の勝地がある。〔名産〕 山中漆器、九谷焼。

山代温泉 石川縣江沼郡山代町。北陸線動橋驛から南五軒二、温泉電氣會社電車で一五分、賃金一五錢。又は乗合自動車で三〇錢、所要二〇分(毎列車、貨切一圓半。前記山中温泉から電車で一九錢、同大聖寺驛から東六軒餘、電車一九錢、同粟津驛から電車三九錢、粟津温泉から電車二八錢、片山津温泉から電車二七錢。東に春日山及藥師寺山一帶の丘阜があり、他の三面は展けてゐる。有名な九谷焼の窯元は此の地で陶工後藤才次郎吉田屋などが出て居る。温泉は弱鹽類泉で無色透明、温度

山中温泉

石川縣江沼郡山中町。

北陸線大聖寺驛から八軒九、温泉電氣會社電車により二八分、賃二八錢。電車終點から旅館迄徒歩三〇米以上。又は大聖寺驛から自動車貨切四圓。町は西に藥師山、水無山の翠巒、東に東山の丘陵を繞らし黒部川の清流を控へ、町の南端に、ほろぎ橋の景勝がある。此處は山中節と漆器で知られた情緒豊かな温泉町で、

樹高六米半に及び菰藪があり、天然紀念物に指定され、また園の西部には圖書館・商品陳列所・兼六會館等があり、尙園の南部にある成巖閣は前田侯爵家の別墅であるが、その庭園は指定の名勝である。▲天徳院(曹洞宗) 驛の東南約四軒、市内上鶴間町にあり、電車の便がある。元和年間加賀藩主前田利常の内室天徳院善提のために建立された名刹である。▲大乘寺(曹洞宗) 驛の南七軒、市内野田町にあり、弘長年間富樫家尙の建立にかゝる古刹である。▲野田山驛の南約六軒、市の西南端に起伏する丘陵で、文祿年間以來の共同墓地で、その山巔には利家以下前田氏累代の墳墓がある。【尾山神社】(別格官幣社) 驛の東南一軒半、市内西町舊前田家別邸の地にあり、電車の便がある。境内風致に富み、加賀藩の祖前田利家を祀る。例祭は四月二七日、尙利家の入府記念日、即ち六月一日には市祭があり、種々の餘興など行はれ、大いに賑はふ。▲加賀千代女墓 驛の南半軒、市内田丸町専光寺の墓にある。千代女は江戸時代の女流俳人で、素園又は妙林と號し、加賀松任の表具師六兵衛の女である金澤の人福田彌八に嫁したが、二五才にして夫に別れた時、起つて見つけると見つけぬの廣さかなの句を吟じ、のち雜髪して「髪を結ぶ手の隙あつて炬燵かゝな、また愛子追想の句「蜻蛉釣り今日は何處まで行つたやら」及び「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」、「澁からうか知らねど柿の初もきり」などの句が最も人口に膾炙して居る。安永四年九月八日七四才にて歿す。北陸本線松任驛附近興聖寺境内に千代女塚がある。▲小立野臺 兼六園に續く厚、淺野二流に挟まれた狹長な丘陵で、出羽町練兵場・衛戍病院・金澤醫科大學・高等工業學校・刑務所等があり、また藩主前田利常の室、天徳院のために建てる名刹天徳院(曹洞宗)などがある。

六六度乃至七三度、リウマチス・中風症等に特效があり、山中温泉と同じく僧行基の発見と云ふ。附近に薬王院・萬松園・椎木淵等の曳杖地がある。

〔旅館〕 あらや(電山代七・五九、室二四、④四圓)、くらや(電四・四八、室二四、④四圓)、大野屋(電五・六五、室二二、④四圓) 以上普通一泊二圓半乃至五圓、吉田屋(電一三・一三、室一八、④三圓)、白銀屋(電二五、室一三)、吉野屋(電三、室一九)、花屋(電一六、室二一、④三圓)、はたや(電一六、室一六)、以上一泊二圓乃至三圓、田中屋(電一)、玉屋(電二四)、出蔵屋(電六)、かもや(電二六)、以上一泊一圓半、二圓半。

片山津温泉

石川縣江沼郡作見村片山津。

北陸線動橋駅から西四料五電車九分、一二錢。自動車乗合一三錢(前八時―後六時半迄列車毎)貸切五人乗八〇錢。

地は飄湖畔(柴山潟とも云ふ)の風光明媚の境、湖は四時色彩の變化極まりなく、又舟遊に適す。泉質鹽類泉で慢性胃腸カタル・糖尿病・黄疽に效がある。附近に小鹽・浦・薬師山・三湖臺(眺望佳)等の勝地がある。

〔旅館〕 矢田屋(電車片山津駅から二三〇米、電話片山津八、室三五) 普通一泊二圓半―五圓、④四圓、東野(同七〇米、電同七、室二六、二圓半―四圓、④三圓)、湯之出別荘(同八〇米、電三九、室二三、二圓半―三圓半、④三圓)、あらや(同五〇米、電五二、室三〇、二圓半―三圓半、④三圓)、森本(同二五〇米、和室二、洋室一、二圓―三圓、④二圓八〇錢)、鹿野(同二七〇米、電一一、室二四、二圓―三圓、④二圓半)、湯ノ出本館(電一、室二四、一圓半―二圓半)、吉野屋(電二六、室二二、同上)、關(電一〇、室二〇、同上)。

粟津温泉

能美郡粟津町。

北陸本線粟津駅の東南三料一、電車一〇分、賃金一一錢。自動車八分、乗

合(列車毎)二〇錢、貸切一圓三〇錢。山中から電車四七錢。

温泉の東方の丘は養老公園と云はれ日本海の碧波を望む事が出来、山村水郭の風光掬すべき地である。湯は無色透明の硫黄泉で、五〇度内外、慢性呼吸器病・慢性消化器病・リウマチス・皮膚病・花柳病等に效がある。

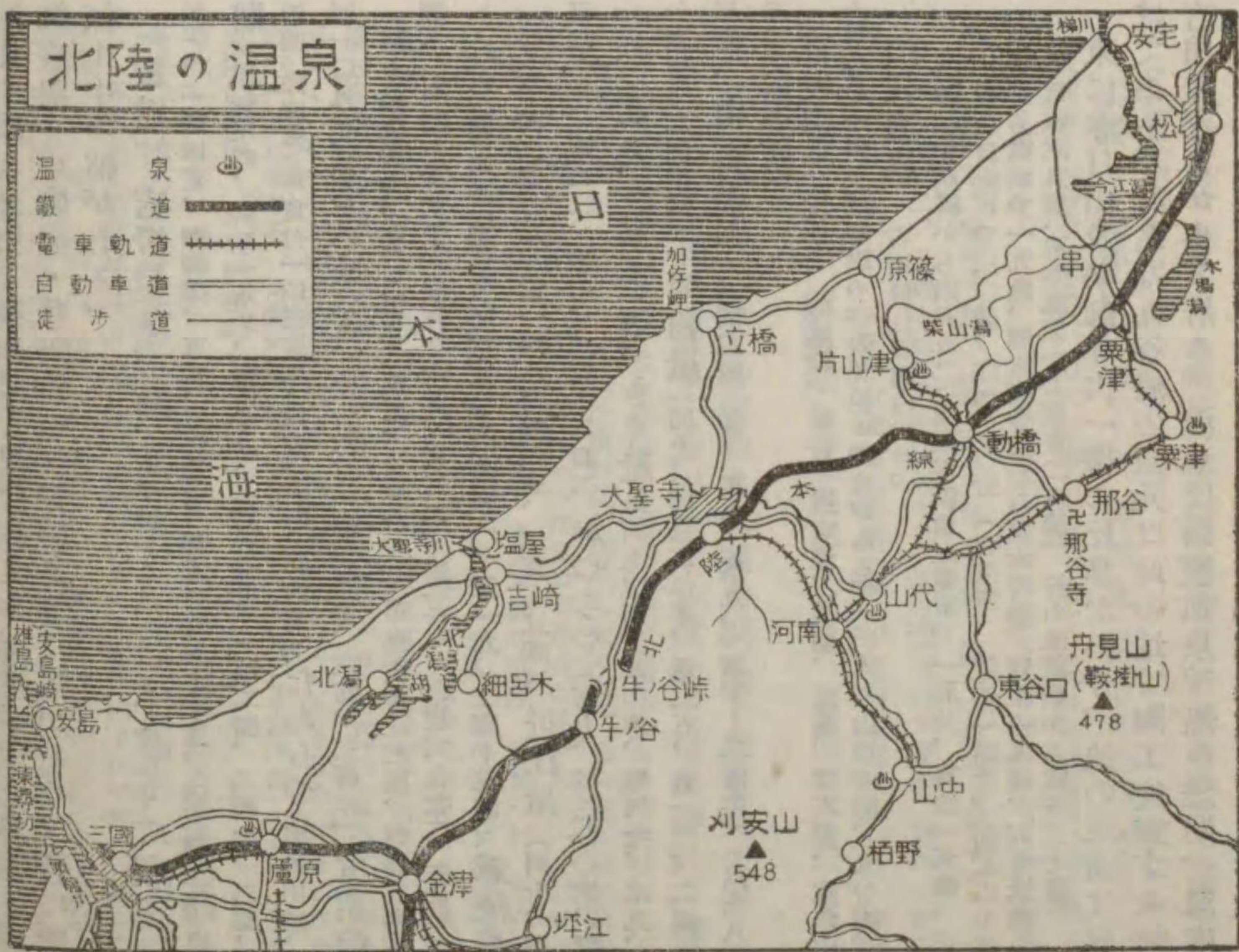
温泉から二料餘、電車を利用して行けば紅葉に名高い那谷寺がある。

〔旅館〕 法師(善吾樓、電粟津一、室五〇、④四圓)、坂田(神泉館、電八、室三二、④四圓)、山下(對岳館、電五、室三五、④四圓)、嘉宮(かみや、電一七、室三三、④四圓)、山本(電一一、室二三)、のとや(電七、室二〇)、のみや(電三、室一五) 其他一泊一圓三〇錢乃至四圓。

〔那谷寺〕(眞言宗高野派) 温泉電動那谷寺驛の南半料、那谷村那谷にあり、境内に聳ゆる岩山は紅葉の名所として知られ風致に富み、庫裡に屬する小庭園は名勝として指定されて居る。

〔吉崎御坊〕(東西兩本願寺別院) 江沼郡吉崎村にあり、北陸本線大聖寺驛から西六料五、自動車三〇分、賃片道四〇錢、往復七〇錢(一日六回以上)貸切五人乗三圓、尙大聖寺驛から七〇〇米の所から吉崎御坊の手前七〇〇米の地點迄大聖寺川の巡航船(一日五回定期)の便がある。片道二〇錢往復三〇錢、三人乗、四〇錢。又は細呂木驛から約六料、自動車二〇分、賃三〇錢六回、貸切一圓半或は三國線芦原驛から七料二、自動車三〇分、乗合片道五〇錢往復八〇錢(一日四回)、貸切往復五圓。

寺は北瀧湖北口東岸にあり、蓮如上人が文明三年近江の三井寺を免れて越前に入り、一乗谷城の國主朝倉敏景に圖つて一字を建立したので今の吉崎御坊で、今は東西本願寺の別院となり、堂塔伽藍壯大である。その願慶寺、正念寺には何れも「肉付の面」を傳へ、互に眞實を争て居る。肉付の面とは昔嫁を憎める姑が、恐しい面をつけて嫁をおどした處、天罰たごころに至つて面が顔から取れなくなり、始めて己が罪深きを悔い、蓮如上人の法力に依つて取り去る事が出来たと云ふ傳説の面である。而し事實は一醜婦が、上人の下に來り



美しき顔に生を受くべき御示しを乞ふたので、上人は憐れに思召して、「此世にては醜き惡女も、一念發起する時は、未來は極樂淨土に往生せん」と疑ひあるべからず」と説かれたとある御文章からの俗説である。寺背の御山は展望に富んで居る。

〔北瀧湖〕 越前の最北部、加賀の國境に近い日本海岸にある。湖は東北から西南に細長く延び(約五料)、周圍凡そ二〇料、面積三平方料で、その面積は廣くないが、水郷の雅趣に富むので、吉崎御坊と共に來遊するものが多い。

蘆原温泉

福井縣坂井郡芦原村。

三國線蘆原驛附近、別に福井から電車の便がある、四一分、五七錢。

地は福井縣下唯一の温泉場で、北陸屈指の和やかな湯の香濃き歡樂郷である。また附近には三國小女郎の名妓に名高い古い港情調の濃い三國町や、白浪岩を囓む東尋坊の奇勝や、春は九頭龍堤上の汐見櫻などがあり、北約七料繪の如き北瀧の湖上を渡ると嫁成しの肉付の面のある吉崎御坊などがある。湯は無色清澄の鹽類泉で五〇度内外、神經系統病・筋骨及關節疾病・呼吸器病・皮膚病等に效がある。

〔旅館〕 紅屋(電芦原三・二五、室三三、一泊三圓、三圓半、五圓、④四圓)、開花亭(電一〇・一一、室七二、三圓―四圓半、④四圓)、灰屋(電七・一〇八、室二八) 別荘(電二二・一五二、室九、同上、④四圓)、鶴屋(電一・一〇五、室三二、二圓半―三圓半、④三圓)、室吉(電二・一五三、室二〇、同上、④三圓)、石塚屋(電一七・二〇七、室二八、同上、④三圓)、いろは(電九・三四、室三五、同上、④三圓) 八木(電八)、龜屋(電一一)、其他、一泊二圓以上。

東尋坊

三國線三國港驛の西北約五料、夏季には自動車片道二〇錢一五分、列車毎及モーターボートがある。前記芦原温泉から一一料二、自動車三五分、

乗合片道二八錢往復四五錢。貸切三圓半。

三國町の北方に接する雄島村の西海岸で、一の斷崖海岸に臨む處、奇岩怪石峭壁の如く相連つて、海水の碧潭に映じ、北方に斗出する安島岬からその岬頭に浮ぶ雄島に至る迄風光絶佳の勝地である。東尋坊の奇勝は此の地方を被ふ安山岩が海蝕作用を受けた結果で、其の節理は三角形或は六角で、龜裂の方向は水平面に直角をなして居る。米ヶ脇浦から安島浦に至る間に於ける東尋坊の七ツ釜と稱せられるものは最も著しいもので、その池壁をなす安山岩は柱状節理を呈し、神巧鬼削千仞の絶壁をなし、池の深さ五丈五尺岩壁一七丈間口八間奥行二三間、實に天下の奇觀である。東尋坊と相對する雄島の小島は、安島岬から二〇〇米、安山岩の露出著しく、樹木茂りて風趣がよい。東尋坊から更に北東へ二軒の海岸崎浦も亦奇勝に富んで居る。

〔遊覽の好期〕 四月から一〇月迄で、七・八・九月の魚釣最も可。

〔舟賃〕 東尋坊往復モーターボート貸切往復(六人迄)三圓、夏季中は乗合がゆく、往復五〇錢、所要往復四〇分位雄島廻遊乗合七〇錢、貸切(六人迄)五圓、一時間半。

〔三國港〕 九頭龍川の河口に臨み、越前平野水運の咽喉を扼し、商業盛んで、北國の要津をなして居る。港は昔から船舶の出入繁く、其結果遊び場所が榮え三國小女郎の名は世に著名な處である。町は水郷の雅趣に富み、春は汐見櫻の眺め美しく、夏は避暑によく、秋は名高い盆踊りで賑はふ。

〔名物〕 かに、わかめ。〔旅館〕 雄島村米ヶ脇「望洋樓」(驛から一軒五、電六七、一圓半—二圓半)、雄島館(驛から九〇〇米、一圓—二圓)。「三國町」宮太館(電三八、驛から一軒一圓半、書食八〇錢、一圓)池上屋(驛から二〇〇米、電二一九、一圓半—三圓)。

の粟田部町に住ませ給ふた。當時水利興らず、生業は不振で、庶民の困苦するを憐み給ひ、親く辛酸を嘗めさせられ、農業の途、交通の便を開かせ給ふた。其後皇子の御名は國外に響き、遂に迎へられて天位を踐ませ給ふたのである。

▲養浩館 驛から北八〇〇米、實水仲町にあり、松平侯の別邸で、邸園は通稱御泉水邸と稱して居る。

〔藤島神社〕(別格官幣社) 驛の西南約二軒、市内岩堀町足羽山の勝景地にあり、新田義貞及義興、脇屋義助及殉難將士を祀る。例祭は八月二五、三日。

▲專照寺 驛の西南二軒、乗合一〇錢。足羽山の東北麓にあり。眞宗三門徒派の本山である。▲商品陳列所 驛の西一軒六、自動車乗合一〇錢。市内には其他寺院が多く、東西本願寺別院、興宗寺、本覺寺、善慶寺(驛の西南二軒、市内堀岩町にあり、境内には安政六年六月幕府のために捕へられて江戸小塚原刑場の露と消えた勤王の志士橋本左内の墓碑がある)を始め、天台宗の光照寺、曹洞宗の心月寺、孝顯寺、淨土宗の安養寺(國寶、惠心像都の佛畫を藏す)、眞宗大谷派の淨徳寺(狩野永徳筆の日本及世界古圖を藏す、國寶)等がある。

〔名物〕 かに、饅頭詰、羽二重餅、絹織物、かに。

永平寺(曹洞宗永平寺派大本山) 福井縣吉田郡志比谷村志比谷。北陸本線福井驛から越前電鐵及永平寺鐵道により、永平寺門前驛下車約一軒徒歩。但電車は福井驛—永平寺門前間直通運輸されて居る。所要四〇分(一六軒五)、片道四二錢。

福井市

▲上野から一三時間五四分(金澤迄急行)五四八軒九、三等五圓九一錢。▲大阪から急行列車で五時間六分(米原經由)二二〇軒三、三等二圓九五錢。市は足羽川の流に沿ふた越前平野の中心地で、今人口六四、一九九(昭和五・一〇調)福井縣治の中心、また氣温湿度が機業に適する處から絹織産地として名高く、羽二重・富士絹・人絹の産が多い。

市はもと福井城の周圍に發達した謂はゆる城下町で、松平氏三二萬石、北陸の雄藩として知られて居た。福井は古來勇將の封ぜられ、或は陣を置いた所で天正元年織田信長は越前の朝倉義景を滅ぼし、大いに北陸に勢力を伸べんと志し、越後の上杉謙信に備ふるため、宿將中の勇將柴田勝家を越前に封じ、之を「北の莊」と呼んだ(今の柴田神社の地)。のち徳川家康が天下の權を握るに及び、外様大名の隨一として加、能、越三ヶ國百萬石を領する前田家を抑へる要地として、慶長五年その子松平秀康を越前に封じ、六八萬石を領せしめた。秀康は翌六年九月北の莊を修築し同一一年九月に至つて竣工した。その子忠昌の時代(寛永五年)に北の莊の北は敗北の北に同じく不吉なりとて福井と改稱せしめたと云ふ。

〔旅館〕 名和屋(佐佳枝上町、電二二四、一泊四圓、六圓、一〇圓)、幾代(佐佳枝上町、電七三、一泊三圓半、四圓、五圓)、田島屋(佐佳枝上町、電三七四、一泊二圓半、三圓、四圓)、茶治、荒川、白濱其他。

〔遊覽順路〕 驛—福井城址—九十九橋—足羽山公園—藤島神社—幸橋—驛。〔名所〕 ▲福井城址 驛の西三三〇米、城内には藩祖を祀つた佐佳枝神社があり其他福井縣廳・縣會議事堂・中學校・女學校・圖書館等がある。▲足羽山公園驛の西南約一軒半、足羽山丘陵の上にある、眺望頗るよく、市街を一眸に集める。山頂には招魂社・織體天皇石像及橋本左内の銅像があり、東隅には別格官幣社藤島神社、西隅には足羽神社がある。足羽神社は越前の歴史を忘るべからざる男太皇皇子を祀る。皇子は應神天皇四世の御孫、孫主人尊の皇子のちの織體天皇にあらせられたお方で、越前坂中氏の振姫をお母とし給ひ、粟田部の龜(今

月二三日から同二九日に至る開山忌には全國の善男善女踵を接し夥しく股賑を極める。尙此處へ來た參詣者の目を驚かすことは、寺とは思はれぬ様な近代的設備の整つて居ること、立派な食堂、浴場等もあり信徒は三階建鐵筋コンクリートの宿坊に宿泊することが出来る。(宿泊料は思召と云ふ事になつて居るが、普通一圓五〇錢位)

〔小舟渡遊園地〕 越前電鐵小舟渡驛前にあり(福井から電車五〇分、四六錢、コナト)。同電鐵會社の經營で九頭龍川の流に沿ひ、風光よく夏季は納涼地として賑はふ。此の附近はまた鮎漁地としても有名である。

敦賀町 福井縣敦賀郡。地は三面山を繞らして海山の形勝に富み、敦賀灣頭に臨んで良港をなし、對岸浦鹽斯徳との間には毎週一往復の連絡船を出し、東京からの國際直通列車も運轉されてゐる。毎月五日・十五日・二十五日東京發の第七列車に一・二等寢臺車を連結して東京—敦賀港間に直通運轉してゐる。東京發午後九・四五、敦賀港着前九・一四、五〇八軒八、二等一圓二二錢、また北鮮各港との最捷經路として重きをなした元山・雄基・城津・清津等の定期航路が開かれて居る。

此の地は古く筍飯と稱し、また角鹿と呼ばれ、韓土との往來の要津に當り、舊藩時代には酒井氏一萬石の支封地で北國樞要の商港であつた。鐵道は小濱線を出して山陰方面に連絡し、海陸交通の便によく市況殷盛である。人口二二五六九(昭五・一〇調)。

〔旅館〕 植山別莊(驛から二軒五、電六四、室一七、普通一泊三、四、五圓、三圓五〇錢、料理兼業)、熊谷ホテル(電一四三、驛一軒五、室一三、内洋間四、二圓—三圓半)、具足屋(電一三八、驛二軒、室一六、同上)大黒屋(電一六八、驛二軒、室一九、同上)、松屋(電一三五、驛前、室一

一、同上、小林別館(電二二八、驛一料五、室一六、うち洋間二、同上、料理兼業)。

【氣比神宮】(官幣大社) 驛の北一料半、敦賀町の東端にあり、バス一〇鐘伊香沙別命(御倉津大神とも申し、播磨・養意の道を開かれた大神である)日木武命・帶中津彦命(仲哀天皇)・息長帯姫命(神功皇后)・豊田別命(應神天皇)・豊姫命(神功皇后の御妹)・武内宿禰の七神を奉祀し、神宮の造営は頗る古く、今の社殿(慶長年間福井城主松平秀康の造営)及大鳥居(高さ三丈四尺丹塗の四脚門で、正保二年の建立)は特別保護建造物になつて居る。例祭九月四日。

【金崎宮】(官幣中社) 驛の北三料、バス一〇鐘。町の東北部字泉にあり、尊良親王(後醍醐天皇の第一皇子)、恒良親王(後醍醐天皇第六の皇子)を祀る。社境は古の金ヶ崎城址で、敦賀灘一帯の風光を瞰下する景勝の地である。延元元年(紀元九九六年)後醍醐天皇尊氏と御和談の際、新田義貞は恒良、尊良兩親王を奉じて此地に下り北國經略に當つた。尊氏之を聞いて、足利高經、高師泰に命じ金ヶ崎城を圍ましめた。義貞よく拒いたが、城中遂に糧食盡き、圍を衝いて免れ、尊良親王は自盡し給ひ(延元二年三月六日、御年二七歳)、恒良親王は舟に搭じて蘇木浦(今の甲樂城の邊)に逃れられたが遂に捕へられ、城は遂に陥つた。高經は諸將の首を實驗するに、義貞、義助の首がないので親王に御尋ねすると、親王は事もなげに「昨夕二人とも自害したが、火葬にするとして、皆で騒いでゐた様だ」と偽つて仰せられたので、高經も心を安じ、親王を都に送り、やがて御弟の成良親王と共に花山院に幽閉し奉つた。然るに義貞兄弟は足利氏の油断のひまに、密に兵勢を蓄へ、忽ち敵の數城を破つたので、尊氏は親王を憐み、遂に薬を勸めて殺し奉つた。時に延元三年四月十三日、御年僅かに二十五歳にあらせられたのである。當社は即ち恒良、尊良兩親王を祀るもので、誰か當時の歴史を細くもの、一度此地に遊ばんか、千載の下になほ悲愴の情堪へ難きものがあらう。

常呂神社があり船でゆくと面白。船賃約二圓、夏季は遊覧船四〇鐘。【小濱町】福井縣邊野郡。小濱線の主要驛で敦賀から一時間半(四九料五)三等七八錢。地は若狭第一の都會で、小濱灘の東南岸に位し、北川の河成平地を控へ、敦賀と共に天然の良港である。もと酒井氏一二萬五千石の城下で、山海の風光に富み、また海産物に富んで居る。人口八、三二〇(昭和五・一〇調)市街の南方後瀬山麓には小濱城址(驛の東北一料七、バス一〇鐘)、北麓には縣社八幡神社、發心寺がある。また町の西方青井山には小濱公園があり(驛の西約一料三)山上の眺望勝れ、園内には梅田雲濱の碑、佐久間艇長の銅像がある。(名物)若狭漬、若狭調、若狭鯨。

黒部峡谷探勝日程案 (東京から五日)

日程	地名	發着時刻	記事
第1日	上野驛	發後 八・五〇	金澤行急行列車(リ)三等車、車中一泊
第2日	三日市驛 宇奈月驛 猫又 鐘釣 猿飛 祖母谷 溫泉 鐘釣溫泉	着前 六・〇〇 着前 六・〇四 着前 六・五四 着前 七・〇〇 着前 八・二〇 發前 一・〇〇 發後 一時頃 發後 二時頃 着夕刻	乗換 宇奈月行電車 下電軌道 徒歩 徒歩 徒歩 宿泊
第3日	鐘釣 宇奈月	發後 一・〇〇 着後 二・二〇	日電軌道 一浴、夕食

備考

▲上野―三日市間急行列車テ九時間一〇分(三八〇料六分)、三等片道四圓五三錢、急行料六五錢。

▲三日市―宇奈月間電車テ(黒部鐵道會社線)一時間(一七料一)片道電車賃五四錢(三等ノミ)

▲宇奈月溫泉(二七〇頁参照) 宇奈月カラ鐘釣迄一五料五ノ間日本電力會社ノ専用軌道ガアリ便乗スル事ガ出來ル。片道一圓往復一圓半、一時間一〇分。宇奈月發七・〇〇、九・二五、一・二〇、鐘釣發九・〇〇、一・〇〇、三・三五。尚鐘釣―小屋ノ平間二料一ノ間ガソリノカー(二五分) ガアルガ一般ノ便乗ハ出來ヌ。

▲鐘釣溫泉(二七〇頁参照) 普通一般ノ黒部溪谷ノ探勝ハ、宇奈月溫泉カラ始マリ、鐘釣溫泉、猿飛ノ奇勝ヲ經テ祖母谷溫泉マテ行ク。此ノ間ハ道モヨク、充分ニ黒部溪谷ノ美觀ニ接スルコトガ出來ル。

▲猿飛ハ黒部奇勝ノ一ツテ、鐘釣溫泉カラ上流約五料、徒歩約二時間、日電軌道ノ小屋ノ平終點カラ約半料。東カラ流下スル祖母谷ト本流トノ合流點テ、急激ニ黒部川ハソノ河身ヲ狭メ、白泡沸騰スルガ如ク奔流シテ居ル所デアル。

鐘釣溫泉カラ百貫山ヲ對岸ニ望ミ、ガラ谷、ウド谷ヲ横ギリ小屋ノ平ヲ經テ小黒部谷ノ落口ニ到レバ溪趣ハ愈々雄大トナル。小黒部谷ハ劍岳大窓ノ南面ニ源ヲ發シ、



日	宇奈月驛	發後	七・三	三日市行
	三日市	着後	八・二	上野行急行列車
		發後	九・二六	二、三等寝臺アリ
第4日	上野驛	着前	七・〇〇	歸宅

毛勝岳、猫又岳カラ來ル中ノ谷ノ水ヲ併セテ一大溪谷ヲ形造リ黒部本流ニ合流スルモノデ、支流中ノ最も長大ナモノデアアル。小黒部谷ノ吊橋ヲ渡リ山側ヲ登レバ道ハ二ツニ岐レ、右ニスレバ立山登山路デ、池ノ平ニ出テ、左方ヘ黒部本流ノ岨道ヲユケバ數百米デ猿飛ノ奇勝ヲ俯瞰スルノデアアル。

猿飛カラ尙暫ク進ムト道ハ二ツニ岐ル。左ニ溪側ヲ下リ、長キ吊橋ヲ渡ツテ對岸ニ移ル道ハ祖母谷入りノ道デ、上流約五料半ノ所ニ祖母谷温泉ガアル。猿飛カラ約一時間半。此處ハ祖母谷、祖父谷溪流ノ合流點ニアリ、名劍山ノ南麓デ海拔八四五米四圍悉ク密林デ蔽ハレタ神秘境デアアル。

旅行費用概算

二等 四〇・三〇  
三等 二〇・五四

内譯

汽車賃急行料共往復二等二圓八〇錢、三等一圓四四錢二  
等寝臺下段二夜分九圓、三等上段二圓、圓六〇錢、黒部一泊料  
二圓五〇錢、食料其他費用二等七圓、三等五圓ヲ計上ス

〔参考〕 黒部カラ白馬又ハ立山ヘノ行程及宿泊所

▲白馬岳へ 祖母谷温泉カラ中脊尾根を辿リ鐘ヶ岳ヲ經テ達スルモノ、祖母谷川ノ右岸ヲ辿リ百貫峠ヲ經テ清水岳ヲ廻ツテ(途中不歸岳附近ニ小屋ガアル)達スルモノ、及ビ祖母谷カラ南越ヲ經テ大黒ニ出テ唐松小屋一泊、唐松岳カラ北ニ縦走シテ達スルモノトガアル。

▲立山へ 鐘釣温泉カラ小黒部峠中腹分岐點(此間約七料、約二時間)ヲ右折シテ小黒部谷尾根ヲ辿リ池ノ平小屋着一泊(分岐點カラ約一六料、約一二時間)途中坊主山ニ黒部保勝會建設ノ小舎ガアル。翌日劍小舎ヲ經テ別山乗越シカラ地獄谷ニ下リ室堂一泊(此間約一六料、一〇時間)。室堂カラ立山往復シテ立山温泉一泊、千垣驛カラ富山ニ出テ歸ル。(第三一頁参照)

〔注意〕 黒部方面カラ立山其他アルプス諸峰ヘノ登山ニハ充分ナル用意ト熟練セル案内者ガナケレバ決シテ斷行スベキデハナイ。案内人夫一日二圓三〇錢(食費ハ雇主支辨)、案内人ノ世話其他ハ宇奈月ノ黒部保勝會又ハ宇奈月驛内黒部案内人組合ニ申込メバヨイ。

〔黒部ノ宿泊所〕 黒部ノ交通ニ於テ最も必要ナル宿泊所ハ前記各温泉場ノ外ニ左記ノ小舎ガアル。

〔清水小屋〕 祖母谷カラ百貫峠ヲ經テ白馬岳ニ至ル途中、不歸岳ノ南側ニアル。モト黒部保勝會ノ建設ニカ、リ、昭和六年營林署デ改築シタモノデアアル(収容約一五名)。

〔坊主小舎〕 小黒部峠カラ尾根傳ヒニ立山方面池ノ平ニ達スル途中ノ坊主山ニアル。昭和六年黒部保勝會ノ建築ニナル二間ニ三間ノ木造平屋造リデ一〇名位収容出來ル。

〔小屋ノ平小屋〕 日電専用軌道ノ終點ニアル。

〔樺平小舎〕 樺平分岐點カラ約一料バカリニアル。

〔膝ノ木小舎〕 十字峽ヲ過ギテ下廊下ヲ經、更ニ新越瀧ノ落合神仙峽ヲ經テ僅カノ所ニアル。木造二階建。

〔雄山湯小舎〕 雄山湯ノ落合ニアル木造二階建。

〔平ノ日電小舎〕 平ノ小舎附近ニアリ、木造二階建デ無電ノ設備ガアル。

黒部峡谷

黒部峡谷は越中の最奥、信・飛・越の三國の境上に聳ゆる鷲羽嶽(海拔二、九二四米二)に源を發し、東西共に二、五〇〇米乃至三、〇〇〇米に及ぶ大山列立山・藥師連峯と白馬・針ノ木・烏帽子連峯ノ間ヲ隔テ、本邦第一ノ深峽を刻シ、日本北アルプスの北半を縦貫すること凡六〇料、愛本に至つて始めて平野に出で、北西に擴がる大扇狀地を造り、富山平野の東北隅に至つて日本海に注ぐ急流である全延長凡そ八四料、此の峡谷は飛驒山脈を縦貫する最大最深のものであつて、飛驒の双六谷と共に最も原始的風趣を保有し得た峡谷で、花崗岩に依て構成せられた大峡谷、高山風景の特色を具備するその流域は、全流域の大部分實に六〇料に連つて居る。殊にそれ等が此の峡谷を推賞しておかないものは、其特色の豊富であり、從て溪觀の非常に多い事であつて、鼠返し・猿飛・仙人谷・十字峽・神仙峽或は下廊下・中廊下・奥廊下等々、殆ど全流を通じて景勝を以て滿され、緊張せる風景の連続的美觀をもつて居る此の峡谷の如きは、内地に其比を見ぬ處であるからである。而も岩壁の高い黒部の廊下では、森林は自然に高所に移て居るので、日光は直接大峭壁を射て激流の面に反映し、最も狭く幽邃の谷である廊下に於て却て、明快壯麗の感を與へ、明るいしかし深い神祕を藏して居る谷、赤裸々な豪快な、男性的な谷の面影を、此の黒部の峡谷に於て痛切に賞味する事が出来るのである。

上流無人の境に、花崗岩の窪みに堪ふる天然の浴槽に身を浸し乍ら、附近の豪快な峡谷美を恣にするの快は、之れ眞に仙境に遊ぶの感である。

〔下廊下、中廊下、奥廊下探勝〕 樺平に於て祖母谷道との分岐點から黒部本流を溯リ樺平(日本電力會社の一根據地)一筋見阪の險(對岸奥鐘山西面に高さ八〇〇米に迫る大峭壁がある)一シアヒ合流點(筋見坂から約一時間、夫婦岩の勝がある)一オロオ谷(此間約一時間、溪趣雄麗で黒部上流の一勝區をなす。此の落口上流の崖上に石小屋がある)一アソ原谷(附近到る處温泉が出る)一仙人谷落口(附近一帶に出湯多く、仙人谷は數段の瀧となつて本流に躍入して居る)一東谷數段の瀧となつて本流に合して居る)以上一三料餘、所要六時間位。

東谷一奥仙人谷一十字峽(此の區間の峡間は峻高な岩壁に割られて居る。約三料半、所要五時間位)。十字峽は劍岳東南面に源を發する劍瀧と、後立山劍から鹿島瀧、爺岳等から落ちる樺小屋瀧とが黒部本流を挾んで相對して合流して居るので十字の廊下を形成す。溪相の卓越、流水の壯美、岩壁、森林の豪華は黒部廊下絶勝の一つである。

十字峽一下の樽瀧落口(歩道は岩場を選び、水面より一〇米内外の高さに通じ、約一時間を要する)一新越瀧落口「神仙峽」(此區間は黒部本流中腹一の峻嶮であるが又壯觀を極め、下廊下の中心點をなして居る。此の歩道は殆ど棧道によつて通ず。十字峽から大べつり迄の道は昭和四年秋開通したものである。されど冬季毎に破損を免れぬから、日電會社に於て毎年修繕を見ざる限り此歩道は到底通過不可能である)一ハンの木平小屋。十字峽から三料四、一日行程である。

ハンの木平小屋一内藏の助谷落口(約二時間、下廊下上部の關門に當り、四周岩壁高く流水また壯美)一御前谷落口(約一時間)一御山谷落口(約半時間)。(日本電力會社の大きな小屋があり、附近に温泉が出る)一平の小屋(約四料御前谷から平までの間は黒部上流中最も廣闊、優美なる流域で、森林及溪流の美、四周の高山の景趣など獨特のものがある)。平は日電黒部上流の根據地であり、また信濃大町から針ノ木峠を経て立山方面に至る樞要地點で、小屋が營まれ、七、八月中は宿泊、賄をする。ハンの木小舎から八料半、歩道さへ通ず

可能ならば十字峠から一日で平の小舎に出られる。  
 樺平林道分岐點から十字峠を経て平の小舎まで約三三軒(八里一七丁)。  
 平から尚上流は中廊下の絶壁、奥廊下の深峽があり、下廊下と共に黒部探勝の標點をなし此處から源流地鷲羽乗越迄は右岸につけられてある。東信歩道を辿ること二日の行程である。平一東瀧落口(約四軒、三時間)一金作谷落口(中廊下と呼ばれる、半日行程で、口との樽瀑を中心としたクロペンカの峻嶒があり、スゴウ瀑から金作谷までは中廊下の核心をなす豪瀧、荒快な廊下の勝を賞する事が出来、また金作瀑を廻れば半日で薬師岳の頂上に達する)一奥の樽瀑落口の立石(約三時間、立石には五、六人宿泊出来る小屋がある)一薬師瀑の出合(約四時間、此處で全く廊下の域を脱し、溪谷は快鬱な源流地の風景を展開して居る)一アカギ澤落口(約三〇分)一五郎澤落口(約一時間)一更に約二時間でさすが雄大な黒部峡谷も草地や露岩の間をせ、らぐ小渓となり、遂に祖父岳と小鷲岳とを連ぬる尾根でつき、鷲羽乗越に到つて信越國境の脊稜に達するのである。鷲羽乗越には三ツ又蓮華の小舎があり、夏季は宿泊、雨が出来ると

宇奈月温泉

富山縣下新川郡内山村。  
 北陸本線三日市驛から黒部鐵道の電車で一時間(一七軒一)、賃金片道五四錢(三等車のみ)

地は黒部川の上流、黒部峡谷の關門に當り、莊嚴な日本アルプスの山嶽北に延びて其山裾を見せて居る幽邃境で、春花秋葉の美もあるが特に冬はスキーの好適地として有名である。温泉は黒部川の上流約六軒の黒瀧、二見兩温泉を引いたもので、泉質炭酸泉、温度九五度、胃腸病・慢性皮膚病・リウマチス・婦人病・梅毒・痛風・腺病等に效がある。

〔旅館〕 延對寺別館(電三〇・三一、室二五、普通一泊二圓半・三圓半、④四圓)、富山館(電三三・三四、室一七、同上、③三圓半) 宇奈月館(電六・七、和室一二、二圓一三圓、③三圓、洋室二、一人四圓、二人六圓) 河内屋(電三六・四四、室二二、洋室一、一泊二圓半以上、水月(電三三、室六、二圓以上)、桃源館(電二九、室一一、一圓半以上)、芳友館(電四

〇、室一〇、一圓半以上、坂井館(電一九、室九、一圓半以上)、温泉湯元(電四・五、室一〇三、湯間買一人四〇錢、一室貸切一圓二〇錢、一圓半)。  
 ▲宇奈月スキー場 宇奈月驛の南方二〇〇米の高臺にあり約一〇萬坪、傾斜は三〇―四〇度から緩急自在のコースに富み又廣大な山谷に連絡して居る。好期一二月下旬から翌年三月中。  
 ▲烏帽子岳スキー場 宇奈月の南方約四軒、二〇―三〇度傾斜の大高原で北方面に低下して居る。登路宇奈月から約四時間、降路下立口驛まで二〇―三〇度の斜面を滑降二時間位。  
 ▲銀ヶ岳スキー場 標高八六一米、下立口驛から四軒、登り三時間、滑降一時間位、一月中旬から四月上旬まで雪量平均五、六尺。  
 〔黒部峡谷の諸温泉〕 宇奈月から上流黒部峡谷には黒瀧・二見・錦瀧・鐘釣・祖母谷・阿曾原・仙人・東谷の諸温泉があり、黒部探勝者の休泊所となつて居るが、日本電力會社の専用軌道が宇奈月から鐘釣迄通じ、夏季は探勝者を便乗させて居る。

▲黒瀧温泉 宇奈月から約六軒、黒部本流と黒瀧川の會合點、黒瀧川の右岸歩曳橋(日電軌道後曳停留所)がある、宇奈月―黒瀧間八〇錢)から約一軒の所に在る。黒瀧川の奔流狂ひ屏風の如く峭壁相迫る脱俗の山水境で特に深秋の紅葉は天下の美觀である。此處は宇奈月温泉の泉源で、温度九八度、泉質効能は宇奈月と同様。〔旅館〕 佐々木(室數二五、收容人員七、八十名、一泊一圓半一圓八〇錢、二圓、二圓半)。  
 ▲二見温泉 黒瀧から半軒餘の上流にあり、まだ浴舎の設がない。  
 ▲錦瀧温泉 日電軌道錦瀧停留所所在、宇奈月から約一六軒。  
 此處は東鐘釣山の太岩峯の懷に、黒部本流に面し、景勝の地を占めて居る。もと新鐘釣温泉と稱して居たが、先年故久通宮殿下御遊覽の硯、景觀の勝れたるを賞でさせられ、附近溪谷に錦瀧關の名を贈つて以來、錦瀧温泉と改稱して居る。泉質は無色透明の鹽類泉で温度七四度半、胃腸病、腦病、神經病等に效がある。

▲鐘釣温泉 錦瀧温泉から約八〇〇米、日電軌道鐘釣驛から約三〇〇米、西鐘釣山の麓に在り、温泉は浴舎より下る一〇〇米許り、左岸河域中、廣さ十坪程の石灰石の天然浴槽に湛へられて居る。炭酸泉に屬し湧出量豊富、古來胃腸病に特して居る。晴れた日には紅黄紫白色とりん高山植物の花咲き誇り、駒鳥や鶯の聲賑りに起る彼方西方には北陸平野と日本海の眺め絶佳にて福井・金澤・小松町・高岡等の市邑や今江瀧・木場瀧・柴山瀧・河北瀧等鏡の如く光つて見え、飛驒の沢町や白山温泉なども脚下に見え、又、能登半島の海中に突出して居るのが見える日もある。又他方には日本アルプスの連峰が雲の如く殆ど帯狀に連り、遙か西の重巒たる山の間からは江州伊吹山も望まれる等、山頂の眺望は頗る廣大である。  
 〔登路〕 左記日程案の如く北陸線金澤又は西金澤驛から白山下まで金澤電氣鐵道及金名鐵道により、それから山麓の白山温泉まで自動車でゆく。白山温泉口と、尾添口、平瀨口、石徹白口の四路がある。  
 「尾添口」は岩間温泉を根據地とするもので、「平瀨口」は飛驒の平瀨から登る二〇軒の道程、「石徹白口」は越前電鐵の終點大野から石徹白まで自動車でゆき、それから三の峯別山を経て白山室堂まで三六軒の行程である。

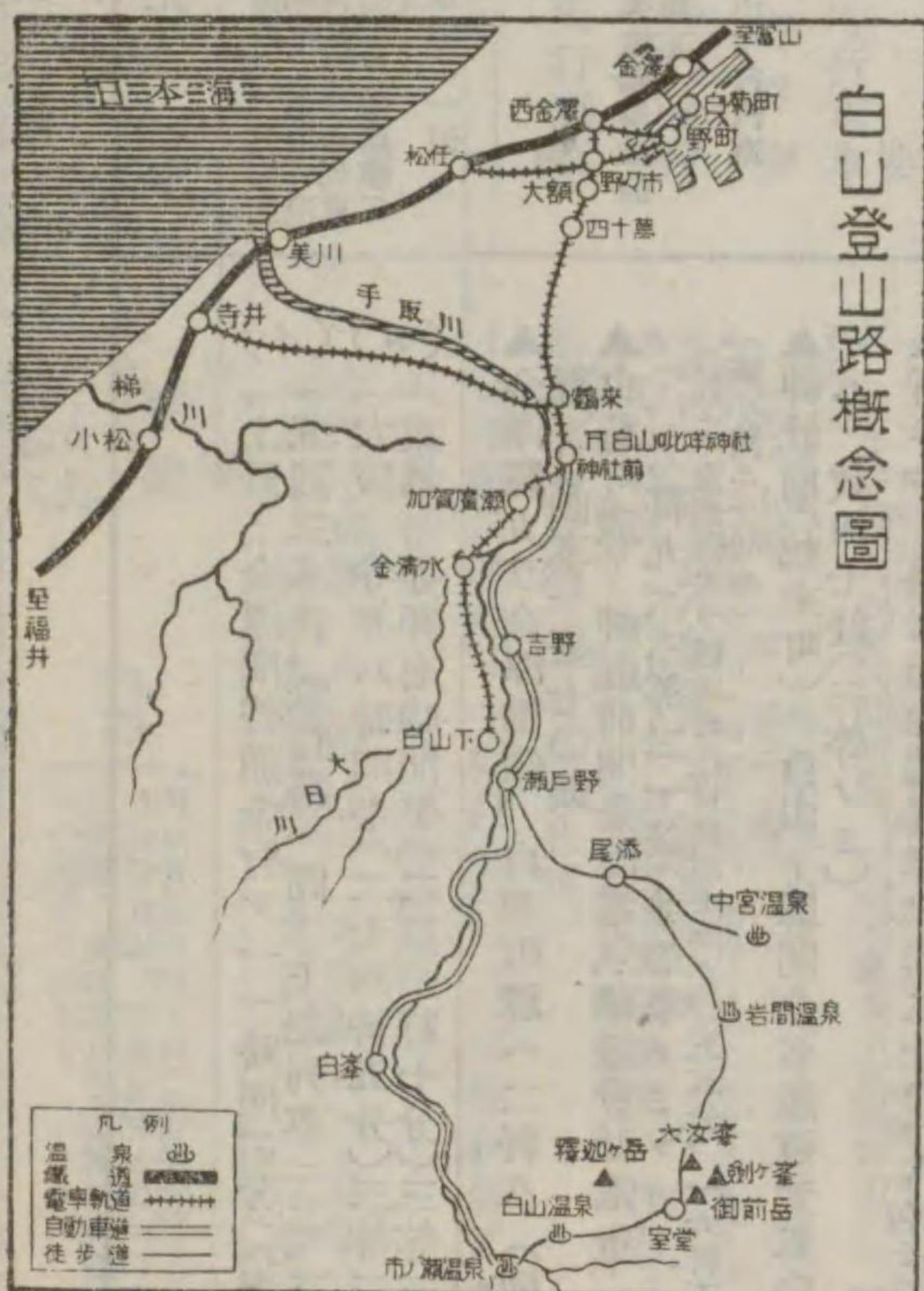
效があると世に知られて居る。日本電力會社經營の旅館數棟あり、一泊二圓、二圓半、三圓半位。外に自炊部室あり、一日三〇錢以上。百四五十名を收容する。  
 ▲祖母谷温泉 鐘釣から約一〇軒、猿飛の奇勝を経て樺平の吊橋を渡りて右岸に移り、支流祖母谷川を溯つた左岸、名剱山の南麓標高八四五米の所にあり、四圍悉く密林で蔽はれた神祕境である。温泉は硫黄泉で九七度の高温を有し、旅館はないが四間に六間の木造平屋建の營林署經營の小舎があり、夏季に探勝者の使用に便して居る。此處は白馬岳方面への要衝地で、夏季には物資を供給する賣店がある。  
 ▲阿曾原温泉 鐘釣から約一八軒、樺平から仕合谷、折尾を経てゆく。阿曾原谷の落合近く左岸の岩石の間に湧いて居る。  
 ▲仙人温泉 阿曾原から約二軒、仙人谷の落合附近左岸及右岸に湧出して居る  
 ▲東谷温泉 仙人谷から約一軒、東谷の落合附近黒部本流右岸にあり、水側に近く花崗岩の窪みに湛へられて入浴に使用して居る。

白山

大汝・劍ヶ峰・別山・三峰等の山峰を抱き、最高峰を御前嶽と云ひ海拔二、七〇二米、加賀・飛驒・越前の三國に跨る北陸の雄峰で、古來富士・立山等と共に三名山として信仰登山の山である。  
 山頂に國幣中社白山比咩神社の奥宮が祀られてあり、七月一八日開山祭、九月五日に閉山祭がある。

白山は今から約三五〇年前の天正七年八月二七日に噴火したのを最後として、今は只一部に硫氣を噴出してゐる孔があり、山上には硫々たる燒石が堆積して居る間、舊噴火のあとなどに水を湛へて大きな池を形成して鮮美と、池水の碧色と、燒石の赭色等の對照に豊かな高山植物の藝術味を表は

白山登山路概念圖



白山登山日程案 (東京及京阪から五日行程)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	(イ) 上野驛 (ロ) 大坂驛 (ハ) 京都驛	發後 八・五〇 發後 一〇・五〇 發後 一二・五八	金澤行二、三等急行列車、車中一泊 青森行普通列車、車中二泊	(イ) 上野—金澤間普通急行デ一時間〇分(四三斤一分)三等 (ロ) 大坂—寺井八時間半(二七四斤五分)三等三圓五二錢 (ハ) 京都—寺井七時間半(二三一斤七分)三等三圓六錢
第2日	(イ) 金澤驛 白菊町驛 神社前驛 白山下驛 (ロ) 新井驛 鶴來驛 神社前驛 白山下驛 市瀬	着前 八・〇〇 發前 八・四四 着前 九・三〇 發前 一〇・三三 着前 一一・〇二 發前 一一・二〇 着前 一二・〇〇 發後 一・三三 着後 二・〇〇	乗換 金澤電鐵神社前行電車 白山下行汽車 能美電車二乗換 鶴來行電車 白山下行汽車 徒歩 宿泊	▲金澤驛カラ金澤電鐵、白菊町驛ヘ二斤八(同野町驛ヘ三斤)自動車一臺七〇錢。 ▲白菊町驛—神社前間金澤電氣鐵道會社電車デ約四五分(一六斤九)、三等三錢(並等車ノミ) ▲(注) 金澤驛カラ鶴來町迄自動車モユク、五五分、一六斤五、乗合六〇錢(廣小路ニテ乗換) ▲神社前(鶴來町)—白山下驛間金名鐵道デ五〇分(一六斤八)賃四七錢(三等ノミ) ▲新井—鶴來間能美電車デ五分(一六斤七)賃四七錢、(三等ノミ) ▲鶴來驛カラ數百米ノ所ニ白山比咩神社(シラヤマヒメジンジヤ)(獨理媛神・伊弉諾尊・伊弉册尊ヲ祀ル國幣神社)本宮ガアル。 ▲白山下驛カラ白山温泉入口ノ市瀬迄約三〇斤四ノ間金名鐵道列車ニ接續シテ乗合自動車運轉ス(但終列車ヲ除キ、一日五回)賃一圓四五錢、所要約二時間。 ▲市瀬カラ白山温泉迄約一斤四。地ハ白山ノ峻峰ヲ背負ヒ、湯ノ谷川ニ枕ム海拔約一千米ノ幽邃境テ、泉質炭酸鹽類泉、溫度攝氏四八・五度、效能ハ主トシテ神經系統病・胃病等ニ效ガアル。白山館、山田屋、同新館山田ホテル、林屋、温泉旅館、三圓。 ▲頂上ノ御來光ヲ拜スルニハ、前夜八時頃白山温泉ヲ出發スルカ、又ハ室堂ニ泊リ上早朝四時頃同所出發スレバヨイ。室堂カラ頂上迄八丁七間、所要三分乃至四分。
第3日	白山温泉 白山山 白山温泉	發前 徒歩 發前 徒歩	徒歩 宿泊	▲白山温泉カラ白山頂上迄ハ新道、舊道ノ二途アル。新道ハ一ニ二斤舊道ハ九斤、然シ新道ノ方が樂デ時間モカカラメ。舊道ヘレバ面白イ。 ▲頂上ノ御來光ヲ拜スルニハ、前夜八時頃白山温泉ヲ出發スルカ、又ハ室堂ニ泊リ上早朝四時頃同所出發スレバヨイ。室堂カラ頂上迄八丁七間、所要三分乃至四分。
第4日	野町驛 金澤驛 金澤驛 白山下驛 神社前驛 白山下驛 市瀬 白山温泉	發後 一・〇二 發後 七・五 發後 八・五七 着後 二・二六 着後 二・三二 着後 二・三七 發前 二・三六 發前 二・四二 發前 二・四八	野町行電車 金澤見物 上野行急行 大坂行列車 徒歩 乗合自動車 神社前行汽車 乗換	▲白山室堂 七月一〇日から九月五日迄營業(此期間外ハ寢具、食事等ノ設備ナキ故各自用意スルヲ要ス)一泊四〇錢、食事一食四〇錢、賃毛布四〇錢、休憩料一五錢、夜掛休料三〇錢。 ▲風呂毛隔日位ニアルガ特ニ註文ガアレバ何時デモ湧カス(木炭代ヲ申受ク)。高山植物 史蹟名勝天然紀念物保存法ニヨリ採取スルコトヲ嚴禁サレテ居ル。室堂カラ岩間温泉迄一ニ二斤、下リナレド道路惡ク疲勞ガ多イ四時間位、上リハ五時間位。岩間カラ尾添(オーソ)ニ二時間ヲ經テ白山下驛ヘ二ニ二斤、徒歩四時間、合計八時間位。白山下驛カラ東新谷マデ一ニ二斤、徒歩四時間、合計八時間位。白山下驛カラ尾添(オーソ)ニ二時間ヲ經テ白山下驛ヘ二ニ二斤、徒歩四時間、合計八時間位。白山下驛カラ東新谷マデ一ニ二斤、徒歩四時間、合計八時間位。 ▲(岩間温泉)アルカリ性炭酸泉デ岩罅カラ滾々トシテ湧出シテ居ル。 ▲(旅館) 山崎、一泊一圓三錢。 ▲(強カ) 日三圓(荷物ハ四圓自迄、強カハ頂上案内ヲセズ)。 ▲案内料 頂上案内料一圓、大坂案内料二圓。 ▲白山温泉 白山下—野町間交通機關ハ往路ノ反對。 ▲神社前—鶴來—野町間四五分(一五斤八)四四錢。 ▲金澤市内見物(二五九頁參照) ▲金澤發信越廻リ上野行急行二、三等寢臺アリ。 (ロ) 大坂行普通列車二、三等寢臺アリ
第5日	(イ) 上野驛 (ロ) 大坂驛	着前 七・〇〇 着前 四・五六 着前 六・〇五	歸宅	▲(汽) 汽車賃急行料ノ外(備考欄參照)二、三等寢臺下段 ▲(料) 二夜分九圓、三等上段一圓六錢、旅館二泊 ▲(食) 食料自動車料其他費用トシテ概算 ▲(一) 〇圓宛ヲ計上ス

旅行費用概算	日5第	日4第	日3第
	(ロ)(イ) 上野驛 大坂驛	(ロ)(イ) 野町驛 金澤驛 金澤驛 白山下驛 神社前驛 白山下驛 市瀬 白山温泉	白山温泉 白山山 白山温泉
	着前 六・〇五 着前 四・五六 着後 七・〇〇	發後 八・五七 發後 七・五 發後 一・〇二 着後 二・二六 着後 二・三二 着後 二・三七 發前 二・三六 發前 二・四二 發前 二・四八	着 徒歩 發 徒歩
	歸宅	大坂行列車 上野行急行 金澤見物 野町行電車 乗換 神社前行汽車 乗合自動車 徒歩	宿泊 徒歩
東京から 大坂から	四九八 三七八 三九二 二〇六	二九八 二二九 二二四 二六九	二九八 二二九 二二四 二六九
二等			
三等			
内譯	汽 汽車賃急行料ノ外(備考欄參照)二、三等寢臺下段 二夜分九圓、三等上段一圓六錢、旅館二泊 料 食料自動車料其他費用トシテ概算 一〇圓宛ヲ計上ス		

富士五湖めぐり日程案 (遊覽券利用東京から一日)

「註」左記日程案は御殿場―吉田―精進―吉田―大月の順路になつて居るが之と反對に中央線大月から吉田に入り五湖を探勝するのも順路がよく、寧ろ此の方が普通のコースとなつてゐる程である。

即ち新宿驛發午前八時三十分の長野行列車なれば大月着午前十一時三十分、夕景までじっくり遊覽して精進に着く事が出来、或は七、八月の富士登山期中なれば大月―吉田間自動車及電車は夜中も連絡運轉して居るから新宿驛午後一時五十分の終列車で大月着午前二時四十分、吉田着午前四時頃となり、吉田又は船津でゆつくり朝食を喫し、精進に一泊するか又は急ぐ人は引返して大月又は御殿場に出で其日の中に歸京する事も出来る。

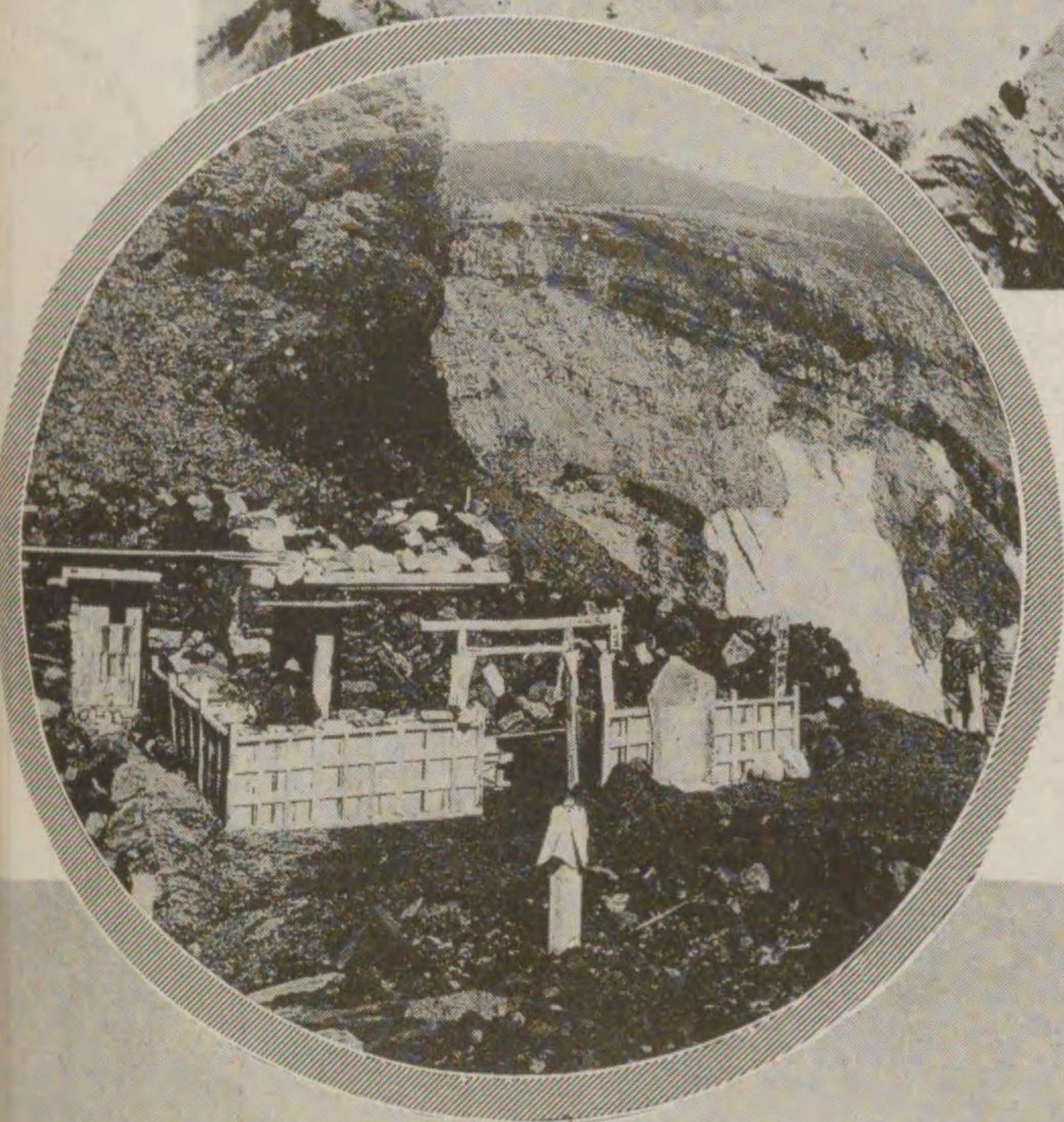
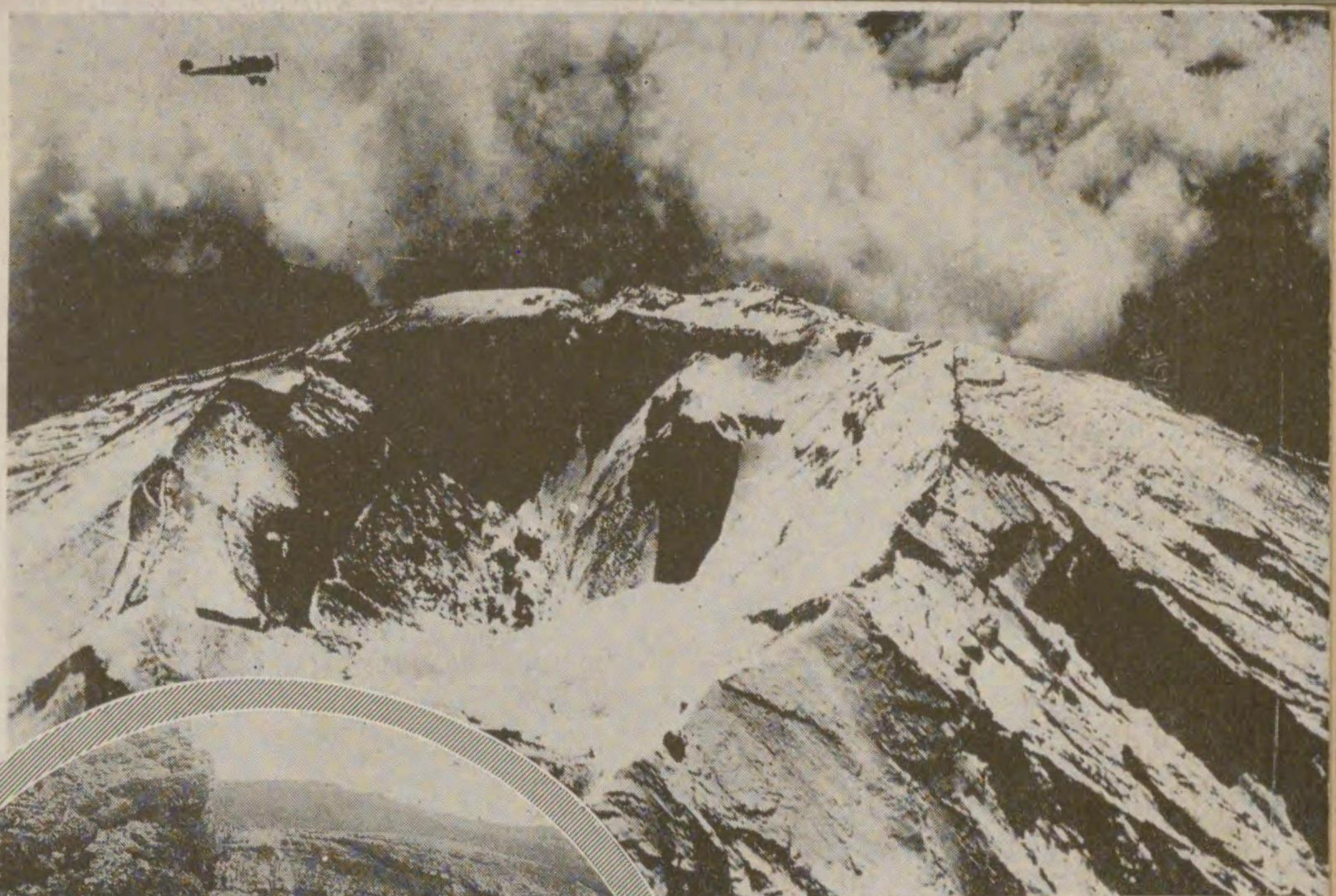
日程	地名	發着時刻	記事	備考
1	東京驛	發前 八・五	下關行列車	▲東京―御殿場三時間(一三料二)、三等普通片道一圓七〇錢
	御殿場驛	發前 二・五	下關行列車	▲御殿場―吉田三〇料六、自動車一時間二〇分、貸切大型二二圓一〇錢、小型一〇圓二〇錢、乗合一圓七〇錢。
	須走	發後 二・〇	同 上(乗換ナシ)	▲御殿場―籠坂一八料餘、自動車四〇分、乗合九五錢。▲籠坂―山中四料餘、自動車一五分、乗合二五錢。▲山中―吉田八料、乗合二〇分、乗合五〇錢。
	籠坂峠	發後 二・四	同 上	▲籠坂峠 海拔一〇四米(御殿場驛ヨリ高キコト六六四米) 眺望雄大、秀麗、脚下ニ銀盤ノ如キ山中湖ヲ望ミ、遊覽客ヲシテ車ヲ停メシメル所デアル。
	山中	發後 二・七	乗合自動車	▲山中―吉田二七料八、乗合一圓二〇錢、貸切一圓二〇錢。
	吉田	發後 二・八	乗合自動車	▲吉田―船津四料、自動車一〇分、乗合二〇錢、貸切一圓二〇錢。
	船津	發後 三・〇	渡船	▲船津―長濱間河口湖縦斷五料八、モーターボート三〇分乃至四〇分、乗合一人四〇錢、貸切ハ乗合料金ノ八人分。
	河口湖	發後 三・四	河口湖縦斷	▲河口湖(二八〇真參照)
	長濱	發後 三・五	下船、徒歩	▲長濱―西湖部落間坂路一料、道路良、自動車乗合一〇錢、途中ニ文化洞ト云フ隧道ガアル。
	西湖部落	發後 四・三	又ハ自動車	▲西湖部落 根場間西湖縦斷約三料半、モーターボートテ約三分、乗合一人三五錢、貸切ハ八人分。
	西湖	發後 四・三	渡船西湖縦斷	



(眞寫省道鐵)

● 湖 栖 本 と 士 富 ●

富士三景



(上) 機上から見た富士山頂  
 (中) 頂上の銀明水  
 (下) 河口湖よりの富士



野居各圖



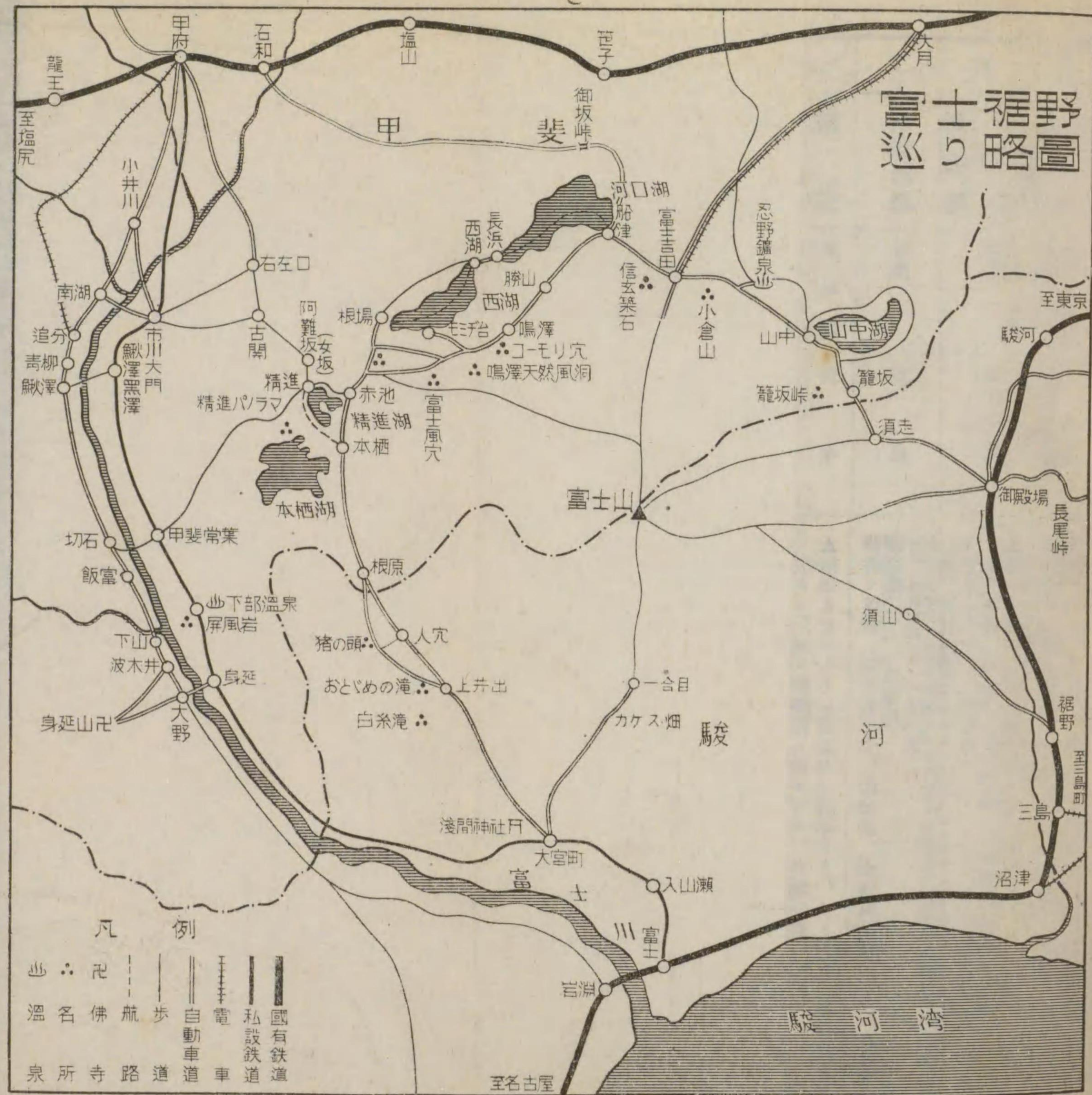
カ行月相集

三  
等  
一  
三  
・  
五  
八

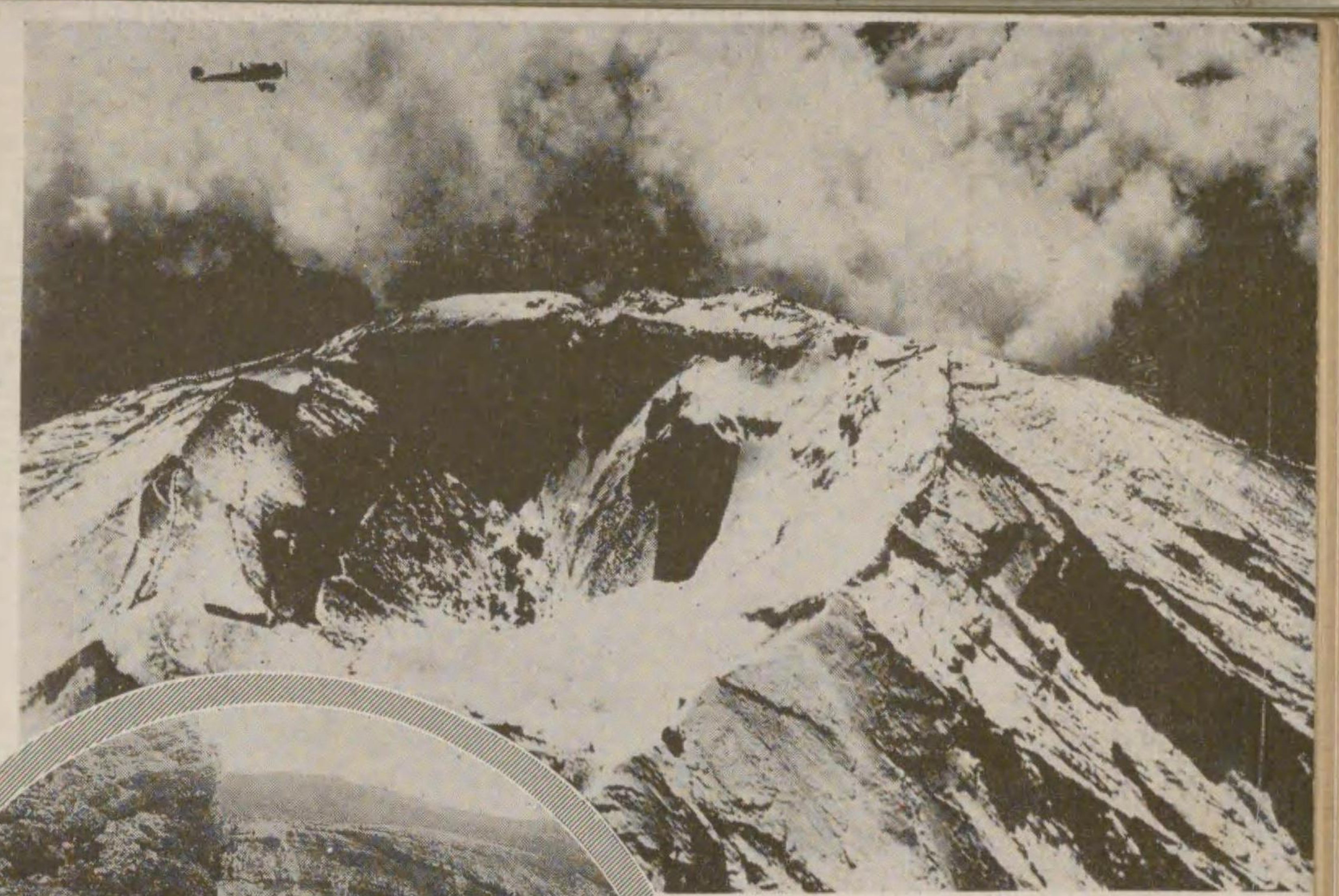
内譯

湖・西湖・精進湖、▲宿泊一泊但シ二等ハ精進ホ  
 テル洋式ニテ計上ス二等一五圓七一錢三等一〇圓八錢  
 車中其他食料 三・五〇

富士五湖めぐり(日程案)



富士三景

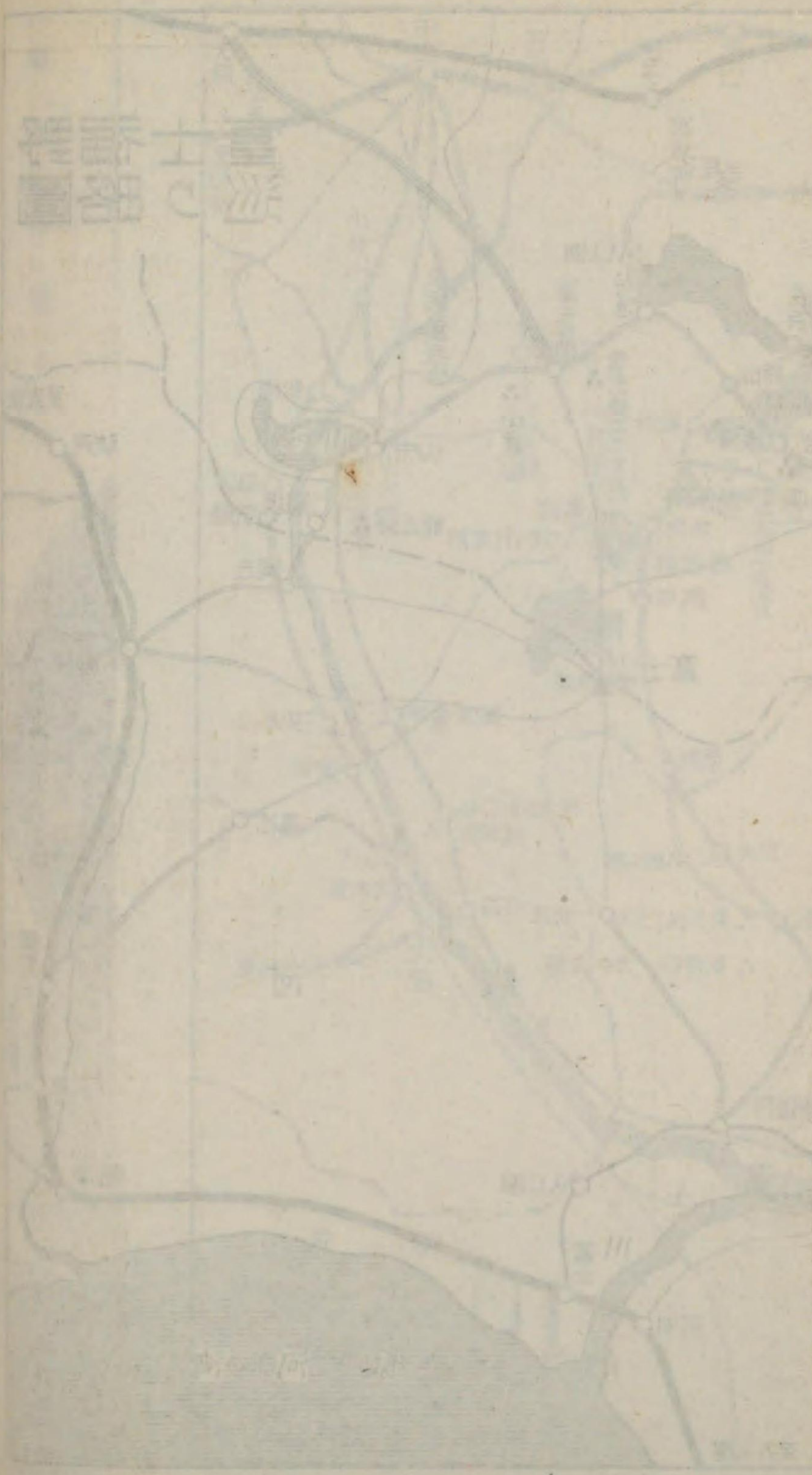
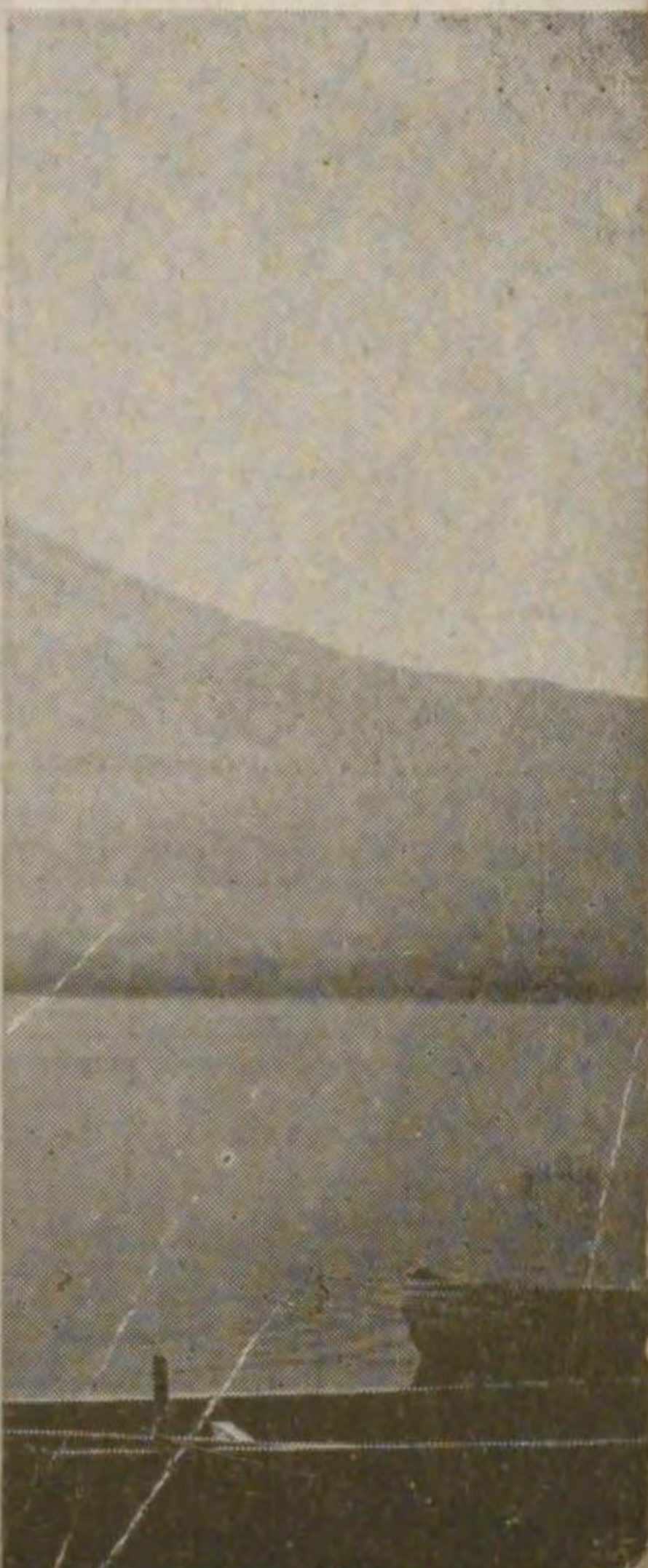


(上) 機上から見た富士山頂  
 (中) 頂上の銀明水  
 (下) 河口湖よりの富士





(上) 巖上から見た富士山頂



日 第 2		日	
精進	本栖湖	赤池	根場
精進	勝山	赤池	根場
船津	吉田	赤池	根場
富士	吉田	赤池	根場
大月	吉田	赤池	根場
新宿	吉田	赤池	根場
着後	着後	着後	着後
五・五〇	三・四七	五・三〇	四・五〇
徒歩	乗合自動車	渡船	乗合自動車
	船津又ハ		
	吉田ニテ晝食		
	大月行自動車		
	新宿行列車		
	歸宅		

旅行費用概算

二 等 一 三 九 . 二 一 五 八

内譯

遊覽券

車中其他食事料

富士五湖めぐり (日程案)

▲西湖(二八〇頁参照)

▲根場カラ精進湖畔ノ赤池迄七軒、自動車三〇分、乗合五〇銭

▲赤池ニ乗合三圓

▲赤池ニ乗合三圓、精進部落間精進湖上約一軒七、モーターボート約二〇分、乗合二〇銭(六人乗和船ハ二五銭)、貸切最低賃八人分八人以上ハ一人二〇銭増

▲「註」精進湖渡船ノクーパーハ、割引ナシニナツテ居ルガ、クーパー所持者ニハ一人ニテモ隨時ニ出船ノ契約ニナツテ居ル。赤池カラ精進湖ノ東岸ヲ迎ツテ精進部落ニ至ル湖畔道路モアル、約四軒

▲精進湖(二八一頁参照)

▲精進ノ旅館、精進ホテル、山田屋、池田屋其他(二八一頁参照)

▲精進カラバナラマ臺迄約二軒半アリ、上リ徒歩一時間半位ヲ要スル。此ノ間乗馬ノ便モアル、片道一圓八〇銭

▲バナラマ臺カラ本栖湖畔ノ本栖マデ下リ約二軒半

▲本栖カラ精進赤池、勝山、鳴澤經由吉田町マデ二四軒一、自動車一時間半、乗合一圓七〇銭(富士山麓電氣會社ノ定期乗合一日九往復ノ便ガアル)

▲此ノ途中ニ「コウモリ穴」青木ヶ原ノ樹海、紅葉臺等ノ名所ガアル、二八一頁参照

▲吉田―大月間二三軒六、富士山麓電氣會社ノ電車テ約一時間餘、賃七〇銭。外ニ同會社經營ノ定期バスノ便モアル、所要一時間、料金八〇銭

▲大月―新宿間二時間〇三分(七七軒五)三等普通賃一圓二二銭

▲鐵道―東京・御殿場間、吉田―新宿間、▲自動車―御殿場・船津間、根場・赤池間、本栖・吉田間、▲渡船―河口湖・西湖・精進湖、▲宿泊―精進一泊但シ二等ハ精進ホテル洋式ニテ計上ス二五圓七一錢三等一〇圓八錢

三・五〇

富士五湖

富士山の東北麓から北麓をめぐり、西北麓に至る間に、富士山頂を中心とする半徑一六軒の圓周上に連る山中、河口、西、精進、本栖の諸湖を總稱して富士五湖と稱し、近頃本邦二十五勝の一に數へられて居る。

山麓一帯の地は海拔八〇〇米を越え、是に點々する五湖は太湖の面影を其儘に潭碧の水を湛へて閑雅幽邃を極め、千古の姿態をとり、に競ふ青木ヶ原の樹海、婦女子にも親しみ易い秀麗な裾野の曲線美と、之に織りなす様々の花卉や珍草、廣潤な展望を恣にする事の出来るパノラマ臺の神祕と秀麗の景勝を藏し、加之、空氣乾燥清澄にして健康上にも亦申分のない淨境である。新緑の頃樹海の逍遙に、眞夏の避暑に、キヤムピングに、秋、紅葉郷の探勝に、十月中旬から下旬迄、冬期高原のスキーに、又湖上スケートに、又は裾野の狩獵に四季を問はぬ行樂地であり、國民的大公園としての理想郷である。

富士の山おなじ姿に見ゆるかな  
あなた面もこなたおもても

八面玲瓏、白扇倒に懸る富士の靈峰は、古來各方面同一なりと傳へられてゐるが、寶永、小富士、小御嶽、大室山、愛鷹山などの配合により、吉田、精進、大宮等皆風致を異にし、又裾野を繞る五湖との調和により各方面皆其の景趣風致を異にしてゐる。

富士五湖はもと富士山の噴起のために、その北をめぐり御坂山脈その他との間に生じた新月形の水面の變化により形成せられたものであると云ふ。即ちその東北部をなすものは桂川の谷に排水して一度は著しく水位を低下したが、山中丸尾の熔岩流に堰止められて山中湖を獨立し、北部のものは同じ桂川の谷に注ぐ排水路により一たびは乾涸したが、貞應六年の御丸尾熔岩流のたけに堰かれて河口湖を生ずるに至つた。また西では青木ヶ原熔岩流で大室山熔岩流とのために三分せられて西、精進、本栖の三湖と變じたものである。これらの五湖は各富岳の靈峯を背景として絶佳なる風景を占有してゐる。

五湖中河口、山中兩湖は湖底概ね平坦にて浅く、鯉、鮒、鱒、鯰、若鷺等を産し、舟遊に、スケートに頗る好適である。又湖畔の風光明媚にて近時キヤムプに、別荘に聲價が擧つてゐる。西、本栖兩湖は湖心深く紺碧を湛へ、湖畔原始的に頗る凄美を呈してゐる。本栖は水底年中攝氏四度を變ぜざる故冬期も結氷する事なく、湖水は清冽にて透徹掬して之を飲む事が出来、精進湖は最も小なるも周圍の山岳樹海と調和して幽邃である。

世に富士八海とて、富士道者根廻りの目標とするものがある。それは前記五湖の外に駿河の須津湖(浮島沼)と明見、志比連(四尾連湖)とを加へてゐる。然しこの三湖、殊に後者の二湖は何等富士山に直接の關係もなく、また前の五湖には比肩し得る程のものではない。要するに強ひて八といふ數に拘泥し過ぎたもの如くである。所謂五湖は併稱せられる通り相通するところが、他の湖沼とは異つてゐる。

岳麓の交通

一、東海道本線御殿場驛—吉田間

此の區間は富士山麓電鐵會社の自動車が一八往復の定期乗合を運行して居り、省線主要驛と連帶扱をしてゐる。

▲御殿場から須走三〇分五〇錢(一〇軒五)、山中湖七〇分、一圓二〇錢(二軒六) 吉田一時間半、一圓七〇錢(三〇軒六) 一日七往復。

▲吉田—山中二分五、五〇錢(八軒) 須走一時間一圓二〇錢(二〇軒一)。

二、中央線大月驛—吉田間

此の區間は富士山麓電鐵會社の電車及自動車が頻りに往復し、富士登山期間中は夜間でも中央線の各列車に連絡運轉して居る。

A、電車 所要五分乃至一時間五分、二軒六、三軒六、四軒七〇錢、三等車のみ。

B、自動車 所要一時間、二軒六、料金八〇錢。

三、吉田—精進湖畔赤池及本栖間  
此の區間は所謂富士五湖遊覽の河口湖及西湖を渡船で渡る徑路と鳴澤・勝山村を経てゆく富士山麓電鐵會社の自動車路(省線主要驛と連帶してゐる)とがある。

A、河口湖及西湖縦断行路(毎年四月一日から十一月三〇日迄)

船津發(河口湖渡船)	料程	料金	所要	後	後	後	後
西湖發(西湖渡船)	五・八	四〇	四七〇	九・〇	一一・〇	一三・〇	一五・〇
根場發(根場・赤池)	三・五	三五	三〇〇	一〇・五	一二・五	一四・五	一六・五
根場發(間自動車)	七・〇	五〇	三〇〇	一一・〇	一三・〇	一五・〇	一七・〇
赤池發(赤池・根場)	△六・〇	九〇〇	一一・〇〇	後	後	後	後
根場發(西湖渡船)	△七・〇	九・〇〇	一一・〇〇	後	後	後	後
長濱發(河口湖渡船)	△八・〇	一〇・〇〇	一二・〇〇	後	後	後	後

注意 △印は七、八月以外不定期。八人以上の團體の場合は本定期外と雖も出船す。精進湖渡船はクーポン所持者に對しては何時にても出船する。

▲吉田—船津間は約四軒餘あり、自動車が凡そ一時間毎位に發車して居る。所要一〇分、乗合二〇錢。

▲河口湖—西湖間は約一軒あり、自動車の便がある、料金一〇錢。

B、勝山經由自動車路(八年一〇月一日現在)

▲吉田—赤池(精進)七〇分、一圓五〇錢(二〇軒九) 一日九回。

▲赤池—本栖一〇分、二〇錢(三軒二) 一回九回。

四、中央線甲府驛—精進間  
此の間は右左口村迄列車に接續して乗合自動車がある、それから先は徒歩により途中に阿難坂及右左口峠がある。

▲甲府驛—右左口村間一二軒一、自動車四〇分、乗合四〇錢、五人乗貸切一臺

富士五湖めぐり(岳麓の交通)

三間。  
▲右左口村(上り六軒) 右左口峠(峠を約一軒三下つて更に四軒餘上る) 阿難坂(下り二軒餘) 精進。

「註」甲府から市川大門迄約一六軒、バスにて三〇分、三〇錢(一日二五回)、五人乗貸切一圓半、又は電車にて一時間、賃五二錢。市川大門から古關迄一六軒、古關—精進六軒徒歩。

五、甲府—御坂峠—船津—吉田間

此の區間は御大典事業として昭和六年一月竣工した御坂國道で、最近バスの運轉を見るに至つた所である。途中御坂峠は甲斐富士見三景として古來著名な勝地である。

▲甲府驛前—御坂上約一時間餘、七〇錢。

▲船津 約一時間五分、一圓、賃切七圓。

▲吉田 約二時間、一圓二〇錢、賃切七圓五〇錢。(約四八軒) 右一日六回往復運轉してゐる。

六、富士身延電鐵大宮町驛—本栖—精進赤池間

此の區間は八年七月開通した自動車路で、此の開通に依つて岳麓を自動車に依つて一周する事が出来る事となつた。

▲大宮町驛—上井出間約一二軒、自動車四〇分、乗合四〇錢(前五・三〇—後六・三〇)まで(二回往復)、賃切五人乗三圓。

▲上井出—八穴六軒半。▲八穴—根原間一〇軒八。▲根原—本栖間三軒三、▲本栖—精進赤池間三軒二。

▲大宮驛—上井出—本栖間三軒六、自動車一時間半。

▲貨切料金(富士山麓電鐵會社)

車類別	五人乗	一三人乗	一六人乗
貸切別	八圓	四五圓	五五圓
一日貸切	二二圓(高級車)	二七圓	三三圓
半日貸切	一三圓(高級車)		

一日貸切の場合は乗合時間を午前六時から午後六時迄とし一時間を増す、毎

二七七



に賃金の一割増とす。  
半日貸切の場合は午前午後に分し乗車から降車まで六時間とし一時間を増す毎に一割五分増とす。

岳麓名所案内

御殿場—吉田間

【御殿場町】静岡縣駿東郡。静岡縣東部の町で、富士・箱根兩火山の裾野の重り合つたうちでも最も高い部分に位し、海拔四五四米。南に狩野川の支流黄瀬川を、東北に酒匂川を流して居る。土地が高燥で、風景も頗る雄大なため、近來別荘を營むもの多く、東海道線の一驛をなし、沿線中最高の土地となつて居る。地は靈峯富士の御殿場口及須走口の發源地として知られ、夏季登山期には非常に賑はふ。人口九、六一六(昭和五・一〇調)。

【旅館】松屋(電二二、室一七、収容九〇名)、③三圓、料理兼業)、富士屋(電二三、室一一、収五〇人、③三圓)、田口館(電六二、室一八、収一三〇人、③三圓、料理兼業)、大黒屋(電六一、室一一)、富士野屋(電一一、室八)、村田屋(電一三五、室八)、御殿場館(電二九)、鳥屋(電一三二)、箱根屋(電四八)、山中屋(電一〇七、室八)等。以上普通宿泊料二圓乃至五圓(但半泊は以上の七割)晝食料六五錢乃至二圓、團體(五人以上)一圓五〇錢。

【附近の名所】▲佐野の瀧 東海道線御殿場驛の次驛、裾野驛から西北約一軒半にある。自動車七分、乗合一〇錢(六回)、貸切片道六〇錢、傳三〇錢。富士山基底の礫岩礫塊灰石及び玄武岩の東南に流下する處に懸る高さ一七米の瀧で、七條に分れて居る。地は佐野瀧園と稱し、遊園地が此處に經營されてゐる。

【須走村】静岡縣駿東郡、御殿場から山中・吉田へ通ずる往時の鎌倉往還の一小聚落で、富士山須走口の登山道として知られ、須走淺間神社がある。人口五〇五(昭和五・一〇調)。海拔七八〇米。御殿場から一〇軒半、乗合五〇錢。【旅館】(電話なし)、米山館(②二圓)、大米谷(普通一泊二、三、五圓、團體一圓半、晝八〇錢—一圓半、②二圓)、大申館(夏季のみ営業)、富士木館、扇屋等(収容何れも八〇名位、普通一泊一圓半乃至三、四圓、團體一圓五〇錢)。

人位、遊覽券指定一泊二圓、晝食一圓)、泉質は單純泉で浴用加熱し、リウマチス、神經痛、婦人病等に效くと云ふ。

【忍野の鷹丸尾針葉純林】吉田淺間神社の東方八軒、山中湖の北一軒。富士熔岩流上に密生する原生林で、樹齡數百年の老木一六、二五二アールの地積を擁し、此の雑木を雑へず、富士山麓植物景観中の一異彩を放つて居る。

【忍野八海】山中から吉田に通ずる道路の途中に當つて、周圍に山を繞らした忍野盆地がある。東西約四・八軒、南北一・五軒、銀杏の葉の形をし、山中の西から流れ下つた鷹丸尾と稱する熔岩流が、この平野に流れ込んで、東部内野區、西部忍草區、中部熔岩地域と分つて居る。此の熔岩地域に世界一品の稱ある溶室御料のハリモミ純林(前記)がある。此の平野は往昔湖水であつた處で、この附近にまだ人類の影を見なかつた頃に湖は涸れて一の湖底平野となつたものである。忍野村は富士山麓唯一の米産地をなし、中にも忍草區は岳麓に類例のない程肥沃で、米も珍しく此村の需用を充して餘ありと云ふ。こゝに泉源が八ヶ所あり、之を忍野八海と云ひ、信仰的に八海巡りをする道者が多い。

【鐘山の瀧】(小佐野の瀧)吉田への途中道路の傍にある(吉田淺間神社の東南二軒)、山中湖及忍野八海の湧水を集めた桂川が、槍丸尾の熔岩流を超えて二段の瀧となつて居るものである。近年附近の小丘鐘山に多少の設備をして富士見公園と名づけて居る。

【吉田】山梨縣南都留郡。山梨縣の南部、富士の北麓にある岳麓第一の名岳で、街は福地村(上吉田とも稱し)人口四、五〇九と瑞穂村(下吉田とも稱し)人口一、三二〇の二自治區からなる一續きの長い街で俗に兩者を併せて吉田町と稱して居る。此處は谷村町に次ぐ甲斐絹の集散地であり、また富士登山北口及び五湖めぐりの中心地として知られ、舊鎌倉往還に當る交通の要衝をなしてゐる。

【旅館】芙蓉閣大外河ホテル(電吉田三、室一八、収容二二〇人、②二圓半、普通一泊料二、三、四圓、晝食料七〇錢、一圓、一圓半、團體宿泊一圓二〇錢)、望岳館刑部ホテル(電二七、室一六、収容二二〇人、②二圓半、普通一泊及晝食料同上、團體一圓半)、城山莊(電一四七、室八、収五〇人、泊料一圓半乃至三圓、晝食三〇錢乃至一圓半)、杉林(電同二二、室二〇、②二圓半、普通一泊料同上)、菊屋(電一一、室八)、等。

山中湖 富士五湖中最も東に位するもので、湖面海拔九八二米に達し、本邦では中禪寺湖(二五〇頁参照)、棒名湖(二三頁参照)に次いで第三位を占めて居る。また面積も五湖中最大で六・四九五方軒を有して居るが湖岸線は河口湖に次ぎ一三・五方軒である。湖底は平坦で浅く、最深僅かに一五米に過ぎない。従つて水は餘り清冽ではなく、飲用には適しない。湖畔には落葉松の瘦生する草野が廣く、緩傾斜を以て四周の丘陵に連り、西南に富士を仰いで風光明媚である夏はキヤムプに(八月中の平均温度華氏六八度三分)、冬はスキーの好適地があり、湖面は長く結氷してスケートに適する。湖中にはナマツ・コヒ・フナ・ヤマメ・ウナギなどを産し、また淡水海綿・メンカラスガヒ・シジミ等も見られる。山中は夏冬とも氣温頗る低く、大正九、一〇、一一の三ヶ年の平均温度一月の零下六度六分(東京三・二)、最高八月の二〇度六分(東京二五・三)で、平壤や青森より低く、随つて夏でも蚊が居らぬ、冬期は一部湧泉のある部分の外は湖面結氷して人馬を通ずる。

【湖畔の旅館】山中湖ホテル(和洋兩式、洋室三〇、室代一人室二圓—五圓、二人室四圓—八圓、日本室一三、一泊四圓—五圓、②五圓半、食料朝一圓、晝・夕二圓)。

【山中】(山梨縣南都留郡中野村字山中) 中屋、洗心樓、森の家(スキー季節三食付一圓位)。

【忍野鐵泉】山梨縣南都留郡忍野村字忍草、山中から吉田への途中(吉田から温泉迄約四軒、自動車一〇分、乗合三〇錢、一日三往復、貸切一圓)から東北へ約二軒入つた忍草區にある。此處は富士の北麓桂川の溪流に沿ひ、風光絶佳の地を占め、瀟灑な温泉旅館芙蓉俱樂部がある(室數一七、團體収容一五〇)。

吉田は實に富士登山町で、町の中央に立つ金鳥居から秀麗な芙蓉峯を仰ぎ、路傍には登山記念の石碑が立つなど、信仰的歴史的情調は自ら備はり、如何にも登山町として語られる。

【附近の名所】【富士淺間神社】(縣社) 金鳥居の北約三〇〇米、上吉田の村端れ海拔九七三米の平地にあり、木華開耶姫命を祀り、富士登山の起點になつて居る。境内の東宮本殿は一間社流造で永祿三年(紀元二二二〇年)に武田信玄の再興したもので、繪棟調刻などに室町時代末期の特徴を存し、國寶に指定されて居る。西宮は同じく室町時代の建築ではあるが、後補された部分が多い。毎年八月二六日に鐵火祭を執行し、町内戸毎に霧火を焚いて大いに賑はふ。拜殿の前にある大杉は樹幹目通り八米餘、根廻り約二〇米もあり、神木とされてゐる。

【山の神の大藤】吉田の東北約四軒、西桂村上墓地の自動車路から西へ約二〇〇米の所にある。根廻り八尺三寸、目通りの廻り六尺三寸もあり、側にあるイタヤカヘデの大木に纏繞し、更に稍距つた釋の大木に絡まり、天然の藤棚をなし、幹の巨大な事は比類少いものである。花期には街道の自動車からもその美觀が眺められ、指定の天然記念物となつて居る。

大月—吉田間

【大月】山梨縣北都留郡廣里村字大月、中央線の一驛をなす大月驛は字駒橋にあり、富士山北口の關門に當り、吉田の金鳥居迄二六軒六四四(六里一八丁)電車及自動車の便がある。

【旅館】濱野屋(電大月二七、室一三、②二圓半)、中西屋(電同三七、室一〇、②二圓半)、富士見館(電同八、室二五)等、一泊二圓、二圓半、三圓—五圓。

【附近名所】▲嚴殿山 驛の北、桂川を距て、大絶壁をなす處で、武田氏治世の當時小山田氏の守つた城址がある。▲大月の大藤 驛の東四五〇米、三島神社の境内にあり、樹幹周圍目通り三丈四尺根廻り四丈二尺あり神木として保護され、指定の天然記念物である。

【谷村町】山梨縣南都留郡、富士山麓電車的主要驛をなし(大月から二五分合等あり、人口八、一九五(昭和五・一〇調)、山梨縣第二の郡邑であり、甲斐絹

の機業が盛んに行はれ、その集散地としては南北兩郡留郡中の第一位にある。【三ツ峠山】地は海拔一、七八五米で標高は餘り高くないが、南アルプス八ヶ岳、秩父連峰などの展望臺として、また靈峯富士を間近に眺めて眺望よくその麓に散在する五湖を俯瞰するの妙地位を占めて居るので近年著しく知られて來た處である。また頂上南面の屏風岩はロック・クライミングの練習地として興味を惹いて居る。

登路は富士山麓電鐵の小沼驛(大月から三九分、一五軒八、賃四七錢、吉田から二分、七軒八、賃二三錢)から約七軒あり、小沼の宿より一、一七一米(小沼は六一四米)を抜き、登路の過半は尾根筋を傳ひ約四時間を要する。頂上から河口湖の北東岸の河口村まで約五軒、下り一時間半位である。

吉田—精進—本栖間

【船津】山梨縣南都留郡船津村、吉田の金鳥居から四軒五八七、舊鎌倉街道の交通の衝に當り、河口湖の東南岸に發達した聚落で、旅館や別荘が湖面に臨み、風致がよい。人口三、二七四(昭和五・一〇調)。

【旅館】船津ホテル(電話船津五、室數一六、九〇人收容、③三圓、普通宿泊料二、三、四圓。晝食料一、二、二圓半)、河口湖ホテル(電同一三、和室一五、洋室二、收容一四〇人、③三圓、普通宿泊料二圓、三圓半、五圓、學生團體一圓半乃至二圓、晝食料八〇錢乃至二圓、洋室二食付六圓)、大屋旅館(電一二、室一五、③三圓、普通一泊料二圓一四圓)、登喜和屋(④二圓半、電三一)、山岸(④二圓半、電一八)。

河口湖 富士山の正北麓に位し、東西五軒餘、南北二軒五、湖面海拔八三〇米、湖岸線の屈曲に富むこと五湖中第一位を占め、その延長一七・六軒に達して居る。湖面の廣さは五・七八四方軒、湖中に鷓鴣島と稱する一島を有し、その東に最深の水底一五米に及ぶ處がある。

御坂峠北に聳え、三ツ峠其東に連り、十二ヶ嶽西に支を列ねて三面から湖を壓し、南ひとり開けて八ヶ岳の大芙蓉峯地に青蓮に涵してゐる逆富士は富士崎形中の隨一である。

ウリカヘデ・シデ・テツカヘデ・イタヤカヘデ・リヤウブ・マユミ・ニシキギ・ヤマザクラ・ヌルデ・ヤマウルシなどの調葉樹は、初秋の候には一時に錦繡爛りなして格段の趣きを見せて居る。

▲大正道は西湖畔根場から精進湖畔赤池に至る垣路七軒〇〇七(一里廿八丁)の新遊覽道路で、此處は丁度青木ヶ原丸尾が御坂山脈に衝突して、その流れを止めた末端で、樹海の岸とでも云ふべき地に當つて居る。道の中央部に丸尾は累々と重なり、樹木は開きて富士の麗峯を仰ぐ景勝の一區がある。此處を「御殿庭」と名付け、船津から足和田山の南鳴澤を経て來る縣道が相會して居る。

【コウモリ穴】西湖の西岸から南半軒、鳴澤村附近にある。入口は熔岩溝になり、西北に向ひ段階的に洞穴をなし、縦穴又は斜穴となり無數の蝙蝠が棲息して居る。遊覽には案内人を要する。

【紅葉臺】吉田の西方一二軒の鳴澤から西南二軒、足和田山脈の西部を占める峯で、北は西湖を俯瞰し、西と南とは青木ヶ原の樹海を望み、南方遙かに大室、長尾の寄生火山を、東南方は富士を仰ぎ、秋季樹海の紅葉を展望するに絶好の地である。標高一、六二六米。

【富士山麓スキー、スケート場】富士山麓には一月中旬から三月上旬まで積雪があり、普通二月下旬迄は一合目附近で一米半内外の積雪を見、六合目までは宏大なスロープが廣がつて居る。六合目以上は概ね氷結してスキーには適しない。御殿場登山口太郎坊附近と、吉田口一合目附近には年々スキー家が集り、太郎坊には小舎があり食糧、寝具を携帶すれば小屋を根據地として二子山、寶永山附近まで登るに従つて雪質もよく、緩急種々のスロープがあり、太郎坊までの滑降は痛快である。

スケートには山中湖は一二月下旬から二月下旬まで結氷し、時には馬車も通れる程の厚さとなつて水の質もよく、降雪がない。河口湖は一二月末から二月中は結氷し、全湖面凍結することは稀であるが湖岸の大部分が凍る。精進湖は一月上旬から三月上旬まで結氷し、その厚さ時に五〇釐に達することがある。

精進湖

富士ノ西北麓に位し、東北西の三面は山に圍まれ、南の方のみ青木ヶ原の低地に接して居る。湖周約一〇軒、湖面積八六九平方米、最深二五米五で、五湖中最小

富士五湖めぐり (精進湖)

湖岸緑樹鬱蒼として風光に富み、産屋ヶ崎、敷島の松の勝地があり、夏はキヤムプに、秋は紅葉に、冬は狩獵に、四季の行樂によい所である。

湖の東南岸船津から西岸の長濱村迄乗合のモーターボートがあり、途中ウノ島に寄つてゆく。湖上航路五、七九七米。

▲鷓鴣島は五湖中只一の島で、河口湖陥没の時に殘された地盤で、島はその地層を同じくする北岸の大石村に屬して居る。先史民俗(アイヌ)は此の島を利用して安住地としたものの如く今尚遺物の發見さる、事があると云ふ。

影うつる富士の高ねにうつもれて残る水なき河口の湖 (清水濱臣) 【鳥居峠】河口湖と西湖との間にある峠で海拔九六九米、河口湖より一三九米、西湖より六五五米高い。従つて兩湖の水面は七四米の高低がある譯である。河口湖畔の上陸點から一路直通して峠の頂には隧道が通じ、大正洞門又は文化洞と稱し、洞の中央に到れば前面に西湖が展開し、振り返つて見れば河口湖が鏡の如く眺められる。此の洞門を出て下れば直に西湖の渚に出る。行程約一軒、乗合自動車がある。

西ノ湖

(俗に西湖とも云つて居る)湖面海拔九〇三米七、東西三軒半、南北最廣所一軒二、面積二・三方軒、湖岸線一〇軒で五湖中第二の水深を有し、湖心迄九〇米九、従つて水色は美しく冬季は第三號に相當し、河口湖畔の船津では此の湖水を導いて飲料水として居る。附近十二ヶ岳の麓はキヤムプの好適地である。

【青木ヶ原樹海】西、精進、本栖の三湖畔から大室山に至る鬱蒼たる原生林の樹海である。貞觀六年(紀元一五二四年)富士山の一部が噴火して流出した青木ヶ原丸尾の熔岩帯の上に密生した森林で、起伏常なき間に熔岩散亂し、その苔蒸す丸尾の裂隙中に根を衝き入れて晝尚暗き原生林をなして居る。今西湖から精進に至る大正道路や、吉田から同じく精進湖畔に至る縣道が之を貫いて居る。

樹林は麓近くでは針闊混生林で、ブナ・イタバナ・樺・榎・ハウチハカヘデのもの、湖上の風光は夙に内外人に讚美され、湖の南岸から湖心まで熔岩流の半島が突出して居るので、湖形は鹿の頭の如く見える。

精進湖と西湖とはもと相通じて細長い一湖をなし湖の海又は石花海と謂はれて居たものであるが、貞觀六年御中道小御嶽の西方約四軒のあたりにて噴火した熔岩流が未廣がり流下し、所謂青木ヶ原丸尾に依り、兩斷されたものである。此の事は三代實錄などに明記されており、今日地形地質の上から之を首肯する事が出来ると云ふ。而して此の二湖の水は相通するものらしく、湖面の海拔は殆ど同一であり、西湖の水が發電の爲に河口湖へ落され、水面が低下すると、精進湖面も亦下ると云ふ事である。

自動車の終點赤池から(湖の東南岸)精進部落のある湖の北岸までは約一軒五あり、湖上モーターボートで約二〇分を達するが、湖の東岸にある山道を二軒餘で達することも出来る。

精進部落は精進湖の北畔に位する戸數約一〇〇軒許りの一寒村で、湖畔至る處キヤムプに適し(八月中旬平均温度華氏七一・四度)、諏訪神社の大杉が聳えて居る。

【精進湖畔の旅館】精進ホテル(洋式、一人室六、室代三圓、四圓、二人室八、室代四圓一六圓、特等室一〇圓、三食付八圓一〇圓。食事料朝一圓半、晝二圓、夕二圓半。日本間、一泊三圓、四圓、五圓。遊覽券指定一泊二食付六圓、晝食二圓、日本室は三圓半)、池田屋本館(室一八、②二圓半)、池田屋別館(④四圓)、湖畔の家(②二圓)、山田屋本館(室一、②二圓)、山田屋新館(③三圓)、富士屋(室二、②二圓半)、對岳樓ホテル(電精進五・六)、以上普通一泊一圓半一五圓。

【附近の名所】【精進パノラマ】精進ホテルの背後、羊腸たる坂路を登ること二軒半(上り一時間半、下り三〇分位、乗馬往復二圓三〇錢)片道一圓八〇錢(標高一、二五七・四米)精進部落は九二〇米)、突峯を鳥帽子岳と稱し、精進湖を抜くこと約三五〇米、四望實に開豁、眺望雄大にして南アルプスの連峯、甲府平野、富士川峡谷を瞰下し、瞰下に展開する樹海、四湖の鳥瞰は眞にパノ

ラマの名に背かぬ。是非奮撃を試むべき所である。パノラマ臺から本栖湖畔に下り、湖の東岸の本栖村に出る事が出来る。約二軒半。

**本栖湖** 精進湖の東南端赤池から西南に進むこと約三軒で本栖湖の東岸に達する。(バス二〇分、乗合片道二〇錢、一日九往復) 五湖中最西南部に位し、湖岸延長一三軒一、水深は最も深く一二六米に及び、湖底の水温年中攝氏四度を保つて居るので冬季と雖も水結することがない。水色は冬季第一號、夏季第四號を呈する。面積四・九六一方軒。紺碧に湛へる水は瑠璃の如く輝き透徹掬して以て飲むことも出来、湖畔最も幽邃にて一縷の煙なく、一座の懸るなき神仙郷で、雜樹叢生して樹海に續き、富士の靈峯其上に屹立して居る。

本栖も亦地下にて西、精進と絡連あるが如く、その水位は略同一で、湖面海拔九〇二米である。

**大宮町 人穴 本栖間**

【大宮町】 静岡縣富士郡。静岡縣の中部、靈峯富士の西南麓にある町で、富士裾野から流れ出る潤川に臨んで居る。東海道本線富士驛から枝れる富士身延鐵道の電車で二分で達する(一〇軒三、賃二九錢)。此地は富士登山の表口として知られ、官幣大社淺間神社の所在地であり、また富士製紙會社の工場等があつて盛んに洋紙が産出されて居る。人口二四、〇七四(昭和五・一〇調)。

【旅館】 梅月(電六・七、大宮町驛から一軒、室一九、②二圓半)、借樂園(電二、驛八〇〇米、室二四、②二圓)、橋本館(電七七、驛七〇〇米、室二三、②二圓)、中村屋(電六五、驛七〇〇米、室一六、小松屋(電一五九、驛七〇〇米、室二〇、②二圓)、佐野樓(電二三五、驛一軒一、室二二)、富聖館(電一二五、驛三〇〇米、室二〇)、鳥岩(電三六〇、驛半軒、室一一)、中村屋別館(電二一、驛前) 等何れも宿泊料二圓、三圓、四圓、五圓。晝食料七〇。

**愛鷹山 (足高山)**

愛鷹山は富士の東南側にある一個の獨立死火山で、昔から富士、愛鷹と併稱せられて小さい山の割合には名高い山である。また東の足柄、北の足和田山と共に富士の三足などとも稱されて居る。静岡縣の富士及駿東の二郡に跨り、面積約一八〇方軒を占め、その北側は富士山と楯合谷、所謂鞍状谷をなし、十里木(須山村の一區)で海拔八六九米に及んで居る。山頂は五峰に分れ、越前岳(一、五〇四米)と云ふ最北の一峯が最高で、南に愛鷹山(一、一八七・七米)がある。東海道から真正面に見えるので、之が全山岳の名稱となつたもので、東海道の旅客は往々富士の眺めの目障りとされて居る。此の兩峯の間に大岳(一、二五三米)、呼子岳(一、三三三米)、位牌岳(一、四五七・六米)が西南に開く半圓狀をなして相接して居る。そして此の中の開谷は噴火口であると云はれ、その谷は火口瀝で、下流須津川となつて浮島沼に注いで居る。

【足鷹縦走コース】 御殿場驛(一、二軒一、自動車四〇分、賃切一圓半、乗合六〇錢)―須山村(約二軒、半時間)―黒岳(海拔一、〇三六米、距離約六軒、二時間半)―越前岳(約四軒、一時間)―呼子岳(約六軒、二時間半)―位牌岳(約八軒、二時間)―愛鷹山(約一二軒、三時間)―鷹根村(約二軒、半時間)―東海道線原野驛(須山から計約四〇軒、所要一二時間)。

【註】 裾野驛から今里迄約八軒、定期乗合があり(所要三〇分、賃五〇錢、一日五回)、それから須山村迄約六軒ある(今里から約二軒の下和田―須山間の四軒は道路急坂となり、自動車はゆかぬ)。

**富士愛鷹山**

鏡乃至二圓、料理兼業。

【附近名所】 淺間神社(官幣大社) 大宮町字櫻ヶ丘にあり、富士身延鐵道大宮町驛から西北七二四米、自動車五分、乗合一〇錢(三〇回)、境内廣く風致に富む。同社は延喜式所載の名神大社で、木花咲耶姫命を祀り古來駿河國一宮として名高い。今の社殿は慶長年間再建に於て、淺間社造りで、本社は神社建築中最特殊なる様式に屬し、國寶に指定されて居る。毎年五月五日の流鏝馬祭、七月七日の御田植祭及一月四日の例祭には参詣者で賑はふ。

【大石寺】 静岡縣富士郡上野村上條にあり前記大宮町驛の北約九軒二、自動車の便がある、三五分、三〇錢(一日八回)、賃切一圓半、同寺は正應三年一〇月、白蓮阿闍梨日興上人開創の日蓮正宗總本山で、法燈連綿として續くこと六百数十年の今日及び、富士五山の一たる名刹である。總門・三門、御影堂・五重塔・御寶藏・客殿・位牌堂・經藏・常樂堂・六壺間・書院・上厨裡・下厨裡・對面所・大興・塔中・十四箇坊寺の堂塔伽藍があり、四月一四・一五日の靈寶虫拂會、舊一〇月二二・二三日の大會式には大法要がある。富士西麓にある白糸瀧、工藤祐經の墓、源頼朝駒止の櫻等は此處から四軒乃至六軒の所にある。

【頼朝駒止の櫻】 下馬櫻又は駒櫻とも云ひ、白糸村狩宿部落の南方にあり前記大宮町驛の北約一〇軒二、自動車四〇分、三五錢(一二回)、賃切三圓半櫻は赤芽の白山櫻で、地上一米の所の樹周八米五、枝張東西二二米、南北一六米の巨樹で、白山櫻の代表的なもので天然記念物に指定されて居る。花期は四月一〇日頃で、その咲初めは淡紅色を帯び、のち白色となる。

【白糸の瀧】 前記大宮町驛の北約一二軒、上井出村と白糸村の境界にあり、自動車の便があり(四〇分、四五錢、一二回)、そこから徒歩一分、瀧は三層の熔岩流から成る岩層の最下から落下し、之に火山岩層の層から湧く水が加はつて、恰も無數の白糸が懸つたやうで甚だ美觀である。高さ七五尺、中四〇尺。

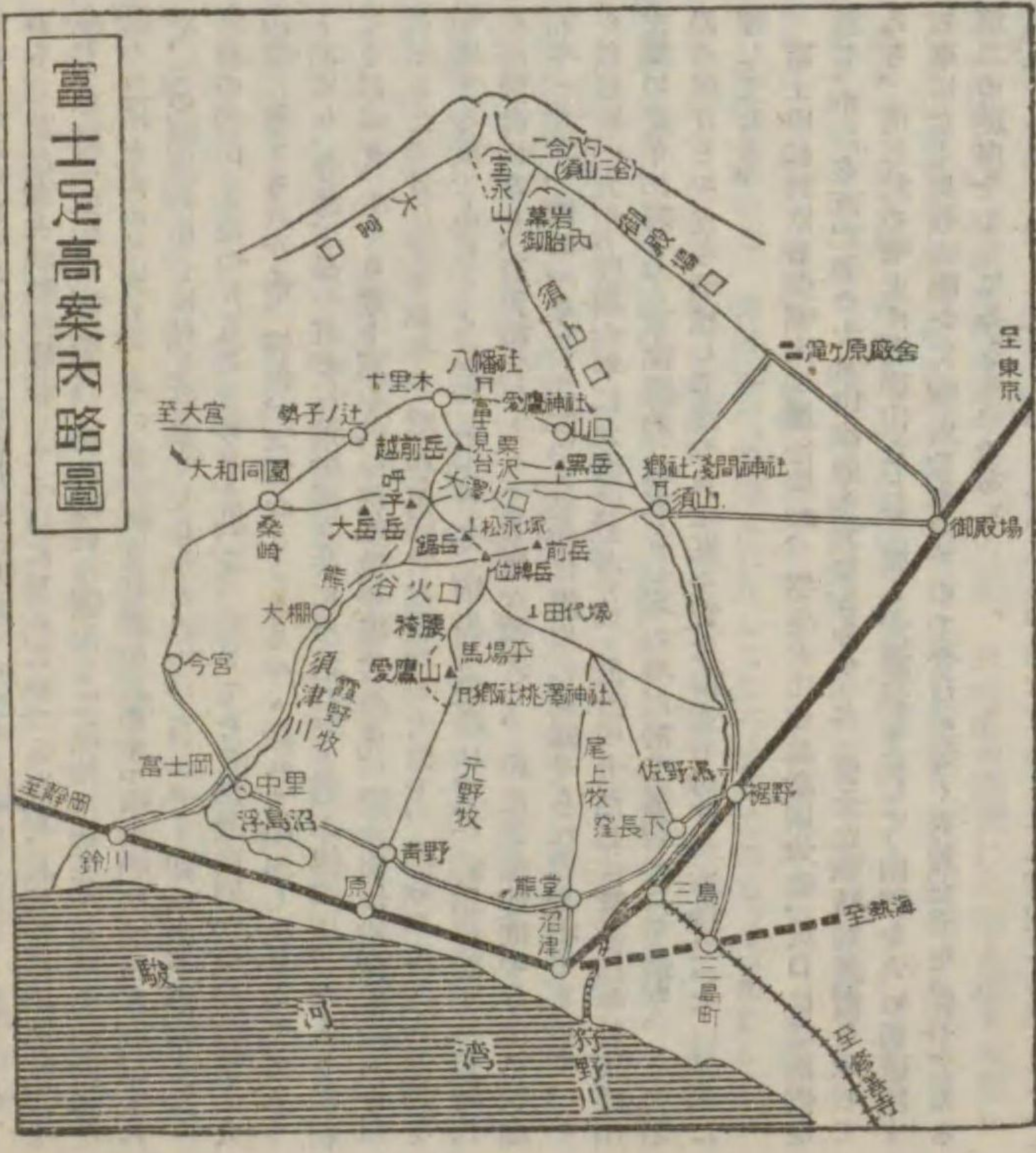
【上井出の旅館】 吉野屋(室四)、蓬萊屋(室九)、更科亭(室二五)、麻屋(室五)、一泊一圓、一圓半。

【猪の頭瀧】 從來世に知られる事跡だが、岳麓に於ける唯一の水瀧で、前記大宮町驛の北約二二軒三、バスの便がある。一時間一〇分、七〇錢(一日五回)、賃切四圓八〇錢。瀧は高さ約四一五米、中一〇米許りのもので、瀑面互

を「大瀧」と云ふ。前者は愛鷹山の諸岩を流出せし火口で、後者は水蒸氣の爆發せしものである。

【案内人】 須山村に保勝會があり、そこに富士、足高山案内組合があり、位牌岳頂上迄二圓、原驛又は鈴川驛に至る場合は五圓である。

【登山の好期】 五月(若葉の美裝)。五月下旬―六月(ヒメイハカミ、アシタカツ、ジ)、七月下旬(ハコネコメツ、ジ)、八月下旬(アシタカジヤウカウサウ)、九月―一〇月(高山植物)、一〇月―十一月(紅葉)、二月(雪景)。



富士不二の高嶺は本邦の中部、甲・駿の地に座位を占めて居る我が邦第一の名山で、コニデー式火山の特徴を遺憾なく發揮してその麗姿を東海の天高く聳立すること實に、三、七七八米餘に達して居る。(註、一八二七年の調査、陸測の地圖に依れば三、七七六・二九米であるが、最近の實測に依れば三、七七八・五米が正當であると云ふ説がある、本邦第六位)、其の頂は八采の秀峰に岐れてその中に内院と稱する舊火口を抱き、前には太平洋の蒼海を控へ、西麓には富士の清流を繞らし、其の麓に八湖を湛へしめ、六十州の峻嶽大嶺皆袖を列れて朝してゐる。

天つ日の照せる四方の國中に

たぐひなしといふ山は富士の根 伴蒿 撰

富士はげに容姿崇高秀麗にして他に比を見ざるべきものなく、民衆の儀表と尊まれ、我が日の本の鎮と仰がれてゐる。富士山は富士火山脈に屬する火山で、僅かに頂部を失つた圓錐形をなし、頂角平均一二〇度、山頂に近きあたりは三二・三四度に達するが裾野は二一三度に過ぎざる處長く曳き、美しい對數曲線を描いて居る。富士山の自然的範圍は、その噴出物、中にも熔岩の及ぶ地域によつて大體定められ、東西三八八料(猪の頭から頂上及須走を直線にて繋ぎ東海道鐵道線路に至る)、南北三八八料(富士岡村中里から頂上を經て河口湖に至る)。面積九〇七六平方料(山梨縣三〇二平方料、靜岡縣六〇五・六平方料、體積一、〇三〇立方料(一七立方里)、根廻り(道路上の里程)一二五・二五二料(御殿場―山中―吉田―河口湖―西湖―精進湖畔赤池間四八・三四八料、精進赤池―木桶―上井出―大宮三八・五〇七料、大宮―十里木―須山―御殿場三八・三九七料)を計算され、其最高點は御ヶ峯である。富士山の在る地方は第三紀の終り頃には海であつたが、フオツサ・マグナ(大裂隙)を生ずるや、此の裂隙から火山噴出が起り盛んに噴出物を海底に沈積

した。富士の周りを取巻く御坂層は主として此の火山噴出物から成ると推せられてゐる。其後漸次地盤は隆起して今日に及んだのであるが、其地帯に錐狀陥落を生じ、地殼に破れ目が生じ、盛に熔岩を噴出して陥落地帯を埋めてその基盤を造り上げたものである。その後引續き活動を止めず、噴出物は堆積に堆積したが、その噴出の中心は殆ど移動しなかつたので、コニデー型火山の標式となり世界の名山となつたものであると云ふ。然してその活動は同一の所謂富士火山脈に屬する八ヶ岳、箱根、天城などよりもや、遅れて噴出したものであらうと云はれ、孝徳天皇の五年に琵琶湖と共に出現したと云ふ傳説は、あまりに新しきに過ぎ、少くも數十萬年前の洪積世の事である。富士山は洪積世から今日に至るまで實に數十萬年の壽命を保つた長命の火山で、恐らく今後も活動を持續する事であらうと云はれてゐる。噴出の發端は實に前述の如く地質時代の洪積世にあり、有史時代に入りても屢々噴火し、桓武天皇即位の年即ち天曆元年(紀元一四四一年)に於ける活動は歴史に記録せられた最初のもので、その後延暦一九年、貞觀六年に大噴火があり、最近の大活動は寶永四年將軍徳川吉綱の晩年に起り、東南腹約二、五〇〇米の地に於て爆裂火口を造り、その熔岩の破片その他を堆積して造つた山峯を寶永山と名付け、海拔二、七〇二米に達してゐる。

富士山に於ける側噴出は屢行はれ、寄生火山は其數四六個、火口は二四個を算し、中にも西北側の大室山は最も大なるもので、完全な截頭圓錐體を示してゐる、而して此の噴火は磐梯山などの如く大爆發をなして山體を大いに破壊する事はなく比較的緩やかな噴火であつたので今日の如く秀麗な姿を保つてゐる。第二の理由をなしてゐるものである。

「ふじの山はひとつあるものと思ひしに甲斐にもあるてふ駿河にもあるてふ」  
 「二つなきものと思ふ不二の嶺は甲斐にも有るてふ駿河にもあるてふ」など、古は行政區劃は頗る漠然としてゐる様であつた。今も多くの人は富士山は、頂上で眞二つに割り、南は靜岡縣に、北は山梨縣に屬してゐる様思つてゐるが、實際は北側でも八合目以上は凡て大宮の官幣大社淺間神社の境内で、靜岡縣に屬するのである。

〔氣象〕 富士山頂に於ける八月の平均温度は五・九度で沼津の二月のそれと殆んど等しく、八月の最低は氷點内外である。氣壓は八月平均四九一耗で沼津のそれより二六五耗低く、遞減率は高さ一〇〇米毎に氣壓一八七耗、五〇〇米

毎に三五耗である。山頂の沸騰點は七二・四度、その遞減率は高さ五〇〇米毎に三・八度である。山頂八月の風向は西南風最も卓越し、風速は平均一・一米、時には六一米に達した事があり、降水量は八月の平均六九〇耗である。

富士登山道

御殿場口、須走口、大宮口、吉田口、精進口の五つあり、夫々長短がある。

吉田口 中央線大月驛から吉田を經て頂上迄四五料。此の口は五合目迄森林帯に屬し、又山を仰ぎ乍ら登る程急峻でないから割合に疲れず、富士五湖の目を樂しまして呉れる事と、裾野一帯に密生する樹木が、比較的長い間炎暑を避けて呉れるなどの特長がある。

▲中央線大月驛―吉田間二六料一、自動車一時間、乗合一人八〇錢。電車一時間、片道七〇錢(登山季節中は大月驛着各列車に接続す)

▲吉田―頂上間二〇料、登山所要時間八時間半位。

吉田起點料程・所要時分表

地名	料程	徒歩所要時間	乗馬賃	海拔	平均勾配
淺間神社	九、三三	一・二〇時	圓	八七〇米	四度
馬返	五、七九	一・四〇時	上り八〇、下り七〇	一、四四五	七度
五合目	四、一七	三・〇〇時	上り八〇、下り七〇	二、三三五	七度
八合目	一、九八	三・〇〇時	上り八〇、下り七〇	三、三三〇	七度
頂上	九、三三	三・〇〇時	上り八〇、下り七〇	三、三三〇	七度

〔註〕 吉田金鳥居から約三三〇米の淺間神社裏から馬返迄約八料の間自動車

富士登山

専用道路がある、所要二五分、乗合上り一圓、下り八〇錢。

〔山舎休泊料〕 ▲八合目ホテル 一泊二圓五〇錢 震靈齋食料付、特別一泊料一圓八〇錢、同半泊一圓三〇錢。 ▲山舎一泊一圓四〇錢、半泊一圓、中食料五錢、辦當座料一五錢、休憩茶料一〇錢、遊覽券指定一泊二食付、馬返一七合三勺間宿泊料は一圓四〇錢宛、八合目ホテルは二圓半、晝食料は何れも五五錢宛。

〔強力〕 四圓(但し客五人以上の時は持込客一人毎に二〇錢増、風雨滞在は一日五〇錢増)

▲開山期 七月一日。 ▲閉山期 九月一日。

〔登山道概要〕 縣社淺間神社の西一〇〇米、登山道の南側に大塚と稱する楕形形の土山がある。昔日本武尊東夷を征して歸途相模から甲斐に入る途次富士を遙拜せられた處と傳へる。更に諏訪の森御料林を美しく眺め大石茶屋、中の茶屋を經て馬返に着く。此の間は所謂裾野で、爪先登りと云ふよりは少し急であるが、山頂から噴出した砂礫は幾分分解して土壌化して居るので、道路は稍固く足許も確かで、御殿場口、須走口に比して歩行容易である。古來俗に草山三里と稱へ、一合目以上の森林帯の木山三里と並稱されて居るほどで、草木植物が千紫萬紅の妍を競ひ、殊に大石茶屋附近に於ては六月中旬満開のレンゲツ、ジの大群落は目の届く限り赤毛氈を敷き詰めた如くである。従つて此の附近は蜂蝶の樂天地で、山麓到る所養蜂が行はれて居る。淺間神社から約二料二登り、中の茶屋の手前約七〇〇米の所に岐路があり、東南へ進むこと一料餘で泉端に達し、更にその南一料餘で雁の穴がある。「泉端」はその昔源頼朝が巻狩の際弓を以て砂を突きしに忽落として湧出したと云ふ傳説を有する吉田の水道水源地で、岳麓八海の一として富士道者巡歴の一名區である。「雁の穴」は熔岩トンネルの一種で、普通の横穴の外に數個の獨立の竅穴があり、此の存在は珍奇なものとして居る。

中の茶屋から東北に一料半進めば洞谷があり、その兩側に近く熔岩洞穴がある。南のを新胎内と云ひ總延長六〇米半、北のを舊胎内と稱し總延長六五米

巡驗者の多い點と信仰の對象たる點に於て富士諸熔岩中の第一位にある。

馬返邊で裾野の部分は盡きて彌々富士の木體となり、五合目迄所謂木山三里で、潤葉喬木の森林帯である。五合目は山中第一の集落地で休泊所、救護所、巡查派出所があり、此處で森林帯は盡きて、これから先は粗鬆なる砂礫と

磊々たる岩盤の標出する所謂石山三里である。

五合目と八合目の間には約二〇度の急坂があり、乗馬は五合目止りとなつて居る。六合目との間に經ヶ岳と云ふ燐岩塊がある。之は文永六年日蓮上人が一〇〇日の間法を修した道場で、手習の經卷を埋めた所と傳へ、燐岩流の斷絶して残つたもので、砂走り潭の北の絶壁をなす屏風岩、七合目の鎌石、七合三勺の龜岩、七合五勺の烏帽子岩などは皆それである。

八合目は須走口と合する所で、此處を大行合目と云ひ、石室も多く、派出所敷設所、郵便局などがある。八合目から頂上迄は所謂胸突八丁で、平均二三度五〇分の傾斜であるが、頂上近く一層急峻で、昔は匍つて登つたと云ひ、僅か八丁四八間を二時間位かゝる。

御殿場口 御殿場驛から頂上迄約二〇軒三、往復約一四時間。

此の口は割合に、森林帯が尠く、比較的風致の變化に乏しい。二合五勺以上は砂礫の爲め登山歩行に少からぬ困難が伴ふ。然し登山道が東方にあるので三合目以上何回にても御來光を拜し得るの特長があり、また下山道は七合目から太郎坊附近まで砂走りと稱する別道があつて、僅々三五分位で降る事が出来る。之は甚だ愉快であるが、急勾配の所を一氣に迂り降りる事故、餘程注意せぬと往々モンドリ打つて砂礫中に混する岩塊の爲め思はぬ怪我をする危険がある。

【案内人及其賃金】(案内人は各旅館、登山用具販賣所及登山組合にて申込に應ず) (二八七頁註参照) 強力賃(荷物人夫兼案内人) 御殿場驛から頂上迄四圓、瀧ヶ原から頂上迄三圓五〇錢、胎内廻りは五〇錢増、中道廻りは二圓増、吉田口下山の場合三圓五〇錢増、須走口下山の場合一圓増、大宮口下山の場合二圓五〇錢増。

御殿場驛起點料程・所要時間・車馬賃表

地名	距離	徒歩所要時分	自動車所要時分	乗馬賃	海抜
御殿場驛	〇丁	〇時	〇時	〇圓	四〇〇米
淺間神社	〇里	〇時	〇時	〇圓	四〇〇米
瀧ヶ原	一里	一〇分	一〇分	〇圓	四〇〇米
一里松	二里	二〇分	二〇分	〇圓	四〇〇米
五本松	三里	三〇分	三〇分	〇圓	四〇〇米
馬返	四里	四〇分	四〇分	〇圓	四〇〇米
太郎坊	五里	五〇分	五〇分	〇圓	四〇〇米
一合目	六里	一〇分	一〇分	〇圓	四〇〇米
二合目	七里	二〇分	二〇分	〇圓	四〇〇米
三合目	八里	三〇分	三〇分	〇圓	四〇〇米
四合目	九里	四〇分	四〇分	〇圓	四〇〇米
五合目	十里	五〇分	五〇分	〇圓	四〇〇米
六合目	十一里	六〇分	六〇分	〇圓	四〇〇米
寶永山	十二里	七〇分	七〇分	〇圓	四〇〇米
七合目	十三里	八〇分	八〇分	〇圓	四〇〇米
八合目	十四里	九〇分	九〇分	〇圓	四〇〇米
九合目	十五里	一〇〇分	一〇〇分	〇圓	四〇〇米
頂上	十六里	一〇〇分	一〇〇分	〇圓	三、七〇〇米
内輪廻					
外輪廻					

須走起點料程及乘馬賃表

地名	距離	徒歩所要時分	乗馬賃	海抜
淺間神社	〇里	〇時	〇圓	〇米
一里	〇里	〇時	〇圓	〇米
二里	〇里	〇時	〇圓	〇米
三里	〇里	〇時	〇圓	〇米
四里	〇里	〇時	〇圓	〇米
五里	〇里	〇時	〇圓	〇米
六里	〇里	〇時	〇圓	〇米
七里	〇里	〇時	〇圓	〇米
八里	〇里	〇時	〇圓	〇米
九里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十一里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十二里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十三里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十四里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十五里	〇里	〇時	〇圓	〇米
十六里	〇里	〇時	〇圓	〇米
頂上	十六里	一〇〇分	〇圓	三、七〇〇米

山内乗合自動車 二合目―太郎坊間 五〇錢 砂上、ソリ 七合目―二合五勺 六〇錢

【註】1 強力の携帶すべき客の荷物は重量一五斤までとし御中道廻りは一五斤(三貫匁)迄とす。之以上七五〇瓦(二〇〇匁)を増す毎に二〇錢を増すものとす。2 登山者事故の爲滞在三日以上に渉る時は賃金の半額を支拂ふこと。3 暴風雨等のため滞在する時は強力の賄料は客の負擔とす。

【山内宿泊料其他】一泊料一圓半、半泊料一圓二〇錢、布團料二〇錢、並席料五〇錢、中食料六〇錢、休憩料五錢(茶付一〇錢)

▲開山期 七月一日。閉山期 九月十五日。奥宮例祭八月十五日。

須走口 東海道線御殿場驛から須走經由頂上迄約二四軒。

此の口は森林に富み、いかにも麗しい感じのする登山道で、又下山にも山上から太郎坊近くまで一直線に降りる砂走りがあり走降容易にて興味がある。

▲御殿場驛―須走間一〇軒、自動車三〇分、乗合片道五〇錢、(八回定期の外臨時増發あり)

▲須走(縣社淺間神社前)―院内間一三軒七、登山所要約八時間、下りは三―四時間位。

【強力賃】三圓七〇錢(夜行は二割増、携行荷物一五斤迄) 【山内宿泊料】御殿場口と同じ。

大宮口 富士身延鐵道大宮町驛下車、大宮町から頂上迄二〇・二三二軒(五里五丁二五間)。上り一〇時間乃至一二時間、下り四時間乃至七時間。

此の口は昔から表山又は表口と云はれ、驛の北西約一軒の淺間神社に詣で、本宮裏から其の奥宮に參るのが登山本道で最も古い歴史をもつてゐる。一合目、二合目には高山植物あり(溫度六〇乃至七〇度)、欠巢畑―三合目間は森林地帯

三四合目間は灌木地帯(溫度五、六〇度)、五合目間は苔草地帯(溫度五〇度)、五合目以上は岩石熔岩地帯で一足毎に之等自然の風趣に接し、又、駿河灣から伊豆半島、遠江灘まで一眸に收むるなどの特長を有してゐる。又下山道には、胸突下から莫産に跨つて萬年雪を八合目迄迂り下り、同所から三合五勺迄眞直に砂走りを下る快味がある。

大宮口は頂上迄一八ヶ所の休泊所もあり登山必需品を販賣してゐる。是等は皆組合になつて居て共通の宿泊券、食事券、休憩券等の切符を欠巢畑事務所販賣して居る。一泊料一圓六〇錢(割引切符一圓五〇錢)、半泊料一圓一〇錢(割引一圓)、晝食料六〇錢(同上五五錢)、休憩茶料一ヶ所一〇錢、(此割引一八ヶ所分七五錢)遊覽券指定一泊一合目から頂上迄の各宿泊所一圓半、同晝食六〇錢。

【強力】大宮町から頂上御鉢廻りをなし下山口迄金四圓。(強力の携帶する荷物は四貫目迄とし、以上五百目を増す毎に三〇錢を増す。滞在する時は賃金負擔、午後六時から一二時迄の出發は五割増。他の口へ下山の時は外に日當一圓八〇錢、賃金は凡て客負擔とす)。

富士登山

大宮町起點行程・車馬賃表

地名	距離	自働車	乘馬	海抜
大宮町	0.0	乗	0	3,700
浅間神社	0.5	乗	0	3,600
集煙	1.0	乗	0	3,500
合目	1.5	乗	0	3,400
合目	2.0	乗	0	3,300
合目	2.5	乗	0	3,200
合目	3.0	乗	0	3,100
合目	3.5	乗	0	3,000
合目	4.0	乗	0	2,900
合目	4.5	乗	0	2,800
合目	5.0	乗	0	2,700
合目	5.5	乗	0	2,600
合目	6.0	乗	0	2,500
合目	6.5	乗	0	2,400
合目	7.0	乗	0	2,300
合目	7.5	乗	0	2,200
合目	8.0	乗	0	2,100
合目	8.5	乗	0	2,000
合目	9.0	乗	0	1,900
合目	9.5	乗	0	1,800
合目	10.0	乗	0	1,700
合目	10.5	乗	0	1,600
合目	11.0	乗	0	1,500
合目	11.5	乗	0	1,400
合目	12.0	乗	0	1,300
合目	12.5	乗	0	1,200
合目	13.0	乗	0	1,100
合目	13.5	乗	0	1,000
合目	14.0	乗	0	900
合目	14.5	乗	0	800
合目	15.0	乗	0	700
合目	15.5	乗	0	600
合目	16.0	乗	0	500
合目	16.5	乗	0	400
合目	17.0	乗	0	300
合目	17.5	乗	0	200
合目	18.0	乗	0	100
合目	18.5	乗	0	0
合目	19.0	乗	0	0
合目	19.5	乗	0	0
合目	20.0	乗	0	0
合目	20.5	乗	0	0
合目	21.0	乗	0	0
合目	21.5	乗	0	0
合目	22.0	乗	0	0
合目	22.5	乗	0	0
合目	23.0	乗	0	0
合目	23.5	乗	0	0
合目	24.0	乗	0	0
合目	24.5	乗	0	0
合目	25.0	乗	0	0
合目	25.5	乗	0	0
合目	26.0	乗	0	0
合目	26.5	乗	0	0
合目	27.0	乗	0	0
合目	27.5	乗	0	0
合目	28.0	乗	0	0
合目	28.5	乗	0	0
合目	29.0	乗	0	0
合目	29.5	乗	0	0
合目	30.0	乗	0	0

▲開山期 七月二日。閉山期 八月三日。以上五二日間は奥宮の御開殿期である。

**精進口** 精進湖畔赤池から東南に向ひ、天神峠、小御嶽社を経て吉田口五合目に合する一六軒半の間馬が通ぶ。此處には有名な富士風穴(入口は深さ一〇米半、方七米の竅穴で、その孔底に下ると東北に向ひ、平均傾斜一三度、延長木道一八七米あり洞底はもとより側壁も天井も悉く水で張りつめ、氷柱が垂下してゐる。洞内の気温は盛夏も水點に近く霧の貯蔵に利用されてゐる)があり、尙約二軒で長尾山の南麓天神峠、即ち一合目(海抜一三七〇米。東北の鳴瀬から六軒半、大和田から七軒で共に登山路が通じてゐる)で常設の休泊所があり、更に半軒で右に氷穴がある。一合目から約七軒で小御嶽下の四合目に達する。此處は海抜一、一〇〇米夏でも水を蒸らす小御嶽風穴があり、山頂には石長姫を祀る小御嶽神社がある。四合目から吉田口の五合目迄約二軒。

殿場口に合する。御中道廻り」富士の中腹海抜二、五〇〇米内外の一線を劃して(各登山道の五合目を連路)山腹を一周すること云ふ。一周一三三の稱あれども、實際は三〇軒位である。何れの登山口からするも可なれども案内強力を得易き點よりすれば吉田口から登り絶頂を極め殿場口六合目の寶永火口側の室に一泊、翌朝天候をよく見定め未明に出発するを便とする。(若し風雨に際するときは危険の外何等の得る處なし)。

【登山期】 開山日、閉山日間は奥宮の御開殿期中であるが、登山の最好期間は七月中旬頃から同下旬頃までである。尙最近秋山と稱して九月中旬まで登山するものも多く、ために部分的ではあるが宿泊所の開いて居る所もある。(天氣良好ならば夜登るも亦可)

【登山注意】 登山中最も困る事は風雪に遭遇する事である。故に出発に際してはよく天候を確かめる事を忘れてはならぬ。萬一不幸にして風雨に遭遇した場合は休憩所又は最も安全な岩蔭に必ず避難せねばならぬ。又最初餘り輕卒に元氣を消費せぬ様心懸ける事も肝要である。又行装は輕装なる事を尙ぶ。

【登山に必要な準備】 日歸り登山とすれば一時頂上に於ける寒氣を防ぐのみの用意で事足りるが、服装は可成輕快なるを尙ぶ。左に携帶品の主なるものを舉れば  
▲毛織シャツ、二枚(原地オリーブセーター等)、▲履巻、▲脚絆又は巻脚絆、▲草鞋又は地下足袋(出来れば筒の深き踵の丈夫な地下足袋がよい)、

▲手袋、▲水筒、▼眼鏡、磁石等を携行すれば尙よい、▲リュックサツク、▲腰刀等日用品袋を用意すること、▲帽子(麦稈、經木等の眞田編を用ひ、内部に油紙を貼紙したものがよい)、▲着蓑蓑、▲金剛杖、▲米砂糖(之は胃酸の缺乏による歩行困難を防ぐに有利)、▲梅干(之は渴を癒し息切を緩和する)、▲仁丹類、繻帶、絆創膏、カンフルチンキ等、▲案内書、地圖、時計、マツチ、手拭等。

登山用品の物價は大體次の如き標準であるが、之は登山期になつてから其年の物價により定められるもので、また各登山口及販賣場所により(山頂に近づくと程高くなる)多少の差異がある。  
▲金剛杖並一本二五錢、▲並製草鞋一足一〇錢乃至一八錢、▲麻製草鞋一足二五錢乃至三九錢、▲ナイター一本二六錢乃至四五錢、▲ビール一本六五錢乃至八〇錢、▲スタンブ二錢、▲熨印三錢。

富士登山日程案

一、御殿場口から日歸り登山の例 (東京から一日)

地名	發着時刻	記事	備考
東京驛	發後 一〇・二五	鳥羽列車	▲東京—御殿場驛間汽車二時間四五分(一—三軒二)三等普通賃一圓七〇錢。
御殿場驛	着前 一〇・〇〇	下車、準備	
太郎坊	發前 一・三〇	自働車	
一合目	發前 二・二〇	休憩五分	
二合目	發前 二・四五	徒	
三合目	着前 四・〇五	御來光拜觀	
四合目	發前 四・四〇	徒	
五合目	發前 五・〇五	徒	

富士登山(日程案)



三、大宮口登山五湖巡り日程案(遊覽券利用名古屋・關西方面から四―五日の旅)

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第1日	大阪驛	發後 六・五	明石發東京行	▲大阪―富士驛間一〇時間四七分(四一〇軒二)、三等普通賃四圓七九錢。
第1日	京都驛	發後 八・〇	普通列車	▲京都―富士驛間九時間四二分(三六七軒四)、三等普通賃四圓四一錢。
第1日	名古屋驛	發前 三・〇	車中一泊	▲名古屋―富士驛間五時間四一分(二二九軒八)、三等普通賃二圓九四錢。
第2日	富士驛	着前 五・四	身延電車ニ乗換	▲富士―大宮町間富士身延鐵道ノ電車テ二二分(一〇軒三)、賃二四錢(三等車ノミ)。
第2日	大宮町驛	着前 五・〇	甲府行電車	▲大宮町驛―一合目間九軒九、自動車一時間、乗合一圓二〇錢。
第2日	欠巢畑	着前 八・〇	登山事務所アリ	▲大宮町驛―一合目間九軒九、自動車一時間、乗合一圓二〇錢。
第2日	一合目	着前 九・〇	下山、徒歩	▲一合目―八合目間約九軒、登山所要約七時間。
第2日	八合目	着後 五時頃	宿泊	▲八合目宿泊所一泊(普通一泊一圓六〇錢、クーポン指定一泊一圓半)
第3日	八合目	發前 早曉	曉明ヨリ二時間	▲八合目―頂上間一、三七一米、登山所要約二時間。
第3日	頂上	着 曉明	御來光拜觀	▲頂上―馬返間一〇軒九、下山徒歩三時間半。
第3日	吉田返	發前 八・〇	下山、徒歩	▲馬返―吉田淺間神社裏間自動車専用道路ニヨリ七軒餘、自動車二〇分、賃金下り八〇錢。
第3日	吉田町	發前 一・三〇	自動車	▲吉田町―旅館(二七九頁參照)。
第3日	馬返	着前 一・三〇	自動車	▲吉田―船津間四軒、自動車一〇分、乗合二〇錢。
第3日	吉田町	發後 一・〇〇	本栖行自動車	▲船津―長濱間河口淵斷斷モーター船テ約四〇分(五軒八)、一

日程	地名	發着時刻	記事	備考
第3日	河口湖津	發後 一・三〇	河口湖渡船	▲河口湖津―長濱間河口淵斷斷モーター船テ約四〇分(五軒八)、一
第3日	河口湖濱	發後 二・一〇	下船	▲河口湖津―長濱間河口淵斷斷モーター船テ約四〇分(五軒八)、一
第3日	長湖濱	發後 二・一〇	徒歩又ハ自動車	▲河口湖津―長濱間河口淵斷斷モーター船テ約四〇分(五軒八)、一
第3日	西湖落	發後 二・三〇	西湖渡船	▲西湖落―長濱間河口淵斷斷モーター船テ約四〇分(五軒八)、一
第3日	根場	發後 三・三〇	自下	▲根場カラ精進湖南畔ノ赤池迄約七軒、自動車三〇分、乗合五〇錢。
第3日	精進湖畔	發後 三・三〇	自下	▲根場カラ精進湖南畔ノ赤池迄約七軒、自動車三〇分、乗合五〇錢。
第3日	赤池	發後 四・〇〇	下船	▲赤池カラ精進湖北岸ノ精進部落マデモーター船テ約二〇分、乗合二〇錢、二軒八。
第3日	精進部落	發後 四・〇〇	宿泊	▲赤池カラ精進湖北岸ノ精進部落マデモーター船テ約二〇分、乗合二〇錢、二軒八。
第4日	精進ノ臺	早朝 往復	精進カラ往復二時間	▲精進―古關間六軒餘(精進村カラ直チニ阿難坂ニカ、リ、二軒餘登リ蘆川ノ溪流ニ沿フテ下レバ古關村ニ出ル、乗馬賃二圓半)
第4日	阿難坂	發前 八・〇〇	徒歩	▲古關―右左口八軒(古關カラ二又道ヲ右ニ折レ又上ルコト一軒三ニテ右左口時ニ達シ夫カラ下ルコト六軒ニテ右左口村ニ出ル、精進カラ乘馬賃五圓)
第4日	右左口峠	發前 八・〇〇	徒歩	▲右左口峠 甲府ノ正面ニ位シ一峠遮ルモノナク甲府盆地ノ大觀、白布ヲ敷ケルガ如キ釜無、笛吹ノ二川ノ流レ、駒ヶ岳、八ヶ岳、金峰ノ峻嶺ヤ甲府市街ノ白聖點々トシテ手ニトル様ニ見エル。海拔八五三米。
第4日	右左口村	發後 正午頃	晝食	▲古關カラ左ニ折レ市川大門迄一六軒(精進カラ乘馬賃六圓)
第4日	右左口村	發後 正午頃	晝食	▲市川大門ニ奈良屋旅館アリ(電市川大門三〇番、一泊一圓二〇錢、一圓半)
第4日	右左口村	發後 正午頃	晝食	▲市川大門―身延間(二六軒三)富士身延鐵道ニテ一時間(電車)、市川大門―甲府間同上電車ニテ五〇分(五二錢)。
第4日	右左口村	發後 正午頃	晝食	▲右左口―甲府間一二軒一。
第4日	右左口村	發後 正午頃	晝食	▲自動車四〇分、貸切五人乗三圓、乗合四〇錢(二八人乗バス甲府驛發着列車ニ接續シテ七回運轉)。



富士登山(日程案)

二九四

日	甲府驛	鹽尻驛	名古屋驛
着後	一・四〇	一・四七	一・五〇
發後	四・五九	五・〇〇	二・〇・八
着後	長野列車	乗換	乗換
發後	名古屋行	姫路行	姫路行
着前	四・二四	歸	歸
發前	五・四〇	宅	宅

「註」御嶽昇仙峽遊覽ノノチ甲府驛發後八・三五ノ列車ニヨリ鹽尻及名古屋乗換  
 歸京・阪スルモヨイ、昇仙峽ハ三一〇頁參照。  
 ▲甲府—名古屋間汽車八時間半(二七八糎八)、三等三圓五六錢。  
 ▲名古屋—京都間普通列車テ四時間三四分(一七七糎六)  
 甲府—鹽尻—名古屋—京都間三等普通五圓一九錢(四五六糎四)  
 ▲名古屋—大阪間普通列車テ五時間五〇分(一九〇糎四)  
 甲府—鹽尻—名古屋—大阪間三等普通五圓三〇錢(四六九糎二)

旅行費用概算

三二 等等

名古屋カラ	京都驛カラ	大阪驛カラ
二九・四二	三五・〇一	三五・八九
二〇・五九	三三・三七	三三・八一
二二・四二	二八・〇一	二八・八九
一三・五九	一六・三七	一六・八一

MEMO

遊覽券 ▲鐵道券 發售—富士—大宮町間、甲府—  
 中央線—發售間。▲自動車券 大宮町—  
 合目、右左口、甲府間、吉田、船津間、根場—  
 湖、赤池間。▲渡船券 河口湖、西湖、精進(三進)  
 ▲宿泊券 大宮口、八合目、精進三等(三進)  
 圖二、六圖ノ二泊ヲ含ム  
 食事料、登山用品其他雜費概算七・〇〇ヅ、。

御嶽昇仙峽及身延山詣て日程案 (東京から三日遊覽)

日	第 2 日	第 1 日
甲府	昇仙峽	新宿驛
着前	着前	發後
發前	發後	發後
徒歩	遊覽	鹽尻行列車
御嶽自動車ニテ天神 森ニ至リ昇仙峽遊覽 往復	自動車	下車、宿泊
▲甲府驛カラ天神森(昇仙峽入口)迄湯村鑛泉經由一〇糎五(和田時經由ハ徒歩四糎、自動車ニテ三〇分、乗合片道六〇錢、往復一圓(前五時カラ後四時半迄一回)貸切一臺二圓。 ▲天神森—仙峨瀧(昇仙峽最奥ノ勝景地)マテ四糎半。夫カラ金櫻神社マテ二糎餘。往復遊覽所要四、五時間、道路平易。 ▲金櫻神社(縣社) 仙峨瀧ノ西北二糎餘、宮本村御嶽ニアル。少名彥命・素戔嗚命・大己貴命ヲ祀リ社殿壯麗、東宮及中宮ハ鎌倉時代ノ作テ特別保護建造物ニ指定セラレテ居ル。北方ニ聳ユル金峯山ノ山頂ニ本宮ガアリ、此處ヲ里宮ト稱シテ居ル。 ▲歸路ハ再ビ御嶽新道ヲ引返スカ又ハ御嶽バノラマ・兜岩・乗鞍岩・三聲返等ノ勝地ノアル舊道ヲ上下シ吉澤村ニ出テ湯村溫泉ヲ經テ歸ル。バノラマハ眺望絶佳ノ境テ遠ク富岳ヲ望ミ甲府平原ヲ隔テ、南アルプス連峰ヲ眺ムルコトガ出來ル。道路改修セラレ徒歩容易。 ▲甲府—下部驛間富士身延鐵道電車テ約一時間二二分(三六糎六)、賃一圓一三錢。 ▲下部驛—下部溫泉間東南一糎三、自動車乗合一五錢、(一日二六往復)貸切五人乗七〇錢。 ▲下部溫泉ノ旅館、下部ホテル、溫泉館其他(三〇〇頁參照)。		

御嶽昇仙峽及身延山詣て(日程案)

二九五

日	第	着前	發前	記	事
下部驛	發前 九・五	富士行電車			
身延驛	着前 一〇・七 發前 一〇・三〇	下 乗合自動車			
身延山	着前	參 詣			
身延山	發後 一・三〇	乗合自動車			
身延驛	着後 二・〇四 發後 二・三〇	身延電車			
富士驛	着後 三・三〇 發後 三・四	乗 東京行列車			
東京驛	着後 七・五	歸 宅			

〔註〕日歸リニテ身延山詣テノミノ場合ハ東京發前夜下關行終列車ニ乗リ(二等寢臺アリ)富士驛ニテ乗換ヘ身延驛着午前五時四一分、歸リハ身延山發午後二・〇四、東京着後七・五六ノ汽車ニ依ラル、トヨイ。東京―身延間三等片道三圓六九錢。

旅行費用概算

三二 二等 二七・九三

内譯

〔汽車費〕二等一圓〇三錢、三等六圓九三錢、自動車賃二圓(以上備考欄参照)宿泊料二泊分二等九圓三等七圓、食料其他費用トシテ五圓宛ヲ計上ス

註 昇仙峽觀楓季中ハ右日程(新宿―昇仙峽―身延山―東京)ニ依ル遊覽券(汽車及自動車共約二圓引)發賣サルル筈デアル。

昇仙峽―金峯山―増富温泉遊覽日程案 (東京から四日)

日	第	地名	發着時刻	記	事	備	考
1日	第	新宿驛	發後 二・五五	長野行列車 車中一泊		▲新宿驛―甲府驛間四時間四分(一二三軒八)、三等一圓八三錢。	
2日	第	甲府驛	着前 四・三六 發前	下車、休憩 乗合自動車		▲甲府驛―昇仙峽入口天神森間一〇軒五、自動車三〇分、乗合六〇錢、貸切五人乗二圓、二〇人乗六圓。	
		昇仙峽入口 天神森	着前	徒 歩		▲昇仙峽入口天神森カラ峽最奥ノ勝仙峨瀧迄徒歩四軒五。	
		昇仙峽	着前			▲昇仙峽最奥ノ勝仙峨瀧カラ金櫻神社迄約二軒餘。	
		金櫻神社 カサガクツ				〔參考〕仙娥瀧カラ東北二軒半(約一軒ノ所)金櫻神社道ト分レテ右ニ入ルデ荒川ト板敷川トノ合流點ニ達スル。ソレカラ板敷川ニ沿フ一軒ノ谷ハ斷崖絶壁ヲナシ樹木ソノ上ニ繁茂シ、大小ノ瀑布ガ十餘相列ツテ奇景ヲナシ「板敷瀧」ト稱サレテ居ル。マタ荒川ト板敷川ノ合流點カラ荒川ニ沿フテ下黒平ニ至ル三軒半ノ溪谷ハ野猿ガ多ク棲ンデ居ルノデ「野猿谷」ト名ヅケラレ、ソノ兩崖ハ削ルガ如ク、深淵急湍多ク、秋季ハ紅葉ガ美シイ。	
		猫坂峠	着後			▲金櫻神社(海拔八七〇米)カラ猫坂峠マデ約二軒七、ソレカラ更ニ二軒下黒平ニ至リ、尙一軒許リデ上黒平部落ニ達スル。	
下黒平	發後				▲猫坂峠(海拔一、一三八米、南アルプス及金峯山(二、五九五米)ノ大觀ガヨク、峠ノ北麓(金櫻神社カラ約四軒ノ所)ニ燕岩ト稱スルモノガアル。石英安山岩ノ岩脈デ、炭灰岩ノ母岩ヲ貫イテ居リ、ソノ中凡ソ五〇米、東南カラ西北ニ向ツテ長サ數百米ニ亘ル大絶壁ヲナシ、頗ル壯觀ヲ呈シテ居ル。		
上黒平	着後				▲上黒平(約一、一〇〇米)ニ至リ、山梨縣中巨摩郡宮本村。甲府驛カラ北約二一軒。温泉ハ硫黃泉デ浴用加熱、「信玄公湯」ノ傳説ガアリ、リウマチス、皮膚病、花柳病、婦人病ナドニ效クト云フ。黒平ハ上下合セテ數十戸ノ山村デ、炭焼ヲ生業トシ、住民ハ藤原氏ノ後裔ト稱シ殆皆藤原ヲ姓トシ、能三番ト云フ舞ガ昔カラ傳ハツテ居ル。		

第3日	増富	金峯山	室堂	水晶峠	上黒平
着後	着後	着	着	着	發前六時頃
宿泊	徒歩	徒歩	徒歩	徒歩	徒歩

黒平カラ約三軒、樽坂ヲ越エ更ニ約八軒テ水晶峠ニ達シ、夫カラ下リ坂路一軒半ニテ御室ニ出デ、又登ルコト約一軒半テ片手廻シノ巨岩ガアル。此附近路傍ニ各種ノ高山植物繁茂ス。尙登ルコト二軒餘ニテ金峯山頂ニ達ス。金峯登山ハ相當經驗アルモノハ可ナルモ、初心者ハ案内人ヲ要スル。

【金峯山】 海拔二五九五米、展望ニ雄大ニテ富士、西ニ八ヶ岳連峯ヲ始め北アスブスヲ望ミ、東及北ニハ甲武、信諸山ノ雄姿ヲ一眸ニ收メル。黒平カラ約一六軒。

金峯山カラ八丁嶺前宮ヲ經テ金山(四戸ノ貧寒ナ部落)迄五時間程跋涉シ更ニ約七軒、一時間半ニテ増富温泉ニ達ス。

【瑞巖山】 海拔二二三〇米、金峯山ノ西北峯嶺ニ聳ユル秩父山塊ノ一支脈ニテ全山花崗岩カラ成リ山腹ハ概ネ針葉樹林ニ蔽ハレ、ソノ間ニ花崗岩塊ノ奇嶺ガ石筍ノ如ククイ岩ヲ鑿ヒ、山骨稜々トシテ奇巖ヲナシ、實ニ天下ノ奇觀デアアル。山麓ニ帯ハク潤葉樹林ガ茂リ、此間ニ釜淵川及本谷川ノ溪流ガアリ、秋季紅葉ノ美ヲ以テ聞エテ居ル。登山ニハ増富ヘノ道ノ金山ニ至ル手前ノ急ナ下リ道ノ所カラ右ヘ岐レテ約五軒テ頂上ニ達スル。

【増富ラヂウム温泉】 山梨縣北巨野郡増富村。中央線北嶺前ノ東北ニ六軒、地ハ海拔一〇六〇米、瑞巖山、國師嶽、金峯山等ニ二千米内外ノ高嶺重疊ノ間ニアル。仙臺デ、鑛泉ハラスジウムエマナチオンノ含有量ハ世界デ有數ト云ハレ、ソノ効能ハ温泉浴ヨリモ瓦斯浴ニ多大ノ效果ガアルト云フ。各旅館共ガ湯散地ニ天然浴槽ヲ設ケテ居ル。鑛泉ハ津金湯(津金樓旅館)、美人湯(不老館)金泉湯(廣英館)藤本湯(藤本館)ナド湧出地ハ夫々異ツテ居ルガ、何レモアルカリ性食鹽泉デ、泉温二〇度ト云ハレ、ダケニ外傷ニ特效ガアリ胃腸及肝臓ニ關スル慢性諸症、リウマチス、痔疾、婦人病、糖尿病、膀胱カタル、淋疾、皮膚病ニ效クト云フ。

【温泉宿】 不老館(室三二、一泊)、一圓半、二圓半、津金樓(室三八、收二六五、一圓半、二圓半)、金泉湯(室一〇、一圓半、二圓半)。

第4日	増富	八卷	新宿
着後	着後	着後	着後
宿泊	徒歩	徒歩	徒歩

▲増富—八卷(江草な)間約一〇軒、駄馬二圓半、山籠八圓。

▲八卷—中央線北嶺前間一六軒、自動車四〇分、乗合六五錢。

▲新宿—新宿間三時間四分(一三六軒七)、三等二圓。

内譯 (汽車賃及自動車賃二等八圓九一錢三等五圓〇八錢(備考欄参照)ノ外旅館ニ泊料五圓、辨當料其他費用トシテ三圓宛ヲ計上ス)

甲府及其の附近

**甲府市** 新宿から約三時間半(一二三軒八)、三等一圓八三錢。

甲府盆地の中央北邊に位し、山梨縣の行政、産業、交通の中心をなし、生絲、葡萄などを集散して市況活潑である。人口七九、四四七(昭和五・一〇調)、柳町、櫻町、緑町は市内の主要商店街である。

甲府盆地は四周山脈に圍まれた所謂「山無し」で、此の盆地は開闢以來この國の活舞臺となつた所である。東西約三〇軒、南北はその廣い所(西端韭崎嶽澤間)で約一八軒、面積約二四〇平方軒を有して居る。そして東方は概して高く、海拔三〇〇米若くは夫以上に及び、西南方は低くなつて二五〇米位に下つて居るので此の盆地内の水は笛吹、釜無の二川に集り、悉くその西南隅にある富士川に落ちて南流して駿河灣に注いで居る。

甲府市の創立は武田信玄の父信虎が永正一六年六月、石和からつ、じが崎(市外西山梨郡相川村)にその居館を移したのに始まる。爾來武田氏は六代六三年間此處に居た。その址は今古城と云ひ、縣社武田神社が鎮座して居る。武田氏滅亡の後は一時豊臣氏の領する處となり、今の甲府城の基を開いたものである。甲府城は鎌倉時代に一條忠頼の築いたもので、文祿三年、淺野長政封を受けて略之を落成し、古府の民戸を城下に移し、その築城は慶長の末年に完成した。關ヶ原役後徳川家康の子義直、秀忠の子忠長、家光の子綱重等交々封ぜられたが、寶永二年柳澤吉保挺んで城主となり、その子移封の後は大名家を置かず、専ら幕府の直領として明治に至つたものである。故に城下町として發達したもので、政治の中心、また位置の關係上商工業の中心となり今縣廳及歩兵第四九聯隊の衛戍地となり、明治三六年六月一日中央線開通と共に東京との交通至便となり、更に昭和四年八月富士身延鐵道に依つて東海道線に連絡されてからは益々その繁榮は顯著となつた。

【旅館】 談露館(錦町、驛半軒、電四八七八・四八七九、室二六、普通一泊二、三、半、五圓、②二圓八〇錢)、古奈屋(錦町、驛六〇〇米、電

甲府及其の附近(甲府市)

四八六一・四八六二、室四二、洋室二、一泊二、二半、三圓、②二圓八〇錢) 竹屋(相生町、驛八〇〇米、電二〇二八・三五七八、室二〇、一泊二半、三、四圓)、米倉(常磐町、驛七〇〇米、電二〇三九、室一九、一泊二圓半、三四圓)、萬屋(常磐町、驛七〇〇米、電二七五九、室二〇、一泊二、二半、三圓、②二圓二〇錢)、西柳屋(橋町、驛前、電二二九一、室二五、一圓八〇錢—三圓半)、小松屋(相生町、驛八〇〇米、電二五〇八、室二八、一圓半—三圓)、海洲温泉館(櫻町、驛半軒、電二九〇八、室三一、一圓半—三圓) 東洋館(錦町、驛七〇〇米、電四八八九、室一六、一圓半—二圓半)、清水屋(橋町、驛前、電二八五四、室一六、一圓半、二圓)。

【市内遊覽順路】 驛—柳町通り—商品陳列所—遊龜公園—善光寺—酒折宮—甲府城址—武田神社—驛。(以上自動車にて約二時間半、五人乗一臺三圓半、二人乗一臺六圓)。

【名所】 ▲甲府城址 驛の東南に接し、府中城或は一條小山城とも稱し、自然の丘陵に據つて築かれたもので、今はその大部分が舞鶴公園となり、天守臺址の展望絶佳である。園内に櫻樹が多い。公會堂、機山館、武德殿、圖書館がある。▲縣社武田神社 驛の北一軒二、自動車乗合二〇錢、武田城址で、神社は武田信玄を祀り大正八年の創建である。例祭は四月二二日で、古式の神幸式が舉行され、市中大いに賑はふ。信玄晴信は大永元年に生れ、天龜四年四月一二日享年五三にて病歿、性沈毅にして機略に富んだ武將であつた。▲善光寺 國寶の佛體數基を藏し伽藍莊嚴、蒼然たる古大刹。▲酒折宮 驛の東一軒三、自動車乗合一五錢、日本武尊東征の遺蹟、善光寺に隣す。

【名物】 葡萄、葡萄酒、印傳、水晶、月ノ琴、枯露柿、甲斐嶺燻。

【甲州葡萄】 甲州葡萄の産地は東は勝沼から西は甲府を経て龍王、穴山に至る甲府盆地北邊の地一帯に及び、特に勝沼附近の岩崎村、祝村はその木場とされ、ブドウ酒の醸造は祝村及甲府市などに行はれてゐる。葡萄栽培の起原は遠く鎌倉時代の初期にありと傳へられ、明治年間に至り米國種、イタリ種などを移植して改善された。

【湯村鑛泉】 甲府驛の西北二軒八、昇仙峡に至る途中にあり(自動車二〇錢)

含鹽類性硫酸泉で浴用加熱してゐる。慢性リウマチス、皮膚病、痔疾に效がある。附近一帯土地高燥で清爽の氣に満ち、甲府人士の遊興の地である。

〔旅館〕常磐ホテル(電甲府三六〇四、室和室一〇、一泊二圓半、五圓、④三圓、洋室四、室代二圓、三圓、食事代朝一圓、晝七〇錢、夕一圓半)、明治温泉(電同四一〇六、室一三、二圓、二圓半)、富士の屋(電同三九六六、室二八二圓、二圓半)、柳屋(電同二四九〇、室二〇、二圓半、三圓半、④二圓)、湯傳(電二〇九〇、室一五、一圓三〇錢、二圓、三圓)、弘法の湯(電なし、室一〇、一圓半、二圓、二圓半)、鶯の湯(電八七九甲、室七、一圓半)、千鳥(電同三九六、室六、二圓半)。

御嶽昇仙峽

〔昇仙峽への交通〕中央線甲府驛から西北約一〇軒でその入口の天神森に達する。此の間自動車の便がある。甲府發前五時、後四時半、御岳發九時、後五時半まで一往復二〇人乗大型バス運轉、料金片道六〇錢、貸切五人乗二圓、二〇人乗六圓。甲府驛から徒歩に依るものは和峠を経て此處へ出る。約四軒天神森から徒歩で川を左にして北進すれば天鼓林、覺園峯等の名勝を経て昇仙橋を渡れば約四軒で最奥の勝仙峽に達し、更に二軒餘進めば縣社金櫻神社に詣でる。往復約四一五時間。

昇仙峽は金峰山の南麓に發源する荒川溪谷の花崗岩風景の標式的のもので、天神森長潭橋畔から仙娥瀧に至る四軒餘の間、水の美、岩の奇、山の秀と相俟つて絶景を展開し、殊に秋季紅葉が美しく、指定の名勝地である。天神森から仙娥瀧に至る間が最も絶佳で、曰く人面石・大砲岩・駱駝岩・猿岩・寒山拾得岩・登龍岩等其名の如き形の奇巖怪石や足踏に和して地底から妙音の響く天鼓林、奇峰半天に聳立する覺圓峰、翠松に覆はれた夢の松島、懸崖に懸ること十丈餘の仙娥瀧等の奇景が隨所に展開し、奇景勝景、迎接に違ない程である。

富士身延鐵道沿線

下部温泉

山梨縣西八代郡富里村下部。下部驛まで甲府から一時間二二分(三六軒六、貸一圓一三錢)、富士驛から一時間四五分(五一軒五、貸一圓七〇錢)。下部驛から温泉場迄東南一軒三、自動車乗合一五錢(一日二〇往復、貸切七〇錢)。

温泉は毛無山の西常葉川に枕む高燥な土地で、昔川中島の役に信玄が上杉謙信の爲に刀傷を蒙り此處で傷を治したと云ふ故事があるので信玄の隠し湯とも云はれて居る。泉質は無色透明の弱鹽類泉で、沸し湯も設けてあるが源泉の儘(三二度)でも入浴出来る。胃病・切傷・挫骨・打撲傷・婦人病等に效がある。(精進赤池からバノラマ臺經由下部迄乗馬賃七圓)

〔旅館〕下部ホテル(電下部一五・一六、日本室三三、洋室五、一泊二圓半、三圓、四圓、④三圓)、源泉館(電二三、室數五〇、宿泊料一圓半、一圓半、五圓、温泉浴料共)、大森館(電二・二二、室六四、宿泊料一圓半、一圓半、三圓)、富士川(電一〇・一一、室二三、宿泊料一圓半、三圓、四圓、温泉浴料共)、大市館(電八・二〇、室二四、一圓二〇錢以上)、(以上何れも内湯及貸切湯あり)、橋本館(電六、室二二)、登富屋(電二二、家一〇)、守田屋(電四、室一五)(以上三軒共内湯なし、一泊一圓二〇錢以上)。

〔木喰上人遺蹟〕富士身延鐵道久那土驛(甲府から二時間八分、賃八九錢)の東約六軒、古關村丸畑にあり、木喰五行上人の生家及六〇歳の時歸省して建立した永壽庵がある。上人は享保三年此地に生れ、全國を遍歴して一千餘の佛像を彫し、各地に佛寺を建立した名僧で九〇餘歳を以て歿した。永壽庵には上人作の佛像が數體保存されて居る。

〔飯澤町〕山梨縣南巨摩郡、飯澤黒澤驛(甲府から電車約五〇分、賃四〇錢、二軒五)から富士川を渡り約一軒六、自動車一〇錢(一九回)、貸切七〇錢。飯澤町はもと富士川舟運の要津として、また附近物資の集散地として榮えた所であるが、今はその重要性を失ひ、單なる鐵道の一驛として存在するに過ぎない。

〔旅館〕粉奈屋(電飯澤一六、室二〇、一泊一圓後、二圓、二圓半、④二圓二〇錢)、國木屋(電同六五、室一三、一泊同上)。

〔註〕飯澤町へは前記身延鐵道の外に甲府から一日一七回三〇人乗大型定期バスの便がある、所要五〇分(二軒一、賃片道四〇錢、往復六〇錢、貸切五

〔昇仙峽十二勝〕▲長潭 長潭橋下岩壁削れるが如く斜めに傾き、花崗岩特有の方狀節理を顯はす所、溪流深潭をなし、岩上の老松之れに映じて一しほの趣きを添へてゐる。▲五月雨岩 (自長潭橋一二三三七間。以下括弧内の距離は自長潭橋を示す)。▲登龍岩 (一七五五六間)奇岩中の奇なるものにて、輝石安山岩の大山岩が花崗岩の裂れ目に沿うて噴起し、之れに龍鱗の如く苔蒸してゐる。▲天鼓林(二〇二二二間)道路の兩側少しの平地に老松生ひ茂り附近の路上を強く足踏みする時は鼓の如き音を發するにより此の名がある。▲羅漢寺(二五三三九間)もと眞言宗の巨刹、後曹洞宗に改宗さる。木彫五百羅漢を護す、弘法大師の作と云ふ。▲天狗岩 (一里一丁四一四間)覺園峯に相對す。▲覺園峯(一里二丁二二二間)峽中最大の巨岩にて高さ數十丈、古松之れに蟠屈して偉觀を呈す。▲石門(一里三丁一七間)二個の大岩塊轉落し相擁して道に衝る、天然の石門。▲雪紅瀧(一里三丁四五間)。▲昇仙橋(一里四丁二四間)。▲仙娥瀧(一里五丁)懸崖にかゝること十丈餘、三段となりて落下し水煙濛々として轟きあたるの靜寂を破つてゐる。

〔峽中の旅館〕小松屋(西山梨郡能果村竹日向、バス天神森終點から二〇〇米、室五、一泊一圓半、二圓半)、金溪ホテル(同上覺園峯附近にあり、天神森から三〇〇米、和室四、洋室一、一泊同上)、菅原屋(同郡千代田村平瀬、天神森にあり、電吉澤五、室七、一泊同上、晝食一圓半)、昇樂温泉旅館(同上、天神森にあり、バス終點から半軒、電吉澤三、室四、一泊同上)、昇仙峽ホテル(中巨摩郡吉澤村吉澤、天神森から半軒、電吉澤六、室五、一泊同上)。

〔金櫻神社前の旅館〕御嶽館(室七)、眞靜館(室四)、大黒屋(室一二)、松田屋(室一二)以上何れも料理兼業にて一泊一圓二〇錢、一圓半、二圓、二圓半圓體は七〇錢、一圓二〇錢。其他丹見屋、山口屋。

人乗三圓、二〇人乗七圓。

尙甲府驛前から今諏訪、飯野、長澤經由道分まで二軒三分の間山梨電氣鐵道の便がある。所要約一時間、賃片道四〇錢(往復六〇錢、約三〇分毎に運轉)。

▲飯澤から富士川ノ西岸切石、飯富、上澤を経て波木井迄二軒、自動車一時間二分、乗合一圓(一四回)。賃切六圓。波木井には波木井城址がある。日蓮に歸依して信仰厚かつた波木井實長の居館で、戰國時代にはその末裔義實が謀を蒙つて武田信虎に毒殺された地である。

▲波木井一身延町二軒餘、自動車乗合二五錢、一五分、一日一回、賃切一圓三〇錢。

〔富士川〕大菩薩連嶺以北の水は悉く甲府盆地の西南隅市川大門、飯澤兩町の間に集つて、夫から下流は富士川となり日本三急流の一となつて、蜿蜒約六軒、駿河灣に注いで居る。慶長年中角倉了以が徳川家康の命を受けて河床改修以來、川舟を通じ、三二〇餘年の間甲府盆地と東海道との交通運搬に大なる貢獻をなして居たが、昭和四年身延鐵道がその東岸に開通せられてからは、彼の名高い川舟は殆ど影を歿し、川下り探勝者も船頭を得るに困難となつた。

▲富士一身延町一時間四五分(四三軒三)、賃一圓四二錢。

▲久遠寺は波木井郷の豪族波木井六郎實長(新羅三郎義光の裔)日蓮に歸依すること篤く、身延山を獻じて招請したので、文永一年五月、日蓮入山に創る。最初は今の西谷に草庵を構へて之に住んだが、弘安四年一月實長は別に一〇間四面の大伽藍を建立し、身延山久遠寺と號した。その後中興日朝(一一世)の時に至り文明年間西谷の地狭隘なるを以て今の地に移し、大伽藍を起してから宗風大いに振ひ、法